

平成21年6月4日・6月5日
教育研究会要録
大学・附属共同研究紀要

豊かな学びを育む学習の創造

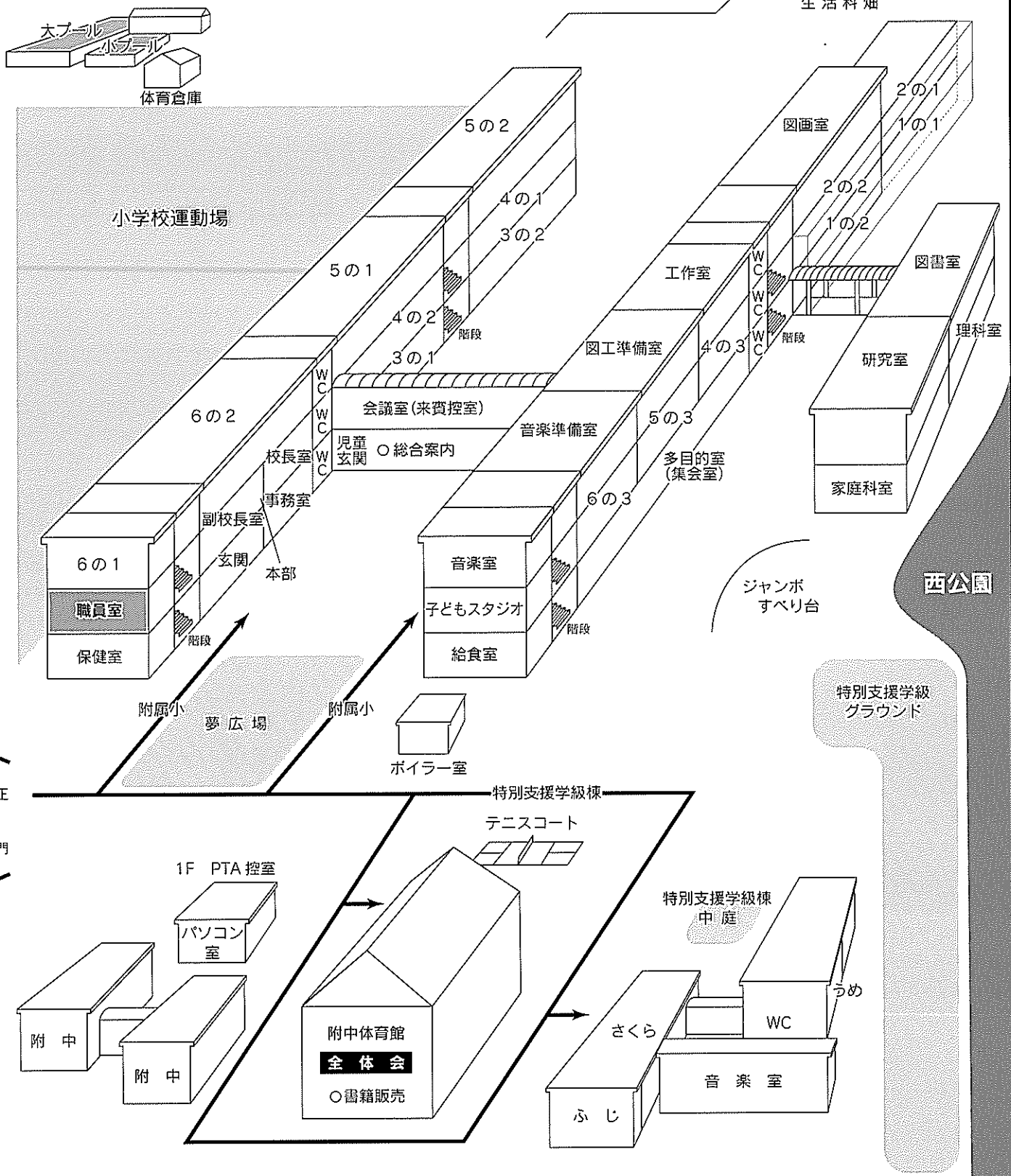
知のネットワーク化を図る活用・探究の授業づくり



福岡教育大学附属福岡小学校

研究会会場図

※下靴のままお上がりください。





ごあいさつ

福岡教育大学 学長 大 後 忠 志

福岡教育大学附属福岡小学校の平成21年度研究発表会の開催にあたりまして、ひとことごあいさつを申し上げます。

本学は、九州地区で唯一の教員養成系単科大学として、教員にふさわしい人材育成を中核に、地域とともに歩む大学をめざしているところです。

その中で、各附属学校は、その役割についても先導的研究実験校としての任務を確かに果たしていくことが、大きな使命の一つであると考えています。特に、大学と連携して研究開発を行うことは今後ますます重要となり、その成果は、この研究発表会を通して、それぞれの公立学校に寄与できるものであることが強く求められています。

本年度の研究発表会は、主題を「豊かな学びを育む学習の創造－知のネットワーク化を図る活用・探求の授業づくり－」と設定して、その研究の成果を世に問うものがあります。公開授業はもちろん、学習指導協議会、全体講演、テーマ別協議会、シンポジウムなど2日間にわたる多彩な内容となっています。そして、昨年度までに継続発展させてきた3年間の研究の成果が発表されるものと期待しています。

今回の研究発表会が地域の学校のみならず、我が国における初等教育実践の進展に少しでも寄与できれば、これに優る喜びはありません。ご参会された皆様のご指導・ご助言を切にお願いする次第であります。

最後になりましたが、ご多用の中、ご講演をお引き受け下さいました、上智大学教授の奈須正裕先生に深く感謝申し上げます。また、ごシンポジウムや学習協議会におきまして司会者・指導助言者としてご協力下さいました諸先生方にも心より御礼申し上げます。

今回の研究発表会を機に附属学校を中心に、本学と各地域の公立学校及び教育関係機関との連携を深めてまいりたいと考えております。

関係する皆様より一層のご支援をお願い申し上げまして、ごあいさつといたします。



は じ め に

校 長 鈴 木 清 一

昨年3月に告示された小学校の新学習指導要領は、平成23年度の本格実施に先立って、早くもこの4月から算数や理科などの一部教科で前倒し実施が始まりました。また、昨年公表された教育振興基本計画は、我が国の教育改革の具体的施策を示すものであり、新学習指導要領にはとくに明記されていませんが、小学校段階からのキャリア教育を推進し、学習意欲の向上と学習習慣の確立、定着を図ることが謳われております。これは、知識基盤社会を担う子どもたちの「生きる力」を育むための具体的な手立てを確立するという、学習指導要領の改訂の観点を強く意識したものであります。即ち、教育改革に対する国の姿勢の一端を示すものとして率直に受け止める必要があります。これからは各学校において、子どもの個性と教師の専門性や得意性を重視するなどの創意工夫を生かし、特色ある教育を充実することが求められると考えられます。

本校では、これまで長年にわたり、教育課程の編成、実施、評価に関する研究実践を積み重ねてきました。一昨年度からは、これまでの研究成果を踏まえつつも、より強く現場のニーズにマッチさせるため、授業づくりに重点を置く研究にシフトし、研究主題を「豊かな学びを育む学習の創造」として、学習指導要領の改訂の方向性を見据えて研究を進めてまいりました。副主題を「学びの体験を活かす3つの統合による授業づくり」から「子どもの問いを深化・拡充させる授業づくり」を経て、今年度は「知のネットワーク化を図る活用・探究の授業づくり」と設定しました。具体的には、子どもの学習意欲の向上や思考力・判断力・表現力の育成をねらいとした「活用・探究型」の授業づくりの取り組みであります。さらには、地域連携の一環として、教育力の向上に取り組む「福岡県の教育ビジョン」を取り上げ、本校の研究との相互補完性、共通性を探る試みにも挑戦しました。

今回の研究発表会開催にあたりましては、多くの方々から本校と発表者への直接的、間接的なご指導・ご支援と励ましをいただきました。ここに深く感謝申し上げますとともに、今後につきましても格別のご指導とご高配を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

目 次

ごあいさつ	1
はじめに	2
目 次	3
日程と内容（第1日目）	4
日程と内容（第2日目）	6
本校研究の歩み	8

公開授業及び全体会の部（第1日目）

学習指導案（午前）	9
全 体 会	30
学習指導案（午後）	31
学習指導協議会	50
全体講演	50

公開授業及び全体会の部（第2日目）

学習指導案（午前）	51
全 体 会	68
学習指導案（午後）	69
テーマ別協議会	92
シンポジウム	92

研 究 紀 要 の 部

研究紀要の部目次	93
研究全体構想	94
ふくおかプラン	102
各教科等部要項	114
特別支援教育部要項	170
帰国子女教育部要項	180
おわりに	187
平成21年度研究同人	188

第1日目 6月4日(木)の日程

※ 下線付きの公開授業は、午後の学習指導協議会対象の授業です。

※ 雨天の際、体育の授業は、附属福岡中学校荒陵館の2階で行います。

I 学習指導の部(午前)

▼ 学 習 指 導 (9:15~10:00)

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年1組	生 活 科	つくろう！ へんしん いきものらんど	塚本 正典	1-1/ワークスペース
3年2・3組	音 楽 科	つくろう！ハーモニーワールド 森の1日	古井由希子	音 楽 室
4年1組	国 語 科	どんなお話がはぶかれたのかな？～「夏のはれもの」の原作と絵書～	光延正次郎	4年1組教室
4年2組	学 級 活 動	飛ばそう！協力のシンボル ～連風づくり～	黒澤 真二	3年2組教室
5年1組	算 数 科	土地をリフォームして未来の街をつくろう(図形の面積)	田中 健悟	5年2組教室
6年1・3組	家 庭 科	つくろう！伝統の味 ご飯とみそ汁	緒方 敦子	家 庭 科 室
6年2組	道 徳	最上級生としての責任	三浦 研一	6年1組教室

▼ 特別支援学級の学習指導 (9:15~10:00)

3・4年くら組	生活単元学習	ピザパーティーをしよう	倉富 護	特支棟音楽室
---------	--------	-------------	------	--------

▼ 特別支援学級と通常学級の交流学習指導 (9:15~10:00)

1年2組 1・2年ぶ組	体 育 科	うまくよけよう！ ころがしボールゲーム	毛利 拓也 堀 亮輔	附属小運動場
----------------	-------	---------------------	---------------	--------

II 全体会の部(午前) ※ 附属中学校体育館において

▼ あ い さ つ (10:20~10:35)

福岡教育大学学長 大 後 忠 志
校 長 鈴 木 清 一

▼ 主 題 発 表 (10:35~11:05)

・豊かな学びを育む学習の創造

一知のネットワーク化を図る活用・探究の授業づくりー

研究主任 田 中 健 悟

▼ 教 科 等 発 表 ① (11:05~11:25)

・社会形成者として判断する社会科学習

ーシミュレーション活動を位置付けた授業づくりー

社会科部

高 瀬 雄 大

▼ 教 科 等 発 表 ② (11:25~11:45)

・数量や図形に豊かにかかわる算数科学習

ー置き換え活動を段階的に位置付けた授業づくりー

特別支援教育部算数科

弘 松 英 樹

▼ 児 童 発 表 (11:45~12:00)

・創り出そう！私達のハーモニー

指導者 高 武 龍 彦

Ⅲ 学習指導の部(午後)

▼ 学 習 指 導 (13:00～13:45)

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
2年1組	国 語 科	糸で生きるってどういうこと? ～糸で生きる虫たち～	平川 洋一	4年1組教室
2年2組	図画工作科	ぺったん がったい ふしぎなかたち	安藤 順子	工 作 室
3年1組	算 数 科	ボールをつくろう! 正三角形・二等辺三角形	永尾 健	6年1組教室
4年1・3組	音 楽 科	「白」と「黒」の音楽をつくろう	高武 龍彦	音 楽 室
5年1組	社 会 科	米粉で復活! 日本の農業「福岡県版R10プロジェクト」	高瀬 雄大	5年2組教室
5年2・3組	体 育 科	アタックチャンスを確実に ～ジャンボブレールボール～	渡邊 正則	附属小運動場
6年1・3組	理 科	電気を使ったヨットカーレース (電気の利用)	福原 伸治	理 科 室

▼ 特別支援教育学習指導 (13:00～13:45)

3・4年さくら組	国 語 科	だい本をつくってげきをしよう	諏訪原佳子	特支棟さくら組
5・6年梅組	算 数 科	てんすうをあわせよう ～おたのしみゲームたいかい～	弘松 英樹	特支棟音楽室

▼ 知のネットワーク化を図る活用・探究の学習指導協議会 (14:00～15:00)

会 場	教科領域等	司 会 者	指 導 助 言 者	
4 年 1 組	国 語 科	志免町立志免中央小学校 教諭 西 村 眞 輝 うきは市立江南小学校	久留米市立柴刈小学校 校長 佐々木 保 善 志免町立志免中央小学校	福岡教育大学 准教授 河 野 智 文 福岡教育大学
5 年 2 組	社 会 科	教諭 石 井 雄 児 前原市立雷山小学校	校長 芋 生 修 一 春日市立春日原小学校	准教授 小 田 泰 司 福岡教育大学
6 年 1 組	算 数 科	教諭 二 串 英 一 福津市立神興東小学校	校長 山 下 英 俊 那珂川町立片縄小学校	教授 飯 田 慎 司 福岡教育大学
理 科 室	理 科	教諭 田 代 直 美 福岡市立城南小学校	校長 平 石 信 敏 南筑後教育事務所	准教授 坂 本 憲 明 福岡教育大学
1 年 1 組	生 活 科	教諭 松 田 伸 治 太宰府市立太宰府西小学校	副所長 北 島 孝 徳 久留米市立青木小学校	教授 津 川 裕 福岡教育大学
音 楽 室	音 楽 科	教諭 武 田 耕 治 福岡市立馬出小学校	校長 丸 山 誠 二 郎 福岡市立筑紫丘小学校	准教授 原 田 大 志 福岡教育大学
図 画 室	図画工作科	教諭 北 田 尚 雄 春日市立須玖小学校	教頭 権 島 稔 宗像市立玄海東小学校	教授 阿 部 守 福岡教育大学
4 年 2 組	体 育 科	教諭 久 保 勝 美 福岡市立舞松原小学校	校長 脇 田 哲 郎 福岡市立高宮小学校	教授 相 部 保 美 福岡教育大学
家庭科室	家 庭 科	教諭 篠 原 裕 子 大川市立宮前小学校	校長 小 嶋 悦 子 宗像市立自由ヶ丘小学校	准教授 貴 志 倫 子 福岡教育大学
3 年 2 組	特 別 活 動	教諭 宮 崎 昌 人 福岡市立東住吉小学校	校長 坂 田 紳 一 柳川市教育委員会	教授 木 内 隆 生 福岡教育大学
6 年 2 組	道 徳	教諭 大 近 正 博 宗像市立日の里東小学校	副委員長 松 石 正 夫 前原市立南風小学校	教授 堺 正 之 福岡教育大学
特別支援 学級棟 梅組教室	特別支援教育 算 数 科	教諭 正 路 澄 代	校長 谷 口 慎 二	准教授 中 山 健

Ⅳ 全体会の部(午後) ※附属中学校体育館において

▼ 全 体 講 演 (15:20～16:40)

「習得・活用・探究の学力と授業づくり」

全 体 講 師 上智大学 総合人間科学部 教育学科 教授 奈 須 正 裕 先生

▼ あ い さ つ

副校長 佐々木 壮一朗

第2日目 6月5日（金）の日程

※ 下線付きの公開授業は、午後のテーマ別協議会対象の授業です。

※ 雨天の際、体育の授業は、附属福岡中学校の荒陵館2階で行います。

I 学習指導の部(午前)

▼ 学 習 指 導 (9:15~10:00)

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年2組	国 語 科	ばめんの ようすを ふくらまそう「おむすび ころりん」	藤田 進	1年2組教室
3年1組	<u>社 会 科</u>	見つけよう！ ぐりーんバスから見える福岡市のいいところ	高瀬 雄大	3年2組教室
3年23組	<u>体 育 科</u>	あらつジャングルたんけん（体づくり運動）	毛利 拓也	附属小運動場
4年2組	算 数 科	ビルのオーナーになって家賃を決めよう（面積）	島川 二郎	4年1組教室
5年2組	理 科	電気の力でキャッチ（電磁石の性質）	福原 伸治	理 科 室
6年1組	総 合	あらつフードプロジェクト	渡邊 正則	6年1組教室
6年2組	外国語活動	Let's enjoy sweets.	緒方 敦子	子どもスタジオ

▼ 特別支援教育学習指導 (9:15~10:00)

ふ じ 組 さくら組 梅 組	合同生活単元学習	つくろう！ ふじ・さくら・梅 祭り	倉富 護 諏訪原佳子 弘松 英樹 堀 亮輔	特別支援学級棟 音 楽 室
----------------------	----------	-------------------	--------------------------------	------------------

II 全体会の部(午前) ※附属中学校体育館において

▼ あ い さ つ (10:20~10:35)

初 等 教 育 研 究 部 委 員 長
校 長 鈴 木 清 一

▼ 主 題 発 表 (10:35~11:05)

・豊かな学びを育む学習の創造

ー知のネットワーク化を図る活用・探究の授業づくりー

研究副主任 平 川 洋 一

▼ 教 科 等 発 表 ① (11:05~11:25)

・集団とのかかわりを深めながら生活づくりに参画する学級活動

ーワークショップ型の話し合い活動を位置付けた授業づくりー

特別活動部

黒 澤 真 二

▼ 教 科 等 発 表 ② (11:25~11:45)

・価値ある動きを創る体育科学習

ーゲームの中にフィードバック活動を段階的に位置付けた授業づくりー

体 育 科 部

渡 邊 正 則

▼ 児 童 発 表 (11:45~12:00)

・創り出そう！私達のハーモニー

指 導 者 高 武 龍 彦

Ⅲ 学習指導の部(午後)

▼ 学習指導 (13:00～13:45)

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年1組	図画工作科	かぜと ひかりの おくりもの	安藤 順子	図 画 室
2年1組	学級活動	2の1アンビシャス広場に1年生をしょうたいしよう!	黒澤 真二	2-1/ワークスペース
2年2組	道 徳	みんなの物を大切にする心を見つけよう	三浦 研一	3年2組教室
4年1組	社 会 科	オッショイ!博多山笠〜768年も続く祭りを受け継ぐ人々〜	永江 英俊	4年1組教室
4年2組	理 科	空気や水の性質を上手に利用しよう (とじこめた空気や水)	今村 光宏	理 科 室
5年1組	音 楽 科	歌い継ごう! 日本の響き	高武 龍彦	音 楽 室
5年2組	算 数 科	しきつめて模様をつくろう! (三角形と角)	永尾 健	5年2組教室
6年2組	総 合	つくろう! 我らのオリジナルフラ	平川 洋一	6年1組教室

▼ 帰国子女教育学習指導 (13:00～13:45)

3～6年 3組合同	国際交流タイム	世界の童話や民話を紹介しよう	島川 二郎 高瀬 雄大 緒方 敦子	子どもスタジオ
--------------	---------	----------------	-------------------------	---------

▼ 特別支援教育学習指導 (13:00～13:45)

1・2年ふ組	算 数 科	かぞえて つくろう ふじぐみレストラン	弘松 英樹	特支棟音楽室
5・6年梅組	体 育 科	つなごう! ころがしラケットボール	堀 亮輔	特支棟運動場

▼ 福岡県の教育ビジョンに応じたテーマ別協議会 (14:00～15:00)

会 場	ビジョン	協 議 会 テ ー マ	提 案 者	指導助言者
5年2組 教 室	ビジョン① 学ぶ意欲	学ぶ意欲を高める授業づくりA (算教科を中心に)	永 尾 健 島 川 二 郎	志免町立志免西小学校 教 頭 重 松 宏 明
4年1組 教 室		学ぶ意欲を高める授業づくりB (社会科を中心に)	高 瀬 雄 大 永 江 英 俊	宗像市教育委員会 指導主事 猿 樂 隆 司
子 ども スタジオ	ビジョン② 自尊感情	自尊感情を高める授業づくり (学級活動を中心に)	黒 澤 真 二 緒 方 敦 子	北筑後教育事務所 指導主事 矢 野 俊 次
3年2組 教 室		規範意識を高める授業づくり (道徳を中心に)	三 浦 研 一 安 藤 順 子	福岡県教育庁義務教育課 指導主事 高 野 誠 一
6年1組 教 室	ビジョン④ 体力等	体力等を高める授業づくり (体育科を中心に)	毛 利 拓 也 渡 邊 正 則	福岡教育事務所 指導主事 稲 津 一 徳

Ⅳ 全体会の部(午後) ※附属中学校体育館において

▼ 教育力向上福岡県民会議関係者と本校教員によるシンポジウム (15:20～16:30)

「福岡の教育ビジョンについて語る」

— これからの福岡の教育力向上について様々な角度から考える —

福岡教育大学	名誉教授	横 山 正 幸 先生 (教育力向上福岡県民会議推進委員 副会長)
福岡県教育庁福岡教育事務所	所 長	家 宇 治 正 幸 先生 (教育力向上福岡県民運動 福岡地区推進会議 事務局長)
国立夜須高原青少年自然の家	所 長	宮 野 哲 美 先生 (前福岡県教育庁教育企画部企画調整課 教育力向上対策室 室長)
附属福岡小学校	研究副主任	平 川 洋 一
司会 附属福岡小学校	研究主任	田 中 健 悟

▼ あ い さ つ

副校長 佐々木 壮一郎

本校研究のあゆみ

年度			
23	○学習効果判定の理論と実際	59	○自己実現の喜びを生みだす学習内容の検討 学習実態の多様性に即応する学習指導
24	○カリキュラムの構成と実際	60	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 子どもの個性が生きる指導
25	(発表会なし)	61	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 「学習の個性化をめざす指導法の開発」 (明治図書から出版)
26	○学習深化の指導	62	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 学習の個性化をめざす学習過程
27	○学習深化の指導	63	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 「学習の個性化」をめざす授業の改造 「感動体験を中核とした生活科の授業づくり」 (明治図書から出版)
28	○学習深化をめざす指導	平成	○個が生きる授業の創造 自己理解の学習過程
29	○学習指導における諸問題の再検討	元年	○個が生きる授業の創造 考えを確かにする活動構成
30	○学習指導における新課題の再検討	2年	○個が生きる授業の創造 考えを深める自己吟味活動を通して 「個が生きる授業づくり」(北大路書房から出版)
31	○学習指導深化をめざす新課題の究明	3	○生きる喜びを生み出す授業の創造 思い・願いをもって問いつづける活動づくり
32	○組織化をめざす学習指導法の究明	4	○生きる喜びを生み出す学習の創造 思いをあらわしていくよさを 実感する活動の展開
33	○組織化をめざす学習指導法の究明	5	○生きる喜びを生み出す学習の創造 自分のよさを実感する表現活動の展開
34	○学習指導の系統化	7	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 新しい教育課程における教科領域の 学習の具体化
35	○改訂指導要領による学習指導の諸問題	8	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 子供主体の活動からみる教育課程の編成 「新時代の授業を創る」(明治図書から出版)
36	○考える子どもを育てる指導法の究明	9	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 子供主体の活動からみる教育課程の編成
37	○考える力をのばす学習指導法の考察	10	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 活動や体験を基盤とした学習の総合化 「学習創造」(算数・人間・障害児教育)出版
38	○考える力をのばす学習指導法の考察	11	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 子供と創る教科・総合的学習の展開 「学習創造」(理科・図画工作・音楽)出版
39	○考える力をのばす学習指導法の考察	12	○豊かな人間の育成をめざす教育の創造 知恵と心情をはぐくむ教科・総合的調和的展開 「学習創造」(国語・体育)出版
40	○考える力をのばす学習指導法の考察	13	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 調和的に展開する教科領域・総合的学習像の明確化 「新世紀の学力づくり」(明治図書)出版
41	○考える力をのばす学習指導法の考察 「授業における思考訓練」(明治図書から出版)	14	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 一教科・総合の学びを連動する〈ふくおかプラン〉の展開一
42	○教科の本質に立脚した学習指導法の考察 「思考をのばす学習過程の評価」(明治図書から出版)	15	○豊かな人間の育成をめざす教育課程の創造 一「自己追究」の学びを拓く〈ふくおかプラン〉の展開一 「評価で変えるカリキュラムづくり」(明治図書)出版
43	○(発表会なし)	16	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 一「生活・文化・人間の学び」を位置付けた〈ふくおかプラン〉の構想一
44	○現代化をめざす指導法の究明 教材の現代的価値と児童の実態と 反応に基づく指導内容の検討	17	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 一自己開発と「生活・文化・人間の学び」を統合する〈ふくおかプラン〉展開一
45	○現代化をめざす指導法の究明 基本的内容にせまらせる学習の開発	18	○豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 一協働を中核とした学習の展開一
46	○現代化をめざす指導法の究明 ひとりひとりを生かす 合理的な学習指導のしくみ	19	○学びを強め確かにする学習の創造 一学びの体験を活かす3つの統合による授業づくり一
47	○現代化をめざす指導法の究明 学習の連帯化をはかる指導のしくみ	20	○豊かな学びを育む学習の創造 一子どもの「問い」を深化・拡充させる授業づくり一
48	○現代化をめざす指導法の究明 連帯性を育てる学習指導のしくみ	21	○豊かな学びを育む学習の創造 一知のネットワーク化を図る活用・探究の授業づくり一
49	○現代化をめざす指導法の究明 連帯の力で学びとる姿勢の形成をはかる 学習指導のしくみ 「学習を連帯化する指導法」 (明治図書から出版)		
50	○現代化をめざす指導法の究明 学びとる力の育成をはかる学習指導のしくみ		
51	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 操作を通した学習の構造化		
52	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 操作を通した学習指導の展開 「できるまで育てる」(秀巧社から出版)		
53	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 交流でよりよい操作を身につける学習指導 「自由活動の時間」(秀巧社から出版)		
54	○現代化をめざす指導内容と指導法の実証的究明 教材の価値にせまらせる操作学習の評価		
55	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 見直し活動を生かした操作学習の深化		
56	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 自己を見直し、考えを深める 指導のしくみ		
57	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 自ら見直し活動に取り組み、 自己を深める指導のしくみ 「学ぶ喜びを生み出す授業」 (北大路書房から出版)		
58	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 個が生きる課題づくり		

公開授業及び全体会の部

第1日目 午前の部

学習指導案

※ 下線付きの公開授業は、午後の学習指導協議会対象の授業です。

※ 雨天の際、体育科の授業は、附属福岡中学校の荒陵館2階で行います。

▼ 学 習 指 導 (9:15~10:00)

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年1組	<u>生 活 科</u>	つくろう！ へんしん いきものらんど	塚本 正典	1-1/ワークスペース
3年2・3組	音 楽 科	つくろう！ハーモニーワールド 森の1日	古井由希子	音 楽 室
4年1組	国 語 科	どんなお話がはぶかれたのかな？～「夏のわすれもの」の原書と数書～	光延正次郎	4年1組教室
4年2組	<u>学 級 活 動</u>	飛ばそう！協力のシンボル ～連風づくり～	黒澤 真二	3年2組教室
5年1組	算 数 科	土地をリフォームして未来の街をつくろう（図形の面積）	田中 健悟	5年2組教室
6年1・3組	<u>家 庭 科</u>	つくろう！伝統の味 ご飯とみそ汁	緒方 敦子	家 庭 科 室
6年2組	<u>道 徳</u>	最上級生としての責任	三浦 研一	6年1組教室

▼ 特別支援学級の学習指導 (9:15~10:00)

3・4年さくら組	生活単元学習	ピザパーティーをしよう	倉富 護	特支棟音楽室
----------	--------	-------------	------	--------

▼ 特別支援学級と通常学級の交流学習指導 (9:15~10:00)

1年2組 1・2年ふじ組	体 育 科	うまくよけよう！ ころがしボールゲーム	毛利 拓也 堀 亮輔	附属小運動場
-----------------	-------	---------------------	---------------	--------

身近な自然物を使って見立てた生き物クイズを通して、伝え合う活動を位置付けた学習 第1学年1組 生活科学学習指導案

指導者 塚 本 正 典

単 元 つくろう! へんしん いきものランド

指 導 観

本単元について

本単元は、身近な自然物を見付けて、自分が見付けた生き物をもとに遊びをつくり出す面白さに気付くことをねらいとしている。具体的には、①身近な自然物を使って楽しく生き物づくりをすること、②自然物を使う面白さに気付くこと、③友達とくらべたり一緒につくったりして遊びを楽しむことである。そこで、生き物づくりの材料になりそうな自然物を見付ける活動や、つくった生き物をもとにクイズをしながら友達と使ったくらべる活動を繰り返すことで、自然物の特徴から生き物の部分ができる関係や自然物を使った遊びを工夫してつくる面白さや楽しさに気付くことができると思う。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、学校探検を通して、様々な施設や人の様子に気付き、だんだん学校生活に慣れてきている。しかし、友達の遊びの様子から、一人遊びが多く、友達とのかかわりが少ない状態である。そこで、身近な自然物をもとに遊びを考えたり友達と協力して作ったりすることにより、個から小集団での遊びができるようにしたい。このことは、自然を生かして遊びを工夫するとともに、季節の変化によって生活を工夫することに発展していく。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、身近な自然物を使って遊びに使う物を工夫してつくり、遊びの面白さに気付くようにしたい。そのために、自然物をもとに見立てながら様々な生き物をつくっていく。そして、生き物クイズを出したり生き物の理由を説明したりしながら自然物の特徴や遊びの面白さに気付かせていく。さらに、つくった生き物を昆虫や動物、植物のコーナーごとに分けたり、友達が分かりやすくなるように説明を付け加えたりしながら、全体で「いきものランド」をつくっていく。

目 標

- 1 身近な自然物を使って生き物づくりをすることに関心を持ち、意欲的にみんなでいきものランドをつくったり遊んだりすることができる。
- 2 いきものランドをつくる活動を通して、自然物を生かした遊びの面白さや遊びをつくり出す楽しさに気付くことができる。

計 画 (約 12 時間)

階	主 な 学 習 活 動	単 元
1	学校や西公園の探検をして、様々な草花や枝、石集めをする。 ○ 自然物を使って、生き物を作って遊びたい意欲をもつこと ※ 学校や西公園で自然物を集める探検の場を設定し、見立て遊びをする。	3
2	探検で集めた自然物をもとに、生き物をつくったりクイズをしたりする。 (1) 自然物で生き物をつくったり、材料集めをしたりする。 ○ 自然物をもとに生き物を工夫してつくること ※ 探検で集めた様々な自然物の材料コーナーを設定する。	6 ③
3	(2) つくった生き物をもとに、友達と生き物クイズをする。 ○ 自然物の特徴を生かして、工夫してつくる面白さに気付くこと ※ 使っている自然物やその特徴に気付くような、クイズカードと説明カードを準備する。	③ 本時 2 ／ 3
4	つくった生き物を集めて「いきものランド」をみんなで作る。 ○ みんなでつくる楽しさに気付き、達成感や成就感を味わうこと ※ コーナーごとに生き物を設置する場や友達が見て分かりやすいように解説を置く場を設定する。	3

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 身近な自然物を使ってつくった生き物をもとに、意欲的にクイズを出したり、作品のよさについて話し合ったりすることができる。
- 生き物クイズを通して、自然物の特徴を生かして生き物を工夫してつくり出す面白さに気付くことができる。

1 自然物を使って、つくった生き物をもとに、友達の子生き物づくりのよさについて話し合う。

○ 友達の子生き物づくりのよさを探しながら、もっとつくっていきたいという意欲を高めること

☆ 大きなバッタの足が、すごいな。

☆ お花でつくったちょうちょが、つくりたいな。

本時のめあて

いきものくイズをして、ともだちがつくった いきものの
すごいところを みつけよう。

2 生き物づくりをして、生き物クイズをしたり生き物づくりの楽しさやよさについて話し合ったりする。

(1) 自然物を使って、生き物づくりをする。

○ 生き物の体のつくりや動きの様子と、使った自然物の関係に
気付くこと

「具体例」



「自然物（葉、枝、種など）」



「生き物づくり」

☆ わたしは、葉っぱと、枝をつかってつくりました。この生き物は、何でしょう。

→ そうです。わたしは、遠くへ跳べるバッタをつくりました。葉っぱが体で、枝が手や足です。

☆ バッタの後ろ足を長い枝を使って、いっぱい跳べそうだね。

(2) 生き物クイズや生き物の説明をして、発見した友達のすごいところについて話し合う。

○ 自然物の大きさや形、色、手触りの特徴を生かしてつくった面白さや楽しさに気付くこと

☆ 大きい葉っぱと小さい葉っぱを使ってバッタを作っているの
で、親子みたいで、かわいいね。

☆ ちょうちょの羽根を花びらで表して、やわらかい羽根の感じが
出ているね。2匹いるので、仲良しの友達みたいだね。

3 生き物クイズをもとに、次の活動について話し合う。

○ さらに生き物をつくったり、クイズを考えたりしていきたい意
欲をもつこと

☆ ぼくは、だんご虫をつくったので、大きなだんご虫や小さなだ
んご虫を作って、だんご虫の兄弟をつくりたいです。

○ 準備

教師側：学習の流れ図、自然物、ボン
ダンボールシート

児童側：学習ノート、はさみ、生き物の
作品

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

◎ 友達と生き物クイズをしたり、つくった生き物を見たいという発言をしている。

【支援】

※ 友達がつくった生き物をもとにクイズを出したり、生き物のよさについて話し合ったりする場を設定する。

【子どもの見取りの観点】

◎ 自然物の大きさ、形、色、数、手触りの特徴から発言している。

【支援】

※ 自然物でつくった生き物を提示し、つくる時や自然物選びの工夫の視点について、探検で見つけた生き物をもとに、話し合う場を設定する。

【子どもの見取りの観点】

◎ 身近な自然物を組み合わせたり、生き物の様子が分かるように自然物を選んだりしながら、生き物づくりをしている。

【支援】

※ 生き物の特徴に気付くことができるよう、探検で見つけた生き物の写真の資料や様々な自然物、道具を準備する。

【子どもの見取りの観点】

◎ 自然物の大きさ、形、色、数、手触りの視点から生き物の体のつくりや動きの様子、生き物の気持ちを学習ノートにまとめたり発言したりしている。

【支援】

※ 具体的な話し合いになるよう、使った自然物や生き物を提示しながら、工夫したところやつくり方について実演的に説明する場を設定する。

【子どもの見取りの観点】

◎ もっと生き物づくりを工夫してつくっていくことを発言したり、友達と一緒に生き物を組み合わせるよさについて発言したりしている。

【支援】

※ 生き物をつくったダンボールシートを組み合わせた作品を提示し、コーナーづくりのよさに気付くことができるようにする。

図形楽譜を取り入れ音色の組み合わせを生かす音楽づくりに取り組む学習

第3学年2・3組 音楽科学習指導案

指導者 古 井 由希子

題 材 つくろう！ハーモニーワールド 森の1日

指 導 観

本題材について

本題材は、鑑賞教材「森の水車」を聴き、子どもたちと森の様子を豊かに想像しながら森の音楽をつくっていくことをねらいとしている。具体的には、①音の出し方や組み合わせを工夫すること、②音楽の仕組みに着目し、それを手がかりに音を音楽へ構成することなどが主な学習内容である。このような内容をおさえることで、表現の幅を広げることができる。例えば、1つの森の様子だけではなく朝・昼・夜の森の様子をグループごとに考え、それぞれ作った音楽をお互いに交流し合い、音色の組み合わせを生かした工夫を確かめることができる。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、音遊びやリズム遊びなどを通して友達とかかわり合いながら楽しく活動することができている。また、曲想を感じ取ることもできている。しかし、曲想に合った表現の工夫を行うことや、自分たちで音楽をつくる活動の経験は十分でない。そこで、本題材では簡単な音をリコーダーや他の楽器で表現する活動や、自分の思いや意図をもってつくった音を組み合わせる音楽をつくる楽しさを味わわせたいと考える。

本題材の指導について

本題材の指導にあたっては、出合う段階において「森の水車」を聴き、情景を思い浮かばせ、つくった森の音楽をおうちの人に聴かせるという目的意識をもたせる。そして、学級全体でどんな森にするか森のお話を作る。つくる段階では、リコーダーなど様々な楽器を使って音を選ぶ活動を行い朝の森の音楽をつくる。さらに朝の森の音楽をもとに、小集団で昼と夜の森の音楽をつくる。最後に味わう段階では森の音楽の1日を通して朝・昼・夜をそれぞれ比較しながらクラス全員で工夫の観点を明らかにし、グループで発表会を行う。

目 標

- 1 心に感じたものを楽器の音色、及び自分たちの声などいろいろな音色や旋律に置き換えて表現しようことができる。
- 2 「森の中に響く音」を想像し、その森に合った音色を探し即興的に表現することができる。

計 画 (約4時間)

階 段	主 な 学 習 活 動	時 間
出 発	1 鑑賞教材「森の水車」を聴き、森の1日のお話を作る。	1
合 合	○ 曲の感じや情景を想像し、つくってみたいという創作意欲をもつこと	
う	※ 楽曲を聴いて思ったことを交流する場を設定したり、つくった音楽を家族に聴かせようと相手意識をもたせたりする。	
つ	2 全員で朝の森の音楽をつくる。 (1) 朝の森のお話をもとに朝の森の音楽をつくる。	2
く	○ 「森の水車」から聞こえた音楽と自分のもつ朝の森の様子を、楽器の音色という観点から音を選び、朝の森の音楽をつくること	①
る	※ 朝の森に合った音を選び音楽を作ることができるよう教師がモデル演奏をする。 (2) 朝の森の音楽をもとに昼の森の音楽をつくる。	① 本時
味 味	○ グループごとに選んだ音をもとに音色を組み合わせ、昼の森の音楽をつくり、つくった音楽を図形楽譜に表すこと	
わ	※ 昼の音により近くなるようつくった音楽を図形楽譜として提示する。	
う	3 つくった森の音楽についてお互いに聴き合い感想を交流する。	1
	○ 友達のつくった音楽を聴いて、どんな様子が浮かんだか感想を発表すること	
	※ 比較しながら聴くことができるよう聴く観点を提示する。	

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 自分たちで作った昼の森のお話に合う音楽を、友達と試行しながら意欲的につくることができる。
- 昼のにぎやかな森の様子の情景を思い浮かべながら、今まで選んだ音色の組み合わせを工夫することができる。

1 朝の森の音楽を聴き、学習のめあてについて話し合う。

- 朝の森の音楽づくりで表現の工夫に関する観点をつかむこと
- ☆ 鉄琴の音が朝の静かな森にひびく風の音に聞こえるね。
- ☆ リコーダーの高い音で鳥の鳴き声に似ているよ。

本時のめあて

音色の組み合わせを工夫して昼の森の音楽をつくろう。

2 グループごとに選んだ音色を組み合わせる昼の森の音楽をつくる。

- (1) お話をもとに、音色の組み合わせについてグループで話し合う。
- 集まった音色をもとに森のグループごとに森の音色を工夫して組み合わせること

- ☆ 昼の森の動物たちが会話をしている様子（鍵盤ハーモニカ・カステネット・リコーダー・木琴）
- ☆ 昼の池で魚が泳いでいる様子（トライアングル・鉄琴など）

- (2) 組み合わせた音色を図形楽譜に書き表し、その中でフレーズの配列を変えたり、繰り返しを用いたりしてもう一度自分たちがつくった音楽の工夫を考えグループで話し合う。

○ つくった音楽の配列を工夫して組み合わせること

- ☆ 鍵盤ハーモニカとカステネットの組み合わせで①②③④の④のかわりに②を2回繰り返すとにぎやかな感じに変わるね。

●~~~~ × × × × ● × ● × ●~~~~●~~~~
プー~~~~パンパンパンパンプー~~~~パン プー~~~~プー~~~~
① ② ③ ④

- ☆ 森の池で魚が泳いでいる様子を表すためにトライアングルや鉄琴の組み合わせで①②③④の②④を最初に鳴らした方が魚が泳いでいる感じがするよ。

○~~~~ △~~~~ ○~~~~ △~~~~
ポー~~~~ン チチチチチチ ポー~~~~ン チチチチチチ
① ② ③ ④

3 音色の組み合わせを意識しながら、各グループで昼の森の音楽を演奏する。

○ お互いの表現のよさを認め合うこと

- ☆ ○○さんのグループは繰り返しをつくったことで昼に鳥たちがたくさん出てきてにぎやかな森に近づいた感じがしました。
- ☆ 楽器の演奏の仕方を変えただけで、その楽器の音の聞こえかたが変わるということが分かりました。

○ 準備

教師側：情景画・拡大歌詞・グループごとに図形楽譜を書く画用紙

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 身近な楽器の響きを工夫しながら自分たちが想像した森にあった音色を選んでいる。

【支援】

- ※ どんな楽器をどのように演奏しているか聴く観点を与える。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 楽器の音色の美しさを感じとりながら聴いたり、情景を想像しながら聴いている。

【支援】

- ※ 友達の発表を聴きながら、どんな様子が思い浮かぶか聴く観点を与える。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ つくった音色の組み合わせがそれぞれつくったお話に合ったものかどうか聴き合っている。

【支援】

- ※ それぞれのグループがお話に合った曲をつくっているか聴くグループに聴く観点を与える。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分たちのつくったお話に合った音色の組み合わせや配列を工夫して考え、お互いに認め合っている。

【支援】

- ※ いい表現の工夫があったら全体の場で教師が知らせていき、他のグループの音楽と対比的に聴き合うことができるような場の設定をする。

- ◎ 他のグループの表現のよさに気付きどこに取り入れるか発言している。

【支援】

- ※ よりよい表現の工夫を自分たちの音楽に取り入れることができるよう表現の工夫について聴く観点を示す。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 他のグループの表現の仕方を知りお互いの表現の工夫を生かそうとしている。

【支援】

- ※ お互いのグループのどんな表現が話に合った表現になっているか聴く観点を与える。

友達とともに場面と場面をつなぎながら原作から省かれた場面を創る学習

第4学年1組 国語科学習指導案

指導者 光 延 正 次 郎

単元 どんなお話がはぶかれたのかな?～「夏のわすれもの」の原作と教科書～

指導観

本単元について

本単元は、場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の気持ちの変化を読むことをねらいとしている。具体的には、①原作から省かれた場面での登場人物の気持ちを、場面と場面をつなぎながら想像すること、②原作から省かれた場面を読んで確かめ、教科書に掲載するときにその場面を省いた作者の意図を明らかにすることが主な学習内容である。「夏のわすれもの」は、主人公のまさるが祖父の死前後で大きく変容するお話である。みんなと川で遊びたいというまさるは、中学年の子どものものでありまさると自分を重ねて読むことができると考える。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、各場面での登場人物の行動や会話からそのときの気持ちを読むことはできるようになってきた。しかし、場面の移り変わりとともに変化する登場人物の気持ちを読むには至っていない。これは、登場人物の行動や会話を関連的にとらえて、登場人物の気持ちを読む読み方が確実に身に付いていないからである。そこで、国語科学習の充実期にあたり、知的能力も発達し、学校等での体験により自主性も増してくるこの期に本単元を設定する。このことは、幅広く読書しようとする態度を育てる上でも意義深い。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、友達とともに場面と場面をつなぎながら原作から省かれた場面を創ることができるようにしたい。そのための活動を具体化すると次の3つとなる。①原作から省かれた場面での登場人物の行動や会話を想像し省かれた場面を創作すること、②原作から省かれた場面を読んで確かめその場面での登場人物の気持ちを読み取ること、③教科書に掲載するときにその場面を省いた作者の意図について話し合うことである。

目 標

- 1 「どんなお話がはぶかれたのかな?」という課題をもって、意欲的に「夏のわすれもの」の原作と教科書を読み、登場人物の気持ちについて想像したことを進んで話し合うことができる。
- 2 原作から省かれた場面と前の場面や後ろの場面の登場人物の行動や会話をつないで、登場人物の気持ちを想像することができる。

計 画 (約8時間)

階	主 な 学 習 活 動	単
つ か む	1 「夏のわすれもの」原作と教科書を比べ、読むめあてについて話し合う。 ○ どんなお話が省かれたか知りたいという課題意識をもつこと ※ 原作と教科書を比較させて、省かれた場面があることに気づかせる。	2
	2 教科書に掲載されるとき原作から省かれた場面を創る。 (1) 教科書に掲載されるとき原作から省かれた途中の場面を創る。 ○ 前後場面の登場人物の行動や会話をつないで、気持ちを想像すること ※ 省かれた場面の挿絵や前後の場面の本文を黒板に掲示し参考にさせる。	4
ふ か め る	(2) 原作から省かれた最後の場面を創る。 ○ 『おじいちゃんのわすれもの』とは何か考え題名に迫ること ※ ぼくとおばあちゃんの手に忘れた『おじいちゃんのわすれもの』とは何か想像させる。	③ 本 時 2 / 3 ①
	3 同じように祖父と孫が出てくる「さよならの学校」(今西祐行)を読む。 ○ 家族の在り方の違いについての感想を深めること ※ 「夏のわすれもの」とは違う違う家族の在り方について書かれた副教材を提示し、感想を深めさせる。	2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 意欲的に「焼き場の場面」の原作を読み、登場人物の気持ちの変化について想像したことを進んで話し合うことができる。
- 原作から省かれた「焼き場の場面」と前の場面や後ろの場面の登場人物の行動や会話をつないで、登場人物の気持ちを想像することができる。

準備

教師側：前時までの流れ図、挿絵、
拡大本文、原作の文章、
文カード、学習プリント

<各活動の子どもの見取りと支援>

- 1 「焼き場の場面」の挿絵からこの場面でのお母さんとまさるの言動を予想し話し合う。

○ 教科書に掲載されるときに原作から省かれた「焼き場の場面」のお話を創りたいという思いをもつこと

☆ 「焼き場の場面」で、お母さんとまさるはどうしたのかな。

本時のめあて

教科書にのるとき原作からは省かれた「やき場の場面」のお話をつくろう。

- 2 挿絵や前後の場面を参考にしながら「やき場の場面」のお話を創って、原作と比較する。

(1) 挿絵や前後の場面を参考にしながら「やき場の場面」のお話を創る。

○ 挿絵から想像したり、前後の場面の登場人物の行動や会話とつないで想像しながら、登場人物の行動や会話を想像し創作すること

☆ まだ、おじいちゃんが亡くなったことが実感できなくて、まさるは泣かなかったんじゃないか。

(2) 創ったお話と原作と比較する。

○ 「焼き場の場面」と前の場面や後ろの場面の登場人物の行動や会話をつないで、登場人物の気持ちを想像すること

☆ おじいちゃんがそばにいないような気がして、おばあちゃんは泣かなかったんじゃないか。

るて通相
いいん変
るをすわ
ま続いら
さけ岩ず

い実つんお
ま感たがじ
さでこ亡い
るきとくち
ながなや



焼き場
で

さ：だ遊たい
るとろんち
思うではち
うない川や
まあるでん

おそう式の日

あがんがを右
ちめやらさ手
やるり庭すで
んおとをり左
ばなぼな手

ば気いんお
あがるがじ
ちすよそい
やるうばち
んおなにや

つちよじぼ
てや。やく
：んばなだ
だあいけ

ちすでまう
やる左まつ
んお手、む
ばを右い
あさ手た

- 3 「焼き場の場面」を省いた作者の意図について話し合う。

○ 「焼き場の場面」を省いた作者の意図を解釈すること

☆ 「焼き場の場面」では、まさるもおばあちゃんも変容していないから、省いてもいいと作者は考えたのではなかろうか。

【子どもの見取りの観点】

◎ 教科書に掲載されるときに原作から省かれた「焼き場の場面」のお話を創りたいと表現(話す・書く)している。

【支援】

※ 教科書に掲載されるときに原作から省かれた「焼き場の場面」の挿絵を提示する。

※ 「焼き場の場面」の挿絵からお母さんが泣いているのをとらえさせ、まさるはどうしたか予想させる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 挿絵や前後の場面を参考にしながら「やき場の場面」のお話を創っている。

【支援】

※ 省かれた場面の挿絵や前後の場面の本文を黒板に掲示し参考にさせる。

※ まず、焼き場の場面ではまさるは泣いたのか泣かなかったのか、お母さんとどんなことを話したのか話し合わせた後、お話を創らせる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 「焼き場の場面」と前の場面や後ろの場面の登場人物の行動や会話をつないで、登場人物の気持ちを想像している。

【支援】

※ 原作の「焼き場の場面」を提示し、みんなが創ったお話と比較させる。

※ 原作の「焼き場の場面」にある、「ぼくだけじゃないよ。ばあちゃんだって…」という会話に着目させ、おばあちゃんが泣かなかったわけについて話し合わせた後、まさるが泣かなかったわけと同じなのか違うのか比較させる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 「焼き場の場面」を省いた作者の意図を表現(話す・書く)している。

【支援】

※ 「おそう式」の場面を省かずに「焼き場の場面」を省いた作者の意図を尋ねる。

体験をもとに少人数討議から協力のシンボルである連風のデザインを決める話し合い活動 第4学年2組 学級活動指導案

指導者 黒 澤 真 二

題 材 飛ばそう!協力のシンボル～連風づくり～

指 導 観

本題材について

本題材は、楽しい学級生活を自発的、自治的につくるために、学級で協力し合って活動することをねらいとしている。具体的には、①連風揚げの体験から、大空に連なる連風を学級の協力のシンボルとして、自分たちもつくりたいという思いを感受すること、②連風揚げの体験活動を情報として、見取りの観点にそった意見交流を行うことで、連風のデザインを創造すること、③学級として連風を飛ばすことで、協力のシンボルとして飛んだ連風に感動し、集団としての意義をさらに深めることである。一本の糸でつながっている連風をつくる過程で協力のシンボルとして必然的に考える状況と環境が生まれ、自主的、実践的な態度を育てることができる。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、意欲的に委員会活動や係活動を行っている。しかし、活動の様子を見ると、個人差が強すぎて、自分中心に行うことが多くなり学級目標に向かって活動していくまでには至っていない。そこで、上学年としての自覚があるこの時期に、連風づくりという体験活動を通して、学級の結束力を高めたい。そして、友達と協働で連風をつくって揚げることで、協力の意味を再確認し、学級で協力して活動するよさを実感できるようにする。

本題材の指導について

本題材の指導にあたっては、まず、連風揚げを体験し、連風への興味と学級でもっと協力する必要があるという状況を理解できるようにする。次に、今までの知識や連風揚げの体験を情報として協力のシンボルとしての連風のデザインを決める話し合い活動や試しの体験活動を行い、連風づくりができるようにする。そして、一人一人が役割を分担し協働で連風づくりに取り組み、実際に飛ばしていくことで、学級としての意義をさらに深め、今後も学級目標に向かって実践していく意欲を高めさせる。

目 標

- 1 協力のシンボルである連風について話し合い活動を行ったり、体験活動をしたりすることで、学級目標に近づくという意識を高めることができる。
- 2 「学級の協力の証がわかる連風」をつくる過程で、学級全体や少人数での話し合いの進め方がわかり、連風を揚げるができる。

計 画 (約4時間)

階	主 な 学 習 活 動	時
つ	1 連風を揚げる体験から、自分たちも連風をつくって学級みんなで飛ばしたいという目的や組織について話し合う。	1
	く ○ 連風には、一本の糸でつながっているという協力の意味がこめられていることをとらえること ※ G T が揚げる連風を参観したり、実際に連風を揚げる環境を用意したりする。	
決	2 協力のシンボルとして飛ばす連風のデザインについて話し合う。	2
	(1) 協力のシンボルとして飛ばすためにはどんなデザインにするかを話し合う。	①
め	○ 2つの話し合いの観点にそって集団決定していくこと ※ マトリックスボードや付箋紙を活用して友達の考えを比較できるようにする。	本
	(2) 決めたデザインで試しの体験活動を行い、原案の付加・修正点を話し合う。	時
る	○ 体験したことを少人数討議でまとめ、全体討議で意見を比較すること ※ 体験したことやG T のアドバイスを基に観点にそって比較できるようにする。	①
	3 連風を実際に飛ばし、学級としての成果と課題を話し合う。	1
行	○ 学級の一人一人が連風づくりでもつながり合い、協働で連風を飛ばすこと ※ 活動後の感想を交流し合い、今後の学級の生活づくりに意欲をもたせる。	

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 「一人一人がデザインにかかわれるか」「つながっているよさがわかるか」という観点で原案を集団決定することができる。
- 原案を出し合う全体討議、考えが異なる友達との少人数討議、少人数討議を基にした全体討議という本時の話し合いの進め方がわかる。

1 「協力のシンボル」として飛ばす連風にするための原案について話し合う。

- 今までの連風を揚げた体験や知識を基に、出された原案が2つの話し合いの観点に合うかを考えること

☆ 今まで情報収集してきたことを基に考えを発表しよう。

本時のめあて

「協力のシンボル」としての連だこのデザインを決めよう。

- 赤 一人一人がデザインにかかわれるか
- 青 つながっているよさがわかるか

2 「協力のシンボル」としてわかる連風にするために、意見の異なる少人数グループで考えを整理し、学級全体で友達の意見を比べながら集団決定する話し合い活動を行う。

- (1) 「協力のシンボル」としてわかる連風にするために、意見の異なる少人数グループで考えを整理する。

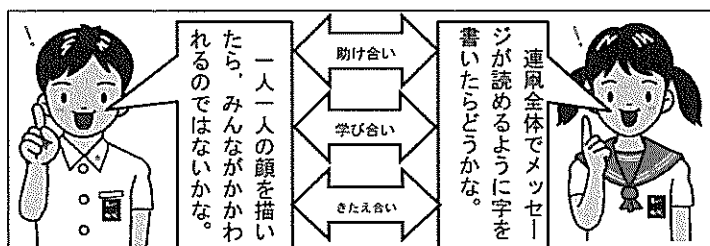
- 赤「一人一人がデザインにかかわれるか」青「つながっているよさがわかるか」の2つの観点に合うような原案にするためには何が必要かを考え、お互いの意見を比べること

☆ 連風を揚げたとき、学級全員がつながっていることがわかるようなデザインにしていきたいね。

- (2) 少人数グループで話し合ったことを全体に発表し、「協力のシンボル」としてわかる連風のデザインを決める話し合い活動を行う。

- 一人一人が学級で協力する意味を考え、連風全体で1つのシンボルになることをとらえること

☆ みんなが学級全体のことを考え、つながっていけるといいね。



3 先生の話聞き、話し合い活動でよかった点を評価する。

- 自分の考えが原案に生かされたり、友達の意見で新たな考えが創造できたことを実感すること

☆ 自分の考えが友達に認めてもらえてうれしかったな。これから協力のシンボルとしてわかる連風をつくっていきたいな。

準備

教師側：学習の流れ図、マトリックスボード、拡大付箋紙

児童側：情報比較ノート、付箋紙、学級活動ファイル

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 「協力のシンボル」としての連風づくりというゴール像をもっている。

【支援】

- ※ GTといっしょに連風を揚げたときのビデオを視聴させ、話し合い活動の意欲を喚起させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 情報収集したことを基に、自分が考えた原案を発表している。

【支援】

- ※ ブレインストーミングの手法で、自由に考えた原案を発表できるようにするとともに、出された原案を話し合いの観点ごとに黒板上に分けて貼ることができるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 友達の考えと自分の考えを比較し、話し合いの観点を基に話し合っている。

【支援】

- ※ 4の2の連風として学級目標を考えさせ、マトリックスボード上で付箋紙を操作させながら、原案を整理することができるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 連風全体で協力したシンボルを表せる原案はどれかを考え、新たな考えを創っている。

【支援】

- ※ GTには、子どもたちの考えで連風が揚がるのかという現実性の面からのアドバイスをもらい、協力の意味を学級全体の姿としてとらえていくことができるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自他の考えを比べ合い、連風のデザインを決めたことを感じている。

【支援】

- ※ 先生の話で、学級目標にある「助け合い」「学び合い」「きたえ合い」の「合い」を意識して活動できるよう意欲付けを図る。

面積の求め方について、説明・分類・選択の活動を取り入れた学習

第5学年1組 算数科学習指導案

指導者 田 中 健 悟

単 元 土地をリフォームして未来の街をつくろう（図形の面積）

指 導 観

本単元について

本単元は、直線で囲まれた多様な図形の面積を計算で求めることができるようにすることをねらいとしている。具体的には、①面積を求めるのに必要な部分の長さを測り既習の図形に帰着させて面積を求めること、②公式をつくり出し、それを用いて面積が求められるようにすること、③多様なアイデアで面積を求められることなどである。そのために、土地の区画整理を教材化する。区画整理は、図形の変形を目的として複雑な図形を設定できる。そして、友達との学び合いを通して多様な面積の求め方を考えることができ、創造性の面で大変価値がある。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、これまでに、第4学年では長方形や正方形及びそれらの複合図形の面積の求め方を学習してきている。そして、そこでは、図形を分割したり補完したりするアイデアを使って面積を求めることはしていきっている。しかし、多角形のように単位面積の数を数えることができない場合について面積を求めるアイデアを考えることができるまでには至っていない。そこで、図形を合成・分解・移動する見方を身に付けさせ、それらと面積の公式を組み合わせる創造する力を育てていきたい。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、面積を求める過程で平行・垂直の関係を図形の中に見たり、図形をまとめて見たりする豊かな感覚を身に付けることができるようにしたい。そのために、図形を変形する活動を学習の中心に据え、単元を展開していく。まず、「見いだす」段階では、未来の街づくりで土地の区画整理に出会い、変形による求積の見通しをもたせる。次に「試みる」段階では、三角形や四角形の面積を求める方法を追究する。最後に「広げる」段階では、多角形の面積を多様な方法で追究する。

目 標

- 1 未来の街づくりに関して、土地の区画整理で面積を多様に求める方法や、オリジナルの立体模型をつくる活動に意欲的に取り組むことができる。
- 2 求積方法が明らかになっている既習の図形に変形して、様々な図形の面積を求めたり、同じ面積をもつ図形に置き換えたりすることができる。

計 画（約 14 時間）

階	主 な 学 習 活 動	時
見 い だ す	1 未来の街づくりに出会い、その一部である平行四辺形の土地の面積を求める方法について調べる。 ○ 直線で囲まれた図形の面積の求め方についての見通しをもつこと ※ 平行四辺形の求積にカードを用いる。	3
	2 土地のリフォームの課題で、三角形や台形や多角形などの求積方法を調べる。 (1) 三角形や台形などの土地の面積を求める方法について調べる。 ○ 平行四辺形に変形したり、三角形に変形したりすれば、面積が求められること ※ 図形カードを用いて変形を多様に考えさせ、それを小グループで交流する。	5
試 み る	(2) 面積を求め土地をリフォームする。 ○ 長方形や正方形の面積をつくること ※ 様々な図形が含まれた土地を設定する。	④
	3 多角形の面積の求め方や、立体図形のつくり方を調べ、未来の街をつくる。 (1) 多角形の土地の面積を求める方法について調べ、土地をリフォームする。 ○ 多角形の面積は、三角形や四角形に図形を帰着させて多様に導き出せること ※ 小グループで交流し、図形の見方を多様に考えることで面積が求められること (2) 立体図形を調べ、未来の街をつくる。 ○ 立体図形の構成要素をとらえること ※ 立体模型を観察・構成させる。	①
広 げ る		6
		③
		2
		3
		本
		時
		③

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 四角形の求積方法をもとに、五角形の土地の求積方法を多様に調べる活動に意欲的に取り組むことができる。
- 五角形の面積を、分解・補完・移動などの考えを用いて求積し、多様な求積方法の中からより簡単な方法を選び出すことができる。

1 五角形の土地の面積を求める方法について、四角形の求積方法をもとに、その見通しについて話し合う。

○ 長方形に囲まれた五角形の求積方法への見通しをもつこと

- ☆ 五角形の図形の面積も、図形を分けたら求められそうだな。
- ☆ 五角形の図形でも、平行と垂直の関係を見つければ、いろいろな方法で面積が求められそうだな。

本時のめあて

五角形の面積の求め方を、四角形の面積の求め方を参考にして考え、その解決用法を交流し、簡単な方法を見つけ出そう。

2 五角形の面積の多様な求め方について調べ、友達と説明し合ったり、考え方を分類したりする。

(1) 五角形の面積の多様な求め方について、既習の面積の公式や四角形の面積を求めたときの図形の見方などを参考にして自力で追究する。

○ 既習の求積公式と図形の見方とから選択したり、組み合わせたりして、五角形の求積方法を多様につくり出すこと

【既習の求積公式】

- ◆ 長方形や正方形の公式
- ◆ 平行四辺形の公式
- ◆ 三角形の公式
- ◆ 台形の公式

【既習の図形の見方】

- ◆ 分解合成的な見方
- ◆ 補完的な見方
(2つ分の倍積変形を含む)
- ◆ 動的な変形の見方

選択と組み合わせによる求積方法の創造

☆ 五角形の面積の求め方も、いろいろな方法が考えられるぞ。

(2) 自力で解決した五角形の求積方法について小集団で交流し、考えを分類して、より簡単な方法を話し合う。

○ 五角形の面積の求め方について工夫した方法を共有したり、より簡単な方法を考えたりすること

- ☆ 図形を2つに分ける方法と台形の上底を動かす方法をうまく組み合わせれば、1つの台形になって計算も簡単になるな。
- ☆ 切り分け法と動かし方の組み合わせのアイデアを組み合わせる新しい方法が便利だな。

3 五角形の面積の求め方で、小集団で考えたより簡単な方法を、学級全体で出し合い、話し合う。

○ より簡単な方法を交流し合い、考えのよさを共有すること

- ☆ 図形を2つや3つに分ける方法は、わかりやすいけれども、変形のアイデアを組み合わせると、もっと簡単な方法になるね。

準備

教師側：学習ノート、発表用ボード、

発表用カード、指示棒

児童側：定規、ファイルした学習ノート

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 五角形の図形と前時の四角形の図形とを比べ、図形を囲む辺に平行な部分がないことを発言している。
- ◎ 面積を求める方法について、これまでの方法として、「切り分け」「分け合わせ」「つけ足し」「動かし」の方法を想起し、発言している。

【支援】

- ※ 前時の四角形と本時の五角形との共通点や差異点を発問する。
- ※ 前時までに見つけてきた面積を求めるためのアイデアについて、流れ図やノートをもとに発問する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 既習の面積の公式と図形の見方との組み合わせによって、自力で多様な求積方法を見つけ出している。
- ◎ 求積のアイデアを図や言葉に置き換えて過程をノートに表現している。

【支援】

- ※ 図形の変形のアイデアを書き込んだり、手順よく説明したりできるように、学習ノートの考えの記入欄を設置しておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 発表用カードを用いて、友達に五角形の面積を求めるアイデアとその過程を説明している。
- ◎ どのアイデアを使ったかによって、考えを分類し、より簡単な方法を見つけ出している。

【支援】

- ※ 発表用カードに説明に必要なことを書き込ませてから説明させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 小集団でより簡単な方法として選出したものに対し、簡単な理由を説明している。
- ◎ 簡単な方法の共通点を見つけ出している。

【支援】

- ※ 公式を用いる回数や、図形の個数の観点から比較させる。

基本のみそ汁をもとに、家庭実践のみそ汁を追究する学習

第6学年1・3組 家庭科学習指導案

指導者 緒 方 敦 子

題 材 つくろう!伝統の味、ご飯とみそ汁

指 導 観

本題材について

本題材は、米飯とみそ汁の調理に関する基本的・基礎的な知識・技能を身につけ、家庭実践できることをねらいとしている。具体的には、①調理を行うことで米から米飯への変化が分かること、②みそ汁の調理方法が分かること、③米飯とみそ汁は、日本の各家庭で古くから親しまれている食品の組み合わせであり、食材の組み合わせを変えながらも、手軽に調理できることが分かることである。米飯とみそ汁が調理できることは、今後の食生活を構築していく上で、よりよい食生活をつくることに結びつく上からも意義深いと考える。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、今までにゆでる、炒めるなどの調理方法に関心をもち、簡単な調理をつくることに進んで取り組み、食に対して関心が高い。また子どもたちは米飯やみそ汁について日常的な食事として親しんでいる。しかし、米飯やみそ汁のよさや調理方法、そこに伝わるよさや知恵については十分に理解していない。そこで、本題材で実習や調べ学習を通し、米飯やみそ汁のよさや調理方法を理解していくことで、日本の伝統的な味である米飯とみそ汁のよさについて見直すことにつなげていく。

本題材の指導について

本題材の指導にあたっては、つかむ段階でご飯とみそ汁に出合わせ、つくりたいという意欲をもたせる。つくる段階では、実習を通してみそ汁づくりに必要な知識・技能を習得させる。その実習では、だし、実、みその3つについて分かったことをもとに家庭実践の計画を立てさせる。いかす段階では、家庭実践の計画をもとに、調理実習を行う。題材を通して、食材を変えて繰り返し実習することで、みそ汁づくりへの理解が深まり、技能の定着が図られ子どもたちが自信をもって実践に臨めるようにする。

目 標

- 1 米飯とみそ汁に関心をもち、意欲的に実習や、家庭実践に取り組もうとすることができる。
- 2 米飯とみそ汁の調理方法が分かり、家庭実践の計画を立てると共に、自分の工夫点をいかしながら実践することができる。

計 画 (約 11 時間+課外)

階	主 な 学 習 活 動	時
つ か む	1 家庭で食べられている米飯とみそ汁に出合い、学習課題について話し合う。 ○ 自分たちも米飯とみそ汁をつくりたいという意欲をもつこと ※ 実物の米飯とみそ汁の提示と試食する時間を設定する。	2
	2 米飯とみそ汁をつくるために計画を立て、実習を行う。 (1) 米飯の炊き方について調べる。 ○ 給水時間、加熱時間、水と米の割合について理解すること ※ 米の変化が分かるモデルを提示する。	7 ②
つ く る	(2) 基本のみそ汁について話し合い、話し合ったことをもとに調理実習を行う。 ○ だしの取り方、実を入れる順番、味噌の風味を損なわない方法を理解すること ※ 課題解決のために、比較実習させる。	②
	(3) よく食べられている実について、入れるタイミングについて話し合い、調理実習を行い、家庭実践の計画を立てる。 ○ 実の種類に応じて、鍋に入れる順序とタイミングが変わることを理解すること ※ 基本のみそ汁をもとに話し合わせる。	③ 2 / 3 本 時
い か す	3 家庭実践の計画をもとに、調理実習を行うと共に、実際に家庭で実践する。 ○ 家庭実践の時の、自分の工夫点を意識しながら取り組むこと ※ 実践交流会を行う時間を設定し、実践結果や家族からのコメントを紹介する。	2 + 課 外

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- みそ汁をつくるために、実を入れるタイミングを明らかにしながら、意欲的に調理実習を行うことができる。
- 計画に沿って、調理実習を行い、基本のみそ汁をもとにすれば、実を変えても、みそ汁をつくることができる。

- 1 前時までの内容を振り返りみそ汁づくりの計画について話し合う。
 - みそ汁をつくる上で、実を入れるタイミングについて検討していく必要があることに気付くこと

☆ この実でもみそ汁ができるかな。どのタイミングで、実を鍋に入れていけばいいのか確かめたいな。

本時のめあて

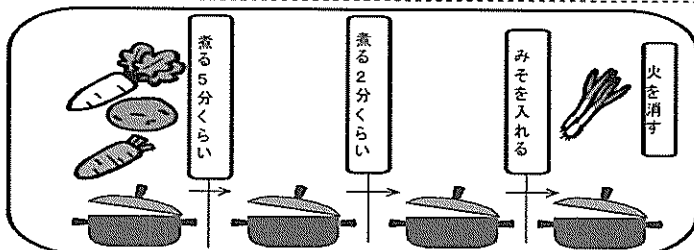
みそ汁づくりに、よく使われる実をいつ鍋に入ればよいの調べるために、基本のみそ汁をもとにして実習しよう。

- 2 基本のみそ汁をもとにして、グループで実を入れるタイミングについて話し合い、調理実習を行う。

(1) 調理過程のどの段階で、どの実を入れていけばよいのかを話し合い、調理の計画を立てる。

○ みそ汁の実の種類によって、鍋に入れるタイミングを変える必要があることに気付くこと

☆ 大根やにんじん、ジャガイモはどのタイミングで鍋に入れるのかな。固いから最初に入れるのかな。



(2) 話し合ったことをもとに、調理実習を行い、みそ汁ができるかどうかについて確かめる。

○ 調理のどの段階で、実を入れればよいのかを把握すること

☆ 火が通りにくいものは、最初がいいみたいだね。

☆ すぐに火が通る実は、みそを入れる直前でいいね。友達と確かめ合いながら、できたからよかったな。

- 3 調理実習の結果を報告し合い、実に応じてどこで鍋に入ればよいのかについて話し合う。

○ 実に応じて鍋に入れるタイミングが異なることを理解すること

☆ 今日の調理実習で、実を入れるタイミングが分かったから、みそ汁づくりに自信がたったぞ。

☆ 今日の実習の結果をもとに家庭実践の計画が立てられそうだ。次は、実践でつくるみそ汁に挑戦してみたいな。

準備

教師側：プリント、調理器具、調理実習に使う材料、ボード

児童側：エプロン、筆記用具、マスク

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

◎ みそ汁づくりをする上で、みそ汁の実をいつ鍋に入ればよいのかについて、調べる必要があることに言及する姿や、発言している姿

【支援】

※ みそ汁には、いろいろな実が使われていることに気付かせ、調理方法を、基本のみそ汁をもとにして、検討する必要性について、実感させる。

【子どもの見取りの観点】

◎ どの種類の実がどの段階で鍋に入るのかを、理由も一緒にお互いに確認したり説明している姿

【支援】

※ どの種類の実をどこで鍋に入れるのかが分かるように、ボードを用いて、話し合わせる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 友達と協力したり、安全や衛生面に気をつけたりして実習している姿

【支援】

※ グループの中で、役割分担させて、調理実習させる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 話し合ったことをもとに、みそ汁ができるかどうかを、調理実習を通して確かめている姿

【支援】

※ 話し合いに用いたボードを見ながら、調理実習をさせる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 調理実習を通して、実の種類に応じて、鍋に入れるタイミングが異なることに言及する姿

【支援】

※ 各グループの結果を板書で整理していく。

【子どもの見取りの観点】

◎ 根菜類は最初に、火が通りやすいものは、その後に入れるなど、種類に応じて、入れるタイミングが決まってくることに言及する姿

【支援】

※ 拡大ボードを用意し、実がどの段階で入ったのかを整理していく。

主人公の判断や把握した価値を比較しながら新たな道徳的価値を見出す学習

第6学年2組 道徳学習指導案

指導者 三 浦 研 一

主 題 最上級生としての責任

指 導 観

本主題について

本主題は、役割を果たすことの大切さを実感し、仲間と協力しながら、責任をもった行動をしていこうとすることをねらいとしている。そのために、2つの資料を活用し、役割や責任を果たすことの大切さについて考えさせる。2つの資料の選定にあたっては、子どもたちの生活実態に近いものを選定し、資料配列に関しては、抽象から具体へと、把握した価値を活用することができるようにする。そこで、本主題を設定し、最上級生としての役割と責任を果たすことの大切さについて考えることは、よりよい学校生活を営んでいく上で意義がある。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、これまでの学校生活の中で、最上級生としての役割や責任を意識しながら生活することができている。しかし、リーダーとしての体裁をつくろい、本当に自分の役割を果たすことができていることも多い。そこで、本主題において、資料を通して主人公の判断する心を分析的にとらえさせることで、主体的に責任を果たすことのように気付かせ、自分が属する集団をよりよいものにしていこうとする心情を養いたい。

本主題の指導について

本主題の指導にあたっては、2つの資料を比較しながら、最上級生としての役割と責任の大切さをつかむことができるようにする。そこで、資料A『気持ちのよい登校班に』では、自分の役割と責任に対する心構えについて考えさせ、資料B『そうじ班長のなやみ』では、判断の伴う場面において、最上級生としてどのような心構えでいることが大切なのか考えていく。これまでの自分との比較、主人公の判断内容の比較、資料同士の比較を位置付け、実生活に向けての問いをうみ出し、実践意欲を高めることができるようにする。

目 標

- 1 最上級生としての役割と責任を見つめ直し、これからの生活に向けての実践意欲を高めることができる。
- 2 最上級生としての役割と責任を果たすための大切な心に気付き、自覚することができる。

計 画 (約2時間)

階	主 な 学 習 活 動	単
見 つ め る	1 自分を振り返り、役割や責任を果たすことの大切さについて考え、話し合う。 (1) 資料A『気持ちのよい登校班に』をもとに、主人公の気持ちを考え、役割を果たすときの大切な心について話し合う。 ○ これまでの自分から主人公の心情を把握すること ※ 主人公の心情を共感的に把握させる。 (2) 資料B『そうじ班長のなやみ』を提示し、資料A『気持ちのよい登校班に』との違いについて話し合う。 ○ 役割責任にかかわる問いをもつこと ※ 判断を迫られる場面の含まれる資料を提示し、子どもたちに価値葛藤させる。	1
	2 資料B『そうじ班長のなやみ』をもとに、最上級生としての役割と責任の大切さについて話し合う。 (1) 迷う場面における主人公の判断について考え、話し合う。 ○ 主人公の心情から、道徳的行為を支える心の違いに気付くこと ※ 判断内容を比較しながら、それぞれの判断を支える心について明らかにする。 (2) 把握した価値をもとに、これからの具体的な自分の姿について話し合う。 ○ 役割責任の価値をとらえること ※ 価値にかかわる映像を提示する。	1 本 時
深 め る	3 これからの自分について考え、話し合う。 ○ 価値の実現状況を振り返ること ※ 実現状況を振り返る活動を位置付ける。	事 後

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 2つの資料の比較から見出した価値をもとに、これまでの自分を見つめ、実生活に向けての実践意欲を高めることができる。
- 2つの資料を比較することで、考えを他者と交流しながら、最上級生としての役割を果たそうとする自分に気付くことができる。

1 資料A『気持ちのよい登校班に』と資料B『そうじ班長のなやみ』とを比べ、主人公の違いについて考え、話し合う。

- それぞれの主人公の自分の役割を責任をもってやり遂げようとする姿の違いに課題意識をもち、追究の方向を明らかにすること

☆ 最上級生としての役割を果たすにはどんな心が大切なのか。

本時のめあて

最上級生として判断に迷ったときに、リーダーシップを発揮するための大切な心について考えよう。

2 資料B『そうじ班長のなやみ』をもとにしながら、迷う主人公の判断について考え、最上級生として役割や責任を果たすための大切な心について話し合う。

- (1) 資料B『そうじ班長のなやみ』での迷う場面における主人公の判断について考え、その違いについて異質小集団で話し合う。

- 迷う場面における主人公の判断について考え、それらと比較することでそのときの心を分析的にとらえること

☆ 「1年生ができるまでしよう」という判断と「1年生ばかりかまてられない」という判断には、それぞれ大切にしている心の違いがあるな。

- (2) 資料A『気持ちのよい登校班に』の主人公が大切にしたい心と、迷う場面での主人公の判断とを比べ、役割や責任を果たすときの大切な心について考え、話し合う。

- 前時の資料と比較し、役割や責任を果たすための大切な心について明らかにし、価値を把握すること

☆ 資料Aでは、あきらめない心や創意工夫する心が大切だったけど、資料Bでは、本当に相手のことを考えることや自分に与えられた責任にしっかりと応えることが大切だということがわかってきた。

- (3) 役割や責任を果たすときの大切な心をもとに、これまでの自分自身を見つめ、これからの自分について考え、話し合う。

- これからの実生活に向けての具体像を明らかにし、最上級生として役割を果たそうとする心があることを自覚すること

☆ これまでの自分は、ただやらされているだけの自分が大きかったけど、今は本当に相手のことを考える心が大きくなってきた。

3 実生活へ向けての意欲を高めることができるような教師の説話を聞き、これから大切にしていきたいことについて話し合う。

- 教師の説話から実践への意欲を高めること

☆ 最上級生ということを意識して活動に取り組んでいきたい。

準備

教師側：場面絵、資料『気持ちのよい登校班に』『そうじ班長のなやみ』、付箋紙、道德ノート、心の大きさカード

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 2つの資料の主人公が大切にしたい心の違いから、本時学習での追究の方向性について見通しをもっている。

【支援】

- ※ 2つの資料を比較しながら、その違いを明らかにすることができる話し合い活動を位置付ける。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 主人公が役割や責任を果たすために判断し、大切にしたい心に違いがあることをとらえている。

- ◎ 主人公の判断についての自分の考えをもとに、立場の違う他者と交流し、自分の判断の見直しをしている。

【支援】

- ※ 主人公の判断や心の違いをとらえることができるようにするために、価値比較図に、自分の考えをまとめる活動を位置付ける。

- ※ 自分の考えをもとにした異質小集団による交流活動を位置付け、ねらいとする価値について考えを深めることができるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 最上級生としての役割や責任を果たすために大切にしたい心について明らかにすることができる。

【支援】

- ※ 前時に明らかになった役割や責任を果たすための大切な心と、主人公の判断や心とを比較し、話し合う活動を位置付ける。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 把握した価値をもとに、これまでの自分の最上級生としての姿を見つめ、これからの生き方についての具体的な考えをもっている。

【支援】

- ※ 学習前の自分と学習後の自分の心を見つめることができるカードを活用し、大切にしたい心の大きさの違いがわかるようにする。

- ※ 最上級生として役割を果たす様子がわかる映像資料を提示し、これからの具体的な生活においての在るべき自分の姿について考えさせる。

友達とかかわりながら、よける転がす動きを自らつくりだす学習

第1学年2組 体育科学習指導案 (1・2年ふじ組との交流及び共同学習)

指導者 毛利 拓也 (T1) 堀 亮 輔 (T2)

単 元 うまくよけよう! ころがしボールゲーム

指 導 観

本单元について

本单元のねらいは、ねらったところにボールを投げたり転がしたりすること、ボールを止めたりすること、ボールを操作できる位置に動くことができるようになることである。また、ゲームの簡単な規則を理解したり、同じ仲間(友達)や相手(敵)を意識してかかわりを広げたり、深めたりしていくこともねらっていきたい。本单元は、簡単な規則でボールを転がしたり、投げたりするドッジボールをもとに子どもの実態に合わせて場や得点方法などの規則を工夫したボールゲームである。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、いろいろなボールを投げたり、捕ったりする遊びなどに興味をもっている。また、中あてドッジボールなどの簡単な遊び方についてはある程度理解し、相手を意識してボールを投げたり、よけたりすることができる。しかし、ボールをねらったところに投げる・転がすなどの動きは十分に身に付いてはいない。そこで、場や得点方法などの簡単な規則のボールゲームを設定し、動きを繰り返して、簡単なボール操作やボールを持たない動きを自分たちで身に付けられるようにしたい。

本单元の指導について

本单元の指導にあたっては、簡単な規則や場の变化からよける、転がす動きを高めて、投げる・止める・移動するなどの動きのよさをつくることができるようにする。であう段階では、新たなゲームに出合わせ、試しのゲームを通して、活動の簡単な規則を理解させるとともに、新しい動きを体験させる。ひろげる段階では、よける転がす動きを高める場を通して投げる・止める・移動する動きのよさを引き出していく。いかす段階では、ころがしボールゲーム大会を行い、今までに獲得した動きのよさを発揮させることによって満足感や達成感を味わわせる。

目 標

- 1 ゲームの簡単な規則を理解し、2組やふじ組の友達と協力したり、教え合ったりしながら「ころがしボールゲーム」を楽しむことができる。
- 2 場や対戦相手などの状況の変化に合わせてよける、転がす動きから投げる・止める・移動する動きをつくりだすことができる。

計 画 (約7時間)

時 間	主 な 学 習 活 動	備 考
1	新しいゲームに出合い、試しの活動をしながらか動きを体験する。 ○ ゲームで必要なよける、転がす動きを体験すること ※ ゲームの手順表の提示と動き方の説明や動きのモデル演示	1
2	変化する場でゲームを楽しむ。 (1) 2つの島を移動するゲーム1をする。 ○ ゆっくりボールをよけたり、転がしたりする動きをつくること ※ ボールを転がす動きを身に付けるための規則の提示と動き方の説明	4 ①
3	(2) 3つの島を移動するゲーム2をする。 ○ 相手の動く先を予想してボールを転がしたり、少し動きを止めてよけたりする動きのよさを身に付けること ※ 3つの場を移動できる規則の提示と対戦する人数の変化、動きのモデル演示	②
4	(3) 3つの島を移動するゲーム3をする。 ○ ボールを転がしたり、よけたりしながら、投げる・止める・移動する動きのよさを身に付けること ※ 3つの場の規則の提示とモデル演示	① 本時
5	つくった動きをいかして大会を行う。 ○ 身に付けた動きのよさをいかして、ゲーム大会で動きのよさを実感すること ※ これまでの動き方のよさを想起させるような流れ図の提示や賞賛の声かけ	2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 友達と動きの教え合いや声のかけ合いをしながら2組やふじ組の友達と協力して「ころがしボールゲーム」を楽しむことができる。
- 3つの場を移動するコートにおいて、相手の位置や動き方に合わせて自分で判断して、ボールをよける・転がす動きを通して、投げる・止める・移動する動きを身に付けることができる。

1 これまでの「ころがしボールゲーム」を思い出し、新しいころがしボールゲームの場所での動き方について話し合う。

○ これまでの「ころがしボールゲーム」と新たな場での試しの「ころがしボールゲーム」を行い、規則や動き方の違いに気付くこと

☆ 新しい転がしゲーム3では、道の幅がかわっているかな。

本時のめあて

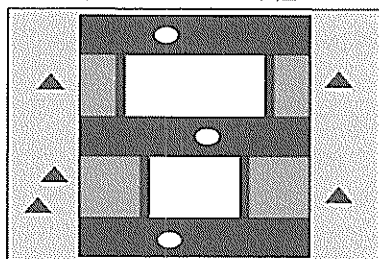
3つの しまのコースで うまくよけたり ころがしたりして
ともだちと ゲームを たのしもう。

2 新しいルールやコートで、楽しくころがしボールゲーム3をする。

(1) 5人対3人での対戦でゲーム3の前半をする。

○ 増やした攻めの人数や移動するコートの変化を利用して、転がしたり、よけたりする動きをつくること

<ゲーム3のコート図>



【ゲーム3基本のルール】

- ・ 1セット3分間×2回
- ・ 島から島へボールを当てられずに移動できたら、シールがもらえる。
- ・ 移動するコースに柵を設けてその下を狙ってボールを転がす。

☆ 相手の動きやボールを見てから、うまくよけよう。

☆ ボールの動きに合わせて、早めに(遅めに)転がそう。

(2) 5人対3人での対戦でゲーム3後半をする。

○ 規則の変化(30秒後に投げる動きが追加される)を利用して、転がす・よける動きから投げる・止める・移動する動きをつくること

☆ 相手の動く先を考えて、早めにボールを投げよう。

☆ 投げられるボールを考えて少し動きを止めて、よけよう。

3 新しいころがしボールゲームで、よくできるようになった動きや自分や友達のがんばりなどについて話し合う。

○ 新しいゲームでできるようになった投げる・止める・移動する動きを身に付け、その動きのよさについて気付くこと

☆ 前よりも相手にボールを当てられるようになったな。

☆ ボールがくる場所を考えて、よけられるようになったな。

☆ ボールをもっている友達から離れた所へ動いてみよう。

○ 準備

教師側：ボール、手順表、コートの図、
対戦表、柵、支柱、BGM、
Gボール、ビブス、流れ図

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

◎ これまでのゲームと本時の場での試しのゲームでの規則や動き方の違いに気づき、その違いを発表している。

【支援】

※ 前時のゲームと違う本時の場(人数や規則)での試しのゲームを行わせ、本時のめあてについて、話し合わせる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 相手の動きをよく見ながら、ボールを転がしたり、よけたりしている。

【支援】

※ ゲーム3では、島から島へGボールにボールを当てられずに移動できたらシールがもらえる。

※ 移動するコースに柵を設けて、その下を狙わせることで、ボールを転がす動きを高める。

※ 投げたり、よけたりするタイミングのはかり方について、教師のモデル演示や賞賛の声かけをしていく。

【子どもの見取りの観点】

◎ 相手の動きをよく見ながら、自分がどこに動くかを判断して、移動してボールに当たらないようによけている。

◎ 動く相手に合わせて、自分も動きながら、よい判断をしてボールを転がしたり、投げたりすることができている。

【支援】

※ 移動するコースに柵を設けて、その上を狙ってボールを投げる動きを高めるようにする。

※ 教師の声かけや演示、友達のうまくいった動きの演示の発表などをさせることによって、狙ったところに投げたり、捕ったりするコツをつかませる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 友達のうまくいった動きの演示を見て、動き方のまねをしたり自分の動き方を発表したりしている。

【支援】

※ 動きのモデル演示の発表と動き方のよさについて話し合わせて、本時の学習を振り返らせると共に、次時のゲーム大会への意欲付けを行う。

友達とかかわりながら、よける転がす動きを自らつくりだす学習

第1・2学年ふじ組 体育科学習指導案 (第1学年2組との交流及び共同学習)

指導者 堀 亮 輔 (T2) 毛 利 拓 也 (T1)

単 元 うまくよけよう! ころがしボールゲーム

指 導 観

本学級の子どもたちについて

本学級の6名の子どもたちは、休み時間にボール遊びをしている姿がよく見られる。友達と一緒に投げたり転がしたりなどのボール遊びをする子どももいるが、中には1人だけでボール遊びをする子どももいる。飛んでくるボールの位置関係を判断することはまだ難しいが、転がってくるボールであればおおよその方向をつかんで動くことができる。そこで、ボールを転がして楽しむゲームを繰り返し行うことで、動き方を知り、攻め方を見付けて、ゲームを楽しむことができるようにしたい。

本単元について

本単元は、簡単なルールでボールを転がしたり、投げたりするドッジボールをもとに、子どもの実態に合わせて場や得点の方法などのルールを次第に難しくしていくゲームである。本単元のねらいは、攻めと守りのあるゲームを友達と楽しく行い、簡単なボール操作やボールを持たないときの動きができるようになることである。また、ゲームを行うことを通して、運動を行う際の手順やきまりを正しく理解したり、友達と協力したり一緒に楽しく活動する態度を身に付けたりすることができるようになることもねらっていく。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、場の変化に応じよける、転がす動きをつくることができるようにする。であう段階では、新たなきまりやゲームに出合わせて、活動の手順や簡単なルールを理解させるとともに新しい動きを体験させる。ひろげる段階では、活動の場や相手の人数を攻撃優位な数に変化させ、よける転がす動き、投げる・止める・移動する動きなどを引き出していく。いかす段階ではころがしボールゲーム大会を行い、今までに獲得した動きを発揮させ、満足感や達成感を味わわせる。

目 標

- 1 運動の手順やきまりを理解し、2組やふじ組の友達と協力したり、教え合ったりしながら「ころがしボールゲーム」を楽しむことができる。
- 2 場や対戦相手の人数による状況の変化に合わせて、転がす、投げる、よけるなどの動きをすることができる。

計 画 (約7時間)

階	主 な 学 習 活 動	単 元
で あ う ひ ろ げ る い か す	1 新しいゲームに出合い、試しの活動をしながらか動きを体験する。 ○ ゲームで必要なよける、転がす動きを体験すること ※ ゲームの手順表の提示と動き方の説明や動きのモデル演示	1
	2 変化する場でゲームを楽しむ。 (1) 2つの島を移動するゲーム1をする。 ○ ボールを転がしたりよけたりする動きのタイミングをつかむこと ※ 2つの場を移動できるルールの提示と対戦する人数の変化、動きのモデル演示	4 ①
	(2) 3つの島を移動するゲーム2をする。 ○ 教師や友達の声かけで、強くボールを転がしたり素早くよけたりする動きを身に付けること ※ 3つの場のルールの提示とモデル演示	②
	(3) 投げる動きを加えたルールで、3つの場を移動するゲーム3をする。 ○ ボールを投げる、止める、移動するなどの動きを身に付けること ※ ねらった位置へのボールの投げ方についての動作補助やモデル演示	① 本 時
	3 つくった動きを活かして大会を行う。 ○ つくりだしてきた動きを活かしながらか投げたりよけたりすること ※ これまでの動き方のよさを想起させるような流れ図の提示や賞賛の声かけ	2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 友達と声をかけ合い、2組やふじ組の友達と協力して「ころがしボールゲーム」を楽しむことができる。
 - 相手の位置や動き方に合わせて、素早くよけて移動したり、正確にボールを投げたり転がしたりすることができる。
- (A G)：教師の動作補助やモデル演示でよけたり投げたりできる。
(B G)：教師や友達の声かけに応じて素早くよけたり投げたりできる。

1 これまでの「ころがしボールゲーム」を思い出し、新しいころがしボールゲームの場所での動き方について話し合う。

- これまでの「ころがしボールゲーム」と新たな場での試しの「ころがしボールゲーム」を行い、ルールや動き方の違いに気付くこと
- ☆ 新しいゲームでは、相手の人数やルールが変わっているな。

本時のめあて

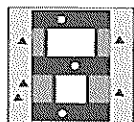
3つの しまのコースで うまくなげたり よけたりして ともだちと ゲームを たのしもう。

2 新しいルールで、楽しく「ころがしボールゲーム」をする。

- (1) 5人対3人での対戦で「ころがしボールゲーム」前半をする。

- 増やした攻めの人数を活かして転がしたり、素早くよけたりする動きをつくること

<ゲーム3>



- ・ 1セット3分間×2回。
- ・ 当てられずに移動できたらシールがもらえる。

☆ 相手の動きやボールをよく見てから、ボールの横にぱっと跳んでよけたり、まっすぐ正確に転がしたりしよう。

- (2) 投げてもよいルールを加えて、ゲームの後半をする。

- ルールの変化を活かして、正確に投げたり、素早くよけたり止めたりする動きをつくること

Aグループ	Bグループ
○ 教師の動作補助やモデル演示によって、正確に投げたり素早くよけたり止めたりすること	○ 教師や友達同士での声かけで、正確に投げたり素早くよけたり止めたりすること

☆ 相手の動きをよく考えて投げないと、ボールをうまく当てることはできないな。

☆ もっと横に速く動いて、ボールをよけよう。

3 新しいゲームで、よくできるようになった動きや、自分・友達のがんばりなどについて話し合う。

- 新しいゲームでできるようになったよける動きや、投げる、転がす動きのよさや伸びについて気付くこと

☆ 上手に投げたりよけたりできたから、楽しくゲームができたね。

○ 準備

教師側：ボール、手順表、コート図、対戦表、BGM、ビブス、柵、Gボール、流れ図

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 相手が転がす動きをよく見ながら、素早くボールをかわすことができる。
 - ◎ 相手が島から島へ移動する動きをよく見ながら、ボールを正確に転がすことができる。
- (A G)：教師の動作補助やモデル演示で、よけたり転がしたりする。
(B G)：教師や友達同士での声かけでよけたり転がしたりする。

【支援】

- ※ 転がしたり、移動したりする感覚のはかり方や転がし方について、教師のモデル演示や賞賛の声かけをする。
- ※ Aグループの子どもたちには、「今走って」など、具体的に動く位置が分かるような声かけをする。
- ※ Bグループの子どもたちには、他の人の動きを見ながら自分自身の動きの改善点に気付くことのできるような動作補助を行う。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 相手の転がす動きをよく見ながら、素早くボールをよけている。
 - ◎ 動いている相手に合わせて、正確にボールを投げている。
 - ◎ ボールの飛んでくる方向や距離をつかんで、ボールを止めている。
- (A G)：教師の動作補助やモデル演示により素早くよけたり正確に投げたりする動きをつかむ。
(B G)：教師や友達同士での声かけにより素早くよけたり正確に投げたりする動きをつかむ。

【支援】

- ※ 教師の声かけや演示、友達のうまいといった動きの演示の発表などをさせることによって、素早いよけ方や正確な投げ方についてのコツをつかませる。
- ※ Aグループの子どもたちには、効果的にゲームを進めることができるために、実際に一緒にボールの取れる位置に動くなどの動作補助を行う。
- ※ Bグループの子どもたちには、転がってきたり飛んできたりしたボールをよけるための動きがわかるように、どのように移動すればよいかわかる声かけをする。

第3・4学年 さくら組 生活単元学習指導案

指導者

倉 富 護

単 元 ピザパーティーをしよう

指 導 観

本学級の子どもたちについて

さくら組の子どもたちは、3年生男子2名、女子2名、4年生男子2名の計6名から構成されている日常生活において、保護者と一緒に調理する等の体験はしてきている。調理では保護者の指示に従って、物を運んだり、道具の準備をしたりといったことをしてきている。しかし、目的に応じて役割分担し、調理する経験にまではいたっていない。そこで役割を明確にしたピザ作りをする。

本単元について

本単元は、家庭で行ったピザ作りをきっかけで、学級で、「みんなでピザを食べたい。」という目的意識がうまれたことから始まる。ねらいは、調理を通して、自分の役割を果たすことである。具体的には①調理に向けて必要なことを見通すこと、②ヒントパネルや教師から、必要な情報を求め、求めた情報を手がかりに課題解決に迫ること、③求めた情報を活用し、自分の役割を果たすことが主な内容である。このことにより、課題解決に意欲的な態度、情報の収集・活用の力、社会的なスキルなどを身に付け、自分の役割を果たしていけるようになる。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、つかむ段階では、家庭でピザ作りした体験をもとに、ピザ作りについて話し合い、ピザパーティーについての学習の見通しをもつ。次につくる段階では、ピザ作りの課題解決のために情報を収集したり、活用したりして、ピザ作りをする。さらに、課題解決が繰り返される中で学級のみならず一緒に食べたいという思いが他の人にも食べさせたいというようにひろがり、パーティーの準備活動にも取り組むようにする。いかす段階では、さぐる段階までに身に付けたピザ作りやパーティー開催までの学びを発揮して、他の学級の友達を交えてピザパーティーを行うようにしていく。

目 標

- 1 みんなでピザを作って食べたいという目的意識に向かってピザ作りの課題（こねる、材料を選択する、焼く等）の解決に取り組む。
- 2 ピザの調理を通して、自分の役割を意識したり情報の求め方を工夫したりすることができる。
A G：提示された写真や友達の働きかけからピザ作りにおける情報を収集し、ピザ作りにおける自分の役割を果たすことができる。
B G：場の中からピザ作りにおける情報を集め、他者に働きかけながら調理の役割を果たすことができる。

計 画（約13時間）

階	主 な 学 習 活 動	期
つ	1 ピザ作りする体験をもとに話し合い、課題を整理して、学習計画を立てる。	3
か	○ ピザ作りに向けての計画を立てること	
む	※ ピザの実物や実体験の場	
つ	2 ピザ作りの仕方の課題をもって、計画にそって、課題を解決していく。	8
く	(1) ピザ作りの仕方の情報を収集して、ピザ作りをする。	③
る	○ ピザ作りのために必要な情報をとらえること	本時
	※ ピザ作りの手順やかかわりヒントパネルの提示	3/3
	(2) 招待状や会場作りなどのピザパーティーについての準備をする。	③
	○ 目的達成に向けての準備できること	
	※ パーティー会場や招待状のモデル提示	
	(3) 保護者とピザパーティーをする。	②
	○ ピザパーティーを開催し、目的を達成できた喜びを味わうこと	
	※ パーティー会場の設定	
い	3 友達とピザパーティーをする。	2
か	○ 順序など学習したことを生かすこと	
す	※ 学びを活用する場の保障	

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 前の時間までに収集したピザの作り方の順序、具の種類、後片付けや安全、衛生などの情報を活用し、準備、食べる、片付けるなどの調理の見通しをもち、ピザ作りに意欲的に取り組むことができる。
- ピザ作りにおける必要な知識や技能を身に付けることができる。
 AG：掲示された手順表やヒントパネルをもとにしたり、先生から聞いたりして、ピザの具を選択して順序にそってピザを作ることができる。
 BG：場の中から、自分に必要な情報を集めながら、具を選択したり、相手を意識したりして、ピザ作りをすることができる。

1 前時までのピザ作りから今日の学習では、どんなピザをつくるのか話し合う。

○ 「いろいろなピザを作る。」という学習の見通しがもてること

☆ 今日は、好きな具をのせて作りたいな。

☆ 今日は、一人で作りたいな。

本時のめあて

ぐをえらんで、いろいろなピザをつくろう。

2 ピザ作りの方法と材料を選択して、ピザ作りをする。

(1) ピザ作りの仕方についての話を聞いたり、モデル演示を見たりして、道具や材料の準備をする。

○ ピザ作りの見通しをもつこと

☆ 自分で、作ることができるように順序よく作るぞ。

☆ みんなコーンが好きだから、コーンをのせるぞ。

☆ お母さんにも食べさせたいな。

(2) ピザ作りの手順に沿って、自分のピザを作る。

【AG】

○ ピザの種類や作り方などの情報をもとにしたり、友達の様子を観察したりしながら、ピザ作りの手順をとらえること

【BG】

○ 相手のことを考えて、具を選んだり、作り方を工夫したりして、ピザを作ることをとらえること

(3) それぞれが作ったピザを友達と一緒に試食する。

○ 自分で作り上げた喜びを味わうこと

☆ おいしいな。作れてうれしい。

☆ 友達のもおいしいな。

☆ 今度は、別のを作って食べたいな。

3 ピザ作りをして楽しかったことや、次は、どんな活動がしたいかについて話し合う。

○ できた満足感と、次のピザパーティーに向けての意欲と自信をもつこと

☆ 家の人にもピザ作りについて、教えてもらったので、今度は、家の人にも食べさせたいな。

○ 準備

教師側：ピザ作りモデルVTR、ヒントカード、ピザ作りの手順表、オープンレンジ、ピザの生地、ピザにのせる具、皿、ボール布巾、調理用手袋、お手ふき

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

◎ 学習の足跡からの振り返りをもとに、本時ピザ作りに関する発言をしている。

◎ 今日、学習するピザ作りのことについて、発言している。

【支援】

- ※ 調理ができるパーティ会場の場合
- ※ 前時までに子ども達がピザ作りで必要な情報を集めたものをまとめたパネルの提示
- ※ ピザ作りモデルのVTR

【子どもの見取りの観点】

◎ ピザ作りにおける自分の役割（何の具のピザを作る）がわかっている。

【支援】

- ※ 具の種類の情報の掲示パネル

【子どもの見取りの観点】

◎ AG：提示された写真などの情報や友達の動きを見たり、友達の働きかけを受けたりしてピザ作りをしている。

BG：場の中から、自分に必要な情報を集め、友達に働きかけ、ピザ作りをしている。

【支援】

- ※ ピザ作りの手順の提示
- ※ AG：具の選択に関する情報の提示と助言
- ※ BG：具の選択や食べさせたい人に関する情報の提示と助言、友達への働きかけのパネル

【子どもの見取りの観点】

◎ ピザ作りをして、よさを味わって笑顔をみせている。

◎ 本番に向けて、満足感をもって、意欲を高めている発言をしている。

【支援】

- ※ 感想を発表させ、役割を果たすことと調理の技能を身に付けたことの価値付けや次時への方向付けの助言
- ※ 家の人からの手紙の提示

全体会（1日目）

▼ あ い さ つ（10：20～10：35）

福岡教育大学学長 大 後 忠 志
校 長 鈴 木 清 一

▼ 教科等発表①（11：05～11：25）

・社会形成者として判断する社会科学習
ーシミュレーション活動を位置付けた授業づくりー
社会科部 高 瀬 雄 大

▼ 主 題 発 表（10：35～11：05）

・豊かな学びを育む学習の創造
ー知のネットワーク化を図る活用・探究の授業づくりー
研究主任 田 中 健 悟

▼ 教科等発表②（11：25～11：45）

・数量や図形に豊かにかかわる算数科学習
ー置き換え活動を段階的に位置付けた授業づくりー
特別支援教育部算数科 弘 松 英 樹

▼ 児 童 発 表（11：45～12：00）

・創り出そう！私達のハーモニー
指導者 高 武 龍 彦

第1日目 午後の部

学習指導案

※ 下線付きの公開授業は、午後の学習指導協議会対象の授業です。

※ 雨天の際、体育科の授業は、附属福岡中学校の荒陵館2階で行います。

▼ 学 習 指 導 (13:00～13:45)

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
2年1組	<u>国 語 科</u>	糸で生きるってどういうこと？ ～糸で生きる虫たち～	平川 洋一	4年1組教室
2年2組	<u>図画工作科</u>	ぺったん がったい ふしぎなかたち	安藤 順子	工 作 室
3年1組	算 数 科	ボールをつくろう！ 正三角形・二等辺三角形	永尾 健	6年1組教室
4年1・3組	音 楽 科	「白」と「黒」の音楽をつくろう	高武 龍彦	音 楽 室
5年1組	<u>社 会 科</u>	米粉で復活！ 日本の農業「福岡県版R10プロジェクト」	高瀬 雄大	5年2組教室
5年2・3組	<u>体 育 科</u>	アタックチャンスを実践に ～ジャンボブレールボール～	渡邊 正則	附属小運動場
6年1・3組	<u>理 科</u>	電気を使ったヨットカーレース（電気の利用）	福原 伸治	理 科 室

▼ 特別支援教育学習指導 (13:00～13:45)

3・4年さくら組	国 語 科	だい本をつくってげきをしよう	諏訪原佳子	特支棟さくら組
5・6年梅組	算 数 科	てんすうをあわせよう ～おたのしみゲームたいかい～	弘松 英樹	特支棟音楽室

虫に関する情報を比較しながら、想像を広げる読み方を身に付ける学習

第2学年1組 国語科学習指導案

指導者 平 川 洋 一

単 元 糸で生きるってどういうこと? ～糸で生きる虫たち～

指導観

本単元について

本単元のねらいは、糸で生きる虫たちが「糸をどのように工夫して使っているか」という観点で情報を取り出し、虫の様子をとらえる読み方を習得・活用しながら、それぞれの虫が「糸で生きる」とはどのようなことなのか、自分のことばで表現することである。本単元で重点化する読み方を、①叙述と生活経験・写真をつないで読む、②虫と虫とを比較して「糸で生きているといえるか」解釈する、の2点に具体化する。題名から課題をもち、虫の様子について想像を広げる読み方を繰り返しながら、自然の摂理や虫の巧みさを実感していくことは、新学習指導要領でいう「習得・活用」に応えるものである。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、「たんぽぽのちえ」において、叙述と挿絵を対応させたり、事柄の順序にそって生活経験とつないだりしながら、内容を具体化する読み方を身に付けてきた。そのなかで、「仲間を増やすためのちえといえるか」解釈する学習を行ってきた。今後は、自分の経験との比較にとどまらず、事例として挙げられているもの同士を比べて判断する学習を充実させていく必要がある。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、子どもたち自身が読み方を意識しながら使ったり、虫たちの巧みさを実感したりすることができるようにしたい。つかむ段階では、題名をもとに「糸で生きるってどういうことなのか」課題をもたせる。ふかめる段階では、書かれている虫たちの順序をおさえながら、叙述と生活経験・写真をつなぐ読み方、虫同士を比較して糸で生きる意味を解釈する読み方を繰り返しながら身に付け、それぞれの虫の糸の使い方の巧みさをとらえる。まとめる段階では、「糸で生きる虫のすばらしさ」を表現し、深めた理解を実感させる。

目 標

- 1 「糸で生きるってどういうことなのか」課題をもって教材文を読むことができる。
- 2 虫たちの「糸の使い方」をもとに叙述を取り出し、生活経験・写真とつないだり虫同士の糸の使い方を比較したりしながら、それぞれの虫が「糸で生きる」意味をとらえることができる。

計 画 (約8時間)

時 間	主 な 学 習 活 動	備 考
つ か む	1 「糸で生きる虫たち」を読み、書かれている内容と順序について話し合う。 ○ それぞれの虫の糸の使い方と工夫が書かれていることをつかむこと ※ 写真をもとに順序をとらえさせる。	2
ふ か め る	2 それぞれの虫を読み深める。 (1) カイコガとアオバセセリの糸の使い方と糸で生きる意味について読み取る。 ○ カイコガ・アオバセセリを比べて、それぞれが糸で生きていることをとらえること ※ 糸の使い方が分かる箇所に線を引く、写真や生活経験とつないで具体化する、それぞれを比べて「糸で生きる」といえるか説明し合う活動を順に位置付ける。 (2) ハネナシコロギスとホシミスジの糸の使い方と生きる意味について話し合う。 ○ ハネナシコロギスとホシミスジを比べて、それぞれが糸で生きていることをとらえること ※ 糸の使い方が分かる箇所に線を引く、写真や生活経験とつないで具体化する、それぞれを比べて「糸で生きる」といえるか説明し合う活動を順に位置付ける。	4 ② 本 時 2 / 2
ま と め る	3 糸で生きる虫たちの糸の使い方と工夫について書きまとめる。 ○ それぞれのすばらしさを自分のことばで表現すること ※ 書き出しから結びまでの書き方を示す。	2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- アオバセセリが糸で生きているといえるか課題をもって文章を読み、アオバセセリの糸の使い方の巧みさを実感することができる。
- 叙述と生活経験・写真をつなぐ読み方、虫同士を比較する読み方を身に付けながら、糸で生きるわけをとらえることができる。

準備

教師側：学習の流れ図、写真、学習プリント、拡大本文、叙述カード

児童側：定規

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ アオバセセリもカイコガと同じように糸で生きているといえるか、知りたいと発言している。

【支援】

- ※ カイコガの糸の使い方のすばらしさを流れ図をもとに想起させる。
- ※ これまで使ってきた読み方や前時の写真を提示して、糸の使い方のすばらしさを予想させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 「はっぱを引っばる」、「とじ合わせる」を取り出している。

【支援】

- ※ 「糸の使い方」が分かる箇所にサイドラインを引かせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ カイコガはさなぎ・まゆであることに対してアオバセセリは幼虫・すであると、違いを明確に発言したり書いたりしている。
- ◎ 「活動に便利のように」「身を隠すために」「外敵を驚かせる」という点から「糸で生きる」意味を書いたり発言したりしている。

【支援】

- ※ 「まゆをつくるほど、たくさん糸を出すことはありません」という叙述をもとに、「糸で生きる」といえるか発問する。
- ※ カイコガと「何が違うのか」「どうして違うのか」問い返す。
- ※ アオバセセリの体の色がよく分かる「糸で生きる虫たち」の原典や写真を提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 「活動しやすいように」、「快適な住まい」、「外敵から身を守る」等の観点から「糸で生きる意味」を書きまとめている。

【支援】

- ※ 前時の書きまとめ方を参考にさせ、書き出しを与える。

- 1 カイコガとアオバセセリの写真を比べて、アオバセセリの糸の使い方の違いや糸で生きる意味について予想し、話し合う。

- アオバセセリの糸の使い方の工夫、糸で生きる意味を読んで見つけたいという思いをもつこと

☆ カイコガはまゆを体の回り全体につくって、外敵や湿気や温度から自分を守っていたな。アオバセセリはどうなんだろう。

本時のめあて

アオバセセリが 糸をつかう ようすを よみとって、「アオバセセリが 糸で 生きると いえるか」 はなし合おう。

- 2 アオバセセリが糸で生きる様子を読み取る。

- (1) アオバセセリの幼虫の「糸の使い方」がどこに書かれているかという観点で、文章を取り出す。

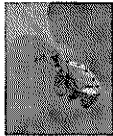
- 必要な情報を確かに取り出し、事柄の順序をとらえること

☆ 糸をロープのように使って、はっぱを引っばったり接着剤のように使ってくっつけたりして、葉と葉をとじ合わせているんだな。

- (2) 叙述と写真、生活経験をつないだり、2つの虫を比べたりしながら、アオバセセリの「糸で生きる」意味について話し合う。

- カイコガの「外敵や湿気、温度から体を守る」と比べて、アオバセセリの「糸で生きる」意味を、「葉と葉の間に隠れることができる」、「自由に動いてえさが食べられる」「風通しや見通しがよくなる」「外敵を驚かせる」等の点からとらえること

☆ アオバセセリは幼虫だから、生きていくために便利のように糸を使って巣をつくっているんだね。

ア オ バ セ セ リ			⇄		カ イ コ ガ
か だ の を 外 敵 に 通 見 に え さ を 食 べ る か せ る 外 敵 を 驚 か せ る	生 き る 意 味 を と じ 合 わ せ る	糸 の 使 い 方 を 引 合 は せ る	く ら べ る	生 き る 意 味 を と じ 合 わ せ る	糸 の 使 い 方 を 引 合 は せ る

- 3 アオバセセリが糸で生きるわけについてを書きまとめる。

- アオバセセリの糸の使い方の巧みさを実感すること

☆ 糸で生きているといえるよ。それはね、糸で葉を丸めて、すきまを作って、外敵から身を隠したり風通しをよくしたりしてるよ。

共通の場や材料を通して作品や友達と対話し、技能を働かせる学習

第2学年2組 図画工作科学学習指導案

指導者 安 藤 順 子

題 材 ペったん がったい ふしぎなかたち

指 導 観

本題材について

本題材は、身近にあるもので型押し遊びの活動を通して、豊かに発想し、自分や友達との表現の違いや面白さに気付くことをねらいとしている。これは見出された表現方法や内容について交流することで、写し出される形の面白さや意外性に気付き表現の楽しさを味わうことができる。具体的には、①身の回りにあるもので型押し遊びをし、写し出された形や色からイメージし、表現活動を楽しむこと②身近にある材料や用具の使い方を工夫して表現していくこと③一人遊びから並行遊び、共同遊びに発展し、多様な用具の組み合わせによる面白さについて交流し表現を練り上げていくことなどである。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、これまでに、ねちゃねちゃ絵の具で画面いっぱい好きな色を選択しながら手で表現した後に、見えてきた世界を見立て、パスを使って付加表現する活動をしてきている。また、ローラーの動かし方を工夫することで、直線だけでなく、カーブや色の濃淡など、様々な線の模様の面白さを表現してきている。そこで、一つの用具材料から様々な表現方法を見出し、さらに新たな発想をすることを繰り返せば、イメージしたものを表現する構想力を育むことになる。

本題材の指導について

本題材の指導にあたっては、身近なものを使った操作活動を取り入れていく。表現導入段階では、集めた自然材や人工材に絵の具をつけて型押し遊びの活動により、さらに材料の使い方・表し方について問いを創出させる。表現追究段階では、材料や用具を組み合わせたり、形を変形したりしながら写し方を工夫して表現し、具象的に表現していきたい内容へと深化させる。最後にパスやペンを使って表現しその作品の付加表現へと深化させる。

目 標

- 1 自然材や人工材を使って、写し出される形や色の面白さから意欲的に材料を選択し、活動を楽しみながら表現することができる。
- 2 スタンプ材を押す以外の方法を考えて型押しをし、写し出された色や形から想像し、表現を広げることができる。

計 画（約5時間）

階	主 な 学 習 活 動	時
表 現 導 入	1 自然材や人工材を使って、型押し遊びをする。 ○ 身近なスタンプ材から、題材への興味を喚起し、身近な材料によって写し出される形の面白さに気付くこと ※ 西公園に行つて自然材の収集や不定形な形が生み出される人工材の提供	2
表 現 追 究	2 スタンプ材の使い方を工夫し、写し出された形や色から発想し、表したい内容を付加表現する。 (1) スタンプ材を組み合わせたり、形を変形させたりしながら型押し遊びをする。 ○ 用具による表現の多様性をつくり出す面白さを味わうこと ※ 組み合わせたり、形の変形が可能な用具の準備と選択した色の提供 (2) 型押し遊びによって写し出された形や色から、想像したことを描画材料を使って付加表現する。 ○ 表現したい内容を写し出された形や色から発想すること ※ 全体で見立て遊びができるような参考作品の提示と顔料ペンの提供	2 ① 本 時
鑑 賞	3 それぞれの作品を展示し、グループ作品の自慢や面白さについて交流する。 ○ 作品のよさや面白さについて鑑賞し、表現した満足感や達成感を味わうこと ※ 全体で鑑賞する場の設定	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 新たなスタンプ材から写し出される形や色の面白さから意欲的に型押し遊びをすることができる。
- 自分の気に入る方法で何度でも繰り返しながら色や濃さ、押し方や材料・用具の組み合わせ方などを工夫して表すことができる。

1 これまでにできた造形作品を見て、さらに本時ではどんな活動をしていきたいのかについて話し合う。

○ 準備された材料や用具、新たに持参したものを使って型押し遊びをし、そこで発想したことをもとに、工夫して表現する活動の見通しをもつこと

☆ 私は、いろんな形をした洗濯ばさみでスタンピングをしたよ。

○○さんは西公園で拾ってきた枝をコロコロ転がしていたよ。

本時のめあて

ようぐを くみあわせたり、おしかたを くふうしたりして、おもしろい かたちを あらわそう。

2 写る形を想像し、材料や用具の組み合わせ方や押し方を工夫したりしながら型押し遊びをする。

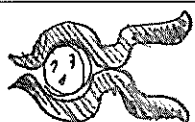
(1) 材料や用具をどのように組み合わせたり、押し方を工夫することができるのかについて、話し合う。

○ 写り方を想像しながら、できそうな型押し遊びの活動イメージを広げること

☆ 洗濯ばさみだと閉じたり開いたりすることができそうだよ。

(2) 試してみたい方法や材料・用具の組み合わせで、型押し遊びをしながら新たな形をつくったり、見立てたりする。

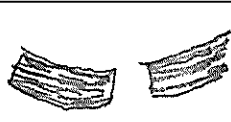
○ 手の動かし方や材料や用具の組み合わせなどについて繰り返し表現しながら創造性のある形を見出すこと



洗濯ばさみにスポンジを挟み、大きな魚



数本の木片を束ね、繰り返して、花畑



フィルムキャップを転がして汽車

☆ 洗濯ばさみとフィルムケースを組み合わせたらまるで魚が泳いでみたいになったよ。

3 グループでできた作品を鑑賞し、自分や友達の表現のよさや面白さについて鑑賞する。

○ 自分や友達の作品の面白さやよさについて交流し、表現することの満足感を味わうこと

☆ 石に違う色を着けて並べていったら、まるで虹ができたようだったよ。虹の上を歩いてみたいなあ。

準備

教師側：スタンプ材、スタンプ皿、これまでの作品、ビニールシート

児童側：スタンプ材、スモック、造形バッグ

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

◎ グループで表現してきた作品を、鑑賞の場に展示し、これまでの表現で面白かったところやこれからやっていきたい表現について意見を出し合っている。

【支援】

※ 全員が鑑賞できるように壁に造形作品を掛けて、どのような活動ができたのかについて意見を出させ、表現方法を共有させる。

※ 材料や用具の押し方や形の面白さについて話し合わせる。

【子どもの見取りの観点】

◎ これまでの型押し遊びの活動や、材料・用具の特徴を活かした新たな表現方法について思いつき、これからの表現活動の見通しをもっている。

【支援】

※ 造形作品の中から用具の組み合わせによってできた形について紹介させたり、用具の提示をする。

※ 材料や用具の活用の広がりを見出すことができるような板書をする。

【子どもの見取りの観点】

◎ 材料や用具を組み合わせ、新たな形を何度も試したり、表現を繰り返したり、絵の具の濃さや色、押し方を工夫しながら表現している。

【支援】

※ 材料ヒントコーナーに組み合わせたり、形の変形が可能な材料・用具を豊富に準備したりする。

※ 友達の活動範囲に入るときの活動ルールを提示し、共同遊びや並行遊びにつなげる。

※ 見立て遊びをしたときの形の名前や使った材料・用具を提示しておく。

【子どもの見取りの観点】

◎ 本時の活動からできた作品を見て、どのような型押し遊びの工夫をしたのか、形や色からどのような面白い形が生まれてきたかについて発表したり、聞いたりしている。

【支援】

※ 実際に鑑賞の場に展示し、工夫の観点が見られるような表現方法やその形や色からイメージしたことについて交流させる。

第3学年1組 算数科学習指導案

指導者 永 尾 健

単元 ボールをつくろう！二等辺三角形・正三角形

指導観

本単元について

本単元は、二等辺三角形や正三角形を作図したり敷き詰めたりしてボールを作る過程で正三角形、二等辺三角形の概念を理解することをねらいとする。具体的には、①正三角形、二等辺三角形の定義を理解すること②辺や頂点に着目して正三角形、二等辺三角形の意味を理解すること③二等辺三角形や正三角形を定規やコンパスを使って作図できることである。そこで、ボールを作る活動を通して二等辺三角形や正三角形の性質をとらえ、作図の方法や組み立て図を並べた模様から大きさの異なる二等辺三角形や正三角形を見だし二等辺三角形や正三角形の概念を柔軟に使いこなすことができるようにしたい。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、第2学年で「三角形、四角形」の学習で、構成要素に着目しながら三角形と四角形を弁別できるようになった。また、三角形や四角形を作図をすることだけでなく、辺や頂点に着目して直線を加えることで、思い通りに三角形や四角形を増やすことができるようになっている。そこで、ボール作りを行う中で、二等辺三角形や正三角形の構成要素を繰り返し活用できるようにしたい。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、ボールを作る活動を通して、二等辺三角形や正三角形の定義をとらえ、ボールの組み立て図の作成に生かすことができるようにする。そこで、つかむ段階では、二等辺三角形や正三角形でできたボールに出合わせ、性質をとらえることができるようにする。つくる段階では、作図をする方法を考えたり、正三角形や二等辺三角形のピースを並べたりして、角の大きさや辺の長さの相等関係を使って作図をしたりすることができるようにする。ひろげる段階では、ボールの組み立て図が多様な形で構成されていることをとらえさせる。

目 標

- 1 二等辺三角形と正三角形の意味や性質が分かり進んで二等辺三角形や正三角形を作図したりボールの組み立て図をつくったりすることができる。
- 2 二等辺三角形や正三角形を二等分したり組み合わせたりして他の図形をとらえることができる。

計 画（約8時間）

階	主 な 学 習 活 動	単 元
つ	1 正三角形や二等辺三角形でできたボールに出会い、正三角形、二等辺三角形の性質をさぐる。	1
か	○ 辺の長さに着目して正三角形と二等辺三角形の定義がわかり分類ができること	
む	※ 紙を折ったり、重ねたりしながら調べる場を設定する。	
つ	2 二等辺三角形や正三角形の作図をしながらボールの組み立て図を作る。	4
く	(1) 方眼紙やコンパスなどを使って二等辺三角形と正三角形を作図する。	②
る	○ 二等辺三角形と正三角形のかき方を考え、作図をすることができること	
る	※ ストローや定規を使いながら同じ長さの辺のかき方を考えさせる。	
る	(2) 二等辺三角形や正三角形のピースを並べてボールの組み立て図を作る。	②
る	○ 辺の長さや角の大きさの共通な点に着目すれば、二等辺三角形と正三角形を敷き詰められることをつかむこと	
る	※ 角の大きさや辺の長さに着目させる。	
る	3 二等辺三角形や正三角形の性質をいかして簡単なボールの組み立て図を作る。	3
る	○ 正三角形や二等辺三角形を組み合わせでできる多様な形を構成すること	本
る	※ ボールの組み立て図を作るときに、二等辺三角形や正三角形を組み合わせさせたピースでつくる活動を設定し、組み立て図の中に多様な形をとらえさせる。	時
		1
		／
		3

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- サッカーボールの組み立て図の中に複数枚の正三角形で組み合わさったピースを意欲的に敷き詰めることができる。
- 正三角形のピースで敷き詰められたサッカーボールの組み立て図の中から、いろいろな図形を見いだすことができる。

1 サッカーボールをつくるためにこれまで学習した正三角形を使って組み立て図（展開図）を構成する課題を話し合う。

- サッカーボールの組み立て図のシルエットに正三角形を2, 3…枚を組み合わせたピースを敷き詰める見通しをもつこと

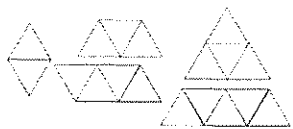
☆ サッカーボールの組み立て図のシルエットに正三角形を2つ組み合わせた形を並べていけば敷き詰められそうだよ。

本時のめあて

正三角形が組み合わさったピースをしきつめて、サッカーボールのくみだて図についてしらべよう。

2 サッカーボールの組み立て（展開）図を作る際に、これまでに学習した正三角形を組み合わせてつくる方法について話し合う。

- (1) 正三角形のいろいろな組み合わせについて出し合い、組み合わせられた形をもとにサッカーボールの組み立て図について調べる。



正三角形のいろいろな組み合わせ

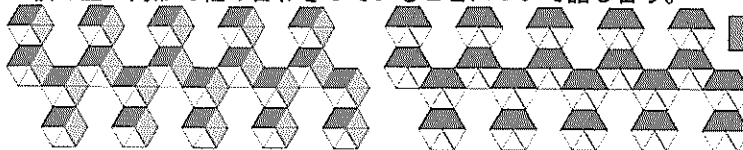


サッカーボールの組み立て図のシルエット

- 2, 3…枚の正三角形を組み合わせたものが正六角形の形をしていることに気づくこと

☆ 2まいや3まい、4まいの正三角形を組み合わせたピースを並べたら、うまくサッカーボールの組み立て図ができるぞ。

- (2) それぞれの組み合わせでできたサッカーボールの一部の形が6枚の正三角形で組み合わさっていることについて話し合う。



- 向きが変わっても正三角形の辺の長さは同じであり、正六角形が、6つの正三角形で構成されていることに気づくこと

☆ サッカーボールの一部分の形をよく見ると、6つの辺で囲まれたきれいな形（正六角形）が6つの正三角形でできているんだね。

3 正三角形を組み合わせることによって他にどんな形ができているのかを話し合う。

- 敷き詰められた図形の中に他の図形を見取ることができること

☆ 9まいの正三角形で、さらに、大きな正三角形ができるよ。ほら、一つの辺に三つ分の小さな正三角形がここここにもあるよ。

準備

教師側：サッカーボールの組み立て図のシルエット、正三角形のピース

児童側：コンパス、定規

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ サッカーボールの組み立て図のシルエットから、正三角形がどのように並べられるのかを類推し、見通しをもっている。

【支援】

- ※ サッカーボールの組み立て図のシルエットを提示し、組み立て図の中に正三角形のピースを敷き詰めていく活動を見通させ、正三角形がどのように敷き詰められるのかを見通させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ サッカーボールの組み立て図の中に、正三角形がどのように構成されているのかを調べるために、複数枚の正三角形が組み合わさったピースを敷き詰めている。

【支援】

- ※ サッカーボールの組み立て図の中に正三角形がどのように構成されているのかを効率よく調べるために、正三角形を複数枚組み合わせたピースを提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ サッカーボールの組み立て図の中の正六角形部分に着目して、正六角形が、2まいの正三角形の組み合わせ（ひし形）、3まいの正三角形の組み合わせ（台形）などで構成されていることを説明している。

【支援】

- ※ さらに、正六角形が、正三角形で構成されていることに気づかせるために、サッカーボールの組み立て図が、同じ形（正六角形）で構成されていることをとらえさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 敷き詰められたサッカーボールの組み立て図の中に、他の形を見取っている。

【支援】

- ※ 正三角形で敷き詰められた中に、様々な形を見いださせるために、未習の正六角形や台形などの形も認めることとする。

比較・聴取を位置付け、友達とつくりあげる「音楽づくり」の学習

第4学年1・3組 音楽科学習指導案

指導者 高 武 龍 彦

題 材 「白」と「黒」の音楽をつくろう

指 導 観

本題材について

本題材は、12の音がみな平等に扱われてつくられる音楽の不思議さやおもしろさを感じ取り、調性をもつ音楽とは異なる旋律の魅力を味わうことをねらいとしている。具体的には①12音を使って即興的に音楽をつくること②記譜の仕方について知り、記譜できるようになること③今後合奏等でも扱われる鍵盤楽器に親しみ、その演奏の仕方も学んでいくことである。子どもの発想を生かして、音楽をつくったり楽器に触れたりすることにより、子どもたちは音楽の世界で自己表現できるようになっていくのではないかと考え、本題材を設定した。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、クラスみんなで歌うことを楽しむ姿が見られる。歌唱表現においては、自分の思いを強弱や唱法に気をつけて表現することができている。しかし音楽づくりにおいて、自分の思いを楽曲に表すまでには至っていない。そこで、本題材では、鍵盤楽器を使って半音と全音の旋律の響きの違いを感じ取り、条件に従って音をつないだり重ねたりして音楽をつくる活動を行う。これは、音とかわりながら自分なりの表現をつくる上からも意義深い。

本題材の指導について

本題材の指導にあたっては、まず出合う段階においては、鑑賞曲「白と黒で」に出合い、今まで出合った曲との違いに気付かせる。次につくる段階においては、個人で音楽をつくり、その後、音楽の仕組みに基づいて、一人一人の表現をつなぎグループの音楽をつくる。さらに、中間発表会を開きお互いの表現について交流する。最後に味わう段階では、発表会を開き自分たちで音楽をつくった喜びを実感する。このように、音楽を友だちとかかわりながらつくすることで、ともに音楽をつくり上げる喜びを体感することができると思う。

目 標

- 1 即興的な音楽づくりに意欲的にかかわるとともにグループの友だちと協力して、音楽づくりを行うことができる。
- 2 全音と半音の響きを生かしたり、音の組み合わせを工夫したりして即興的な表現をつくることができる。

計 画 (約5時間)

階	主 な 学 習 活 動	時
出 合 う	1 鑑賞曲「白と黒で」に出合い、感じ取ったことを話し合う。 ○ 今までに出合った楽曲との違いに気づき、即興的な表現に興味をもつこと ※ 鍵盤を書いた掲示物を準備し、全音、半音の関係がつかめるようにする。	1
	2 白鍵と黒鍵の組み合わせや、音の響きを生かしてグループで音楽をつくる。 (1) 個人で白鍵と黒鍵の組み合わせによってできる数小節の音楽をつくる。 ○ 全音と半音の響きの違いに気づくこと ※ 曲作りの条件を設定したり、数種類の鍵盤楽器を準備したりしておく。	3
つ く る	(2) 個人でつくった音楽を組み合わせでグループの音楽をつくる。 ○ つくった音楽を聴き比べ、音楽の仕組みに基づいた組み合わせ方に気付くこと ※ 組み合わせの観点を例示しておく。 (3) 中間発表会を行い、互いの表現を聴き合い、表現を見直す。 ○ 観点に基づいて聴き合い、お互いの表現のよさに気付くこと ※ 交流の観点を提示する。	① ① 本 時
味 わ う	3 「4年1・3組白と黒の音楽発表会」を開く。 ○ 自分たちで音楽をつくった喜びを実感すること ※ お互いに交流し、感想をもらうことができるように交流カードを準備する。	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 中間発表会での友だちの表現を聴いて、その作品のよさやおもしろさを認め合うことができる。
- 中間発表会での聴き合いをもとに、旋律の作り方、旋律と旋律の組み合わせ方を変えたり、音の重なりや新たな旋律を加えたりして表現することができる。

1 代表のグループの表現の出だしの部分を発表し、どんな音楽なのか聴き合う。

○ 他のグループの表現がどのような音楽の仕組みを用いて音楽をつくっているのか関心をもち、中間発表会への意欲をもつこと

☆ 他のグループはどんな工夫をしているのかももっと聴いてみたい。おもしろい表現の仕方は自分たちの表現に取り入れたい。

本時のめあて

中間発表会を開いて他のグループのよいところを見つけ、新たにふしをつくったりふしの組み合わせ方を工夫したりして、自分たちの白と黒の音楽をつくりなおそう。

2 各グループの表現を鑑賞し合い、自分たちの表現に活用する。

(1) グループでつくった白と黒の音楽の中間発表会を開き、お互いの表現のよさを見つけあう。

○ 自分たちの表現にない友だちの表現を見つけたり、表現のよさを認め合ったりすること

☆ 重ねて音を出す方法を、わたしたちのグループにも取り入れたらいい。

(2) 中間発表会で聴き合ったことをもとに、自分たちの表現をつけ加える。

○ 聴き合ったことをもとに、表現をつくりかえる観点をつかむこと

☆ 半音と全音を交互に組み合わせてみよう。



【組み合わせ方を変えた例】

☆ 黒鍵と白鍵を同時に引くと、緊張した感じが出せるよ。



【新たな旋律につくりかえた例】

(3) グループ内で新たな工夫を取り入れた演奏を試す。

○ つくりかえた表現の新しい工夫のよさに気付くこと

☆ 音を重ねると緊張感がでてきたよ。

3 旋律の組み合わせ方や新たな旋律を加えたグループの表現をそれぞれ発表する。

○ 自分たちの表現の高まりを実感すること

☆ 友達の表現の工夫を取り入れて、もっと楽しい音楽になったぞ。

準備

教師側：グループごとに作成した表現の拡大楽譜、鍵盤楽器、録音機器
交流発見カード

児童側：前時までの表現

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

◎ 代表グループの表現を聴き「おもしろかったな。他のグループの表現のよさのつづきをもっと聴きたいな。」と中間報告会に向けて意欲的に発言している。

【支援】

※ 他のグループの冒頭の部分の表現を聴く活動を仕組むことで、中間発表会への期待感をもたせる。

※ グループで話し合ったときと同様に、聴き合うことで表現が高まったことを想起させる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 友だちの表現のよさを認め、交流発見カードに書いている。

◎ 友だちの表現から自分たちの表現に取り入れることができる工夫を交流発見カードに書いている。

【支援】

※ 友だちの表現のよさや、発見した表現を書き込める交流発見カードを準備しておく。

【子どもの見取りの観点】

◎ 中間発表会での聴き合いをもとに上行下行、リズムなど音楽的要素に基づいた工夫をしている。

【支援】

※ 交流発見カードの内容をしっかりと話し合わせる時間をとる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 新たにつくった表現を見出し、試しに演奏している。

【支援】

※ 新たな表現に気付いたグループを取り上げ、賞賛する。

【子どもの見取りの観点】

◎ 自分たちの表現の高まりに気づき、次時の学習への見通しをもっている。

【支援】

※ 前時の表現を録音しておき、聴き比べができるようにしておく。

米粉の消費量を上げるシミュレーションを行い、自給率低下の問題を解決する学習

第5学年1組 社会科学学習指導案

指導者 高瀬 雄大

小 単 元 米粉で復活！ 日本の農業 「福岡県版R10プロジェクト」

指 導 観

本小單元について

本小單元は、給食に米粉パンを導入する回数を検討する活動を通して、我が国の食料生産や輸入食材の現状をとらえたり、自分たちの食生活を見直したりすることをねらいとしている。具体的には①我が国は食料を輸入に頼らざるを得ない現状があること②国内の農業保護の面から食料自給率を向上させる必要があることなどである。米粉は古くから我が国で親しまれている食材であり、輸入率90%を超える小麦の代用食材として注目を集めている。故に米粉の消費量を上げる可能性を追求し、我が国の食料生産について考えることは、実社会に参画する資質や能力を育てる上で有効な教材であると考ええる。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、我が国の農業、水産業について調べ、食料生産に携わる人々が、消費者の願いに応えるために、安全でおいしい食料の生産を行うために様々な工夫や努力をしていることをとらえることができている。そこで、生産者の思いをとらえながら、米粉の消費量を上げる方法について考えることで、食糧自給率の向上には消費者も積極的にかかわる必要があることをとらえさせ、輸入小麦に頼りながらも、我が国の農業を守っていききたいという思いから学習問題の設定を行っていききたい。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、自給率を向上させるために米粉の消費量を伸ばす方法を、生産者、流通業者、消費者の立場から考えさせ、日本の農業を保護することの大切さについて考えることができるようにしたい。そのために、米粉の消費量を上げるシミュレーションを繰り返す中で、我が国の農業の課題をとらえさせ、生産者、流通業者、消費者が連携していくことの大切さについて考えさせたい。

目 標

- 1 我が国の食料生産と輸入食材の関係について調べ、自給率低下の問題を解決するための方法を意欲的に追究することができる。
- 2 米粉の消費量を上げるシミュレーションを行い食料自給率の向上についての可能性や課題を見つけることができる。

計 画 (約9時間)

階	主 な 学 習 活 動	時 間
出 合 う	1 日本の食料自給率が低いことに危機感を抱き、学習問題を設定する。 ○ 輸入食材の不安定さをとらえること ※ 給食費値上げの理由を提示する。	2
考 え る	2 米粉の消費量を上げるためにどのような方法があるかについて追究する。 (1) 輸入食材に頼る理由について調べる。 ○ 安価で安定供給されるしくみをとらえること ※ 生産量やコストを国産品と比較する。 (2) 米粉の商品開発を行い、自給率を上げる取り組みについて調べる。 ○ 休耕田対策の必要性をとらえること ※ 新潟県のR10プロジェクトについて調べさせる。 (3) 福岡県版R10プロジェクトの有効性について検討する。 ○ 輸入と国産食材のバランスを考えることの大切さをとらえること ※ 県産米をパンとして給食に使用するかをシミュレーションで明らかにする。	5 ① ③ ① 本 時
つ く り 出 す	3 福岡県版R10プロジェクトの報告書を作成する。 ○ 種類によって輸入・自給の違いがあることをとらえること ※ 県産ブランド食材を中心に10%伸ばす取り組みを県の農林課に提案する。	2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 米粉を使って消費量を上げるシミュレーションを意欲的に行い、消費者への販売拡大について考えることができる。
- 学校給食で米粉をどのくらい使用できるかについてシミュレーションを行い、小麦の代用としての可能性を追求することができる。

○ 準備

教師側：新潟県版R10プロジェクトの報告書

児童側：説明資料

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

1 米粉の消費量を上げる必要性について話し合う。

- 小麦を輸入に頼らざるをえない現状で米粉の生産を上げる必要性があることをとらえること

- ☆ 小麦の消費量を減らせば安定した供給量が確保できるぞ。
- ☆ どうにかして給食の米粉パンで消費量を上げたいな。

本時のめあて

給食に米粉パンを入れることは、自給率の向上に有効かどうかをシミュレーションで検討しよう。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 小麦の輸入量の減少や価格の高騰により、将来の安定供給に対しての不安が現実化していることを説明している。

【支援】

- ※ 小麦と米の消費量と自給率の双方を比較提示して、国内の農業を保護する立場からどちらなのかについて選択させる。

2 学校給食で米粉を使用した場合の利益について考えるシミュレーションを行う。

- (1) 米粉パンを現在の給食費で何回注文できるかをシミュレーションで検討する。

- 米粉のよさをアピールすることと利益を上げることの両面を考慮する必要があることをとらえること

- ☆ 8回とも米粉パンにすれば年間4tの小麦消費を減らせるけど、給食費を上げなければならないので難しいな。
- ☆ 野菜が嫌いな人が多いから、米粉パンを増やせば残食が増えてしまうよ。
- ☆ 今の給食献立を続けるには何回が限度なんだろう。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 米粉パンと小麦パンの単価を比較し、米粉パンの回数を増やせば給食費を圧迫することの問題点を説明している。

- ◎ 米粉パン 70 円（個）、小麦パン 40 円（個）として、差額でつくっておかず代をもとに、理想の回数を計算している。

【支援】

- ※ 値段の変位表と、それぞれの状況を提示したり、減らせる小麦の量を算出したりして、自給率向上についての有効性を説明させる。

米粉の回数	1回/月	2回	3回	4回	・・・	8回
小麦パンとの差額	30 円	60 円	90 円	120 円	・・・	240 円
おかず代	200 円	170 円	140 円	110 円	・・・	-10 円
献立の状況	肉・菜 野菜・増	→		一品減		給食費 値上げ

- (2) 給食費の値上げを考慮に入れ、米粉パンの導入回数を決める。

- 消費者が輸入食材を必要としながらも、国産食材を消費量を上げることの大切さをとらえること

- ☆ 消費量が上がれば単価が下がるので、やはりできるだけ米粉パンを増やすべきだ。
- ☆ 長く続けて効果を上げた方がよいので、月1回がいいと思う。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 輸入小麦に頼らざるを得ない現実と、自給率を上げるためにできることの大切さをとらえている。

- ◎ 県産米などの地元農産物を使っている給食の献立について話している。

【支援】

- ※ 栄養士の甲斐先生から180円以下でおかずを作ることができないことを話していただき、安価な輸入食材のおかげで給食費を抑えることができることをとらえさせる。

3 輸入食品と国産食品のバランスを考えた献立についてまとめる。

- 消費者の意識を変えることが国内農産物の自給率向上につながることをとらえること

- ☆ 新潟県のR10プロジェクトも、無理なく続けることが大切であると考えているから、少しずつ変えていくことが大切。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 消費者の意識を変えることが自給率の向上につながることをとらえている。

【支援】

- ※ 県が進めている農産物のブランド化によって消費者の意識向上を図っていることを紹介する。

フィードバック活動を繰り返し、アタックにつなぐ動きを高める学習

第5学年2・3組 体育科学習指導案

指導者 渡 邊 正 則

単 元 アタックチャンスを実践に～ジャンボプレルボール～

指 導 観

本単元について

本単元の主なねらいは、レシーブからアタックにつなぐゲームを楽しむ基礎的な技能と動き方を習得し、それを活用して戦術的な動きを創り出すことである。具体的には、①ボールの動きを予測して攻撃しやすい位置に動いたり、有効なボール操作を身に付けて精一杯活動したりすること、②3段攻撃のよさを理解し、そのために必要な動きを高めることである。本単元で活動するジャンボプレルボールは、多様で幅広い動きを引き出し、ネット型のゲームの楽しさを十分味わえるようにコートの広さ、ボールのつなぎ方などの点から教材化したゲームである。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、これまでに基本的なゲームを通して、簡単な作戦を立てて攻防する動き方の基礎を身に付けてきている。しかしそれは固定した状況の中で有効であったり、数的優位な中で有効であったりするものが多い。ネット型のゲームの経験は少なく、チームで連携してラリーを続けたり相手やゲームの状況に合わせて戦術的な動きを工夫して活動したりすることはできていない。そこで本単元を取り上げ、戦術的な動きの基礎となる部分を系統的・総合的に高め楽しく運動ができるようにする。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、チームが連携して攻撃する楽しさを十分に味わえるようにしたい。そのためには、やってみる段階では、3段攻撃に必要な個人技能の修正を中心にしたフィードバック活動を位置付け、ひろげる段階では、レシーブから攻撃というチームの連携の不十分さを修正していくフィードバック活動を位置付けた学習を仕組んで動きを高めるようにする。そのような活動の中で、相手に勝つための有効な動き方やボール操作を素早く判断して活用できる力が身に付くようにする。

目 標

- 1 ジャンボプレルボールの動き方や勝敗に興味をもち、精一杯活動したり友達と動きや楽しみ方を交流したりして攻防を楽しむことができる。
- 2 3段攻撃のための連携プレーの仕方を理解し、その動き方を高めたり状況に合った有効な動きを素早く判断したりして活用できる。

計 画 (約10時間)

階	主 な 学 習 活 動	時 間
や っ み る	1 試しのゲームと単元に必要な基本的な技能を高めるゲームを行う。 ○ 今できる自分の技能や動きを高めていく課題を見出すこと ※ 技能習得を目的にしたフィードバック活動を中心に、簡易化したゲームなどを通して、単元の楽しみ方を見出させる。	2
ひ ろ げ る	2 課題にあったボール操作や動き方を高める方法を考えて、ゲームを行う。 (1) 有効な攻撃を生み出す、ボールや仲間に応じた動き方を考えてゲームを行う。 ○ 返球されたボールを連携して攻撃につなぐボール操作や動き方を理解すること ※ 個人の瞬間的な動きや集団技能のフィードバック活動を中心に、活動が繰り返してできるようにする。 (2) 意図的な攻撃を生み出す役割やそれに応じた動き方を考えてゲームを行う。 ○ 得点を増やすための攻撃のパターンやそのための動きの連携を理解すること ※ 役割分担やそれに応じた動きや思考を中心に集団技能のフィードバック活動を通して動きを付加修正させる。	6 ④ ② 本 時 1 ／ 2
ふ か め る	3 5 J P大会を行い、高めてきた作戦や動きのよさを実感して楽しく活動する。 ○ 単元での動きの高まりを評価すること ※ ビデオでの初めの段階との動きの比較などを行う。	2

本時の学習活動の展開

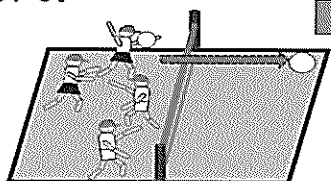
本時授業の目標

- 得意な攻撃のパターン（作戦）を成功させる4人の動きを確認しながらゲームA・Bで意欲的に活動することができる。
- レシーブした人、トスを上げる人、アタックをうつ人がそれぞれの役割にあったポジションに動いたり、ポジションにあったボール操作をしたりして連携した効果的な攻撃をすることができる。

- 1 前時までに身に付けた動きをもとに考えた作戦を試し、作戦を機能させるための本時の活動課題を確認する。

- 兄弟チームで、中心的に試す戦術的動きを確認すること

☆ 私たちはレフトからのストレー
ト攻撃作戦を成功させたいな。



本時のめあて

考えた作戦をもとに、チームの一人一人が、その場面で最も効果的なボール操作や動き方を考えて攻撃しよう。

- 2 効果的に得点するための作戦を基にした動き方を高めるための活動を行う。

- (1) ワンプレーごとに修正点の確認ができるチャンスボールから始めるゲームで課題にした動きを修正しながらゲームAを行う。

- 課題にした動きを修正しながら高めること

☆ もっとレシーブの正確さやボールの高さ、打つ人の効果的な場所への動きを速くする必要があるぞ。

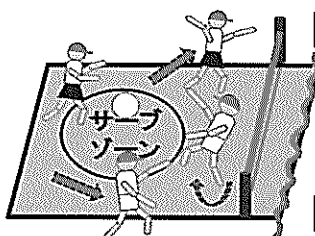


図1 ゲームAの様子

- (2) 攻撃の回数による得点の加算というルールを取り入れたゲームBを行い、連携の高まりや動き方の高まりを確認する。

- 課題とした動きの完成度を確認して、ゲームの流れの中でそれが活用できるようにチームで交流しながら活動すること

☆ ゲームAでは考えた動きができるようになったぞ。ゲームBでも成功するようにボール操作や動き方をがんばるぞ。

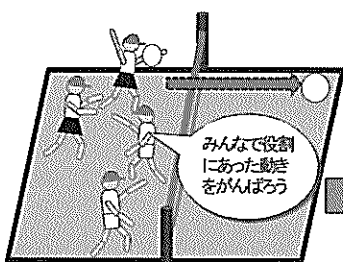


図2 確認のゲーム

- 3 モデルの動きを紹介し、今日の活動でうまくいった動きや作戦を紹介しよさを話し合う。

- 戦術的な動きの価値や仕組みを理解し、自分たちの動きのフィードバック活動に活かすこと

☆ ○○チームみたいに一人が攻撃するだけでなく、いろんな方向から攻撃できたらよさそうだぞ。

準備

教師側：ボール、ゼッケン、得点板、ブ
レルボールのコート

児童側：学習ノート、交流ボード、作戦
カード

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 考えた作戦やそれに必要な動きを確認し、勝敗や活動への意欲を高めている。

【支援】

- ※ 効果的な得点の様子をVTRや写真で掲示して、戦術的な動きを高める課題を明確にさせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 1回1回のプレーをもとにフィードバック活動を行い、ねらい通りの動きに近づくようにしている。

【支援】

- ※ 1回1回の考えたプレーで、どう得点できたか振り返るルールのゲームを行わせ、動きの修正をさせる。(1回の攻撃で得点できたのが何点か)

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ボール操作と同時にボールをもたない動きを意識して動いている。

【支援】

- ※ 兄弟チームでのアドバイスの視点としてボールを持たない人の動きを見る視点を事前にもたせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分たちの課題のプレーを理解しそれを積極的に活用し、より完成度を高めるように修正している。

【支援】

- ※ 得点にちがいを付けることで、1回の攻撃での連携を高めようとする意欲付けを行う。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ゲームに勝つチームのよさが戦術的なボール操作や動き方にあることを理解し、それを次の情報として資料に加えている。

【支援】

- ※ モデルの動きを紹介する中で具体的に解説を加えたり、戦術的な動きのないラリーと比較したりする。

電気を学んできた内容から考えたことを条件の組み合わせに活かす学習

第6学年1・3組 理科学習指導案

指導者 福 原 伸 治

単 元 電気を使ったヨットカーレース～電気の利用～

指 導 観

本単元について

本単元は、現代社会においてなくてはならなくなった電気の利用方法について関心をもち、これまでに学習してきた電気に関する内容をもとに電気の性質や働きについて考えることをねらいとしている。具体的には①電気はつくったり蓄えたりできること②電気は音や光、熱などに変換されることを理解することである。とくに3年生から5年生までに学習した電気の性質の特徴を用いて系統的な学びの体験を活かせるようにする。そこで、手回し発電機で電気をつくる方法を調整しながら学んだことを活かすことを豊かな学びの姿としてねらっている。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、豆電球と電池をつなぐと明かりがつくことだけでなく、5年生で電気の力が磁力に変換できることについて学んでいる。また、電気が流れることで起こる現象について、図などをもとに目に見えない電気の流れについて考えたり、説明したりする活動をしている。そこで、電気をつくり出す活動を思考させたり、遠くまで走らせるだけでなく距離を調整できるよう思考させたりすることで学び合う姿が見られるようになると考えた。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、手回し発電機などを使ってためた電気をもとにヨットカーを動かすゲーム活動を通して電気の働きについての考えをもたせたい。そこで、つかむ段階では手回し発電機を使ったヨットカーレース1を行う。そこで電気をつくったり蓄えたりできることをとらえさせる。さがる段階では、ヨットカーレース2のルールに合わせたヨットカーの動きになるような方法を考えることができるようにする。ひろげる段階では、学習したことをもとにして、より効率的な電気の利用方法の大切さについて考えることができるようにする。

目 標

- 1 手回し発電機やモーターを使った実験を通して電流の大きさと動きとの関係について関心をもち進んで実験しようとするができる。
- 2 発電の仕方を変えながら電気をつくる方法を調べることで、電気の働きや効率的な利用方法について考えることができる。

計 画（約8時間）

階	主 な 学 習 活 動	時
つ	1 手回し発電機を観察し、電気をためてヨットカーレース1をやってみる。	2
か	○ もっと動くようにするためにはどうしたらよいかという見通しをもつこと	
む	※ コイルに磁石を通すだけで電気が起こることを提示し話し合う場を設定する。	
さ	2 手回し発電機を使ったヨットカーレースでうまくいくための方法を調べる。	4
ぐ	(1) 手回し発電機を使って電気をつくり、コンデンサにためて動く距離を調べる。	②
る	○ 手回し発電機を回す回数や速さの違いでつくられる電気が違うこと	
	※ 発電機を回す回数や速さと距離とをまとめる表を提示する。	
	(2) 実験で調べた方法を使って、ヨットカーレース2をやってみる。	①
	○ 発電機を回す回数を変化させることで距離を調節できること	本時
	※ 距離を指定したルールを提示する。	
	(3) 手回し発電機の特徴について話し合う。	①
	○ 動きを数値化して調べられること	
	※ 検流計による装置を提示する。	
ひ	3 ヨットカーレースを通して考えたことから効率的な電気の利用方法を考える。	2
ろ	○ 電気をつくるためには、たくさんのエネルギーが必要なこと	
げ	※ 長い時間LEDをつけたり、オルゴールを鳴らしたりする道具を提示する。	

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 自分の手で電気を作る活動に関心を持ち、レースのルールにあった電気を作る方法について考え、実験して確かめることができる。
- 手回し発電機で電気を起こすには、たくさん回す必要があることを理解し、回数と距離との規則性を活かすことができる。

1 ヨットカーレース2のルールについて振り返り、本時でどんな方法で走らせていこうと思っているかについて話し合う。

○ 電気を作るときの条件をレースのルールに合うように調節するための方法を見付けるというめあてをもつこと

☆ 20 cm動かすためには1分間は回さないとだめなはずだ。

☆ きっと25 cmなら2分間でいいと思うよ。

本時のめあて

手回し発電機を回す回数とヨットカーの距離との関係を調べて、発電する電気の量との関係について話し合おう。

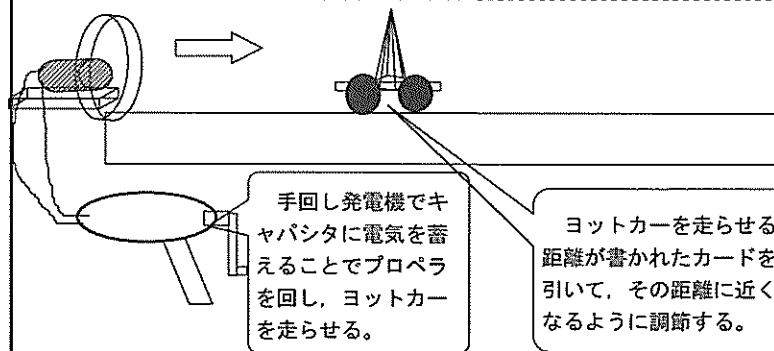
2 これまでに調べてきた電気を作るための方法について話し合い、それぞれのグループで実験をして確かめる。

(1) 電気を作るための方法による動きの違いについて予想を立て、それを確かめることができるための実験を行う。

○ 予想に合わせた実験方法と条件を考えられること

☆ 手回し発電機を回す回数を決めておけばうまくいくはずだ。

☆ ヨットカーレース1のときの実験結果が使えるな。



(2) 実験をして得られた結果から、ヨットカーレースがうまくいくための方法について考え、分かったことをまとめる。

○ 電気をためた量と走る距離との関係について考えをもつこと

☆ 30 cmの時の条件を倍にしたら、60 cmの距離に近くなったよ。やっぱり発電する量と距離にはきまりがあったんだ。

3 結果について考察したことを活かしながら、ヨットカーレースをみんなでやって調べたことを確かめる。

○ 電気を作る方法を変えながら、電気を蓄えることでヨットカーを動かすための電気の量を調節できること

手回し発電機でたくさん回さないでたくさんの量の電気を蓄えることはできないけど、調節することもできるんだな。

準備

教師側：学習プリント、ヨットカー、手回し発電機、プロペラモーター、電子メトロノーム、ルールカード

児童側：前時までの学習プリント

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 電気の量が多すぎないようにする必要があるので、調節の意味について考えをもつことができている。

【支援】

- ※ ヨットカーレースのルールについて前時までに確認している内容を黒板に貼り出す。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 電気を作るための方法として手回し発電機を回す回数という観点から実験方法を考え発表したり、プリントに書いたりしてまとめることができる。

【支援】

- ※ これまでの学びの中で得てきた内容に関して流れ図を提示し、動きの予想と実験方法をイメージで書き込むことができるプリントを提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 実験して得られた結果から、動きと電流の大きさについて考えたことを発表することができている。

【支援】

- ※ グループごとに、実験の結果をまとめるための紙を準備し、そこに考えたことをまとめていく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 回す回数についての条件を制御しながら実験することができる。

【支援】

- ※ 一定の速さで回すことができるように電子メトロノームを提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 実験から得られた結果をもとに分かることを話し合っている。

- ※ 黒板にそれぞれが実験した結果をまとめやすくなるようなロールペーパーとヨットカーの絵を提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 電気の作り方のそれぞれのよさについて考えを発言できる。

【支援】

- ※ 今まで学習したプリントを振り返らせレースの結果と比べながら発言させる。

劇の台本作りを通して誰が何をしたのかをとらえ場面にあう気持ちを表現する学習

第3・4学年さくら組 国語科学習指導案

指導者 諏訪原佳子

単元 だい本をつくってげきをしよう

指導観

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、ことばの実態として、主に一語文で話す子ども、主語＋述語の二語文で話す子ども、多語文で話す子どもがいる。どの子どもも人とかかわりを好み、自分からかかわるが、一方的に話したり、相手が言うことを受け止められなかったり、状況に合わないことを言ったりしてしまうことも多い。ことばの意味がわかり使えるようにすることはもちろんだが、ことばを通して状況や相手の気持ちを理解することが必要である。

本単元について

本単元は、「もりのおふろ」という絵本をもとにして劇をするために、セリフを考えていく。まず、大まかなお話の流れをつかむようにする。その後、劇を行うのに必要な台本を作っていく。台本作りのために試しの劇を行いながら、登場人物の行動や気持ちをつかむことなどができるようにしていく。台本を作る中で、「誰が何をした」ということや、表情や態度に気持ちが表れてくるということをとらえることは、状況をつかむのに役立ち人とかかわり合う中で生かされると考える。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、みとおす、つかむ、ひろげるの3つの段階で行う。みとおす段階では、あらすじをとらえ、劇への意欲をもつ。つかむ段階では、試しの劇を行いながら場面にふさわしいセリフを考えていく。この際、身に付けさせたいことばや課題に応じて複数の場面を設定する。さらに、子どもの特性に応じて、①状況の整理→試しの劇→台本作り、②試しの劇→状況の整理→台本作りというように活動の流れを変える。ひろげる段階では、状況設定が似た劇を行い、いろいろな場面で様子や気持ちをとらえられるようにしていく。

目標

- 1 場面に合う文やセリフを考えるという見通しをもち、進んで取り組むことができる。
- 2 状況がわかり、様子を文で表したり、セリフを言ったりすることができる。
(AG) 誰が何をしたかをとらえ話すこと
(BG) 誰が誰に何ををしたかをとらえ話すこと
(CG) 自分や相手の気持ちをとらえ話すこと

計画 (約6時間)

階	主 な 学 習 活 動	時
みとおす	1 絵本を読んで、あらすじについて話し合い、試しの劇をする。 ○ 劇をするには、セリフが必要なことをとらえること ※ 挿絵のみの拡大絵本を提示し試しの劇を行う場面の設定	1
	2 劇をするために、試しの劇をしながらセリフを台本に書く。 (1) 動物たちが出会う場面の台本を作る。 ○ 台本を作るための手順をとらえること ※ 活動の流れを書いた手順表の提示 (2) 試しの劇をしながら、場面に合うセリフを考え、台本を作る。 ○ 場面に合うセリフを考えるため、「誰が何をしている」という状況をとらえたり、その結果、自分や相手はどう思っているかとらえたりすること ※ 状況をまとめるプリント、表情カード ことばの選択肢、状況をとらえるための劇の場の設定	4 ① ③ 本時 2 3
ひろげる	3 登場人物が違う劇を行う。 ○ 設定が違ってても状況が同じであれば同じことばが使えるのをとらえること ※ 登場人物は違うが、登場人物同士でのやりとりや誰が何をしたかという様子が似た劇の提示	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 場面や自分・相手の気持ちをとらえてセリフを考えることができる。
- (AG)「誰がどうした」という状況をことばで言うこと
(BG)「～される」という状況をとらえ、合うセリフを言うこと
(CG)自分や相手の気持ちをとらえ、合うセリフを言うこと

1 前の時間までの台本を読み、森の動物たちがお風呂に入る場面の台本作りについて話し合う。

- 森の動物たちがお風呂に入る場面の台本を作るという見通しをもつこと

☆ 集まった動物たちがみんなでお風呂に入るんだな。

本時のめあて

どうぶつたちが みんなで お風呂にはいるところの だい本をつくらう。

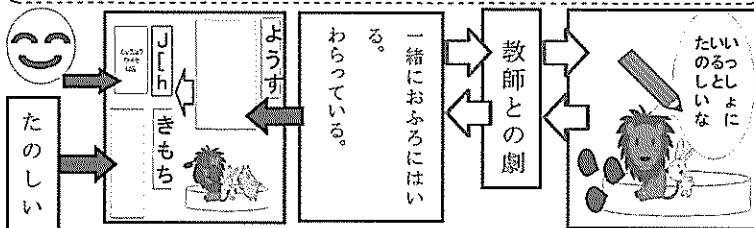
2 みんながお風呂に入る場面の台本を作る。

- (1) 文や挿絵を基にしたり、教師と一緒に劇をしたりして動物たちがお風呂に入る場面の様子や気持ちをプリントに書く。

- 文や挿絵を手がかりにすると様子や気持ちがわかるということをとらえること

Aグループ	Bグループ	Cグループ
○ 登場人物を表すことばと動きを表すことばに注目すると様子がわかることをとらえること	○ 二人の登場人物に着目すると、誰が誰に何をされているかわかることをとらえること	○ 文や挿絵の表情に注目すると誰が何をしようと思っているかわかることをとらえること

☆ 登場人物や動きを表すことばに注目すると様子がわかるな。



教師との劇で様子をとらえたり、セリフを考えたりする。

(2) 自分が担当する場面の劇をする。

- 誰が何をした、何をされたという状況や登場人物の気持ちとそれに合う言い方をとらえること

☆ 友達が泣いてるときに笑ってはいけないんだ。

3 動物たちがお風呂に入る場面の劇をする。

- 状況に合ったことば、話し方や行動をとらえること

☆ 一緒にしたいときは「いれて。」って いえはいんだな。

準備

教師側：手順表 拡大絵本

表情カード ことばの選択肢

ランゲージパル 背景

様子や気持ちをまとめるプリント

ペープサート

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 前の時間に森に動物たちが集まってきた場面の台本を作ったことを発言している。
- ◎ 劇をするために台本を作らなければいけないことがわかり、「つくりたい」「セリフを考える。」などの発言をしている。

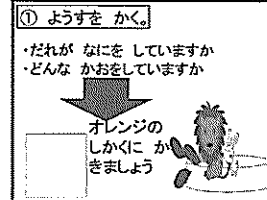
【支援】

- ※ 前時に作った台本の提示
- ※ 本時の場面の挿絵の提示

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 登場人物や動き、様子を表すことば、挿絵などに着目してプリントに様子を書いたり、表情カードを選んだりしている。

【支援】



- ※ 順番、すること、着目点がわかる手順表の提示

- ※ 表情カード、ことばの選択肢、音声カードの提示

- ※ 文や挿絵で状況をとらえるのが難しい子どもに対して、教師と試しの劇を行う場の設定

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 怒っているときは、怒った表情で言うなどと、気持ちに合わせた行動について発言している。
- ◎ 友達の様子や劇の中での働きかけに合った行動を考えたりとったりしている。

【支援】

- ※ 一人の登場人物に対して様々な表情のお面の提示
- ※ 様子や気持ち時間の経過にそってまとめた板書

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 劇の中で、状況に応じたことばの言い方や、楽しそうな表情、嫌そうな表情をしている。

【支援】

- ※ 全員で劇をする場の設定

友達とゲームの合計得点を求める活動を通して、加法の計算の仕方を身に付ける学習

第5・6学年梅組 算数科学習指導案

指導者 弘 松 英 樹

題 材 てんすうをあわせよう ～おたのしみゲームたいかい～

指 導 観

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、5年生3名、6年生2名の計5名で構成されている。これまでの学習で、数を合成したり、簡単な加法の計算をしたりしてきている。計算に対する実態は(AG)具体物の操作を手がかりに1位数どうしの合成ができる段階の子ども、(BG)1位数どうしの計算ができる段階の子ども、(CG)2位数も含む繰り上がりのある計算ができる段階と幅広い実態の子どもがいる。また、友達とのやりとりの仕方においても、積極性や場に応じた対応の仕方などに違いがある。

本題材について

本題材は、魚釣りや的あてなどのゲームを保護者と一緒に行う「おたのしみゲーム大会」を計画し、それを成功させる目的意識をもちながら、加法での計算の仕方を理解することをねらいとしている。具体的には、①ゲームを楽しみながら、友達と点数を合計することに意欲的に取り組むこと、②数を合わせる際の繰り上がりの仕方や、位ごとの数に気を付けて計算すること、③数を正しく計算し、友達と合計することができたことに自信をもつことなどである。こうした学習は他者とのかかわりをもちながら生活と関連させた活動の中で、具体的な操作による計算を定着させ、活用させる上で価値がある。

本題材の指導について

本題材の指導にあたっては、個別の計算の実態に応じて、位ごとの数や繰り上がりに着目して計算する力を身に付けさせたい。「つくる」段階では、様々なゲームコーナーに出合わせ、得点を合わせる試しの活動を行う。「みにつける」段階では、友達とペアになりゲームのルールを少しずつ変え、友達と点数を合計する。「たかめる」段階では、保護者を招待して、ゲーム大会を開き、ゲームを楽しむことを通して、計算の仕方の有用感を味わわせる。

目 標

- 1 計算の仕方を考えながら、友達と得点を合計する活動を意欲的に行うことができる。
- 2 得点を計算する活動を通して(AG)1位数どうしで10をこえる合成の仕方をとらえること、(BG)2位数同士で繰り上がる計算をとらえること、(CG)2位数どうしで合計が100以上に繰り上がる計算をとらえることができる。

計 画 (約7時間)

階 段	主 な 学 習 活 動	時 間
つ く る	1 試しのゲームをする。 ○ ゲームのやり方や、どのゲームも1回ごとの得点を合計するというルールをとらえること ※ コーナーを複数準備し、活動のイメージをもたせる。	1
	2 友達とグループでゲームをし、ゲーム大会を開く練習をする。 (1) グループでのゲームをして合計得点を計算する。 ○ (AG)1位数どうしの合成をとらえること (BG)1位数どうしの計算をとらえること (CG)2位数どうしの計算をとらえること ※ 個別の計算に応じた計算ボードの準備	4
み に つ け る	(2) ルールを変えたゲームで、グループでの合計得点を計算する。 ○ (AG)10をこえる合成をとらえること (BG)繰り上がりの計算をとらえること (CG)100をこえる計算をとらえること ※ 計算ボードで置き換える操作をしながら計算ができる教具の準備	② 本 時 1 ／ 2
た か め る	3 保護者を招待して、お楽しみゲーム大会を開く。 ○ お客さんの得点の合計を求める際に計算の仕方を活かすこと ※ 計算の仕方についての評価を保護者からもらうことで有用感を味わわせる。	2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 計算の仕方を考えながら、友達とゲームの得点の合計を意欲的に求めようとすることができる。
- 友達と得点を合計する活動を通して (AG) 1 位数どうしで 10 をこえる合成の仕方をとらえること、(BG) 2 位数を位ごとに合わせて繰り上がる仕方をとらえること、(CG) 2 位数どうしの計算で 100 の位に繰り上がりのある仕方をとらえることができる。

1 今日のゲームは、おたのしみゲーム大会で、もっと楽しんでもらえるよう、ルールを変えてみることにについて話し合う。

○ ゲームの点数によってもらえる賞品が変わることがわかること

☆ あれは、□点だともらえるんだね。でも、友達と点数を合わせないと、何点かわからないよ。

本時のめあて

ゲームの てんすうを ともだちとあわせて なんてんかけいさんしよう。

2 友達と一緒にゲームの合計得点を計算する。

(1) 最初のゲームで自分の 2 回の点数を合計したり、友達の得点と自分の得点を合計したりする。

(AG)	(BG)	(CG)
○ 1 位数どうしで 10 までの合成の仕方をとらえること (的あてゲーム)	○ 2 位数どうしを合わせる計算の仕方をとらえること (的あて・魚釣り)	○ 合計が 100 までの繰り上がりの仕方をとらえること (魚釣りゲーム)

☆ 5 点と 4 点をあわせたら、9 点になったよ。

(2) 点数を変えた 2 回目のゲームで、再度挑戦する。

(AG)	(BG)	(CG)
○ 1 位数どうしで 10 をこえる合成の仕方をとらえること (的あてゲーム)	○ 2 位数で繰り上がりのある計算の仕方をとらえること (的あて・魚釣り)	○ 合計が 100 をこえる繰り上がりの仕方をとらえること (魚釣りゲーム)

☆ 5 点と 6 点をあわせたら、11 点になったよ。

3 ゲーム大会の練習で、がんばったことやわかったことを話し合う。

○ 得点を正しく計算し、説明できたことに自信をもつこと

☆ 友達と一緒に点数を計算してゲームができたよ。

準備

教師側：各ゲームコーナーや賞品

(AG) 2 数を合成する計算ボード

(BG) 位ごとに合計する計算ボード

(CG) 繰り上がりの操作をする計算ボードと教具

確かめコーナー

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

◎ ゲームの得点を友達と計算して、ほしい賞品をねらうルールがわかっている発言をしている。

【支援】

※ 得点を正しく計算する必要性を感じさせる点数に応じた賞品の設定や場の準備

【子どもの見取りの観点】

◎ 数の位や繰り上がりに気を付け、正しく得点を合計し、計算することができている。

【支援】

※ (AG) 点数を具体物に置き換え、2 数を合成する計算ボードの準備
(BG) 位ごとの数を⑩や①のチップに置き換えて位ごとに合計する計算ボードの準備
(CG) 大きな数計算ができるよう、数の枠を用意した計算ボードと 100 の位を意識させた位取り表の準備

【子どもの見取りの観点】

◎ 点数の位に着目して正しく計算している。

【支援】

※ 個別の計算の実態に合わせて、(AG) と (BG) の子ども、(BG) と (CG) の子どもというグループを作り、点数を合計する順番を固定しておく設定

【子どもの見取りの観点】

◎ 自分の行った操作が正しいか、確かめることができている。

【支援】

※ 合計の数の組み合わせをめくって確かめる自己評価機能の設定

$$30 + 48 = 78$$

【子どもの見取りの観点】

◎ ゲームの得点を友達と計算したときにがんばったことやわかったことを発言している。

【支援】

※ 実際に行った操作の仕方を一部実演させて発表させる活動

学 習 指 導 協 議 会

全 体 講 演

演 題

「習得・活用・探究の学力と授業づくり」

講 師

上智大学総合人間科学部教育学科

教授

奈 須 正 裕 先生

第2日目 午前の部

学習指導案

※ 下線付きの公開授業は、午後のテーマ別協議会対象の授業です。

※ 雨天の際、体育科の授業は、附属福岡中学校の荒陵館2階で行います。

▼ 学 習 指 導 (9:15~10:00)

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年2組	国 語 科	ばめんの ようすを ふくらまそう「おむすび ころりん」	藤田 進	1年2組教室
3年1組	<u>社 会 科</u>	見つけよう! グリーンパスから見える福岡市のいいところ	高瀬 雄大	3年2組教室
3年2・3組	<u>体 育 科</u>	あらつジャングルたんけん (体づくり運動)	毛利 拓也	附属小運動場
4年2組	算 数 科	ビルのオーナーになって家賃を決めよう (面積)	島川 二郎	4年1組教室
5年2組	理 科	電気の力でキャッチ (電磁石の性質)	福原 伸治	理 科 室
6年1組	総 合	あらつフードプロジェクト	渡邊 正則	6年1組教室
6年2組	外国語活動	Let's enjoy sweets.	緒方 敦子	子どもスタジオ

▼ 特別支援教育学習指導 (9:15~10:00)

ふ じ 組 さくら組 梅 組	合同生活単元学習	つくろう! ふじ・さくら・梅 祭り	倉富 護 諏訪原佳子 弘松 英樹 堀 亮輔	特別支援学級棟 音 楽 室
----------------------	----------	-------------------	--------------------------------	------------------

動作化を通して人物への想像を広げる学習 第1学年2組 国語科学習指導案

指導者 藤 田 進

単 元 ばめんのようすをふくらまそう「おむすび ころりん」

指 導 観

本単元について

本単元は、おじいさんの行動を中心に、登場人物の様子や場面の様子をとらえながら、想像を広げて読むことをねらいとしている。具体的には、①さし絵から場面の様子を読むこと、②動作化を通して、登場人物の様子を読むこと、③動作の違いから想像を広げて読むことなどが主な学習内容である。

教材文「おむすび ころりん」は、人物の行動が端的に表されていて、読み手が人物の様子や気持ちをふくらませる余地をもった作品である。従って、自分の知識や経験とつないだり、さし絵を活用したりしながらこの作品を読んでいくことは、子どもの想像力を育てていくのに適した教材である。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、前単元「はなのみち」において、さし絵をもとに、人物の行動の理由を話し合ったり動作化を中心に話のおもしろさを味わったりする学習をしている。このような学習を通して、挿絵と本文を結びつけながら、場面の様子を想像する力が高まりつつある。そんな子ども達に、螺旋的・反復的に学習を通して、獲得した読み方を定着させることが重要である。よって、人物の様子を課題にすえ、意味ある繰り返しの読み方を展開することができる本単元は、価値があると考えられる。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、つかむ段階で、さし絵を並べ替えることによって、作品のあらすじをつかませる。ふかめる段階では、まず1の場面のおじいさんの人物設定について話し合い、「どんなおじいさんなのか知りたい。」といった追究意欲を喚起し、さし絵と叙述をつないで場面の様子をとらえる読み方を意識させていきたい。次に、あらすじに沿って、おじいさんの行動を動作化しながら、人物の様子を想像させていく。まとめる段階では、「おむすび ころりん」のおじいさんと比べながら、いろいろなおじいさんが出てくる作品に読み広げる。

目 標

- 1 「どんなおじいさんなのか。」といった、おじいさんの様子に課題をもち、意欲的に動作化をしたり話し合ったりすることができる。
- 2 おじいさんの行動を中心に、動作化をしたり話し合ったりすることによって、おじいさんの様子を想像を広げながら読み取ることができる。

計 画（約11時間）

階	主 な 学 習 活 動	期
つ	1 「おむすび ころりん」の全文を通読し、あらすじや読みのめあてについて話し合う。	2
か	○ さし絵を手がかりに、あらすじをとらえたり課題意識をもったりすること ※ さし絵を正しく並べ替えさせる。	
む	2 各場面について、おじいさんの様子を想像する。	5
ふ	(1) 1の場面から分かるおじいさんの様子について話し合う。	1
か	○ 働き者でおばあさんと仲良しのおじいさんといった主人公の人物設定や山の畑の様子などをとらえること ※ 自分の知識や経験とおじいさんの行為との比較をさせる。	
め	(2) 2の場面以降のおじいさんの様子について、動作化を中心にさし絵や叙述に着目しながら話し合う。	4
る	○ おじいさんの様子について想像を広げながら自分の考えを表現すること ※ おじいさんの様子が分かるところに、線を引かせた後、おじいさんの行動を中心に動作化をさせる。	本 時 3 ／ 4
ま	3 おじいさんが出てくる話を探す視点として、いろいろな本を読む。	4
と	○ 自分が選んだ作品に出てくる、おじいさんさがしをすること	
め	※ 教師が作成したブックリストを与えるとともに、「おむすび ころりん」のおじいさんと比べながら読ませる。	
る		

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 「ねずみと出会う場面のおじいさんはどんなおじいさんなのか」という課題を解決するために、意欲的に動作化をしたり話し合ったりすることができる。
- おじいさんの行動を動作化しながら話し合う活動を通して、思いがけずねずみが喜んでくれたことに喜ぶおじいさんの様子を想像することができる。

- 1 さし絵をもとに、本時場面のおじいさんはどんなおじいさんなのか話し合う。

○ これまで学習してきたおじいさんの様子を想起すること

☆ 今日はどんなおじいさんが出てくるのかな。初めて出てくるおじいさんかな。

本時のめあて

ねずみに であう ばめんでの おじいさんの ようすを
ふくらまそう。

- 2 本時場面のおじいさんの様子を読み取る。

(1) 穴に落ちるおじいさんの様子について、さし絵をもとにしたり動作化したりしながら話し合う。

○ 真っ暗な穴へ落ちたおじいさんの様子を想像すること

☆ 真っ暗な穴に落ちたおじいさんは、ちょっと怖かったのかな。

(2) ねずみに感謝され、ねずみと一緒に楽しむおじいさんの様子について、動作化しながら話し合う。

○ ねずみと一緒に楽しく遊ぶおじいさんの様子を想像すること

☆ こんな大きなおむすびを、二つももらえたんだから、ねずみさんたちは大喜びしたんだね。

大きなおむすび



おじいさん ころりん すっとうとん。
おむすび たくさん ありがとう。
おいしい ごちそう さあ どうぞ。
ねずみの おどりを みてください。
おれいに こづちを あげましょう。

・たのしいな。
・おいっしょに
・な。おどりたい

どうとう あしを すべらせて、
じぶんも あなへ すっとうとん、
ねずみの おうちにとびこんだ。



・びつくり
・したかった
・こわかった

おむすび じぶんがのしたことで
こんなによろこんでくれたよ
おもいがけず よろこぶ おじいさん

- 3 これまでのおじいさんと本時のおじいさんを比べて話し合う。

○ 本時学習を通して想像したおじいさんの様子を表現すること

☆ 今日学習したおじいさんは、思いがけず喜ぶおじいさんだったな。おじいさんは、ねずみと一緒に踊り出したかもしれないね。

準備

教師側：前時までの流れ図、児童用滑り台、大小おむすびの具体物、金屏風、お面（おじいさんとねずみ）、BGM用CD

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

◎ 既習のおじいさんの様子と比べながら、おじいさんの様子を想像しようという意識をもっている。

【支援】

※ 本時学習場面までのおじいさんの様子を流れ図をもとに想起させる。
※ 動作化のウォーミングアップをさせる。（前時学習したおじいさんの様子）

【子どもの見取りの観点】

◎ 「まっくらだ。」「こわいよ。」といった言葉や動きでおじいさんの姿を表現している。

【支援】

※ 既習の「のぞいてみたが まっくらで」から、場面の様子を想像させる。
※ 背景を黒の段ボールにし、児童用ジャングルジム滑り台を滑らせる。
※ おむすびの具体物を準備し、必要に応じて使わせる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 「（ねずみが喜んでくれて）うれしい」「楽しい」といった言葉や動きでおじいさんの様子を表現している。

【支援】

※ 金屏風のセットを準備し、そのセットの中で動作化させる。
※ 祭りなどの音楽をかけ、楽しい雰囲気を出し、児童の動作化を促す。
※ 教師がねずみ役になり、おじいさんの様子を、動作や言葉で表現させる。
※ 大きなおむすびの具体物を提示し、ねずみの立場になって、おむすびの大きさを実感させる。
※ 「なぜおじいさんはうれしいのか。」といった問い返しによって、おじいさんの思いを具体化させる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 本時学習を通して想像したおじいさんの様子を、「うれしいおじいさん」といった言葉で表現している。

【支援】

※ これまで学習してきたおじいさんの様子と比べさせる。

集めた地域の情報を比べたり、つないだりして福岡市のいいところを発見する学習 第3学年1組 社会科学学習指導案

指導者 高 瀬 雄 大

小 単 元 見つけよう! ごりーんバスから見える福岡市のいいところ

指 導 観

本小単位について

本小単位は、福岡市内に広がるバスの交通網を調べることを通して、地域間の結びつきに気付いたり、土地利用の様子と交通の様子を関連づけて考えたりすることをねらいとしている。福岡市は古くからアジアの玄関口として栄え、商業を中心として発展してきた街であり、交通機関の発達で現在もその勢いは盛んである。そこで、ごりーんバスのコースを探る活動を通して、天神・博多地区の様子や百道地区の様子を比較して違う理由を考えたり、コース周辺の山間部の土地利用の様子と比較したりして地域によって異なることに気付かせたい。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、前小単元の学習で学校付近の様子を絵地図でまとめ、昭和通りや那の津通りに住宅や商店が集中していることや、西公園以外は平坦な地形であることから生活しやすいことをとらえることができている。そこで、西鉄のごりーんバスのコースを調べ、古くから栄える商業都市や豊かな自然が残っていることに気付かせ、白地図にまとめたり、友達に説明したりして、福岡市が発達した交通網によって市内外の各地域と結びついていることをとらえることができるようにしたい。

本小単元の指導について

本小単元の指導にあたっては学校周辺の絵地図を作成したときの学び方を生かし、福岡市の土地利用について紹介する地図を作成させたい。そのためには、現在のごりーんバスのコース以外に、自然が豊かな山間部、海沿いを走るコースを設定し、市街地との土地利用の様子についてとらえさせる。そして市街地は平野なので人口が集中していることや周辺は豊かな自然による農業、漁業が盛んであることをとらえさせる。

目 標

- わたしたちの住む福岡市が、昔から栄えた街でこれからも発展を続ける交通の発達した便利な街であることをとらえることができる。
- バスの路線図と福岡市地図を照らし合わせ、それぞれの地域のよさを交通の様子と土地利用の関係から説明することができる。

計 画 (約12時間)

階	主 な 学 習 活 動	時 間
出 合 う	1 ごりーんバスが、博多駅から百道周辺を回っている理由について話し合う。 ○ コース上に特徴的な場所があることを見通すこと ※ 唐人町地区の特徴を想起し、コース設定の視点に気付かせる。	1
	2 ごりーんバスのコースがどのようにして決められたかを調べる。 (1) ごりーんバスの案内コースの場所について調べる。 ○ 商業施設や文化財施設が多いことをとらえること ※ バスに乗って各停留所付近の様子を調べさせる。	5 ②
	(2) ごりーんバスのコース以外の福岡市のいいところについて話し合う。 ○ 地形の特色と土地利用の関係について平野部とその周辺の相違点からとらえること ※ 市街地周辺部で設定したいごりーんバスのコースを考えさせる。	③ 本 時 3 / 3
考 え る	3 自分たちが考えたごりーんバスのコースマップを作成する。 ○ 地形によって土地利用の様子が異なることをとらえること ※ 地図記号、方位などを使用してわかりやすく作成させる。	6

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- グリーンバスのコースを増やすために、自然が豊かな福岡市の場所を意欲的に追究することができる。
- 特色ある地形を生かして住んでいる人が土地利用をしている様子を市街地と山間部、海沿いの比較から考えることができる。

1 グリーンバスで紹介される場所の共通点について話し合う。

- 大きな駅やお店が集中している場所と人や自動車の往来が多いことをつなげて考えること

☆ グリーンバスは、お店が集中しているところや古い建物があるところを紹介しているね。

本時のめあて

山の近くと海の近くをとりいれて福岡市のいいところがかいできるグリーンバスのコースを考えよう。

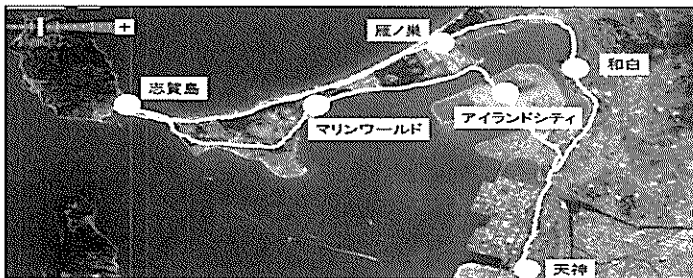
2 新しく考えたグリーンバスのコースのよさについて話し合う。

(1) グループごとに考えたコースについて紹介する。

- コースの中に自然が豊かな福岡市の様子があることについてとらえること

＜マリンロードコース 博多駅～志賀島漁港＞

- ☆ 海の上を走っているような景色がおすすめです。
- ☆ 和白干潟にはたくさんの野鳥が集まるので、白浜バス停で降りてもらえると楽しくバードウォッチングができるよ。



(2) 現行のコースと比べていいところについて話し合う。

- 道路状況やバス停周辺の観光目的が異なることをとらえること

- ☆ 国道3号線や263号線は市街地では交通量が多いけど、マリンロードコースやグリーンコースは時間通り運行できそうだよ。
- ☆ だから、新しいコースを設定してお客さんに紹介すると福岡市が自然いっぱいなところだということをもっと紹介できるよ。

3 福岡市のいいところが伝わるコースについてまとめる。

- 地形の特色を生かして人が暮らしているよさをとらえること

- ☆ 志賀島と曲淵をつないで大きなループをつくるコースにすると海と山の両方が楽しめるから、博多駅を中心にして路線がくめないかなあ。

- ☆ 今のコースから新しいコースへ乗り換える場所を増やせばもっとお客さんが増えるかもしれないね。

○ 準備

- 教師側：グリーンバスのコースマップ
志賀島、曲淵ダム周辺の航空写真
- 児童側：調べた場所の紹介カード

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ グリーンバスのコースを使って、商業地、景観保護地を回っていることを説明している。
- ◎ 交通の要衝や商業施設が集中していることをとらえている。

【支援】

- ※ グリーンバスのコースマップを提示して、それぞれの様子がわかる写真を使いながらその場所の特徴などについて説明させる。

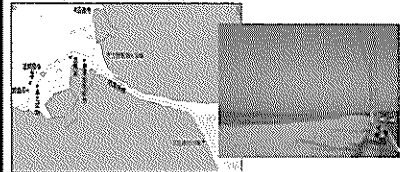
【子どもの見取りの観点】

- ◎ 曲淵及び志賀島周辺の様子を地形や土地利用の様子から説明している。

【支援】

- ※ 航空写真を使って地形の特色を説明したり、紹介カードを使って土地利用の様子について説明したりすることができるようにする。

＜紹介カードの例＞



海の中道は、道の両側が海岸になっているのでとても景色がよい所です。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 2つの地区を比較して、都市部と農村・漁村部の同じところや違うところを見つけて説明している。

【支援】

- ※ 地図記号や分布状況をもとに、地形の特色やそれを活かした土地利用の様子、交通機関の様子などから違いをとらえられるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 2つの地区と現在のコースの土地利用の様子について、地形や交通機関と関係付けながら比んでいる。

【支援】

- ※ 志賀島から曲淵までを縦断する時に通るバス停や路線図から検討して、自然の豊かさを感じる新グリーンバスのコースを考えさせる。

バランスをとったり移動したりする動きから組み合わせた動きをつくりだす学習

第3学年2・3組 体育科学学習指導案

指導者 毛利 拓也

単元 あらつジャングルたんけん（体づくり運動）

指導観

本単元について

本単元は、体のバランスをとったり移動したりする動きを意図的にはぐくむ運動を通して、体の基本的な動きを総合的に身に付けるとともに、それらを組み合わせた動きを身に付けることをねらいとしている。具体的には①バランスを保つ動きや移動する動きができる場を通して、体のバランスをとる動きや体を移動する動きのよさを身に付けること②あらつの森をジャングルに見立て探検するストーリーから進んで学習に取り組んだり、友達のよい動きを発見し自分の動きに取り入れられることである。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、体のバランスをとりながら移動する基礎的な動きや運動感覚を身に付けたり友達と動きを確かめ合って身体を動かす心地よさを味わったりしてきている。しかし、体のバランスをとったり、移動したりする動きの質は十分に高まっておらず、この時期に、多様な動きができるバランスや移動のある場を通して、友達とお互いに動きを見合いながら、バランスや移動する動きから多様な動きのよさを身に付けることができるようにする。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、であう段階では、あらつの森をジャングル探検するストーリーから試しの場を自分で挑戦させて動きの課題をつかませる。ひろげる段階では、であう段階から増えた3つの動きのある場を通して、2つ以上の動きを同時に行ったり連続して行ったりする動きを身に付けさせる。そして、基本的な動きの組み合わせた動きを身に付けることができるようにしていく。いかす段階ではあらつジャングル探検大会を行い、今までに身に付けてきた多様な動きを自分たちで考え出した場で挑戦させることで達成感や満足感を味わわせる。

目標

- 2つ以上の動きを同時に行ったり連続して行ったりできる場を通して、基本的な動きの組み合わせた動きを身に付けることができる。
- 友達と仲よく協力したり、友達のよい動きを自分の動きに取り入れたりしながら、多様な動きをつくる運動を楽しむことができる。

計画（約5時間）

階	主 な 学 習 活 動	単
あ う ひ ろ げ る	1 「あらつジャングルたんけん」に出合い、試しの探検に挑戦する。 ○ 学習の流れやストーリーに合った動きの課題を把握すること ※ 昨年の発表会の想起と試しのジャングル探検から自分の動きを体験させる。	1
	2 あらつジャングル探検に挑戦する。 (1) あらつジャングル探検コース1と2に挑戦する。 ○ 体のバランスをとる動きや体を移動する動きを身に付けること ※ 姿勢や方向を変えて、回る、座る、渡るなどの動き及び速さ・リズムなどを変えて、這う・走る・登るなどの動きができる場の設定 (2) あらつジャングル探検コース3に挑戦する。 ○ 基本的な動きの組み合わせた動きを身に付けること ※ 探検コース1・2の場を変化させたバランスをとりながら移動する場や用具を操作しながら移動する場の設定	3 ② ① 本 時
い か す	3 あらつジャングル探検大会をする。 ○ 高まった動きを実感すること ※ 探検コースを友達とつくりかえる場の設定と自己・相互評価の設定、今までの学習を振り返る交流活動の設定	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 体のバランスや移動する動きを高める場を組み合わせた場を通して、基本的な動きの組み合わせた動きを身に付けることができる。
- 友達と自分の動きのよさを見比べながら、自分の動きに取り入れて、楽しく多様な動きの運動をすることができる。

1 前時までの動きをもとに、試しに探検コース3に挑戦する。

- 身に付けた体のバランスをとったり、体を移動したりする動きをつかって、運動すること

☆ ジングル探検コースで、上手になった通り方を使おう。

本時のめあて

ジャングルたんけんコース1と2で、上手になった通り方を使って、新しいジャングルたんけんコース3を楽しもう。

2 試しの活動をして難しかった場所や動き方について発表して、動き方のコツについて話し合い、探検コース3に挑戦する。

- (1) 試しの活動で前の時間より変わった場や難しかった場、動き方について発表し、動き方の組み合わせ方について話し合う。

- 多様な動きをつくる運動の行い方について考え、友達の考えや動き方を参考に自分の運動にその動き方を取り入れること

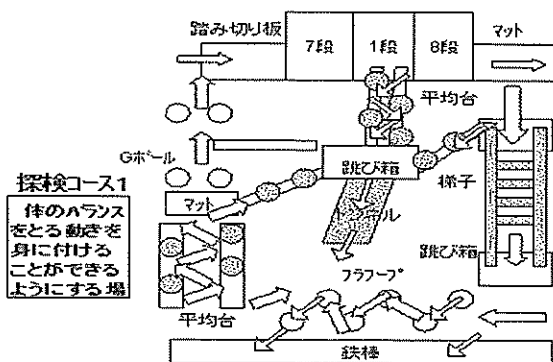
☆ 僕は、こっちのコースの方に挑戦してみたいな。

☆ 私は、このコースが苦手だからこっちを選んでやろう。

- (2) 話し合った動き方のコツをヒントに探検コース3に挑戦する。

- バランスをとって移動するなどの2つ以上の動きを同時または連続して行い基本的な動きの組み合わせた動きを身に付けること

探検コース2 体を移動する動きを身に付けることができるようにする場



☆ ジグザグコースでは、右左右左と足を出して動いたらいい。

☆ 勢いをつけて、走って高いがけ(跳び箱)をよじ登ろう。

3 今日の学習で発見したり身に付けたりした動きについて話し合う。

- 基本的な動きの組み合わせた動きを身に付けることができたこと相互評価して身に付けた動きのよさを実感すること

☆ 上手になった通り方で、いろいろなコースをクリアできたよ。

○ 準備

教師側：平均台、跳び箱、梯子、
マット、Gボール、フラフープ
踏み切り板、コース図、BGM
児童側：学習プリント

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 前時までの動き(バランスをとったり、移動したりする動き)をもとに、試しの活動に進んで挑戦し、前時までの場や動き方の違いに気付くことができる。

【支援】

- ※ 前時までの流れ図での動き方の確認と本時のコース図の提示から試しの活動の行い方やきまりを理解させてから試しの活動を行わせ、本時のめあてについて話し合わせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 前の時間よりも変わったり、難しくなった場について自分の考えを進んで発表したり、動き方のコツについて図をもとに説明したりしている。

【支援】

- ※ 多様な動きができるように、平均台や跳び箱の数を増やして分岐する場や跳び箱の高さを変化させる場を準備する。2つ以上の動きが同時に又は連続して行えるように、周回コースを設定する。
- ※ 前時までのコース図や探検コース3の拡大図を提示して、比較させることで前時までの場や動き方の違いを明確にさせて、話し合わせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ バランスをとりながら移動するなど2つ以上の動きを組み合わせながら運動することができる。

【支援】

- ※ 動きのいい子どもを賞賛したり、うまく乗り越えられない子どもに動き方のコツを指示したり、模範演技をしたりする。
- ※ 1周したら1点入る・1周タイムトライアルなどの規則を設け上手でできる子どもへの技能面を高める。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 今日の学習を振り返り、評価として、自分や友達の発見した動きを学習プリントに記述したり、発表したりしている。

【支援】

- ※ 自己評価できる項目を学習プリントにつくり、記述後交流させる。

床面積をもとに家賃を効率よく調べる方法を説明する活動

第4学年2組 算数科学習指導案

指導者 島 川 二 郎

単 元 ビルのオーナーになって家賃を決めよう（面積）

指 導 観

本単元について

本単元は、面積について単位と測定の意味を理解し、面積を計算によって求めることができるようにすることを主なねらいとする。具体的には、①面積を表す単位は、1辺の長さが1cmの正方形が一番有効であること。②辺の長さが分かれば普遍単位がいくつか分かり、求める公式があること。③複合図形で、分割や補充などの考えが必要になることに気付くようにすることである。ここでは、家賃と面積を結びつけた教材化を図り、面積を根拠として家賃を決めていくようにする。このことは論理的思考力を育てる上からも大変意義深い。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、今までに、長さやかさなどの量についての比較や測定の学習をし、その大きさを数値化することを学んできている。第1学年では、長さについて学習し、直接比較、間接比較、そして任意単位による長さの測定について学習してきた。このようにして、子どもたちは、比較や測定についての見方を積み上げてきている。このような単位の見方を大切に計算で量を数値化していくよさを味わわせる指導を行ってきたい。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、面積を求めなければ家賃を比べることができないという課題意識を持たせ、長方形や正方形から複合図形へと事象を変えながら求積方法について検討していく。見出す段階では、長方形や正方形の面積の直接比較から普遍単位による比較をし、求積方法を調べる。試みる段階において、長方形と正方形の部屋の面積の求積公式をつくり出す。広げる段階において、長方形や正方形の求積公式を使いこなし、複合図形の面積を、分割、補充、分割移動で求める。

目 標

- 1 部屋の家賃を決めることに関心を持ち、長方形や正方形の部屋の面積を進んで求積できる。
- 2 長方形や正方形の面積の求め方を基に複合図形の面積を考えることができる。

計 画（約 6時間）

階	主 な 学 習 活 動	時 間
見 い だ す	1 ビルの1, 2階部分のテナントの各部屋の家賃は適正かを話し合う。 (1) 長方形や正方形でできたテナントの大きさを比較し、家賃の検討をする。 ○ 直接比較して、家賃の把握すること ※ 直接比較ができるようにしておく。	2 ①
	(2) 部屋の家賃は適正かを調べる。 ○ 家賃を任意単位を基に検討すること ※ 1万円の部屋の1辺の長さが1cmの正方形としておく。	①
試 み る	2 ビルの3から5階部分の部屋の面積の求積方法を調べ家賃は適正かを考える。 (1) 正方形と長方形の部屋の面積を比べる方法を話し合う。 ○ 普遍単位を把握すること ※ 配置図を用意し、部屋を比較する。	2 ①
	(2) 4, 5階部分に含まれている長方形や正方形の面積を求め、家賃を整理する。 ○ 長方形と正方形の面積を単位面積のいくつ分で求め、公式化すること ※ 図形の面積を求める公式と単位との関係を押さえる。	①
広 げ る	3 長方形と正方形でできた複合図形の形をした部屋の家賃を面積の求積方法をもとに調べる。 ○ 分割や補充、分割移動の考えがあることを把握すること ※ 他の図形も同じように分割、補充、分割移動の考えが使えるかどうかを考えるようにさせる。	2 本 時 2 / 2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 長方形や正方形でできた複合図形の部屋の家賃を、分割したり、補完したりして、測定する辺の数を少なくする求め方を進んで調べることができる。
- 測定する辺の数を少なくするためには、見取る長方形の数を少なくする必要があることを理解することができる。

1 7階にある4つの部屋の家賃の求め方を調べる方法を話し合う。

- 分割して、長方形にして分ける方法と補完して全体の面積をもとに調べる方法があることを把握すること

☆ 今日は、7階に含まれる4つの部屋の家賃を求めるのだな。今Aの部屋とBの部屋、Cの部屋、Dの部屋があるんだな。

本時のめあて

7階に含まれる4つの部屋を求める時に測る辺の数を少なくする方法を調べよう。

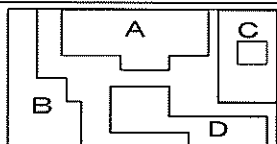
2 Aの部屋の家賃を分割する方法と補完して求める方法で調べる。

- (1) Aの部屋の家賃を長方形の公式が使えるように変形し、測定する回数が少なくすむ方法を調べる。

- 測る辺の数が少なくなる解決方法を見取る長方形の数と結びつけて求めること

問題

7階部分の4つの部屋の家賃を広さを測って家賃をつけよう。

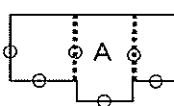


☆ 分けたり、補ったりして少なくすむ方法を探すのだな。

- (2) 小グループや全体でAの部屋の面積の解決方法を説明し合う。

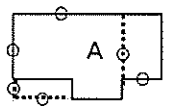
- 自分や友だちの解決方法の妥当性を検討すること

測定箇所6



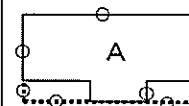
3つに分ける方法

測定箇所6



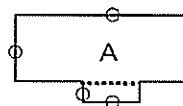
つぎたす方法と
分ける方法

測定箇所6



両方につぎたす方法

測定箇所4



2つに分ける方法

☆ 補完の考えで少ない回数で考えることができるかな。

3 BからDの部屋の家賃を長方形の公式が使えるように変形し、図る回数が少なくすむ方法を調べる。

- 追事象に取り組み、分割や補完で考えたときに使う長方形の違いがあることを把握すること

☆ Bの部屋は、一番少ない測る回数は、6回だった。前の時間のコの字型と同じように違う回数になるものはあるのかな。

○ 準備

教師側：学習プリント 流れ図

児童側：定規、赤鉛筆

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 分割と補完の考え方についての見通しをもっている。

【支援】

- ※ 今までの複合図形との共通点を比べ、似ているところと違うところを整理し、今までの考えが使えることに気付かせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 少ない測定回数で求めるという見通しをもっている。

【支援】

- ※ 学習プリントには、複数の図形を描いておき、何度でもやり直すことができるようにしておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 測定回数が少なくすむようにするためには、公式を使うために必要な長方形や正方形の数を少なくするように見取っていかなければならないことに気付いている。

【支援】

- ※ L字型の部屋の家賃を求める時に、測定回数が少なくすむようにするために長方形の数を少なくしていたことを流れ図で振り返らせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 小集団では、つくった考えの正しさと一番少ない測定回数であったものを検討し、全体で測定回数が少ない方法とそうでないものを出し合い違いを把握している。

【支援】

- ※ 全体で取り上げる解決方法では、測定回数が多いものが出ないときには教師が提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ Dの部屋は、分割でも補完でも測定回数は同じだが、Cの部屋は補完の考えの方が測定回数が少ないことに気付いている。

【支援】

- ※ Cの部屋の測定回数は、補完の考え方の方が測定回数が少ないことを長方形の数で気付かせる。

条件を組み合わせ磁力を調節する方法をつくり出す学習

第5学年2組 理科学習指導案

指導者 福原伸治

単元 電気のでキャッチ～電磁石の性質～

指導観

本単元について

本単元は、電気のを磁力に変換できることをもとに、電流の大きさやコイルの巻き数を変化させることで磁力が変化する様子から、電気と磁力との関係について考えることがねらいである。具体的には①電流を流すことによって、電気のを磁力に変換できること②電流の大きさやコイルの巻き数によって磁力が変化するすることである。単元を通して、ゲーム活動1とゲーム活動2を提示することによって、条件が与える影響を計画的に実験を整えながらできるようにしたい。電流の大きさやコイルの巻き数などを組み合わせながら磁力を調節することに活かす姿を豊かな学びを育む姿としている。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、第3学年において長い導線で回路をつくったり、電池の片方の極に近いところに豆電球をつないだ回路をつくったりしても明るさが変わらないことを学んでいる。また、第4学年で電流の大きさとモーターの動きとの関係について図などをもとに、目に見えない電気の流れについて考えたり、説明したりする活動をしている。そこで電流やコイルの巻き数、巻き方の違いと磁力との関係を図で考えさせることが有効だと考えた。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、クレーンゲームで重いブロックを持ち上げたいという思いから、電流の大きさやコイルと磁力との関係を追究できるようにする。そこで、つかむ段階ではゲーム活動1をして磁力を強くする方法の見通しをもたせる。さぐる段階では、電池の数を増やしたりコイルの巻き数を変化させたりして磁力との関係を調べさせる。ひろげる段階では、ゲーム活動2を行い、磁力を変化させる条件を組み合わせながら、学んだことを活かしていく方法を追究できるようにする。

目標

- 1 電磁石を使った実験を通して、電流の大きさやコイルと磁力との関係について関心をもち、進んで実験しようとすることができる。
- 2 電池の数や巻き数を変えて磁力の変化を調べることで、電流の大きさやコイルと磁力との関係について考えることができる。

計画（約10時間）

時	主 な 学 習 活 動	時
つ	1 ゲーム活動1としてクレーンゲームをしてつくりかえたいところを話し合う。	2
か	○ もっと磁力を強くするためにはどうしたらよいかという問いをもつこと	
む	※ 磁力の弱い電磁石では持ち上げられないブロックを提示する。	
	2 ゲーム活動1で問題となった電磁石の仕組みと磁力との関係について調べる。	5
	(1) 電池の数を多くし強さを調べる。	②
	○ 電池の数や種類を変えれば、電流が大きくなり電磁石が強くなること	
さ	※ 4種類の違った乾電池を提示する。	
	(2) コイルの巻き数を変化させながら磁力の変化について調べる。	②
ぐ	○ モーターを使えば、電気のを物を動かす力に変換できると理解すること	
る	(3) 電流の大きさやコイルの巻き数による変化の違いを比較する。	①
	○ 違いを数値化し、電池の数を变える方法が一番磁力を変化させやすいこと	
	※ 条件ごとの結果をまとめ表にする。	
ひ	3 ゲーム活動2「ねらってキャッチゲーム」で磁力を調節する方法を調べる。	3
ろ	○ 電池の数とコイルの巻き数を組み合わせると磁力を調節できること	本
げ	※ 条件をただ使うだけのキャッチゲーム1と条件を組み合わせないというまくいかな	時
る		2
		3

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 電磁石の磁力を調節する方法に関心をもち、ゲームのルールにあうような磁力について考え、進んで実験をすることができる。
- 電池の数やコイルの巻き数を組み合わせると磁力の強さが細かく調節できることを知り、見通しをもって調べることができる。

1 ねらってキャッチゲーム2のルールについて知り、うまくいくようにするための見通しについて話し合う。

○ これまで実験して学んできた磁力を変化させるための条件を利用することで問題が解決できそうだという見通しをもつこと

☆ 電池の数が3個になっていたら、他のコイルの条件を変えてやらないとうまく調節できないぞ。

本時のめあて

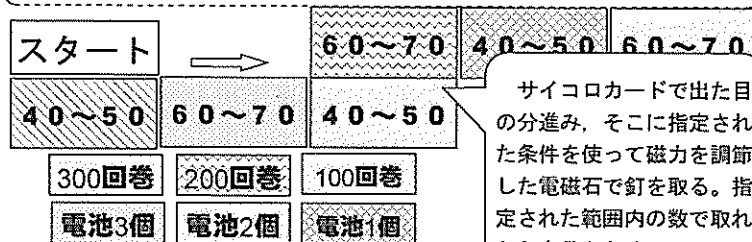
電池の数やコイルの巻き数の条件を変えながら、キャッチする釘の本数の調節の仕方について考えよう。

2 磁力を調節する方法を調べるための実験をして話し合う。

(1) 磁力を変化させる条件による動きの違いについて予想を立て、それを確かめることができるための実験を行う。

○ 予想に合わせた実験方法と条件を考えられること

☆ きっと、釘の数が70本のときは、かなり磁力が強くないといけなから、電池の数が2本ならコイルは200回巻きぐらいにしないとうまく取れないはずだ。



マス目ごとに色で指定された条件を提示

(2) 実験をして得られた結果から、調節した方法について話し合う。

○ 一つの条件が決められていても、他の条件の強さを変化させることで電磁石の磁力を強くしたり、弱くしたりできること

条件1	電池3個	電池2個	電池1個	わかること
300回巻き	95本	72本	50本	22本ずつ…

操作がみえる表現

☆ くぎの本数が40本ぐらいのときで電池の数が3個になっていたとしても、コイルの巻き数や巻き方で調節できるんだな。

3 調べた方法を活かしてねらってキャッチゲーム2を行う。

○ 自分たちで見付けた電磁石の磁力を調節する方法の有用感を感じる

☆ やっぱ、電池の数やコイルの巻き数、巻き方などが固定されていても、他の条件を整えればうまくいくんだな。

準備

教師側：ゲーム盤、サイコロカード、釘、電磁石、学習プリント

児童側：前時までの学習プリント

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

◎ ねらってキャッチゲーム2のルールにあわせて、磁力を変化させるための考えをもつことができている。

【支援】

※ ねらってキャッチゲームで学習した内容を書いた前時までの学習プリントを見直しさせる。

【子どもの見取りの観点】

◎ 前時で学習した磁力を変化させるための観点から実験方法を考え発表したり、自分の学習プリントに書いたりしている。

【支援】

※ 磁力を変化させる条件とその特徴を書き込むことができるプリントを提示する。

【子どもの見取りの観点】

◎ 実験して得られた結果から、動きと電流の大きさについて考えたことを発表することができる。

【支援】

※ 電池の数とコイルの巻き数を組み合わせ、実際に調べてみた方法を比較できる表を提示する。

【子どもの見取りの観点】

◎ 三つの方法を制御しながら実験した結果について、相違点をもとに班の中で話し合っている。

【支援】

※ 条件ごとに変化した釘の数を比較できるための表を提示する。

【子どもの見取りの観点】

◎ 実験から得られた結果をもとに分かることを話し合っている。

【支援】

※ 黒板に班で表にまとめた結果を、条件を組み合わせたパターンに合わせて整理できる表を提示する。

【子どもの見取りの観点】

◎ 実験結果から得られた条件を使って、ゲームを行っている。

【支援】

※ 今まで学習したプリントを振り返らせ、お互いの様子について気付いたことを話し合わせる。

自分と食の関係の追究活動から、自分にとってよりよい食生活の改善をめざす学習 第6学年1組 総合的な学習指導案

指導者 渡 邊 正 則

単 元 あらつフードプロジェクト

指 導 観

本単元について

本単元は、自分の体力、健康等の課題と食の関係についての問題をもとに、改善計画をつくり、実践し、よりよい食生活に改善できる力を身に付けることをねらいとしている。主な学習内容は①身近な課題や人との出会いから、自分なりの視点で食との関係を見出し追究すること②見学や体験など具体的な活動を通して、よりよい食生活に改善できること③家庭との連携を図り、日常的な活動を継続させることである。これらの活動は子ども自身が生活をよりよい方向へと変えていく力を育むものである。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、自分の身近な課題として残菜が多いこと、偏食があることなど食の課題があることに気付いてきている。しかし、具体的にはどのような問題があるのかということや、どう改善すればよいかという方向性まで考えている子はほとんどいない。そこで本単元を取り上げ、様々な視点から「食」についての問題点を考え、それをもとに、よりよい判断ができ、自分にとっての最善の食生活を判断できるようにする。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、自分の生活を見直すことで食との関係に気付かせ、様々な体験や情報から食と健康についての理解を深めさせる。それをもとに自分にとってよりよい食生活を判断でき、具体的な行動を通して改善ができるようにしたい。そのために食の効果調べ、食事メニュー作り、食にこだわりをもつ人との出会い等を段階的に位置付ける。またそれらの体験に関連する食と健康、望ましい食習慣等の課題追究を行わせ、それらをもとに実際に食事としてどのようなメニューがよいかや自分の食生活をどう改善するか計画を立て、実践していく。

目 標

- 1 自分と食との関係や食の意外な効果を知ること
で食について課題を見出し、課題解決に向けた活動に意欲的に取り組むことができる。
- 2 食事の工夫したメニューを考えたり自分の課題にあった食に関する具体的な改善策をつくったりと具体的な行動を通して実践することができる。

計 画 (約14時間)

階	主 な 学 習 活 動	時 間
課 題 設 定	1 体力や生活の課題と食の関係について話し合い、食生活改善の計画を立てる。 (1) 体力、健康と食の関係について調べる。 ○ 残菜や食べ方の現状から課題を自覚したり、その影響を考えたりすること ※ 栄養士と連携し、食の効果について知識を得られるようにする。	6 ④
	(2) 実生活上の課題をどう改善していくかに沿った具体的改善の計画をつくる。 ○ 自分の課題と食の関係に沿った具体的な改善計画を考えること ※ 改善後の具体像をもって計画させる。	②
課 題 追 究	2 自分の課題に沿った具体的食生活改善を実践する。 ○ 具体的な自分の改善計画に沿っての実践や交流などを通して、これまでの取り組みを見直すこと ※ 家庭との連携を図り、中間交流会を開いたり、定期的な数値目標を設定させたりして、取り組みが日常化し、意欲的に継続できるようにする。	4 本 時 2 ／ 4
発 信	3 実践の結果をまとめ、保護者や友達への食生活改善報告会を開催する。 ○ 実践を通しての変化を中心に報告し、実践の成果や食の重要性を発信する。 ※ 具体的な数値の変化を示すプレゼンなど工夫した報告ができるようにする。	4

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 改善計画に基づく実践をはじめでの現状や課題を交流することで、実践内容を付加・修正するとともに、長期的な見通しをもって意欲的に実践に取り組むことができるようにする。
- 具体的な経験をもつG Tからの、自分の実践に対するアドバイスを受けて、食生活改善の計画を見直すことができる。

1 計画に基づいた食生活改善の実践の現状や課題を出し合い、より効果的に継続するための修正点を話し合う。

- 効果的に実践を継続するための問題点を明らかにして、自分の食生活改善計画を修正するという方向性を理解すること

☆ 実践をされていて今の計画でいいか不安があるよ。種類だけでなく食べ方とか量とかの情報もいると思うよ。

本時のめあて

自分の食生活改善の実践を交流して、必要な情報や方法を付加・修正して、より効果的に継続できるようにしよう。

2 より効果的に食生活改善の実践ができるように、友達の実践方法や内容との比較をもとに話し合う。

- (1) 視点の違う実践をしているグループごとに報告をし、質疑応答やG Tからの助言を聞くことでよさや不十分さを話し合う。

- 友達の報告やG Tの助言を聞くことで、食生活改善の実践をよりよくするために必要な情報や視点に気付くこと

☆ 継続していくためには、どんなものを食べるかというだけでなく、どれくらい食べるか、どんな食べ方をするかなども合わせて考えておかないといけないよ。

- (2) 友達の実践方法や内容を参考に、よりよい食生活改善にむけての実践計画を付加・修正する。

- 効果的に継続できるという視点で、実践計画の見直しを行い、実践する際の食べ方、量などの視点を付加・修正すること

(健康アップグループ)
食事の内容と一っしょに生活の見直しや運動との関係も考えていく。

(体力アップグループ)
量だけでなく、持久力に必要な鉄分などより細かく計画する。

(体質改善グループ)
食の安全性の課題などもあるので、どういうものを選んだらいいかの情報も加えよう。

3 考えた改善計画を出し合い、そのよさを共通理解するとともに、今後の実践にむけての見通しを話し合う。

- 現段階での不十分な点を改善して、最終的な報告会に向けての実践の計画や見通しをもつこと

☆ みんないろいろな内容を考えているな。私たちはただ漠然と栄養とか考えていたけど、食には課題が多いことがわかったよ。

準備

教師側：G T（栄養士の先生、保護者）、
追究活動の様子

児童側：根拠となる資料、学習ノート
実践の写真

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ これまでの実践の初期段階からわかったことをもとに自分の現状や課題をまとめている。

【支援】

- ※ 各人の計画書を掲示し交流が日常的にできるようにする。
- ※ 家庭での実践の様子を写真や保護者からの話で具体的に交流できるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分の実践内容と比較して質疑応答をし、そのよさや不十分さを見出している。

【支援】

- ※ 調べた内容に対する交流がしやすいように、追究内容の近いグループごとに座り、質疑応答させる。
- ※ 発表の最後に栄養士やG Tの先生からの感想を聞かせ、活動の意欲をもたせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 次の活動のねらいやこれまでの積み上げを生かして、自分たちの考えを見直す視点を明らかにして改善している。

【支援】

- ※ 栄養士やG Tの先生にも加わっていただき、適宜アドバイスをもらえるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ よりよい改善のために、今後の方向性やそのために集める情報や改善する内容ははっきりさせている。

【支援】

- ※ G Tや栄養士の先生からの話を聞き、取り組みのよさについて評価してもらい、今後の意欲付けをする。

使いたいフレーズを選び、友達とのコミュニケーションの楽しさを実感する外国語活動

第6学年2組 外国語活動指導案

指導者 緒 方 敦 子

題 材 Let's enjoy sweets.

指 導 観

本題材について

本題材は、日常よく食べるおやつを友達に勧めたり、選んだり、共に楽しんだりする活動を通して、相手に質問したり、質問に対して応えたりする言い方に慣れ親しむことをねらいとしている。具体的には、①相手に聞く表現や、聞かれたことに対する応え方に慣れ親しむこと、②慣れ親しんだ表現を使って、友達とおやつを楽しむことである。ここでは、「Do you like ~?」「Which one do you like?」「How many do want?」を用いた質問や応え方を通して自分の班にきた友達と相互のコミュニケーションを図りながら活動できるようにしていく。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、これまでに自己紹介の仕方や、簡単な質問の仕方と応え方について慣れ親しんできている。しかし相手の反応に応じて、次の質問を考えたり、知っているフレーズを選択したりして、コミュニケーションを楽しむまでには至っていない。本題材では、おやつを楽しむために必要な質問や応え方に慣れ親しむことを通して、双方向のコミュニケーションを図ることができるようにする。このことは、コミュニケーションでの相手意識を高めることにつながることから意義深いと考える。

本題材の指導について

本題材の指導にあたっては、課題設定段階でおやつを選択して食べる場面に出合わせ、自分達もやってみたいという意欲をもたせる。リサーチ段階ではおやつを楽しむために、必要な表現について考えたり練習したりすることで使う表現に慣れ親しむことができるようにする。最後に、課題達成段階では、英語表現を用いて実際に各班で訪れた、友達におやつを勧めたり、自分の食べたいおやつを選択したりすることを通して、コミュニケーションのよさを実感できるようにしていく。

目 標

- 1 おやつを楽しむために、質問をしたり、応えたりする活動に意欲的に取り組むことができる。
- 2 「Do you like ~?」「Which one do you like?」「How many do you want?」を用いた表現に慣れ親しみ、コミュニケーションを図るためにフレーズを選択して使うことができる。

計 画 (約5時間)

階	主 な 学 習 活 動	冊
課題設定	1 世界の様々なおやつについて知り、おやつを選んで楽しむ活動に出合う。 ○ 自分たちもおやつを楽しみたい、できそうだ、という意欲をもつこと ※ 教師が実際にシミュレーションをすることで、具体的な場面のイメージをもつことができるようにする。	1
	2 友達におやつを勧めたり、楽しんだりするのに必要な表現について話し合い、使用する表現について慣れ親しむ。 (1) おやつを楽しむのに、必要な表現について話し合い、英語で繰り返し話す。 ○ 場面に応じた、質問や応え方にはどんなものがあるか理解すること ※ 実際にシミュレーションさせながら、必要な表現について考えさせる。 (2) 考えた表現に慣れ親しむために、友達同士で繰り返したり、実際にうまくいくのかシミュレーションしたりする。 ○ 質問の仕方や応え方に慣れ親しむこと ※ 繰り返しゲームを行ったり、班で役割分担演技をしたりすることで、使用する表現に慣れ親しませる。	3
リサーチ		①
		②
課題達成	3 慣れ親しんだ表現を用いて、班ごとにおやつカフェを開き実践する。 ○ 英語で質問を選択したり、応えたりしコミュニケーションすること ※ 班内で役割を分担させ、活動させる。	1 本時

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 自分の考えを伝えようと、意欲的に友達とコミュニケーションを図り、楽しんで活動することができる。
- 慣れ親しんだ表現を用いたり、組み合わせたりして友達とコミュニケーションを図ることができる。

1 自分たちが行く、おやつカフェについて話し合う。

- それぞれの場面に応じた表現があることを想起し、前時までに慣れ親しんだフレーズを練習すること

- ☆ 好きかどうかを聞く時は、「Do you like ○○?」だったな。
- ☆ いくつ欲しいのかを聞くときは、「How many do you want?」が使えるんだっとな。
- ☆ どれがいいのか選んでもらう時は、「Which one do you like?」が使えるんだっとな。話してみよう。

Today's topic

実際にやってみよう！ Let's enjoy sweets.

2 友達に勧めたり質問を繰り返したりしながら、おやつを選択し、実際に食べて楽しむ。

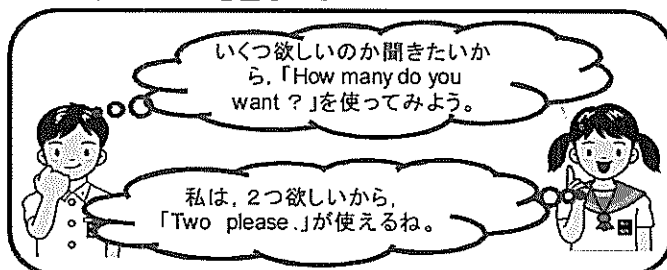
- (1) おやつを楽しむために、自分たちが慣れ親しんだフレーズを、活動の中で繰り返し話す。

- 必要な英語表現をゲームを通して組み合わせることに慣れ親しむこと

- ☆ この場面ではこの言い方が使えるんだな。
- ☆ 相手のほしいものを詳しく聞きたいときは、質問をいくつかすると、よく分かるね。

- (2) 班ごとのカフェに順番で回り、自分の食べたいおやつを選択したり、友達に勧めたりして楽しむ。

- 慣れ親しんだフレーズを使ったり、ジェスチャーを用いて、コミュニケーションを図ること



3 本時を振り返り、本時での友達とのやりとりの楽しさを実感する。

- カフェからもらえたお菓子の包み紙を組み合わせるゲームを通して、コミュニケーションのよさを実感すること

- ☆ 包み紙を組み合わせると、言葉が出てきたぞ。最後まで楽しめたのがよかった。言っていることが通じてうれしかった。
- ☆ 友達に勧めた時に、「Yes, please」と言ってくれたのが、うれしかったな。また友達としてみたいな。

○ 準備

教師側：机、おやつ、組み合わせカード
場に応じた表現のカード

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 今まで慣れ親しんできた、フレーズや単語を声に出して言ったり、確認したりしている。

【支援】

- ※ 場面に応じた表現のカードを提示したり、リズムを付けて、テンポよく言ったりできるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分達が調べてきたことを、慣れ親しんできている、フレーズや単語を用いて、伝えようとしている。

【支援】

- ※ 表現方法が分からなくなったら、ジェスチャー等も交えてよいことを、事前に確認しておく。
- ※ 必要に応じて、表現方法について、教師に聞いたり、板書を見たりできるようにしておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分の班内で、質問に答える人、おかしの準備をする人など役割分担して活動している。

【支援】

- ※ 役割が固定にならないように、必ずコミュニケーションできる場面を設定する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 慣れ親しんだフレーズを用いて、相手に質問したり、自分の気持ちを伝えたりしている。

【支援】

- ※ 必要に応じて、表現方法について、教師に聞いたり、板書を見たりできるようにしておくとともに、ジェスチャーなど交えることについても確認しておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 包み紙を組み合わせる楽しさを味わったり、本時の活動を振り返って、コミュニケーションのよさについて発言したりしている姿

【支援】

- ※ 包み紙に、組み合わせると言葉が出てくるようにしておき、組み合わせゲームを設定する。

成功体験を繰り返しながら、人とのかかわりをひろげていく課題解決学習

ふじ・さくら・梅組 合同生活単元学習指導案

指導者 倉 富 護 諏訪原 佳 子
弘 松 英 樹 堀 亮 輔

単 元 つくろう ふじ・さくら・梅祭り

指 導 観

本学級の子どもたちについて

ふじ・さくら・梅組の子どもたちは、上級生と下級生がペアになったり、グループになったりして、G Tの方に協力を要請して、課題を解決する学習を体験してきている。そこでは、上級生と下級生が、同じ目的に向かって、自分のもっているよさを発揮し合いながら、他者に働きかけ課題を解決しようとした。また、他者を手本として、他者と一緒に行動しようとするといったかかわりも見られた。

本単元について

本単元は、博多どんたく港祭りのステージで踊る友達の姿への感動から、自分たちも、踊りや太鼓を使った祭りをやってみたいという願いからできたものである。そこでは、祭りをつくっていきながら、地域の方とのかかわりをひろげることをねらいとする祭りの実現をめざす。具体的には、①自分の願いの実現をする祭りに向けて必要なことを見通すこと②祭りを実現するために、必要な事柄を身に付けること③G Tの方や異学年の友達と、協力して課題を解決することが主な内容である。自分の願いを実現させることを繰り返す中で、子どもたちは、自信を深め、学級から家族や学校全体、地域社会へとかかわりをひろげていくよさがある。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、つかむ段階では実際に地域の祭りで発表している友達の姿を見る。そして、自分たちも踊りや太鼓などでつくる祭りをやってみたいという思いをもつ。次に、つくる段階では太鼓や踊りでつくる祭りの対象を広げながら繰り返す。いかす段階では、さぐる段階までに繰り返し味わった成功体験をもとに、地域の祭りに参加して、目的を達成した喜びを味わう。

目 標

- 1 どんたく港祭りで見た友達のように、踊ったり太鼓をしたりしたいという思いを達成するために他者とかかわりながら課題を解決し、目的が達成できた満足感を味わうことができる。
- 2 太鼓や踊りの活動を通して、自分たちの目的達成に必要な人とのかかわり方に関する知識や技能を身に付けることができる。

計 画 (約 15 時間)

階	主 な 学 習 活 動	時 間
つかむ	1 祭りを見に行ったときの太鼓や踊りなどの様子について話し合う。 ○ 太鼓や踊りで祭りをつくりたいという目的を明確にし、達成意欲をもつこと ※ 祭りへの参加、友達の踊りのVTR	1
	2 太鼓や踊りでつくる祭りをする。 (1) 太鼓や踊りを試して、役割を決める。 ○ ゲストティーチャーのモデルをみてからの試しの活動から、自分の役割を把握すること ※ モデル提示と役割分担やグループイング	12
	(2) 太鼓や踊りの練習をする。 ○ ペアやグループで協力すること ※ 太鼓や踊りの技術とG Tとのかかわりについてのヒントパネル	② 本 時 3/4
いかす	(3) 保護者を招いて、祭りをする。 ○ 協力して、自信をつけること ※ 個に応じたかかわる内容や技術の設定 (4) 他の学級の子どもたちの前で祭りをする。 ○ 協力して、自信を深めること ※ 成功体験が広がる場の保障	④
	3 地域の祭りの中で、ふじ・さくら・梅祭りを行う。 ○ かかわりをひろげながら、目的を達成した喜びを味わい、自信を深めること ※ 地域での祭りの場の保障	2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 曲に合わせて、太鼓をたたいたり、踊ったりしたいと思って、意欲的にG Tの方とかかわることができる。
- リズムに合わせて、太鼓をたたいたり、踊ったりするにはどうすればいいか、G Tの方に聞くことができる。

1 前時までの太鼓と踊りの練習したことについて話し合う。

- 「太鼓や踊りをもっと上手になって、祭りで発表したい。」という課題意識をもち、学習の見通しをもつこと

- ☆ リズムに合わせてもっと上手にできるようになりたいな。
- ☆ 太鼓のたたき方をもっと強くしたいな。

本時のめあて

リズムにあわせて たいこをたたいたり おどったり しよう。

2 ホークス応援歌のリズムに合うように踊りと太鼓を練習する。

- (1) 太鼓と踊りをグループごとに練習する。

- リズムに合わせた、太鼓のたたき方や踊り方をとらえること

- ☆ どうやったらもっとうまくできるかな。
- ☆ あんなふうにすればいいんだな。
- ☆ G Tの方に見てもらったらいいかな。

【太鼓グループ】	【踊りグループ】
	
○ リズムに合うように、太鼓のたたき方や踊り方についてG Tの方とかかわりながら、とらえること	○ 踊りを曲に合わせようと、足の運び方や手足の動かし方などの動きやタイミングについてG Tの方に働きかけとらえること

- (2) ホークス応援歌に合わせグループごとに発表する。

- 発表を通して、友達やG Tの方とかかわりをひろげること

- ☆ 出だしを早く入るようにしたのでよかった。
- ☆ もっと頑張りたい。
- ☆ 拍手をもらってうれしいな。

3 曲に合わせて、太鼓と踊りグループで一緒に合わせてみる。

- 仕上がった満足感と、本番の祭りに向けての自信をもつこと

- ☆ 協力したから、自分のところもできた。
- ☆ みんなですると、すごい。今度が楽しみ。
- ☆ 早く上手になって、みんなに聞いてみたいな。

準備

教師側：太鼓、手順表、ヒントカード、
前時に踊っている姿を撮った
V T R

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 学習の振り返りをもとに、本時学習への意欲をもって発言をしている。
- ◎ 自分ががんばりたいことを、発言している。

【支援】

- ※ 太鼓と踊りについてのG Tの方からの話
- ※ 前時までの踊りや太鼓の練習のV T R

【子どもの見取りの観点】

- ◎ G Tに働きかけて演技したり、協力したりしながら練習に取り組んでいる。
- ◎ 目的に向かって、見せ合ったり、G Tに聞いたりしながら、練習に取り組んでいる。

【支援】

- ※ G Tとのかかわりと技能の視点からのペアやグループの編成
- ※ 踊りと太鼓の演技の手順の提示
- ※ リズムに合わずに困った状況を絵や写真と言葉で表したヒントパネルの準備
- ※ モデルの提示やV T Rの準備
- ※ G Tの方からのリズムに合うようになるための方向付けの助言

【子どもの見取りの観点】

- ◎ グループごとに完成させたものを他のグループの子どもに、発表し、賞賛をもらったことで、喜びを感じたことについて、発言したり、笑顔を見せたりしている。

【支援】

- ※ 発表交流の場の設定
- ※ G Tの方からの態度と技能についての賞賛
- ※ モデルの提示

【子どもの見取りの観点】

- ◎ もっと、たくさんの人に見てもらいたい、もっと上手になりたいと発言している。

【支援】

- ※ 感想を発表させ、かかわりと役割を果たしたことの価値付けと、次時への方向付けの助言と2人のG Tの方からの評価

全 体 会 （ 2 日 目 ）

▼ あ い さ つ（１０：２０～１０：３５）

初 等 教 育 研 究 部 委 員 長

校 長 鈴 木 清 一

▼ 教科等発表①（１１：０５～１１：２５）

・ 集団とのかかわりを深めながら

生活づくりに参画する学級活動

ーワークショップ型の話合い活動を位置付けた授業づくりー

特別活動部 黒 澤 真 二

▼ 主 題 発 表（１０：３５～１１：０５）

・ 豊かな学びを育む学習の創造

ー知のネットワーク化を図る活用・探究の授業づくりー

研究副主任 平 川 洋 一

▼ 教科等発表②（１１：２５～１１：４５）

・ 価値ある動きを創る体育科学習

ーゲームの中にフィードバック活動を

段階的に位置付けた授業づくりー

体育科部 渡 邊 正 則

▼ 児 童 発 表（１１：４５～１２：００）

・ 創り出そう！私達のハーモニー

指導者 高 武 龍 彦

第2日目 午後の部 学習指導案

※ 下線付きの公開授業は、午後のテーマ別協議会対象の授業です。

※ 雨天の際、体育科の授業は、附属福岡中学校の荒陵館2階で行います。

▼ 学習指導（13：00～13：45）

学年 組	教科領域等	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 者	会 場
1年1組	図画工作科	かぜと ひかりの おくりもの	安藤 順子	図 画 室
2年1組	<u>学級活動</u>	2の1アンビシャス広場に1年生をしょうたいしよう！	黒澤 真二	2-1/ワークスペース
2年2組	<u>道 徳</u>	みんなの物を大切にする心を見つけよう	三浦 研一	3年2組教室
4年1組	社 会 科	オッショイ！博多山笠～768年も続く祭りを受け継ぐ人々～	永江 英俊	4年1組教室
4年2組	理 科	空気や水の性質を上手に利用しよう（とじこめた空気や水）	今村 光宏	理 科 室
5年1組	音 楽 科	歌い継ごう！ 日本の響き	高武 龍彦	音 楽 室
5年2組	<u>算 数 科</u>	しきつめて模様をつくろう！（三角形と角）	永尾 健	5年2組教室
6年2組	総 合	つくろう！ 我らのオリジナルフラ	平川 洋一	6年1組教室

▼ 帰国子女教育学習指導（13：00～13：45）

3～6年 3組合同	国際交流タイム	世界の童話や民話を紹介しよう	島川 二郎 高瀬 雄大 緒方 敦子	子どもスタジオ
--------------	---------	----------------	-------------------------	---------

▼ 特別支援教育学習指導（13：00～13：45）

1・2年ふじ組	算 数 科	かぞえて つくろう ふじぐみレストラン	弘松 英樹	特支棟音楽室
5・6年梅組	体 育 科	つなごう！ ころがしラケットボール	堀 亮輔	特支棟運動場

作品の面白さを共有できる交流を通して、表したいことをつくりだす学習

第1学年1組 図画工作科学学習指導案

指導者 安 藤 順 子

題 材 かぜと ひかりの おくりもの

指 導 観

本題材について

本題材は、風や光を通すような飾りをつくる目的をもって、透過性をもったり乱反射したりする材料を使って色や形の組み合わせを工夫したり、風に揺れる面白さを考えて表すことねらいとしている。具体的には、①風や光を通す飾りをつくる目的をもち透過性をもったり揺れたりする材料からつくりたい内容やつくる方法を発想し、表したい色や形を選んで表現すること②表したい内容に合わせて材料や用具の使い方を工夫すること③風や光を通したり乱反射したりする飾りの美しさや面白さに気づき、友達と一緒に飾って見ることの楽しさを味わうことで、創造性のある形や色をとらえることができる。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、これまで「ふわふわ もこもこ」の学習において、ティッシュペーパーによる形づくりの面白さや、表したい色を選択して彩色してきている。この活動により、つくった形や色から、さらに発想したことを納得いくまで表していく楽しさを味わっている。しかし、友達の色や形の表し方のよさや面白さに気づき、自分の表現に取り入れることはできていない。そこで、見出した表現方法について交流する活動を重視していく必要がある。

本題材の指導について

本題材の指導にあたっては、自分の表したい色や形を選ぶとともに、みんなの作品を飾って見たり作品について話したり聞いたりすることを繰り返しながら、表し方の面白さについて追究する活動を仕組む。表現導入段階では風に揺れる飾りの形をつくり揺れたときの面白さを出すための付加表現をさせる表現追究段階では、光や風を通す美しさを確かめながら色や形を追究させる。最後に鑑賞段階では、展示された作品の面白さや美しさについて話したり聞いたりする活動を行い、達成感をもたせる。

目 標

- 1 風や光を通して見える美しさやおもしろさに関心をもちながら、材料や用具を意欲的に使って飾りものを楽しみにつくることができる。
- 2 表したい内容に合わせて材料や用具を思い思いに使い、光を通し、風でゆれるような材料の組み合わせ方を工夫することができる。

計 画 (約5時間)

階	主 な 学 習 活 動	調
表 現 導 入	1 風や光を通す飾りをつくる目的でOHPシートで形をつくる。 ○ 透過性のある材料の特徴に気づき、用具を使って形を構成すること ※ 窓やベランダに展示する活動提案とOHPシートで形をつくり、接着する方法のモデル演示	2
	2 光や風を通す場所に飾るものを透過性や乱反射する材料で彩色し、付加表現していく。 (1) 形づくったOHPシートに、透過性のある材料で彩色する。 ○ 透過性のある材料によって光を通す面白さや美しさ気づくこと ※ 窓やベランダに飾って、光や風を送りながらお互いに見れる場の設定	2
表 現 追 究	(2) 飾りが風で揺れたり、光を通ったり反射したりする感じから、装飾表現する。 ○ 光や風が通ったときの面白さから材料を選んで付加表現していくこと ※ 光や風を通したり、光ったりする付加材料の提供	①
	3 みんなの作品を展示し、作品のおもしろさや美しさについて話し合う。 ○ 自他の作品の面白さや工夫について満足感や達成感を味わうこと ※ 光や風を通して作品に水をまき、乱反射による輝きが見られる場の設定	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- それぞれ形づくった透明な飾りに、風に揺れたり透過性があったりする材料で、彩色や飾り付けをすることができる。
- 表したいことに合わせて、材料や色を選んだり、用具を使って工夫して表すことができる。

1 前時までにできた作品を展示し、自分の作品と友達作品を見て、面白いところやきれいだなと思う表し方や工夫について話したり聞いたりする。

- 自他の作品から、形づくった飾りの面白さについて、話したり聞いたりするとともに、透明な飾りに彩色表現したいという意欲をもつこと

☆ ぼくは、涙の形をした飾りができたよ。かぜさんからのおくりもので、みんなの飾りが透明できらきらしていたな。だけど、色がついていたらもっときれいになりそうだよ。

本時のめあて

かざりが ひかりや かぜで もっと きれいに なるように、ざいりょうを えらんで かざりつけを しよう。

2 表したい飾りになるように、材料や用具の使い方や表し方を工夫して彩色する。

- (1) 材料の特徴を知り、どのように飾り付けをすることができるのかについて話し合う。

- 透過する材料の特徴から、表したいことを発想すること

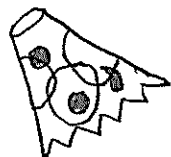
☆ カラーセロハンを貼るときれいだな。それに、ジェリーステッカーを貼ると、色が重なってもっときれいになりそうだよ。

- (2) 自分が表したい色や材料を使って、作品に飾り付けをする。

- 自分が表したいことに合わせて、選んだ材料で光や風を通す美しさを確かめながら色や模様をつくり、飾り付けをすること



スズランテープをいくつもながして



ジェリーステッカーとセロハンを組み合わせて



サインペンで好きな色で形をかき込んで

☆ スズランテープを裂いたら、ふくらんで、きれいだよ。

3 自分や友達の作品を展示し、お互いの作品の面白さや美しさについて交流する。

- 自他の作品の表現の面白さや美しさに関心をもち、表現に対する満足感を味わうこと

☆ 色を重ねたら、きれいな色になったよ。シャボン玉がいっぱいだね。きっと、光さんが私にプレゼントをしてくれたんだね。

準備

教師側：スズランテープ、カラーセロハン、ジェリーステッカー、サインペン、はさみ、のり、セロハンテープ

児童側：スモック、造形バッグ、はさみ

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ これまでの作品をみんなで見合い、これから表したいことや、友達作品から取り入れたいと思う表現の面白さや美しさについて話している。

【支援】

- ※ みんなの作品を飾って、表現を見合うことができるような展示場の設定をする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 材料の特徴を活かして、きれいに光や風を通す飾りをつくるには、どんな材料でどのような表し方ができるかについて発言している。

【支援】

- ※ 形づくった飾りのモデルを見せ、材料と合わせながら飾り付けをするような演示をする。
- ※ 飾り付けをする材料として、カラーセロハンやサインペン、ジェリーステッカーなど透過性をもったものを準備し、提供する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 光や風をきれいに通す感じを活かしている。また、表したいことに合わせて選択した材料を工夫して使って表している。

【支援】

- ※ 色が透過してきれいな感じがでているかを確かめながらつくることができる場の設定をする。
- ※ 透過性のある材料を使って飾り付けをする方法ヒントになるようなモデル資料を掲示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 本時の活動によって、きれいに彩色や飾り付けをした自慢や友達のよさや面白さについて発表している。

【支援】

- ※ 実際に鑑賞の場に展示し、彩色や飾り付けをした作品を全体で交流できるようにし、満足感や達成感をもたせる。
- ※ より一層、色が透過したり揺れたときの美しさを出せるような送風を作品に仕掛けたり、水しぶきをかけたり光を当てたりする。

体験にもとづくゴール像をイメージし、役割分担を明確にしながら自尊感情を高める活動 第2学年1組 学級活動指導案

指導者 黒 澤 真 二

題 材 2の1アンビシャス広場に1年生をしょうたいしよう!

指 導 観

本題材について

本題材は、個々の役割を明確に分担しながら集会を成功させることで、自尊感情を高め、学級の一員としての有用感を味わわせることをねらいとしている。具体的には、①室内遊びの体験から、自分たちも室内遊びを行い1年生を招待したいという思いを感受すること②自分たちが決めた原案を試しの体験活動を通して新たに情報収集し、観点にそった新たな最適案を創造すること③2の1アンビシャス広場を開き1年生を招待することで、個々の役割を果たし、集団としての意義をさらに深めることである。1年生を楽しませる集会を実践するために個々の役割を明確にし、学級の友達と助け合って活動することで自尊感情を高めることができる。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、1年生のときに3年生から集会に招かれ、楽しかった経験をもっている。昼休みは、外で元気に鬼ごっこやボール遊びをしている。しかし、雨で外遊びができないときは、退屈そうにしていることも多い。そこで、他者に目を向けることができるこの時期に、室内遊びを自分たちで創造し、1年生を招待するというゴール像をもたせたい。そして、個々の役割を明確にして、助け合って活動することができるようにする。

本題材の指導について

本題材の指導にあたっては、まず、GTが用意した室内遊びを体験させ、室内遊びへの興味と役割をもつ大切さをとらえることができるようにする。次に、観点にそった話し合い活動を行わせる。そして、決まったことを実際に試しながら体験していく場を設定し、最適案を創造できるようにする。そして、個々が自分の役割を果たすことで、集会が成功できたという達成感や有用感を味わわせ、学級としての所属感を深めることができるようにする。このことで自尊感情を高めていくことができるようにする。

目 標

- 1 室内遊びの体験から、自分たちも室内遊びの広場を創り1年生を招待することで、個々の役割を果たせたという自尊感情を高めることができる。
- 2 2の1アンビシャス広場をもっと楽しい広場にするために、観点や遊びコーナーごとのグループ交流の進め方がわかり、実践することができる。

計 画 (約4時間)

階	主 な 学 習 活 動	順
つ く る	1 室内遊びの体験から、自分たちも室内遊びの広場をつくって1年生を楽しませたいというゴール像について話し合う。 ○ イベントを成功させるためには、一人一人が明確に役割分担し、活動していくことが大切なことを理解すること ※ GTの方と室内遊び体験を行い、室内での遊びについて興味をもたせる。	1
	2 2の1アンビシャス広場で開催する遊びの内容について話し合う。 (1) 遊びの種類を5つ決めるための話し合い活動を行う。 ○ 「1年生が楽しめるか」という話し合いの観点にそって集団決定していくこと ※ ペアで考えを整理させ、全体の考えと比べながら集団決定できるようにする。	2
決 め る	(2) 決まった遊びを試しに体験し、原案の付加・修正点を話し合う。 ○ 「かんたんさ」「おもしろさ」「待つ時間」「工夫」の観点で整理すること ※ 一人が一つの観点を担い、よさや不十分さを意見交流できるようにする。	① 本 時
	3 2の1アンビシャス広場を開き、実践したことについて話し合う。 ○ 学級の一人一人が役割を果たしながら遊びを教えること ※ 喜んでいる1年生の感想を聞き、自尊感情を味わうことができるようにする。	1
行 う		

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 「遊びのかんたんさ」「遊びのおもしろさ」「遊びの待つ時間」「遊びの工夫」という観点で原案を集団決定することができる。
- 遊びの体験活動と体験に基づく観点ごとのアドバイス、違う遊びコーナーの同じ観点ごとのグループ交流、同じ遊びコーナーのグループ交流、全体交流という話合いの進め方がわかる。

1 自分が担当していない遊びについて試しの体験を行う。

- 遊ぶ側と遊びをお世話する側に分かれ、遊ぶ側は1つの観点到絞ってアドバイスをすることを確かめること

☆ 実際に体験して情報を集めよう。

本時のめあて

- 2の1アンビシャス広場をもっと楽しくしよう。

- 「かんたんに遊べるか」「おもしろい遊びか」「遊びをまつ時間が少ないか」「遊びにくふうがあるか」

2 話合いの観点が同じ友達とのグループ交流を通して、同じ遊びコーナーの友達と話し合う。

- (1) ペアで自分の担当でない遊びコーナーを体験し、よかった点やもっと改善したらよい点を付箋紙に書く。

- 「遊びのかんたんさ」「遊びのおもしろさ」「遊びの待つ時間」「遊びの工夫」の観点到分かれてアドバイスすること

☆ 自分の任された観点をしっかりと話し合い、後で同じ遊びコーナーの友達に伝えていきたいね。

〈遊びの待つ時間の観点到話し合っているグループの例〉

一度に四人遊べていたから、待ち時間が少なかったよ。



すごくコーナーは、一回のゲームに時間がかりすぎだからコースを短くしたらどうかな？

- (2) もらった意見について考えを出し合い、まとめる。

- 他の遊びコーナーのよかった点を参考にし、自分たちの考えを整理すること

☆ それぞれの観点到参考になる意見があるね。

3 同じ遊びコーナーで話し合ったことを全体に発表し、最適案を決める話合い活動を行う。

- 自分のアドバイスが最適案に生かされたり、友達の意見で原案がよりよくなったことを実感すること

☆ 2の1アンビシャス広場が全体として楽しい広場になったね。早く1年生と遊びたいな。

○ 準備

教師側：学習の流れ図、原案ボード、体験ボード、遊びコーナーの場

児童側：情報比較ノート、遊び道具、学級活動ファイル

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 話合いの観点到からよくしていくという目的をもって体験している。

【支援】

- ※ 体験ボードを用意し、自分が調べる観点到のよさを赤の付箋紙に、アドバイスを青の付箋紙に貼らせる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 付箋紙に書かれたアドバイスを基に同じ観点到の友達と話し合っている。

【支援】

- ※ 遊びコーナーごとによかった点や不十分な点がなぜ起こったのか、共通点や差異点を考えながら話し合うことができるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ それぞれの観点到で話し合ったことを出し合い、自分たちの遊びコーナーに合うように付加・修正している。

【支援】

- ※ 原案ボードに「かんたんさ」「おもしろさ」「待つ時間」「工夫」といった4つの観点到に沿った付加・修正点を書き込むことができるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 2の1アンビシャス広場全体として1年生を楽しませ、個々の役割が明確になっているかを考えている。

【支援】

- ※ 2の1アンビシャス広場の全体像を提示するとともに、自分たちの遊びコーナーにはない他の遊びコーナーのよさを見付けることができるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 最初の前案と比べ、友達の考えのよさを認め合い、自尊感情を高めている。

【支援】

- ※ 先生の話で、自分の考えが採用された児童を指名し、有用感を話してもらったり、一人一人が自分の観点到に沿った話合い活動ができたことを賞賛したりする。

2つの役割演技をもとに、具体的な場面で価値判断を行い規範意識を高める学習

第2学年2組 道徳学習指導案

指導者 三 浦 研 一

主 題 みんなの物を大切にすることを大切にしよう

指 導 観

本主題について

本主題は、みんなの物や場所を使うときには、他の人のことも考えて使うことの大切さについて考えることをねらいとしている。全ての人々が、常に人と人とのかかわり合いの中で生きていることを子どもたちに自覚させ、社会生活を営む上で、さまざまな行為が他者に対してどのような影響を与えるのかを考えさせていくことは大切なことである。毎日の生活の中で、公共物を大切にし、約束やきまりを守ることが、明るく楽しい生活につながることを具体的な生活の場を通して理解させていくことも必要であると考え。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、明るく活動的な子どもが多く、休み時間には遊んだボールや読んだ本などをしっかりと片付けたり、身の回りに落ちているゴミを自分から拾ったりする姿が見られる。みんなの物は大切にしなければならないということはわかってはいるが、誰も見ていないと「自分くらいならいいかな」「このくらいなら許されるだろう」といった自分本位な考え方をして自分勝手な行動をしてしまうことも多い。そこで、本主題で公共物を大切にすることを考えることは意義がある。

本主題の指導について

本主題の指導にあたっては、2つの役割演技を通して、公共物や場所を使うときには、他の人のことも考えて使うことの大切さについて考えさせたい。まず導入段階では、公共物を使うこれまでの自分について振り返る。次に展開段階では、資料『きいろいベンチ』をもとに、みんなで使う物を使うときの大切な心について話し合う。その際、役割演技①では、資料のあらすじを再現し、主人公の心情を、役割演技②では、公共物を大切に使うことのよさを追求することができるようにする。最後に、終末段階では、教師の説話を聞き、実践意欲を高めることができるようにする。

目 標

- 1 役割演技に意欲的に取り組みながら主人公の心情を共感的にとらえることができる。
- 2 みんなで使う物を大切にすることを自分自身で見つめ、自分の心の中にもみんなで使う物を大切にしようとする心があることを自覚することができる。

計 画（約1時間）

階	主 な 学 習 活 動	時 間
見	1 みんなで使う物を大切にしたい経験について振り返り、話し合う。	事 前
つ	○ みんなの物を大切にしようとする自分の心を見つめること	
め	※ 事前のアンケート調査をもとに、これまでの自分の行為を振り返らせる。	
る	2 資料『きいろいベンチ』をもとに、みんなで使う物を使うときの大切な心について考え、話し合う。	1 本 時
	(1) 紙飛行機を飛ばしている動作化や、はっと顔を見合わせたときの役割演技①を行い、主人公の気持ちについて話し合う。	
深	○ 主人公の心を共感的にとらえること	
	※ 役割演技①を位置付け、主人公の心情を追求させる。	
め	(2) 主人公がどのように行動していればよかったのか役割演技②を行い、話し合う。	
	○ 公共物を大切にすることのよさを明らかにすること	
る	※ 役割演技②を位置付け、価値に気付いた主人公を演じ、ねらいとする道徳的価値をとらえることができるようにする。	
	(3) これまでの自分について話し合う。	
	○ みんなで使う物を大切にすることを自分の心にもあることに気付くこと	
	※ これまでの自分を見つめさせる。	
い	3 これからの自分について考え、話し合う。	事 後
か	○ 価値の実現状況を振り返ること	
す	※ 実現状況を振り返る活動を位置付ける。	

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 主人公の気持ちを共感的にとらえながら、みんなで使う物や場所を大切に使うことの大切さをとらえることができる。
- みんなで使う物や場所を約束を守って使うことで、自分も他の人も気持ちよく生活できることに気付くことができる。

1 心のノートからみんなで使う物や場所にはどのようなものがあり、どのように使っているのかについて話し合う。

- みんなで使う物や場所を使うこれまでの自分を見つめ直し、みんなで使う物を大切に使うことについての気がかりをもつこと

☆ 本が破れてしまっているな。どうしてそんなことになってしまったのかな。

本時のめあて

みんなで つかうものを 大せつにする心を ふくらませよう。

2 資料『きいろいベンチ』をもとに、みんなで使う物を使うときの大切な心について考え、話し合う。

- (1) 紙飛行機を飛ばして遊んでいるときのたかしの動作化や、はっと顔を見合わせたときのたかしの気持ちについて役割演技①を行い、たかしの気持ちについて話し合う。

- 紙飛行機を飛ばして遊ぶ姿や、自分たちのしてしまったことに気付いたときのたかしの気持ちを共感的に把握すること

☆ 紙飛行機を遠くまで飛ばしたいな。ベンチの上から飛ばすと遠くまで飛ぶぞ。楽しいな。

☆ いけないことをしてしまったな。謝りに行こう。

- (2) 価値に気付いたたかしだったらどのようにしていたか役割演技②を行い、みんなで使う物を大切に使うとどんな気持ちになるのかについて考え、話し合う。

- 公園のベンチを汚さずに遊ぶことで、自分だけではなく他の人たちも気持ちよく使うことができることの大切さに気付くこと

☆ 紙飛行機を飛ばすときに、よく考えて行動しておけばよかったんだね。みんなで使う物を大切にしないといけないな。

- (3) これまでの自分の生活を見つめ、自分の欲求を我慢してみんなで使うものや場所を大切に使った経験について話し合う。

- みんなで使う物を大切にしようとする心が自分の心にもあることに気付くこと

☆ 公園の遊具を友達と独り占めしていたけれど、他に遊びに来た子がいたので交代で使ったことがあるよ。

3 実生活へ向けての意欲を高めることができるような教師の説話を聞き、これから大切にしていきたいことについて話し合う。

- 教師の説話から実践への意欲を高めること

☆ みんなで使う物を使うときには、自分のことだけではなく、他の人のことも考えないといけないことがわかったよ。

準備

教師側：場面絵、資料『きいろいベンチ』、役割演技用ベンチ、紙飛行機、道徳ノート、情景図、役割演技用名札

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 身の回りにあるみんなで使う物や場所を使うときのこれまでの自分について振り返っている。

【支援】

- ※ 心のノート74・75ページを提示し、みんなで使う物や場所にはどのようなものがあるのか、それらを日頃どのように使っているか話し合うことで、価値への方向付けを行う。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 紙飛行機を飛ばすことに夢中になっている主人公の気持ちを共感的にとらえている。

- ◎ 役割演技を通してはっと顔を見合わせている主人公の気持ちを、明らかにしている。

【支援】

- ※ 主人公が紙飛行機を飛ばすことに夢中になっているときの気持ちを共感的に追求するために、紙飛行機を飛ばす動作化を位置付ける。
- ※ はっと顔を見合わせている場面を教師（てつお）対子ども（たかし）での役割演技を行い、主人公がどんなことに気付いたのか明らかにすることで、ねらいとする価値をとらえることができるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ みんなで使う物を約束を守って大切に使うと、自分も他の人々も気持ちよく使うことができるという価値に気付いている。

【支援】

- ※ 教師（てつお）対子ども（価値に気付いたたかし）の役割演技を位置付け、主人公たちに足りなかった心はなんなのかを明確にすることができるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 教師の説話を聞き、他の人のことを考えて、公共物を大切にしていこうと実践意欲を高めている。

【支援】

- ※ 社会生活を営む上で、公共物を大切にしていけることが大事だと教師が感じた体験談を語って聞かせる。

地域の祭りがどのようにして継承されていったのか人の働きを中心に考える学習

第4学年1組 社会科学学習指導案

指導者 永江 英俊

小単元 オッショイ!博多山笠～768年も続く祭りを受け継ぐ人々～

指導観

本小単元について

本小単元は、地域の伝統や文化を受け継いできた人々の生き方に触れ、地域社会に対する誇りと愛情を育てることをねらいとしている。具体的には、①博多山笠に関係する施設などを見学、調査したり、博多山笠を継承している人から話を聞いたりして、人々がしてきたことに気付くこと②実際に行事に参加したことのある人の体験談を紹介し合い、地域社会の一員としての自覚を育てることなどである。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、わたしたちの住んでいる福岡県の学習で、福岡県の地形の特色、土地の使い方などを調べて白地図に書き表し、福岡県の様子は場所によって違うことなどに気付いている。しかし、その福岡県の年中行事である博多山笠は知っているものの、その祭りにはどのような工夫や努力があるのかや、祭りを受け継いでいく人々の願いや思いについては、気付いていない。そこで、祭りに対する思いや願いまでもとらえ、地域社会の発展を願う態度を身に付ける上でも大変意義深い。

本小単元の指導について

本小単元の指導にあたっては、博多の町に古くから継承されている博多山笠について、関係する施設を見学、調査したり、継承している人に話を聞いたりして追究できるようにする。まず、博多山笠の年表や博多山笠の様子を提示し、760年以上も受け継いできた人々がしてきたことの見通しをもつ。次に、博多山笠の変遷を櫛田神社やふるさと館に見学に行き、調べる。そして、地域と人を大切にしている博多山笠を受け継ぐ3人に会わせ、交流を通して、博多山笠を継承するための取り組みや博多山笠の意味について話し合う。さらに、自分の住む地域の祭りについても調べ、その祭りに対する思いや願いをとらえ、地域の一員としての自覚を育てる。

目標

- 1 博多山笠が受け継がれている様子を調べ、地域の人々の取り組みによって毎年祭りを開くことができ、博多山笠を大切にすることができる。
- 2 博多山笠が、地域の発展、人々のまとまりなどの願いがあり、祭りに込められた願いや知恵が今に受け継がれてきたことを考えることができる。

計画 (約13時間)

階	主 な 学 習 活 動	単
つ か む	1 博多山笠を受け継いできた人々の取り組みについて話し合う。 ○ 博多山笠を受け継いできた人々の取り組みについて、見通しをもつこと ※ 博多山笠の年表や博多山笠を受け継いできた人々の様子を提示する。	2
	2 博多山笠がなぜ長い間受け継がれてきたのかを資料やインタビューで考える。 (1) 博多山笠の歴史を調べ、話し合う。 ○ 博多山笠の変遷をとらえること ※ 櫛田神社や博多町家ふるさと館に見学に行き博多山笠を調べる場を設定する。 (2) 博多山笠を担ぐ人、博多山笠の人形や飾りをつくる人、博多山笠を支える人について調べ、話し合う。 ○ 博多山笠を支える人の願いや思いをとらえること ※ 流れの代表、博多人形師、ごりょんさんにインタビューする場を設定する。 (3) 博多山笠を受け継ぐ人々の取り組みから博多山笠の意味を話し合う。 ○ 博多山笠の本来の意味をとらえること ※ 博多山笠を受け継ぐ人々の工夫や努力を表現物に置き換える。	9 ④ ④ ① 本 時
さ ぐ る	3 自分の住む地域の祭りを調べる。 ○ 地域の祭りを受け継いできた人々の工夫や努力、思いや願いをとらえること ※ 福岡県内の祭りや山笠を提示する。	2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 博多山笠が760年以上も受け継がれている様子を調べ、博多山笠を受け継いできた人々の取り組みを調べることができる。
- 博多山笠を継承している人々の取り組みから思いの共通点を考えることで、地域の祭りの意味についてとらえることができる。

1 博多山笠が760年以上も継承されていることを調べ、その理由の見通しについて話し合う。

- 博多山笠を受け継いできた人々には、博多山笠を担ぐ人（堀さん）、「飾り山笠」「昇き山笠」の飾り付け（亀田さん）をしている人、こりょんさん（徳安さん）などがあることを見出すこと

☆ 博多山笠には、いろいろな人が、かかわってきたからこそ、760年以上も、受け継がれているんだと思うよ。

本時のめあて

博多山笠を受け継いできた堀さん、亀田さん、徳安さんの取り組みについて話し合い、博多山笠の意味について明らかにしよう。

2 博多山笠を受け継いできた堀さん、亀田さん、徳安さんの取り組みの中で大切にしていることや願いについて話し合う。

- (1) 博多山笠を受け継いできた3人の取り組みから願いを予想する。

- 博多山笠を受け継ぐために、3人が大切にしていることをとらえること

堀 武志さん	亀田 均さん	徳安 和美さん
博多山笠を担いでいる若い人たちを育てている。	地域のひとと何度も話し合い、人形や飾りをつくっている。	洗濯や炊き出しをして、流れのみんなや家族を支えている。

地域づくり、人づくりを大切にしているのかな。

- (2) 博多山笠を受け継いでいる人々の協力体制の資料を読んだり、博多山笠振興会の方の話を聞いたりして話し合う。

- 博多山笠の資料や博多山笠振興会の方の話から博多山笠の意味について探ること

☆ 博多山笠を受け継いでいくことは、こんなにたくさんの人々が博多山笠のためにかかわっているんだね。

☆ 博多山笠を受け継いでいる人々は、地域づくり、人づくりのために一生懸命に取り組んでいるんだ。

3 博多山笠をこれからも受け継いでいくために大切なことについて話し合う。

- これからの博多山笠にとって大切なことをとらえること

☆ 博多山笠を受け継いでいる人は、伝統を守りながら、地域と人をととても大切にしているんだ。これからも博多山笠を受け継ぐ人々が、自分の役割を果たして、みんなと協力をしていけば、これからもずっと続いていくんだ。

準備

教師側：「飾り山笠」「昇き山笠」の写真
博多山笠に関する資料

児童側：学習ファイル 画用紙などに自分の考えをまとめたもの

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 博多山笠が760年以上も継承され続けていることを自分の年齢との比較により実感としてとらえ、発言したり、ノートに書いたりしている。
- ◎ 博多山笠はどのようにして受け継がれているのかを見通しをもっている。

【支援】

- ※ 博多山笠を受け継いできた人々の写真を提示する。
- ※ 前時までに調べた博多山笠を受け継いできた人々について簡単な紹介をする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 博多山笠をこれからも受け継いでいくために取り組んでいることについて発表したり、ノートに書いたりしている。

【支援】

- ※ 博多山笠を受け継ぐ3人の方について調べたことや聞いたことなどを画用紙などに置き換えて提示できるように事前に準備させておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 博多山笠の協力体制や博多山笠振興会の方のお話を聞いて考えたことを発表したり、ノートに書いたりしている。

【支援】

- ※ 博多山笠に携わる人数が多いことを提示したり、博多山笠振興会の方に山笠を受け継ぐために大切にしている話を聞かせたりする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 地域の人々が受け継いできた年中行事には、人々の願いや思い、人々のまとまりが大切であることについて発表したり、ノートに書いたりしている。

【支援】

- ※ 博多山笠を通して、人々の協力や結びつきがわかる資料を提示する。

自然のきまりを見つけ、その性質を調整しながら使いこなす学習

第4学年2組 理科学習指導案

指導者 今 村 光 宏

単 元 空気や水の性質を上手に利用しよう～とじこめた空気や水～

指 導 観

本単元について

本単元は、とじこめた空気と水に力を加え、その体積や押し返す力の変化を調べ、空気及び水の性質についての考えをもつことができるようにすることをねらいとしている。具体的には、①とじこめた空気を圧すと体積は小さくなるが、押し返す力は大きくなること②とじこめた空気は押し縮められるが、水は押し縮められないことを理解することである。これまでに学習してきた電気や磁石の力という見えないものを目に見える形で表してきたことを活かし、その性質について考えを深めていくことができる。これは、粒子概念の基礎となり、科学的な見方や考え方が広がっていく上で意義深いものである。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、第3学年「豆電球にあかりをつけよう」、「磁石のはたらき」、「電池のはたらき」の学習で、電気や磁石の力を絵に表して表現し交流していくことで、目に見えないものを見る形に置き換え、その性質についてとらえていく活動を行ってきた。その学びを活かし、空気や水の状態を絵図に表していくことは漠然としているイメージをよりはっきりとさせ自然事象のきまりを明らかにしていく上で有効であると考えた。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、ポンプ式の水鉄砲を使って自然のきまりを見つけ、使いこなすことができるようにしたい。つかむ段階では、水鉄砲の水を遠くまで飛ばしたいという問いを引き出し、中の空気や水の性質に着目させていく。さぐる段階では、空気や水の様子を絵図に描かせ、見えないものを見る形に置き換え、交流を通して、より具体的なイメージをつくる。ひろげる段階では、これまでに積み上げてきたことを活かして水を飛ばす距離を調節する活動を位置付ける。

目 標

- 1 とじこめた空気と水を押し縮める実験を通して、その体積変化や押し返す力とそれらの性質に関心を持ち進んで調べようとするができる。
- 2 絵図を使って空気や水の状態を交流する活動を通して、空気や水の性質についての考えをもつことができる。

計 画 (約8時間)

階	主 な 学 習 活 動	時
つかむ	1 ポンプ式水鉄砲で水を飛ばすゲームを行う。 ○ もっと遠くまで飛ばすにはどうしたらよいかという問いをもつこと ※ ポンプ式水鉄砲を提示し、遠くまで飛ばす演示を行う。	2
	2 水鉄砲の中の空気や水のはたらきについて調べる。 (1) 水鉄砲の中の水や空気の状態を絵図を使って交流し、実験を行う。 ○ 空気は力を加えると押し縮められるが水は押し縮められず、空気は元に戻ろうとすることをとらえること ※ 絵図を使った交流を行い、空気と水の関係性を読み取らせる。	4
さぐる	(2) 水鉄砲の中の水がなぜ出てくるのかについて調べる。 ○ 空気が元に戻ろうとする力で水が押し出されることをとらえること ※ 交流を通して、絵図に変更を加えさせる活動を設定し、より具体的なイメージをもたせる。	②
	3 空気と水の性質を利用して、水鉄砲で距離を調節するゲームを行う。 ○ 空気の縮める力を変えることで、生まれる力を調節できること ※ 水鉄砲で飛んだ距離を調節するゲームを提案する。	2 本 時 2 ／ 2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- ポンプ式水鉄砲の中の空気や水の性質に関心をもち、水をとばす距離を調節する方法を、確かめようとすることができる。
- 空気の元に戻ろうとする性質を利用して、水を飛ばす距離を調節することができる。

- 1 空気と水の性質はどんなものであったのかを絵図をもとにして振り返り、本時で明らかにしたい内容について話し合う。

- 水鉄砲の水をねらった場所まで飛ばすために、どのような工夫をするのかを調べるというめあてをもつこと

☆ 送り込む空気の量を調節したらいいと思うよ。

本時のめあて

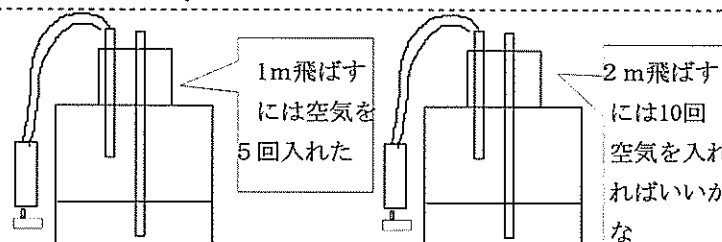
水鉄砲に入れる空気の量を変えて、どのくらい水が飛ぶのか調べよう。

- 2 これまでに調べてきた空気と水の性質について話し合い、それぞれのグループで実験をして確かめる。

- (1) 距離を調節する方法について予想を立て、確かめるための実験を行う。

- 水が飛ぶ距離とポンプをおす回数を関係付けて試行すること

☆ 空気が縮んで押し返す力が関係するから、入れる空気の量を調節すればいいよ。



(1m, 2m, 3mと、) 飛ばす距離を調節する)

空気が多い方が押し返す力が大きいからよく飛ぶよ。

- (2) 実験をもとに、水を飛ばす距離を調節する。

- 空気の元に戻ろうとする性質を活かし、空気を入れる量の調整をすること

☆ 近くをねらうなら、空気は少し入れればいいよ。

☆ 遠くなら、空気をたくさん入れよう。

- 3 実験で試してみた方法で、水鉄砲を使って、水を飛ばして距離を調節するゲームを行う。

- 空気と量の調整をしながら水を飛ばし、その仕組みについて説明ができること

☆ ポンプをおす回数を2倍にすると、それに合わせて水が飛ぶ距離も2倍ぐらいになったよ。

☆ 友達のグループは水が飛ぶ距離を調節するのに、空気を入れる量をうまく調節しているな。

準備

教師側：学習プリント、水鉄砲、
空気入れ、学習の流れ図
画用紙、マジック

児童側：前時までの学習プリント

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 水が飛ぶ距離を調節する方法を明らかにしたいと発言したり書いたりしている。

【支援】

- ※ ねらったところに水を飛ばす演示を行うことで、水を飛ばす距離を調節する活動を行うことに対する意欲を高め、追究することができるようにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 水をとばす距離を調節する方法として空気と水の両方の性質を考えて実験方法を発表したり、書いたりしている。

【支援】

- ※ これまでの学習で得た内容に関して絵図をもとに話し合わせ、空気の量と水が飛ぶ距離との関係に目を向けさせる。
- 自分の予想に基づき、空気を送り込む量と空気が縮んで押し返す力に目をつけて実験することができる。
- ※ 水の量は固定するという条件を提示し、空気の量と押し返す力との関係に着目させる。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 実験結果をもとに、空気を送り込む量についてグループで話し合ったり、空気の量を調整しながら実験を行っている。

【支援】

- ※ 目標の距離が分かるようにメジャーを設置しておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分たちのグループの工夫や、他のグループの工夫について、空気が縮んで押し返す力という観点で説明したり書いたりしている。

【支援】

- ※ 空気や水の学習を振り返らせ、身の回りにも空気や水の性質を使って生活の中で役立っているものが多いことを知らせたり、提示したりする。

比較・聴取から感じ取ったことをもとに、音楽をつくる学習

第5学年1組 音楽科学習指導案

指導者 高 武 龍 彦

題 材 歌い継ごう!日本の響き

指導観

本題材について

本題材は、日本の伝統的な民謡や子守歌に触れ西洋の音階と違った、日本独特の五音音階に触れ、日本の音楽の響きを感じ取ることをねらいとしている。具体的には、①陽音階と陰音階の違いを感じ取ること②日本の伝統音楽独特の歌い方を身につけること③自分たちで日本音階を用いた伴奏のふしをつくることである。そのために第6音（ラ）の音にフラットをつけた場合とつけない場合とを聴き比べたり、歌い比べたりする。また、楽曲に適した音色をもつ楽器を選ばせ簡単な伴奏をつける活動を行う。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは「お祭りや民ようめぐり」の学習で、日本や世界の国々に伝わるお祭りや民謡のリズムがもつ躍動感や楽しさを味わうことを経験してきている。また、それぞれの国々の音楽がもつ特徴の違いや類似性も感じ取って聴いたり表現したりしてきている。しかし、五音音階の響きを考えながら表現するまでには至っていない。そこで、多様な音楽表現に興味をもち、和音の響きを感じ取ってより豊かに表現することができるようになるこの時期に本題材を設定する。

本題材の指導について

本題材の指導にあたっては、まずつかむ段階では日本の伝統的な民謡や子守歌に触れることで西洋の音階と違い、日本独特の五音音階の響きを感じ取らせる。次につくる段階では、五音音階に触れると共に、第6音（ラ）の音にフラットをつけた場合とつけない場合とを歌い比べたり、聴き比べたりして陽音階と陰音階の違いを感じ取らせたり、楽器を選択して簡単な伴奏を付けて歌ったりする。最後に味わう段階では、日本の音階を用いた簡単な伴奏のふしをつくる。その際に進行と音を決めたすごろく式の音列表やオルフ木琴を活用する。

目 標

- 1 日本の様々な音楽に関心をもって聴こうとしたり、表現しようとしたりすることができる。
- 2 日本の音階の特徴的な響きや、ふしのちがいに気をつけて歌ったり、ふしづくりをしたりすることができる。

計 画（約4時間）

階	主 な 学 習 活 動	時
出 合 う	1 日本の民謡や子守歌を聴き、日本音階の響きや特徴を感じ取る。 ○ 日本音階がもつ独特の響きや、楽曲の特徴を感じ取ること ※ 日本音階の響きや特徴が顕著に表れた楽曲を複数用意し、それぞれの楽曲のよさを感じ取ることができるようにする。	1
	2 「子もり歌」「谷茶前」を日本音階の響きを味わいながら歌う。 (1) 「子もり歌」を陽音階と陰音階で歌う。 ○ 陰音階と陽音階の響きの違いを感じ取ること ※ 感じ取ったことを自由に出し合える交流の場を設定する。	2
つ く る	(2) 「谷茶前」の曲想を感じ取り、曲想を豊かに表すための歌い方について表現を追究する。 ○ 友だちの声を聴き合いながらリズムや速さ、声の出し方、拍の流れに気を付けること ※ 沖縄の音階の特徴が表れているか、友だちと聴き合いながら、表現を追究していく場を設定する。	①
	3 日本音階のふしづくりを楽しむ。 ○ 2曲の楽曲から感じ取った日本音階の響きを活かして、ふしのつながりを見出すこと ※ 音と進行を決めた双六式の音列表やオルフ木琴を準備する	1 本 時

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 日本音階がもつ独特の響きを感じ取り、友だちと協力して表現をつくろうとすることができる。
- 日本音階独特の旋律の特徴を感じとって、曲想に合ったふしをつくることことができる。

1 日本音階の教師のモデル表現を聴き、学習のめあてを設定する。

○ 表現の工夫に関する観点をつかむこと

- ☆ 新しいふしだね。日本の民謡みたいな音楽だね。
- ☆ どんなことに気をつけてつくればいいんだろう。

本時のめあて

感じ取ったことをもとに、オリジナルの日本のふしをグループ同士で聴き合って、工夫を広げよう。

2 音階の進行双六表を使って、オリジナルのふしをつくる。

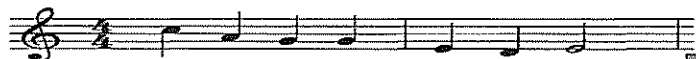
(1) 個人でふしをつくり、伴奏に合う楽器を選んで演奏する。

○ 自分のオリジナルのふしを複数見出すこと

- ☆ 双六表を使ったら、どの順番でもふしができあがるね。
- ☆ 木琴で演奏すると曲の感じにピッタリ合うと思うな。



【沖縄のふしを双六表を使ってつくる場合】

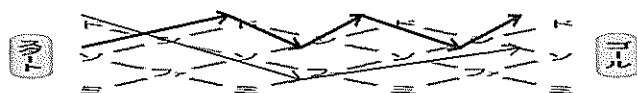


【オルフ木琴を使ってふしを作った例】

(2) 個人で考えた工夫を出し合い、グループで試しに歌ったり、演奏したりして聴き合う。

○ グループの友達と協力して新たな表現を見出すこと

- ☆ あの友達と一緒に演奏してみたらどうなるかな。
- ☆ あの友達はピアノで演奏しているね。いろんな組み合わせができておもしろいね。



【二つの沖縄の旋律を重ねた例】



【高さの違う木琴で低音部の旋律を加えた例】

3 旋律を重ねたり楽器を組み合わせたりして、つくりかえた表現を発表し合う。

○ お互いに本時を通して高まった表現のよさを認め合うこと

- ☆ ふしを重ねて歌ったり、ずらして歌ったり、いろいろな歌い方をして工夫しているね。

○ 準備

教師側：ふしづくり双六表

オルフ木琴

教師のモデル表現

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 教師のモデル表現を聴いて、自分たちの表現の工夫について考えたり、選んだりしている。

【支援】

- ※ 多様な表現のヒントになるよう音楽的要素が異なった複数のモデルを提示する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 双六表をもとに、自分で考えた表現の工夫を学習プリントに書き込んでいる。
- ◎ オルフ木琴を使って日本音階のふしを試してオリジナルのふしをつくらせている。

【支援】

- ※ 個人で考えた表現の工夫が書き込めるよう、楽譜を入れた学習プリントを準備する。
- ※ 友だちの助言を聞きながら、工夫できるよう、グループになって活動できるようにしておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 個人で考えた表現の工夫をそれぞれが出し合い、よさを認め合いながら、新しい表現を見出している。

【支援】

- ※ 各グループに拡大した双六表を準備し、書き込み、試しの演奏ができるようにしておく。
- ※ 他のグループの表現と重ならないよう、グループで活動できる場を設定する。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 他のグループの表現のよさを見出すとともに、見出した表現のよさを自分たちの表現の工夫に取り入れて次時の学習に生かそうとしている。

【支援】

- ※ お互いの表現のよさが書き込める学習プリントを用意しておく。

第5学年2組 算数科学習指導案

指導者 永 尾 健

単元 しきつめ模様をつくろう！（三角形と角）

指導観

本単元について

本単元は、既習の図形の性質や、三角形の内角の和を調べ、それをもとに四角形や多角形など、他の図形についても調べながら、論理的に考える力を育てることをねらいとしている。具体的には、①三角形の内角の和をもとに、四角形や多角形の内角の和を見つけて出す過程を筋道立てて説明できること、②図形の中に辺の平行関係、辺や角の相等関係を見つけていること、等である。そのために、しきつめ模様づくりを教材化する。敷き詰め模様は、対称性を保っているため、図形をまとめてみたり、図形の構成要素を分析的にとらえたりでき、多様性や創造性の面で、大変価値があるものである。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、第4学年で円の学習を行っており、直径と半径、円の中心などをとらえている。また、多角形と正多角形の学習において、正多角形の性質として円に内接するということと、正多角形の頂点と中心を結んでできる三角形は、二等辺三角形であることをつかんできている。そこで、このような既習の内容と円周の学習とを組み合わせさせて考えさせれば、活用するための思考力を身に付けることができると考える。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、三角形や四角形、多角形を敷き詰めて模様づくりをする。そこで、つかむ段階では、三角形や四角形だけでできた単純なパズルを提示し、他の形でもパズルができないかといった課題をもたせる。次につくる段階では、敷き詰められた三角形や四角形の辺や角に着目して、敷き詰められる根拠について調べ、三角形、四角形の角の和のきまりについてとらえさせる。最後に、ひろげる段階で、既習から類推して六角形の内角の和の求め方について考えさせる。

目 標

- 1 長方形や三角形、四角形などを変形しながら、オリジナルの敷き詰め模様を作る活動に意欲的に取り組むことができる。
- 2 合同な図形の性質や辺や角の相等関係に着目しながら、敷き詰め模様の図形を観察したり、図形の性質を見つけたりとすることができる。

計 画（約6時間）

階	主 な 学 習 活 動	単 元
つ	1 三角形や四角形を敷き詰めた模様に出合い模様づくりの計画を立てる。	1
か	○ 模様を構成する三角形や四角形の内角の和に着目すればいいことに気づくこと	
む	※ 様々な三角形や四角形で構成されたしきつめ模様を提示する。	
つ	2 内角の和の求め方をもとに敷き詰め模様づくりのきまりを調べる。	3
く	(1) 敷き詰められた三角形の内角の和の関係を調べる。	①
る	○ 三角形の内角の和の調べ方がわかり、 180° になることをとらえること	
	※ 折ったり、重ねたりして調べさせる。	
	(2) 四角形で敷き詰められた模様の内角の和の関係を調べる。	②
	○ 四角形の内角の和の調べ方がわかり、 360° になることをとらえること	
	※ 三角形に帰着させて調べさせる。	
ひ	3 五角形、六角形の敷き詰め模様の条件について考え、オリジナルの敷き詰め模様をつくる。	2
ろ	○ 五角形や六角形が三角形と四角形で構成されていることをもとに内角の和を求めたり合同な四角形に着目して敷き詰め可能な六角形を導き出したりできること	本 時 2 ／ 2
げ	※ 既習の三角形や四角形に帰着するとともに、合同な図形の意味や性質を想起させて敷き詰められる条件を考えさせる。	

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 六角形の内角の和が一定であることについて調べることにより意欲的に取り組むことができる。
- 対称性を保った六角形で、しきつめ模様をつくることが可能な理由を、角の大きさや辺の長さから筋道立てて説明できる。

- 1 五角形までの追究で分かったしきつめ模様のできる条件から、六角形ではしきつめ模様ができるのか、しきつめ模様に合うための角度を調べる課題について話し合う。

- しきつめ模様ができる図形に共通していることを見つけ出し、しきつめ模様ができる条件の見通しをもつこと

- ☆ しきつめ模様は、六角形の場合でもつくれるかな。
- ☆ 長方形や平行四辺形と三角形が組み合わさった五角形だけは、敷き詰めることができるけど、六角形も何かきまりはあるのかな。

本時のめあて

六角形の内角の和にきまりがあるかどうかを、いろいろな方法で調べ、しきつめ模様の条件にあてはまるか考えよう。

- 2 六角形の内角の和について、一定のきまりがあるかどうかを調べ、そのきまりの見つけ方について話し合う。

- (1) 六角形の内角の和について、これまでに学習した三角形や四角形の内角の和を用いて調べる。

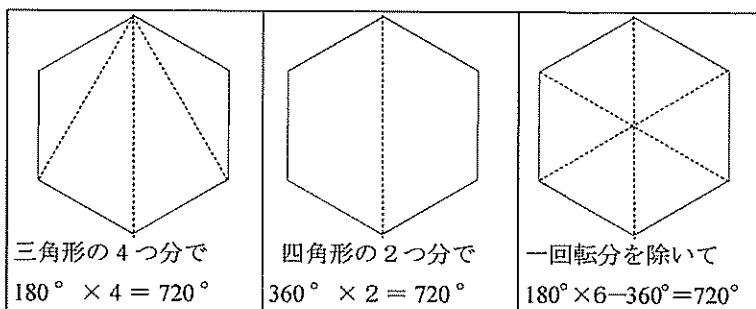
- 三角形や四角形の内角の和を用いて、演繹的に六角形の内角の和のきまりを導き出すこと

- ☆ 六角形は三角形4つに分けられるから、 $180^\circ \times 4$ で、内角の和は 720° になりそうだ。

- (2) 六角形の内角の和の導き出し方について小グループで交流する。

- 六角形の内角の和が 720° であることを、既習の三角形の内角の和や四角形の内角の和などを用いて説明できること

- ☆ 720° になることをいろいろな方法で確かめられるよ。



- 3 六角形のうち、しきつめ模様づくりの条件に合う図形について調べ、見つけ出す。

- 平行にある辺や長さの一致の条件に着目して考えること

- ☆ しきつめができる六角形は、四角形2つ分で 720° になり、4組の平行で同じ長さの辺があるよ。2つの四角形は合同だね。

準備

教師側：提示用の六角形、方眼工作用紙
表現ボード

児童側：定規、分度器

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 五角形で、しきつめ模様ができる特別な場合の条件について、既習を想起し発現している。

【支援】

- ※ 五角形を提示した後、五角形の場合でしきつめ模様ができる場合の条件について発問する。
- ※ 三角形や四角形がいつでもしきつめ模様ができる理由を発問して想起させ、六角形の見通しにする。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 既習の三角形の内角の和や四角形の内角の和を用いて学習ノートに自力解決し六角形の内角の和が 720° であることを、いくつかの方法で導き出している。

【支援】

- ※ 学習ノートに六角形の図形を載せておき、補助線を入れて、図形を分割したり、角度の関係を書き込んだりできるようにしておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自力解決した六角形の内角の和の求め方を、小グループの中で友達に対して、既習の三角形の内角の和と四角形の内角の和、一直線や一回転の角度を利用して、説明している。

【支援】

- ※ 表現ボードに、説明に必要なことを書き込ませ、それを表現ボードと指示棒を使って説明させる。

【子どもの見取りの観点】

- ※ 六角形で敷き詰め模様づくりが可能なのは、合同な四角形が組み合わさった六角形の場合であることに気づいている。

【支援】

- ※ 六角形のしきつめ模様を提示し、その共通点を話し合ったり、角に着目させる説明をさせたりする。

外国の文化の価値と教科で得た知を生かしながら、自らの学校文化をつくりだす学習 第6学年2組 総合的な学習指導案

指導者 平 川 洋 一

単 元 つくろう 我らの附小オリジナルフラ

指 導 観

本単元について

本単元は、フラという外国文化に内在する価値をベースに自分たちの発想を取り入れた「附小オリジナルフラ」をつくることをねらいとしている。主な学習内容は、①フラを体験したり歴史やその価値をリサーチしたりしながらその魅力をとらえること、②学校文化や自分たちらしさを大切に「附小オリジナルフラ」を、友達やG Tとかかわりながらつくること、③つくった「附小オリジナルフラ」を校内・校外に発信していくことなどである。このように、外国の文化に触れながら、各教科で習得した知を活用し、自らの文化として発信していくことは、学びの意義を実感させるうえでも意義深い。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、これまでの6年生が学校行事や対外的な行事でさまざまな学校文化をつくり上げてきたことを知っている。4月に自分たちが最上級生になり、母校となる学校に何らかの足跡を残したいという意欲を高めている。そこで、そのような意欲をもった子どもたちに、自分たちの「オリジナルフラ」をつくり上げる喜びを味わわせたい。また、ハワイで生まれ、全世界に広がったフラを体験したりその魅力をリサーチしたり、友達とかかわったりするなかで、これまで身に付けた知を活用しながら課題を解決する経験をさせていきたい。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、まず、フラを広げていく活動をしているG Tや本校の記念歌製作に携わったG Tとの出会いを位置付けることで、「自分たちのオリジナルフラをつくりたい」という目的をもたせる。そして、フラのもつ独特のメッセージ性をリサーチする、G Tから「フラ」の基本を体験的に学ぶ、音楽や服飾に関するG Tと交渉するなどしながらオリジナルフラをつくり上げ、発信していく。

目 標

- 1 全世界に広がったフラの魅力を調べたり、自分たちのオリジナルフラをつくったりすることで、学校への愛着を深めることができる。
- 2 フラを広げようとするG T、服飾・アクセサリづくりの専門家の方とかかわりながら、自分たちの思いを込めたオリジナルフラをつくることができる。

計 画 (約 16 時間)

階	主 な 学 習 活 動	時 間
課題設定	1 「フラ」と出会い、どのようにオリジナルフラをつくるか計画を立てる。 ○ 「フラ」のもつ魅力に気がかりをもちオリジナルフラを自分たちの手でつくりあげようという思いをもつこと ※ フラを広げる活動をしているG Tとの出会いの場の設定	3
	2 附小オリジナルフラをつくる。 (1) フラのもつ魅力をリサーチする。 ○ 「万国共通の手話」「パラダイス」「メッセージ性」をとらえること ※ ハワイまつり実行委員の方の招聘 (2) オリジナルフラのコンセプトを決め専門チームに分かれてフラをつくる。 ○ 個の関心をもとに、手話・衣裳・アクセサリーの各チームごとに追究すること ※ フラのサークルで学ぶ方々、衣裳の専門家と交流できる場の設定 (3) 各チームの成果を合わせて附小オリジナルフラをつくる。 ○ 自分たちだけのフラができたことを実感し、発信していく必要感をもつこと ※ 校内での披露の場の設定	13 ③ ⑥
追 究	3 つくったフラを発信する。 ○ オリジナルフラをより多くの人へ発信する喜びを味わうこと ※ ハワイまつりへの参加	④ 本時4 課 外

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 前日に発表した附小オリジナルフラについてのふり返りを、個から各専門チーム、学級全体へと交流を広げ、明日のハワイまつりに向けて何をどう修正するか、意欲的に話し合うことができる。
- オリジナルフラのコンセプトと各専門チームのコンセプトという観点から総合的に検討し、修正点を見出すことができる。

1 昨日公開したオリジナルフラをふり返っての感想を、個から学級全体へと発表し合い、本時学習のめあてについて話し合う。

○ 個のふり返りを3つの専門チームのふり返しへとまとめ、明日のハワイまつりをよりよくしようとする意識をもつこと

☆ ひとつひとつの動きを歌詞の意味に合わせて表現することができていた（できていなかった）な。

☆ 3つのチームから、それぞれの観点でふり返る必要があるね。

本時のめあて

明日のハワイまつりに向けて、各専門チームで修正点を話し合っ
て全体で共通理解し、よりよい「オリジナルフラ」をつくろう。

2 明日のハワイまつりに向けての修正点を話し合う。

(1) 各専門チームのコンセプトや具体的構想をもとに、昨日の発表をふり返って、修正点を分析する。

○ 各専門チームのコンセプトをもとに客観的にふり返し、修正点を明らかにすること

☆ エコをイメージした緑を基調とした衣裳をもっと目立たせたいな。

☆ ワンポイントのアクセサリーを紹介して欲しいな

☆ 1つ1つの手話の意味をはっきり表現したいな。

(2) 各専門チームで話し合った修正点を学級全体で検討する。

○ それぞれの専門チームのコンセプトや具体的構想をもとに、明日の発表におけるオリジナルフラの具体的なイメージをもつこと

音楽・手話チーム

☆ 歌詞の意味が表れるように、手の動きや表情をもっとを柔らかくしよう。

「オリジナルフラ」をより高めるポイント

☆ アナウンスに衣裳の説明を加えて観客に伝えよう。

衣裳チーム

☆ アクセサリーが目立つように踊ろう。

アクセサリーチーム

3 話し合った修正点をもとに、明日のハワイまつりで気を付けることや修正点を話し合い、整理する。

○ 本時の話し合いで明確にしたイメージをもとに、明日の発表への意欲を高めること

☆ 最後のステージを思い出に残るものにしたいな。

準備

教師側：前日発表の際のVTR、参観者へのインタビューVTR

児童側：各専門チームの追究資料

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 昨日の発表をよりよくしたいという内容の発言をしている。
- ◎ 各専門グループで見直すという本時の活動の方向を発言している。

【支援】

- ※ 昨日の発表の全体像をVTRでふり返る場を設定する。
- ※ 昨日の感想を個から学級全体に発表する場を位置付ける。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ チームのコンセプトや具体的構想をもとに修正の方向を発言している。

【支援】

- ※ 前日の発表をVTRで視聴する場を位置付ける。
- ※ 各専門チームの話し合いにGTに入っただき、必要に応じて具体的なアドバイスをいただく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自らの専門チームの修正点について、コンセプトを意識しながら発言している。

- ◎ 他の専門チームの修正点をコンセプトを意識しながら発言している。

【支援】

- ※ 学級全体の話し合いの場に、必要に応じて各専門グループのGTからアドバイスをいただく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 明日の発表への修正点を具体的に持って発言している。

【支援】

- ※ 前日に参観していただいた先生方の感想をVTRで視聴する。
- ※ 明日共演する方々、ハワイまつりの実行委員の方々からのメッセージVTRを視聴させる。

滞在国の童話や民話を調べ、滞在国の文化を交流し合う活動

第3・4・5・6学年3組 国際交流タイム学習指導案

指導者 島川 二郎・高瀬 雄大・緒方 敦子

題材 世界の童話や民話を紹介しよう

指導観

本単元について

本単元は、滞在国と日本の民話や童話について比較し、服装、建物、食事などの文化の違いに気づき紙芝居やペープサートなどを通して自分たちが気付いたことを伝えることをねらいとしている。具体的には、①日本の童話の話の内容を整理することを通して、内容の大まかな違いをとらえること②自分たちの滞在国の童話と日本の童話を結びつけて説明することを通して、滞在国の童話に含まれている思いを発信すること③紙芝居やペープサードを使って、滞在国の童話のよさを紹介することである。

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、3年生から6年生までの学年が集まった20人で構成される帰国子女学級である。滞在国はヨーロッパやアジアなど様々である。日常生活の環境も、滞在国のスタイルで多く時間を過ごしたり、いなかったりと様々である。そのため、滞在国のよさの理解もままならないまま帰国してきていることもある。そこで本の紹介を行い、滞在した国や他国の文化を理解し発信しようとする態度を育成することは意義深いと考える。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、滞在国の民話や童話を調べ、日本の童話との共通点をまとめ、紙芝居や劇などに置き換えて多面的に表現することができるようにしたい。そのためにつかむ段階では、日本の童話について調べ、自分たちの滞在国の童話の発表会に向け、学習計画を立てる。追究する段階では、童話を紹介する文章を日本の童話と結びつけて考え、観点別に整理する。そして表現方法を読み聞かせをしている方などに聞いて把握する。最後につくる段階では、滞在国の童話や民話を自分たちの表現方法で発表していく。

目 標

- 1 滞在国と日本の童話や民話について調べ、日本の童話に含まれている内容と滞在国の童話に含まれている内容の共通点を整理し、紹介する文章を考えることで、自他国の文化を尊重し理解を深めることができる。
- 2 日本や滞在国の童話の中の登場人物の服装や童話に表れている風景の情報を収集し、童話や民話の内容と結びつけて、紙芝居や劇などで紹介することができる。

計 画（約12時間）

階	主 な 学 習 活 動	時 間
つ か む	1 日本や滞在国の童話や民話を調べ、学習課題と計画をつくる。 (1) 日本の童話を調べ、観点を整理する。 ○ 童話を調べ、内容を把握すること ※ 話のあらすじをまとめさせる。	4 ②
	(2) 日本の童話や民話との似ているところを整理する。 ○ 日本の童話や民話の内容に含まれる内容をヒーローもの、ハッピーエンドものそして損得ものに分け整理すること ※ 童話や民話の紹介文を用意する。	②
	2 滞在国の童話や民話の内容と方法について調べる。 (1) 滞在国と日本の話を結びつける。 ○ 3つの観点に沿って滞在国の童話を整理すること ※ 滞在国の本の内容と日本の童話の共通点をとらえさせる。	6 ③ 本 時 3 ／ 3
追 究 す る つ く る	(2) 滞在国の童話や民話の紹介に加える内容を決め、発表の仕方を話し合う。 ○ 発表する内容や方法を定めること ※ 表現方法を工夫させる。	③
	3 滞在国の童話や民話の発表会をする。 ○ 童話や民話の特徴を把握すること ※ 全校のみんなへ発表会をさせる。	2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 滞在国と日本の童話や民話の共通点に気づき、どの仲間に入るか進んで発表することができる。
- 日本の童話の仲間わけに合う滞在国の童話を選び、自分の調べた話の紹介文を書くことができる。

1 日本の童話や民話について想起し、自分が紹介しようとする童話の特徴についての話し合う。

- 日本の代表的な童話や民話について調べたことをもとに特徴を把握すること

☆ 桃太郎、金太郎などはヒーローものだったな。わらしべ長者はハッピーエンドもの、舌切り雀は損得ものだったな。

本時のめあて

滞在国の童話や民話に合う紹介文を、日本の話と結びつけてつくろう。

2 各グループが調べた童話を出し合い、それぞれの話の内容や登場人物の様子や結末で整理する。

- (1) それぞれが調べたことをもとに、各国の童話や民話を出し合いその話の特徴について話し合う。

- 滞在国の童話を、ヒーローもの、ハッピーエンドもの、損得もののどの仲間に入るか把握すること

☆ 私たちが調べて発表しようと思っている「シンデレラは最後には幸せな生活を送るようになるので、ハッピーエンド型の物語だと思います。日本の物語では、わらしべ長者の仲間になります。

「伝えよう私たちがいた国の童話や民話」で取り上げる情報

日本：鶴の恩返し、泣いた赤鬼、桃太郎、金太郎、かぐや姫 など
フランス：青い鳥、ろば物語、バラ色の雲、シンデレラ など
アメリカ：頭のいいコヨーテ、綿の花と妖精、クリスマスの鐘など
中国：賢い大臣、猫とヒョウ、岩じいさん、笛吹き岩 など

- (2) 各グループがまとめたものを紹介し合い意見を出し合う。

- どのグループの童話や民話の中にも共通する内容があることとらえること

☆ 登場人物はの様子や最後の結末などでまともてみるとどの国の話も同じような仲間になっていくんだな。中国だったらヒーロー型のものには、「賢い大臣」ハッピーエンド型のものには「岩じいさん」そして損得ものの中には「猫とヒョウ」が入るんだな。

3 自分たちの童話の民話の紹介文を付加修正を行う。

- 紹介内容の改善点をとらえること

☆ 僕が調べた童話「青い鳥」は、幸せを求めて旅する話だった。最後には幸せになるという話なので、わらしべ長者と同じような話になる。わらしべ長者の紹介を入れて紹介するようにしよう。

準備

教師側：学習ノート、世界地図、滞在国流れ図

児童側：発表資料、滞在国の童話や民話

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 滞在国の特徴を伝えるためには、民話や童話に描かれている内容が、日本のものと同じようなところがあることに気付いている。

【支援】

- ※ 日本の童話の仲間わけをしたものを掲示しておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 滞在国の童話を紹介するという見通しをもっている。

【支援】

- ※ 滞在国の童話を複数読むことができるようにしておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 童話について調べてきた資料を使いながらわかりやすく説明している。

【支援】

- ※ 各自が調べた内容について資料集にまとめ、事前に日本との共通点や差異点として確かめることができるようにしておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 友だちの発表から自分の国との共通点や差異点、意見や疑問を発言している。

【支援】

- ※ 話の内容を作文用紙1枚程度にまとめておくようにし、どの仲間に入るかを検討することがしやすくしておく。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 見直す点を学習プリントに書いたり、発言したりしている。

【支援】

- ※ 友だちの話や流れ図にまとめられているものをもとに自分が紹介しようとしている話がどの仲間にあてはまるものになっていることをとらえることができるようにする。

レストランごっこの活動を通して、具体物を繰り返し数え、計数の仕方を身に付ける学習

第1・2学年ふじ組 算数科学習指導案

指導者 弘 松 英 樹

題 材 かぞえて つくろう ふじぐみレストラン

指導観

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、1年生3名、2年生3名の計6名で構成されている。これまでの学習で、具体物を見分けたり、数えたりする経験をしてきている。数を数えることに対する実態は(AG)5程度までの数を1ずつでとらえる段階の子ども、(BG)10程度までの数を1ずつで数える段階の子ども、(CG)10以上の数を数える段階と幅広い実態の子どもがいる。また、視覚的な情報を手がかりに手順を追って活動することが得意な子どもや、人とかかわりを通して、旺盛に活動できる子どもなど違いがある。

本題材について

本題材は、レストランごっこを行い、お客さんの注文に合うように、メニューの食べ物を整えることを通して、数の数え方をとらえることをねらいとしている。具体的には、①レストランごっこを楽しみながら、数を数えることに意欲的に取り組むこと、②絵図やドット図、数字の情報に応じて計数の仕方をとらえること、③数を正しく数え、注文通りのメニューをそろえられたことに自信をもつことなどである。こうした学習は、生活と関連させた遊びの活動の中で、人とかかわりながら算数の力を発揮し、具体的な操作による数え方の技能を定着させる上で価値がある。

本題材の指導について

本題材の指導にあたっては、個別の計数の実態に応じて、数字などの情報を具体物に置き換えて数える力を身に付けさせたい。「つくる」段階では、レストランの場に出合わせ、注文に合わせて数える試しの活動を行う。「みにつける」段階では、絵図から数図、数字へと抽象的な情報を手がかりに数を数える活動を行う。「たかめる」段階では、ふじ組レストランを開き、保護者を招待して、学習の有用感を味わわせ、数え方に自信をもたせる。

目 標

- 1 数を注文と合うように数えながら、レストランごっこの活動を意欲的に行うことができる。
- 2 注文に合わせ数を数える活動を通して(AG)6までの具体物の数をとらえること、(BG)2数を合わせて10までの数をとらえること、(CG)10以上のまとめる数え方をとらえることができる。

計 画 (約7時間)

階	主 な 学 習 活 動	単
つ く る	1 レストランの場で、お客さんの注文に合わせて数を数え、食べ物をそろえる。 ○ 注文カードの数と同じだけ、食べ物を数えてそろえることをとらえること ※ 絵図、数図、数字などの情報を実態に応じて変えた注文カードの準備	1
	2 レストランごっこをし、数を数えて注文の食べ物をそろえる。 (1) 絵図や数図の注文カードを見て食べ物をそろえる。 ○ (AG)5までの数をとらえること (BG)合わせて10未満の数をとらえること (CG)10までの数で2ずつのまとめる数え方をとらえること ※ 食べ物の種類と数を構造化した提示 (2) 数字で表された注文カードを見て食べ物をそろえる。 ○ (AG)6の数え方をとらえること (BG)合わせて10になる数の組み合わせをとらえること (CG)2ずつや5ずつなどのまとめる数え方をとらえること ※ 組み合わせやまとめるメニューの設定	4
み に つ け る		②
		② 本 時 1 ／ 2
た か め る	3 保護者を招待して、ふじぐみレストランを開く。 ○ お客さんの注文に合わせて、数え方を工夫すること ※ 保護者からの賞賛や評価	2

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- お客さんの注文と数が合うように数えながら、レストランごっこの活動を意欲的に行うことができる。
- 数を数えたり、対応させたりする活動を通して、(AG) 6 の数え方をとらえること、(BG) 2 数を組み合わせて 10 になる数をとらえること、(CG) 2 ずつや 5 ずつなどで、まとめる数え方をとらえることができる。

1 お家の人を招待したときに、「ふじぐみレストラン」を上手にできるよう、レストランの仕方を発表する。

○ お家の人から注文を受けて、数を数えることがわかること

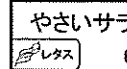
☆ 家族のみんなの注文カードがあるんだ。カードをよく見て、まちがえないように数えよう。

本時のめあて

たべものの かずを かぞえて おりようりを つくろう。

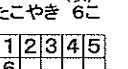
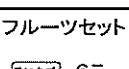
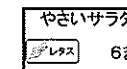
2 家族一人一人の注文カードを見て、食べ物をそろえる。

(1) お客さんの注文に合わせて、数え方を工夫してメニューを作る。

(AG)	(BG)	(CG)
○ 6 までの数をとらえること たこやき 6こ 	○ 合わせて10になる数をとらえること フルーツセット  いちご オレンジ	○ 2 ずつまとめる数え方をとらえること やさいサラダ  レタス 6まい ミニトマト 8こ

☆ たこやきが、5 ことあと 1 こいれたら、6 こだよ。

(2) 数字の注文カードを見て、数えて食べ物をそろえる。

(AG)	(BG)	(CG)
○ 数字を見て6の数をとらえること たこやき 6こ 	○ 数字を見て、組み合わせて10になる数をとらえること フルーツセット  いちご 6こ オレンジ 4こ	○ 2 ずつや 5 ずつのまとめる数え方をとらえること やさいサラダ  レタス 6まい ミニトマト 15こ

☆ レタスを 2, 4, 6 枚、ミニトマトは 5, 10, 15 個って数えると、野菜サラダが簡単にできたよ。

3 レストランで、がんばったことやわかったことを発表する。

○ 数を正しく数え、メニューが作れたことに自信をもつこと

☆ 数をきちんと数えてレストランが上手にできたよ。

準備

教師側：ふじ組レストランの場合

グループごとの注文カード

(AG) 数字を書いた数え箱

(BG) 組み合わせて10になる数え箱

(CG) まとめて数えて入れる器

各メニューに応じた食材の模型

＜各活動の子どもの見取りと支援＞

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 家族からのビデオで、本時ではふじぐみレストランをする練習をすることがわかった発言をしている。

【支援】

- ※ 保護者からのビデオと、家族一人一人からの注文カードが用意されたカード掲示ボードの提示

【子どもの見取りの観点】

- ◎ カードの情報を手がかりに数を正しく対応させたり、数えたりすることができている。

【支援】

- ※ (AG) 数を数えながら、入れられる数字の書いた数え箱
(BG) 2つの食べ物を組み合わせて10になる数え箱
(CG) 単位数ずつ1まとめになった食べ物の準備

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 同じ数のメニューを注文通り何人分が作って、配ることができている。

【支援】

- ※ それぞれのグループで、注文カードの情報を徐々に減らしていくとともに同じ数のメニューを繰り返し、作ることで数にかかわる活動の設定
(AG) 絵図の代わりに枠の中に数字を書いた注文カード
(BG) 数図の代わりに食材の数字を書いた注文カード
(CG) メニューをまとまりがいくつあるのかで示した注文カード

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 自分の作ったものが数と合っているか確かめることができている。

【支援】

- ※ 評価機能としての確かめ箱の準備

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ふじ組レストランをしてみても、がんばったことやわかったことを発言している。

【支援】

- ※ 数え方の有用感を感じさせるための操作を実演する評価

相手の位置に応じてボールをパスしたりシュートしたりする動きをつくりだす学習

第5・6学年梅組 体育科学習指導案

指導者 堀 亮 輔

単 元 つなごう! ころがしラケットボール

指 導 観

本学級の子どもたちについて

本学級の子どもたちは、5年生3名、6年生2名の計5名である。これまでのボールゲームの学習では、ゲームを楽しんで行っているものの、まだボールを正確にとる、ボールが飛んでくる位置を判断して動くなどの技能の習得が十分ではない。また、道具を用いてのゲームはまだ体験していない。そこで、友達とかかわり、場の変化や相手チームから返ってきたボールの状況を判断して動くようなゲームの場を仕組んでいくことにする。

本単元について

本単元の「ころがしラケットボール」は、プレーする位置を固定した攻守混合型ゲームである。具体的には、コートの中をグリッドで区切り、それぞれのプレーゾーンを決め、柄の短いラケットでやわらかく大きなボールを打ち、パスしたりゴールにシュートしたりする。本単元のねらいは、繰り返しゲームを行うことを通して、友達と一緒にころがしラケットボールを楽しむことができることや、場の変化や人の位置、動きによって自分で判断しながらボールを味方にパスしたりシュートしたりする動きをつくりだすことである。

本単元の指導について

本単元の指導にあたっては、プレーする場所をグリッドで決めることで、味方につながるようにボールをパスしたりシュートしたりする動きをつくりだすことができるようにする。そのために、やってみる段階ではころがしラケットボールに出合わせ、試しのゲームにより活動の手順やきまりを理解させ、動きを体験させる。つかむ段階ではパスを受けやすくするもののあるゲームの場に変化させ、味方の位置をとらえて、パスやシュートの動きを引き出していく。ひろげる段階では、ゲーム大会の場で身に付けた動きを発揮させ満足感をもたせる。

目 標

- 1 活動の手順やきまりを理解し、お互いのがんばりや動きのよさを認め合い、友達とかかわりを広げながらゲームを楽しむことができる。
- 2 グリッドのある場で、ゲームをしながらボールを相手の動きに応じてパスしたり空いている場所をねらってシュートしたりすることができる。

計 画 (約8時間)

階	主 な 学 習 活 動	単 元
や っ て み る	1 試しのゲームを行い、ゲームの手順や方法、勝ち負けの決まりや役割を知る。 ○ ゲームの決まりや手順を理解し、パスやシュートの動きを体験すること ※ 試しのゲームで動作補助やモデル演示によって手順や動き方をつかませる。	2
つ	2 変化する場でのゲームを楽しむ。 (1) ラケットでの的当てゲームを楽しむ。 ○ ねらった方向へのボールの打ち方をつかむこと ※ ラケットの持ち方、打ち方を動作補助やモデル演示でつかませる。	5 ①
か	(2) 相手がいらない場でのゲームを楽しむ。 ○ パスをつなぎシュートする動きをつかむこと ※ 空いている場所や打つ方向を知らせる声かけをする。	①
む	(3) 相手チームとのゲームを楽しむ。 ○ 相手やゴールの位置を見ながらボールを打つ動きをつかむこと ※ 相手や味方の位置やタイミングを知らせる声かけをする。	③ 本 時 2 / 3
ひ ろ げ る	3 つくった動きを活かして大会をする。 ○ 身に付けた動きを大会で出し合うこと ※ これまでの動きを想起させるような声かけやモデル提示をする。	1

本時の学習活動の展開

本時授業の目標

- 友だちとかかわりながら、ボールを受ける、パスする、相手がいない方向にシュートするなどの動きをつくりだすことができる。
- (AG) : ゴールを目標として意識しながら、相手がいない方のゴールにパスやシュートをすることができる。
- (BG) : 味方の位置を見て、ボールを打つ方向やタイミングを判断しながらパスやシュートをすることができる。

1 新たな場での試しの「ころがしラケットボール」を行い、これまでのゲームとの動き方の違いについて話し合う。

○ ゲームを通して、これまでの動き方との違いに気付くこと

☆ 新しいコートではゴールが2つあって相手が目の前にいるけど、得点をたくさん取れるように動くぞ。

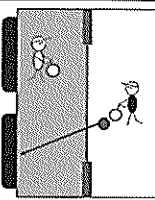
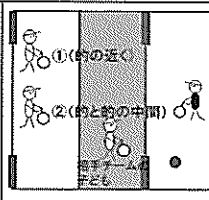
本時のめあて

ゴールが2つで あいてが めのまえにいる コートで パスやシュートをして ころがしラケットボールを たのしもう。

2 友達とかかわりながらボールを受けたり、シュートしたりして、「ころがしラケットボール」をする。

(1) シュートをする動きをつくりだす「ミニゲームⅠ」、パスをする動きをつくりだす「ミニゲームⅡ」をする。

○ 相手の位置に応じてどこにボールを打つのか判断すること

 ミニゲームⅠ 1対1で教師が対戦相手となり空いている方のゴールをねらうゲーム	 ミニゲームⅡ AGは①に BGは②に教師が入りパスをするゲーム
Aグループ ○ 教師の声かけや動作補助によって、素早く動く位置を判断して打つこと	Bグループ ○ 友達同士での声かけや教師のモデル演示で、動く位置を判断して打つこと

☆ 相手のいないところやあいているところをねらって打とう。

(2) ミニゲームⅠ、Ⅱで身に付けた動きを、本時のゲームの場で試す。

○ 相手の動きをよく見て、方向を決めて素早くパスしたりシュートしたりする動きを発揮すること

☆ これまでにできるようになった動き方を使うぞ。

3 得点の成果とゲームの中で動きをつくりだしたことを話し合う。

○ たくさん得点できたことや、パスする動きやシュートする動きが変わったことをとらえて達成感を味わうこと

☆ ゴールが2つあって相手が目の前にいても、うまくパスやシュートをして、たくさん得点することができたぞ。

準備

教師側：得点板、ボール、手順表、
場を表した図、対戦表、
ストップウォッチ、ビブス、
ラケット

<各活動の子どもの見取りと支援>

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 場の変化をつかみ、「ゴールが2つになっている」「たくさん点が入りそう」などと発表している
- ◎ これまでのゲームと本時の場での試しのゲームでの動き方の違いを発表している。

【支援】

- ※ 前時のゲームの様子を示したコート図や写真を提示し、本時の場との違いを考えさせ、たくさん点を取るための動き方を考えさせたうえでゲームをする。
- ※ ゲーム中にプレイを止めて、動作補助やモデル演示をしながら動きを伝える。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ 相手の位置に応じて打つ方向を判断し、素早く動くことができる。
- (AG) : 教師の動作補助やモデル演示によりすばやく打つ方向を判断して打っている。
- (BG) : 教師や友達同士での声かけによって、打つ位置を判断して打っている。

【支援】

- ※ ミニゲームⅠでは、AGには片方のゴール前で教師の立ち位置を固定し、BGには2つのゴール前を動く。
- ※ ミニゲームⅡでは、AGには的の近くに立ちパスでねらえる範囲を広くし、BGには的の的中間に立つ。

【子どもの見取りの観点】

- ◎ ボールや相手の位置に応じて自分の動きやボールのつなげ方を判断し、ゲームを続けていくことができる。
- (AG) : 教師に促されながら素早く動いている。
- (BG) : 教師や友達のモデルの動きを見ながら素早く動いている。

【支援】

- ※ AGについては、教師の促しや声かけ、BGについては、教師や友達の動きに注目させての声かけを行う。
- ※ ミニゲームⅠ、Ⅱに比べて短い声かけでの支援を中心にし、ゲーム中にプレイを止める回数も必要最低限とする。

テーマ別協議会

シンポジウム

テーマ

「福岡の教育ビジョンに ついて語る」

ーこれからの福岡の教育力向上について

様々な角度から考えるー

○シンポジスト

福岡教育大学 名誉教授 横山正幸先生

福岡県教育庁福岡教育事務所 所長 家宇治正幸先生

国立夜須高原青少年自然の家 所長 宮野哲美先生

附属福岡小学校 研究副主任 平川洋一

○司会

附属福岡小学校 研究主任 田中健悟

研究紀要の部

■ 研究紀要 目次

◎ 研究主題構想 94

・豊かな学びを育む学習の創造

— 知のネットワーク化を図る活用・探究の授業づくり —

国語科学習の構想	114
・ 言語技能を駆使して考えを練り上げる国語科学習	
社会科学習の構想	118
・ 社会形成者として判断する社会科学習	
算数科学習の構想	122
・ 筋道立てて数理を創造する算数科学習	
理科学習の構想	129
・ 科学的な思考を活かす理科学習	
音楽科学習の構想	136
・ 価値ある音楽表現をつくりだす音楽科学習	
図画工作科学習の構想	140
・ 豊かな発想とともに表現を創り出す図画工作科学習	
家庭科学習の構想	142
・ 家庭生活とのかかわりを深めながら生活をつくりだす家庭科学習	
体育科学習の構想	144
・ 価値ある動きを創る体育科学習	
生活科学習の構想	148
・ かかわりのよさに気付く生活科学習	
特別活動の構想	150
・ 集団とのかかわりを深めながら生活づくりに参画する学級活動	
道徳学習の構想	154
・ 道徳的価値の大切さを実感する道徳学習	
総合的な学習の時間の構想	158
・ 実社会・実生活と主体的にかかわる総合的な学習の時間	
外国語活動の構想	166
・ 進んで自分の意思を伝え合う英語活動	

◎ 特別支援教育部主題構想 170

・共生社会を豊かに生きる子どもを育てる学習の創造

— 「活用できる環境」を具体化する授業づくり —

国語科学習の構想	172
・ ことばを通してかかわりを広げる国語科学習	
算数科学習の構想	176
・ 数量や図形に豊かにかわる算数科学習	

◎ 帰国子女教育部主題構想 180

・国際社会に生きる基礎を培う帰国子女教育

— 滞在国の体験を生かした授業づくり —

国際交流タイムの構想	182
・ 滞在国の生活経験の価値をとらえる国際交流タイム	

豊かな学びを育む学習の創造

— 知のネットワーク化を図る活用・探究の授業づくり —

3年間の研究内容について

1 豊かな学びを育むとは

「豊かな学びを育む」とは、子どもが学ぶ意義をとらえ、学ぶ意欲を高めながら、知識や技能を身に付けるとともに、それらの知識や技能を選択したり組み合わせたりしながら他者と共に問題を解決していくことを通して、実生活・実社会に実際に働きかけていく「実践力」や、これから出会うであろう実生活・実社会の複雑な問題状況に対応していける素地となる「応用力」を高めていくことである。

子どもたちの現状を見てみると、学習面においては、「できるけれども、好きではない」「自分は人の役に立っていない」などの自尊感情の低下が問題視されている。

学ぶ意欲の低下は、「学ぶことが、自己を伸ばし高めることになる」といった『自分にとっての学ぶことの意味・価値（成長欲）』が希薄になっていることが原因である。この『学ぶことの意味・価値』には、有能感、達成感、自信、自己の可能性、集団の中での自分の存在感や役割意識などの要素があり、自尊感情を高める要因とも密接に関係している。現代社会においては、集団や家庭や地域とのかかわりが希薄化し、それらの中での自分の存在感、役割などが不明確になってきている。

そこで、子どもが教科・領域等の学習において、知識・技能等を習得し、個人の内部に蓄えておくだけではなく、それらの知識・技能等を自分の身の回りの集団や家庭、地域といった外部に出力し、社会で生きていく上での力として活用できるようにすることを考えなければならない。つまり基礎・基本としての知識や技能を身に付けるだけでなく、それらを活用しながら追究していく学習が求められる。それは、教科の基礎・基本を明確にし身に付ける習得の学習と、知識や技能を活用し社会生活と一元化する活用の学習、あるいは総合的な学習では探究の学習を構想することで実現すると考える。

そして、学校の授業においては、個別に学習する場面だけでなく友達と一緒に学び合う場面も重視し、コミュニケーションを図りながら思考力・判断力・表現力を高めていく学習の構想が必要であり、豊かな学びにつないでいかなければならない。

2 豊かな学びに必要な資質や能力は

▼ 学ぶ意欲を高める「自分が学ぶ意味・価値をとらえる力」

子どもの学ぼうとする力（学習に対する関心、意欲、態度等）は、①学習に対する知的好奇心、②学習のやる気・展望（目標設定力・達成感等）、③学ぼうとする姿勢・態度（自己管理能力）のことである。このことを各教科等において分析し、学習活動に具現化していく必要がある。そのためには、子ども自身が学んでいることに対する目的意識を明確にもつことや、学んだことが生活に活かされる、あるいは、つながっているという実感をもつことができる学習を構想することが大切である。

▼ よりよく生きるための「願いや求めの実現や問題の解決に活用できる力」

学ぶ力を、実体的学力と機能的学力の2つの学力で整理する。この学力は、両方とも文部科学省の「確かな学力」として提唱されているものであり、実体的学力は、教科学習で身に付くことが多く、学習の結果得られる力であり、読み書き能力、計算力、語学力、情報処理能力、時事的な知識等が含まれる。機能的学力は、領域や横断的・総合的な学習で高めることができ、学習を通して得られる力であり、情報収集力、問題発見力、問題分析力、問題解決力、コミュニケーション力などが含まれる。2つの学力を整理するものの実体的学力、機能的学力は不可分であり、学力の2側面としてとらえ、教科・総合の学習で調和的に身に付けていくものとする。

▼ 「自分のよさをとらえる力＝自信」

一人で問題や課題を追究して終わるのでは、豊かな学びとはいえない。必要なのは、社会の中で他者との互恵的なかかわりができ、自分の立場や役割を自覚するとともに、自分自身を、自己内からの側面と客観的な側面からの両面で評価できるようにすることである。そして、自分の導き出した「応え」が他者に認められ、社会に活かしていける可能性や実感をもつことができる学習体験・経験を積むことも必要である。そして、自分に対する自信は、他者との学びの中でさらに高められていく。つまり、自己を育てる学びは、他者との関係で成立するものである。

3 豊かな学びを育む具体的方途は

▼ 研究1年次の主張点は

「学びの体験を活かす3つの統合」

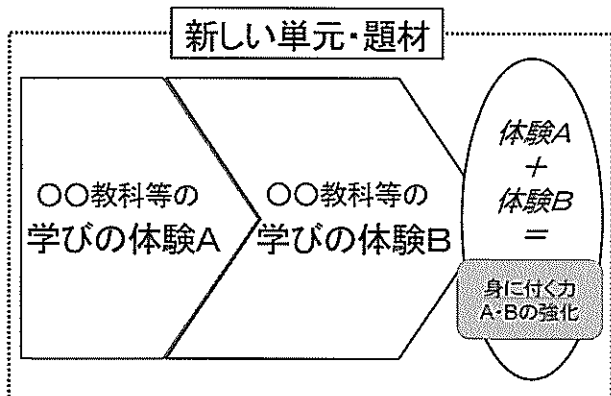
今、自分が行っている学習（部分）が、生活の中でどのように活かされているか、また、社会（職業）、人間とのかかわりに対してどのようなつながりがあるのかを子どもが意識できる状況下（学習の場）で、子どもの学習に対する必要感を高め、学習と自分との「関係性」を明らかにする学びの過程をつくることである。つまり、学習材と自分との関係性を大切に教材化が重要である。さらに、学習材は、子どもの必要感を重視するため、指導者側から見た学習内容の範囲にとどまらず、これまでに学んだ知識や技能、学び方などが、単元や領域、教科の枠を越えて活用されるような単元・題材の構成が求められてくる。

子どもの学びの体験を「統合」して授業をつくるとは、現実社会や自分の生活を学習対象とした問題場面で子どもたちが身に付けた力を活かせるよう、学びの体験をつないだり、くわえたり、まとめたりして単元・題材をつくることである。

従来、教科等で区切られた体験を意図的・計画的に統合し、授業づくりをする。そのために、単元・題材づくりをカリキュラム全体から見渡して考え、学びの体験の統合の視点から研究を進めていった。その結果として、学びの体験を活かす、次の3つの統合の在り方が明らかになった。

○【系統】「自己のもつ知識・技能を駆使しながら、新たな課題に挑戦していく追究」

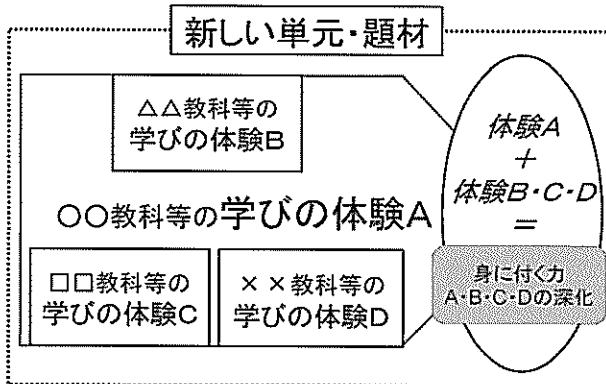
系統による学びの体験の統合



1つめは、異なる学びの体験を系統的につなぐ方法である。たとえば、子どもが新たな体験を行うとき、以前に行った体験の知を活かしたり、子どもが行った体験を、他の体験の知で意味付けたりすることで、現在行っている学びの体験の意義や身に付く力が強化される。そのために、子どもがもっている知識・技能を活かしながら、新たな課題に挑戦できるように学びの体験をつなぐ単元・題材をつくる。

○【補完】「自己追究を進め、他教科等の知識・技能を加味しながら、根拠をより強化していく追究」

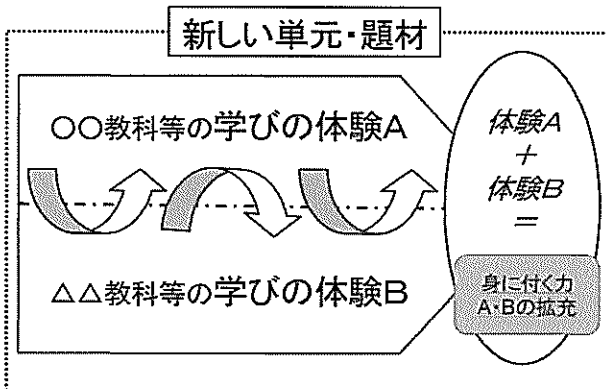
補完による学びの体験の統合



2つめは、学びの体験に他の学びの体験を補完的に加える方法である。たとえば、日常生活における課題は、いろいろな学びの知を合わせた形で応えを求めてくる。何かを計算するときにも、算数の力以外にデータをよむための社会科の資料をよむ力や、妥当性を判断するための自然科学の見方・考え方など、さまざまな力を合わせて解決しなければならないことが多いことに気付く。そのために、学習を進めるなかで得た知識・技能では足りない部分に他の学びの体験で得た知識・技能を補うことで、自分の考えがより深まるように単元・題材をつくる。

○【関連】「共通の学習目標のもと、教科や領域学習の知識・技能が相互に発揮されながら進む追究」

関連による学びの体験の統合



3つめは、2つ以上の学びの体験が関連的に高まるようにまとめる方法である。たとえば、目標が近い学びの体験が別々に行われることで、より充実するときにまとめて行っていく。2つ以上の豊かな体験を繰り返しながら、子どもたちはより豊かな力を身に付けることができるのである。そのために、共通の学習目標のもと、複数の学びの体験が相互に行われながら、力が身に付き発揮されるような単元・題材をつくる。

これら3つの学習内容の統合のさせ方の可能性を考えてきたことと、学習場面の設定、自己追究やその手だてを明らかにしてきたことが研究の主張である。

▼ 研究2年次の主張点は

「子どもの『問い』を深化・拡充させる」

研究1年次の「学びの体験を統合する、関連・系統・補完による授業づくり」を基盤としながらも、実生活や学習に活用できる状況をつくりだすことで、子ども自ら学び自ら考える学習を進めることができるようにした。そして、必要感をもち主体的に問題を解決していく力を身に付けていくために、「子ども自ら問いを創り出し深めたり、広げたりしていく授業づくり」を行っていく。

研究1年次まで、その目的は、学びによって獲得することができる様々な知識や技能を統合することで、新たな知識を創造し活用できるようにしていくことであった。ここでの知識は、子ども一人一人が身に付けた自分の「生活者として生きるための知識」、「文化の担い手として生きるための知識」、「人間として生きるための知識」のことである。

これら3つの学習内容の統合のさせ方の可能性を考えていくことと、学習場面の設定、自己追究やその手だて明らかにしていくことで、子どもの学ぶ意味と関係性を生み出し、学ぶ意欲の向上を図ってきた。そして、つくり出した単元・題材の調和的展開を通して本校のカリキュラムの構想づくりにつないできた。

研究2年次は、子どもが「問題解決力」を身に付けていくことができるように、「子どもの問いを深化・拡充させる」授業づくりを主張していった。

○ 子どもの「問い」を深化・拡充させる

ここでいう「問い」とは、「応え」が決められた数だけ存在するようなものではなく、子どもたち一人一人に対応して生まれてくる、子どもたちにとって切実な問題をいう。そのような「問い」を生み出すためには、教師または他から与えられた課題や問題に対して、子ども一人一人が、疑問やジレンマ、思いや願いをもち、主体的な学びを進めながらも、一人一人の子どもの生活実感に根ざした疑問やこだわりを大切に、それぞれの思いやこだわりを活かした学習課題から出発することが大切となってくる。この「課題」や「こだわり」を子ども自身がつかむことで、主体的な学びが展開できるのである。子ども自らの感覚や意欲、知識、能力、行動力等すべての力をそこに結集して、学習のねらいや対象の価値に自らの力で迫っていくことができるとともに、そこで感じ取ったことや考えたことを、自らの言葉で表現するというように、個々の内面に創出される「問い」から、個性的・意欲的な活動が展開される。

どんな素晴らしい知識も「問うことで引き出される」ということがなければ、顕在化することはない。他者に問う、他者から問われたことを問い返す、問い合うという視点では過去の研究の「協働」が生きていく。既習の知識が使えないか、どのように使うと目的が達成でき

るかという問いでは、昨年度の「学びの体験の統合」の研究が生きてくる。そこで、次のカリキュラムではこれまでの「協働」と「統合」での研究を活かした研究を基盤に、その授業の中味を具体的に追究していく研究を進めていくようにする。

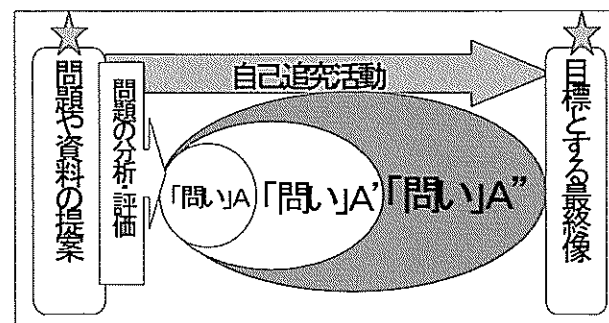
○ 子どもの「問い」を深化・拡充させる授業とは

子どもの「問い」は、教師が一方的に与えるものではない。もちろん、そのきっかけづくりは教師の資料や問題等の提示が大切である。その提示や提案について子ども自身が吟味し(分析・評価)、子どもたち一人一人が、自らの「問い」を創り出していくことを大切にしていく。

図1～3は、その「問い」を深化・拡充させながら展開する学習過程である。この学習過程で大切なことは、☆印がついている単元・題材のスタートとゴールである。これを教師だけでなく、子ども自身も明確にしていけないと、子どもの「問い」は生まれないし、「学び」も成立しない。特にスタートにおいては、ただ教師が提案する問題に出合わせるのではなく、その出合った問題について、子ども自ら分析し、「何がわかっていて(できていて)、何がわからないのか(できていないのか)」「何を一番明らかにしたいと思うのか」というような問題に対する自己評価が大切である。そのためには、子ども自身が、それまでの自分の学びをふり返り、自分自身を客観的に見ることができるようにしておかないといけない。それができてはじめて、子ども自ら、自分にとって切実な「問い」を創り出すことになるのである。その点を大切にしながら、以下の3つの授業づくりのパターンで学習過程を構想していくようにする。

① 「問い」を深化させる授業づくり

1つめは、子どもの「問い」を深化させていくパターンである。「問い」の質を高めていくことで、1つのことがもっとよくわかる、もっとよく表せるというように、自分の考えや表現を練り上げていくように、学習過程を構想していく。



【図1 「問い」が深化していく授業】

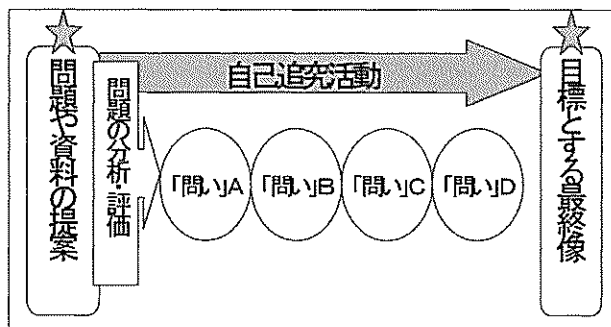
図1は、「問い」が深化していく学習過程のパターンである。単元(題材)の導入段階において創出された子どもの「問いA」は、追究活動が展開されるにしたがい、「問い」を生み出す対象は変わらなくても、その「問

い」自体が質的に高まっていくように、教材化や学習活動、あるいは支援を構想していくものである。この質は教科等の認識過程や問題解決のプロセスによって変わるものである。

子どもは、対象との出会いから、明らかにしたいこと、創りたいもののイメージ(目標や目的)をもつことで、「何をどのように解決するか、表現するか問う」ことから、問題となっている事物・事象そのものについて比較的追究から「問いA」が創出される。さらに「自分の考えをまとめたり、作品を創造・表現しながら問う」ことから、問題の対象とそれを取り巻く事物・事象との関係から生まれる「問い」、「自分の考えや創作・表現した作品を問う」「自分の応えあるいは鑑賞、表現そのものの価値と意味を問う」といった、表現したものや導き出した考えなどの価値に関する「問い」というように、同じ「問いA」が、子どもの追究活動における段階に応じて、質的に高まりながら変容していくのである。これにより、繰り返しこれまでに身に付けた知識や技能を活用しながら、問題解決していくことで、それらの習得が強化されるとともに、主体的な学びが展開される。

② 「問い」を拡充させる授業づくり

2つめに、子どもの「問い」を拡充させていくパターンである。「問い」の量を増やしていくことで、「いろいろなことがわかる。」、また「多面的にわかる。」というように、様々な問題を解決しながら目的の達成をしていく学習過程を構想していく。



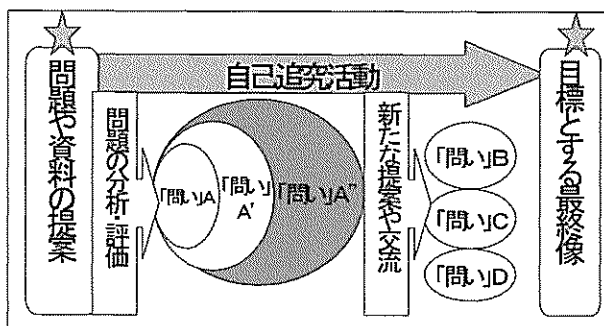
【図2 「問い」が拡充していく授業】

その具体的な型として、図2が、「問い」を拡充させる学習過程のパターンである。単元(題材)の導入段階において創出された子どもの「問いA」から、追究活動が展開されるに従って、「問いA」とは質的に違う「問いB、C」等が量的に高まっていくように教材化や、学習活動、あるいは支援を構想していく。例えば、単元の導入場面で目的達成や課題解決のために、最初いくつかの「問い」が生み出される場合や、他との交流や試しの活動、あるいは明らかになった考えや、新たに出合った対象、新たにつかんだ情報から、追究活動が進むに従って多様な「問い」が生み出される場合がある。いくつかの「問い」を、個人であるいは協働で解決し、目的を達

成していく活動のなかで、子どもの「問い」は量的に高まっていく。

③ 問いの深化・拡充の複合型の授業づくり

3つめは、子どもの「問い」を深化・拡充させる複合パターンである。例えば、プロジェクト的な学習では、課題を達成していく際に、「問い」の質を深め、表現や考えを練り上げていくとともに、目的達成のために、「問い」の量が増えていく。これは、単元・題材の導入段階において、創り出された子どもの「問いA」から、追究活動が展開されるに従って、問題の対象が変化し、「問いA」とは違う「問いBやC」などが創出され、量的に高まっていくように、教材化や、学習活動あるいは支援を構想していく。



【図3 「問い」が深化・拡充していく授業】

以上のように、子どもの「問い」を深化・拡充させることで、子どもたちは学んで得た知識や技能、あるいは考え方を、実生活に即した問題場面で使いこなしながら、自ら主体的に解決方法を探究していくことができるのである。「自分が学んだことが、他の学習やくらしの中で活かすことができた。」という実感は「このことを学んでいきたい。」という、次の学びの必要感(学びの意欲)を生み出すことにつながる。さらに、学習材と自分の関係を考えることで、実社会や現実のくらしの文脈に沿った問題解決に活用していく力を身に付けていくことができるのである。

研究1年次と研究2年次では、どちらかという個人内での学びに重点を置いた研究を進めてきた。そこでは、研究の成果として、実生活や実社会を想定した学習材に対する学ぶ意欲、子どもが問いを深めたり・広げたりしながら粘り強く学習を進める問題解決力を身に付けさせることができた。しかし、学びは、個人内で閉じておくものではなく、他者と交流し合うことで、さらに質を高めることができ、「転移性・応用性」の高いものへと変化していくことは、これまでの教育研究の中で明らかにされてきている。そこで、研究3年次においては、個人内で高めた「知」を、他者と交流する中で、アウトプットしていく状況をつくり、表現力とともに、「転移性・応用性」の高い「知」へと高めていくことをねらう。

4 知のネットワーク化を図る活用・探究の授業づくり（本年度の副主題）

▼ 研究3年次の主張点は

「知のネットワーク化を図る授業づくり」

今、子どもたちの実態を見たとき、OECDやPISA調査から浮き彫りになっている「読解力」が十分に備わっていないという問題の早期解決、そして、試験に強い学力（知識・技能）だけでなく、学ぶ意欲や、知的好奇心、自分から疑問を感じて考える力、コミュニケーション能力等を含めて生きていくための「学力」を身に付けることが求められている。また、幼稚園～小学校、小学校～中学校への義務教育の中で起こる教育的なギャップも問題を投げかけている。

新学習指導要領では、「表現力」「伝え合う力」「知的好奇心」等の育成が一層、求められている。また、義務教育の目標である「人格の形成」も具体的には「知的に生きていくための知的バランスが取れた人間を育てること」をゴールとし、その方法論を生み出さなければならないのである。そのためには、単なる知識を量的に備えた子どもを育てるのではなく、身に付けた知識を他者と共に質的に高め、組み合わせたり、使いこなしたりして、社会生活に活かしていくことまでができる子どもを育てることを、考えていかなければならない。

▼ 「知」とは

「知」とは、知識・技能のみを意味するのではなく、それを獲得し活用する知的能力も含むものであり、本校では、「知」を次の2つの視点で分類している。

① 知識・技能としての「知」

学習対象とかかわる学びを展開する中で獲得される知識・技能のことである。さらに、ここでいう知識は、宣言的知識と、手続き的知識の2つがある。前者の宣言的知識は、言語で記述して表したり人に伝えたりすることが容易な知識である。例えば、科学の概念や法則、芸術の価値などである。一方、後者の手続き的知識は、宣言的知識を獲得する経験や活用する経験を通して身に付けられていくものの見方や考え方などである。

② 知的能力としての「知」

知的能力としての知は、知識や技能を獲得していくための思考や判断といった能力（インプットの知的能力）と、獲得した知識や技能を状況に合わせて使いこなそうとする能力（アウトプットの能力）とに大別される。

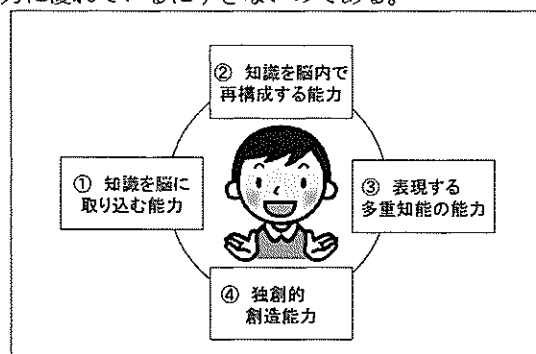
新学習指導要領でキーワードとなっているものの一つに、「習得」と「活用」がある。これまでの授業では、インプットの知的能力を使う「習得」に重きがおかれていた。しかし、今求められているこれからの授業では、アウトプットの能力を使う「活用」も大切にし、バランスのよい知的能力を育てていくことが必要であると叫ばれている。

▼ これから必要とされる知的能力は

現代社会に対応できる資質や能力として、①記憶する能力（知識を脳に取り込む能力）を高め、②イメージ記憶をつくる能力（知識を脳内で再構成する能力）を鍛えるだけでは、不十分である。世の中には、せっかく一生懸命に勉強してたくさんのことをことを覚えたのに、その知能を実際に追うようできない人が多い。逆に、学生時代に、そんなに勉強に熱心に取り組んできたわけではないのに、ものすごいアイデアを出す人がいる。いくら勉強をしても成績が上がらない人、あるいは猛練習をしても運動がうまくならない人は、覚えたことをアウトプットする知能、つまり、③表現知能（表現する多重知能の能力）の使い方に問題があると言える。記憶とは、インプットするだけでなく、外に向かって表現する、つまりアウトプットすることができなければ意味をなさないのである。そこで、覚えた知識、技能を表現する能力を高める必要がある。この表現知能が劣っていると、結果的に資質や能力が高いとは言えない。表現知能は1つではなく、その要素として、言語知能、理論知能、計算知能、音感知能、運動知能、空間認知知能というように、いくつもの知能に分けられる。運動知能は、他の知能と同列にある。「スポーツばかりしていると勉強ができなくなる」という俗説をいまだに信じている大人も多いが、本当に資質や能力が高い人は、勉強をやらせても運動をやらせても上手である。表現知能には、それを高める一定の訓練が必要である。計算ドリルや英語の聞き取りテストの勉強ばかりでは、この表現知能のうちの、計算知能や言語知能を鍛えていたことになる。

資質や能力を高めるためには、もう一つの知能が必要であり、それは④独創性や創造力を生み出す能力（独創的創造能力）である。この4つめの独創的創造能力を高めるには、①～③の能力を発揮させる活動が有効である。

このように、①ものを覚える、②忘れた情報を脳内で再構成する、③その内容を表現する、④そこから独創的な創造力を生み出す、という4つの段階がある。ものを覚える勉強ばかりしていても、現代社会に対応できる能力が高まらない理由は、ここにある。ものを覚えることだけに優れているだけでは、人間の知能全体の半分弱の能力に優れているにすぎないのである。



【人間の知能の4つの能力段階】

▼ 学習対象に応じた「知」の分類

「知」は、教科領域の特性に応じて、大きくは以下のようになっている。

① 子どもの本物の生活を学習対象とした学びで獲得される「知」

□ 知識・技能としての「知」

衣食住や健康など自分の生活をつくり出していく知識や技能、資源やエネルギーなどの生活課題にかかわる知識など

□ 知的能力としての「知」

生活を分析しよりよい生活の目標を設定する力、具体的な行為として計画する力、実践したり発信したりする力

② 文化財を学習対象とした学びで獲得される「知」

□ 知識・技能としての「知」

基本的な概念、事物間に働く法則、事実在即した探究の仕方など

□ 知的能力としての「知」

- ・文化に含まれる概念や法則を取り出したり、当てはめたりする帰納的・演繹的な思考力
- ・新しい文化を創り出そうとする想像力や発想力
- ・文化の価値を感得する感受性 など

③ 人間を学習対象とした学びで獲得される「知」

□ 知識・技能としての「知」

人間の特質や傾向など人間そのものに関する知識、規範を理解して行動できる技能、生命や友情、個性、努力などの道徳的な価値

□ 知的能力としての「知」

- ・人間の考え方を推し量ったり共感したりする能力
- ・自分自身をふり返りよりよい生き方を考える能力

▼ 「知」の3つの関連付け方

①～③のように学習対象の違いに応じて通常は別々に獲得される異なる「知」を関連させて発揮させることは、総合的な学習の時間に行われる「知の総合化」である。これは、知の関連づけの1つである。

知の関連づけ方には、次の3つのタイプが考えられる。

1つめは、総合的な学習の時間に行うような異なる3つの知を関連させて発揮させる「知の総合化」である。

この「知の総合化」を総合的な学習の時間だけのものとせず、各教科領域においても、その可能性を試みたのが、研究1年次の「学びの体験の統合」である。例えば、社会科の学習の中で、意図的に、算数科の割合やグラフ、理科の天気予報の知識・技能を組み合わせるよう教材化を図った授業づくりである。また、例えば、学級活動の中で、計画力や実行力といった知的能力を発揮させるのをベースにした上で、異学年の児童とかかわる活動を中心に教材化を図り、相手を推し量ったり共感したりする知的能力も発揮させようとする授業づくりである。また、家庭科の学習の中では、家庭実践に向けて計

画する力、実践する力をベースにした上で、実習などの活動の中に比較実験などを位置付け、より科学的になるように教材化を図り、算数科などで法則を取り出す際に用いる帰納的な思考力も関連させて発揮させようとする授業づくりである。

2つめは、知的能力としての「知」に焦点化し、インプットする知的能力（習得）とアウトプットする知的能力（活用）をバランスよく発揮させる関連づけ方である。これは、「知的能力の関連」である。具体的には、前のページに記述した、これから必要とされる4つの知的能力（①知識を脳に取り込む能力、②知識を脳内で再構成する能力、③表現する多重知能の能力、④独創的創造能力）をバランスよく単元・題材の中に位置付けていく構想である。

このような「知的能力の関連」を試みたのが、研究2年次の「問いの深化・拡充による授業づくり」である。例えば、算数科の学習の中で、事象に含まれる数理を発見し習得するだけに終わらず、製作活動などを位置付けて、子ども一人一人が、習得した複数の数理を組み合わせたり選択したりしながら、オリジナルの製作活動に活用していくような授業づくりである。

3つめは、知識・技能の「知」に焦点化し、学級内における子どもの個々の知を、友達と活発に交流させる関連づけ方である。これは、「個と集団の知の関連」である。一般的な教育研究の成果として、個別に学習するよりも集団で学習する方が、学び合いが促進され、より質の高い知が形成されることは明らかになっている。

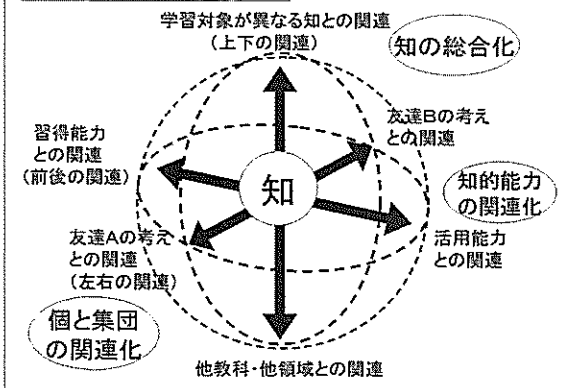
「知」の関連づけ方として、本校ではこれまでに、3つの関連づけ方（①「知の総合化」、②「知的能力の関連」、③「個と集団の知の関連」）を考えてきた。

▼ 研究3年次 本年度の主張点

「知のネットワーク化」とは

「知のネットワーク化」とは、「不変性」「転移性・応用性」「実用性」のある「知」を育てていくために、「知の総合化」「知的能力の関連」「個と集団の知の関連」といった「知」の3つの関連付け方を大切に単元・題材を構成することである。

知のネットワーク化とは



前年度までの2年間の研究の成果と課題から、知の3つの関連を、各教科領域の中に取り入れていく際に、「知の総合化」と「知的能力の関連」が、「実践力」や「応用力」を育てる上で大変有効であることはわかってきている。しかし、「知の総合化」においては、取り入れることが難しい教科領域等や単元・題材があることもわかってきている。そこで、そのような取り入れが本質的な内容に迫ることを妨げる場合には、取り入れないことにしている。また、もう一つの課題として、個人内における知の関連づけに、他者の知との関連づけをもっと活発に促進させることがあげられた。

そこで、研究3年次では、特にどの教科領域等においても、共通なものとして、特に「知的能力の関連」及び「個と集団の知の関連」の2つに重点を置きながら授業づくりを行うことにした。

- 個人内では、「知的能力の関連」に重点をおき、インプットする能力とアウトプットする能力が発揮されるような活動構成を行うこと

(習得と活用のバランスを考えた活動構成)

- 他者との学び合いでは、「個と集団の知の関連」に重点を置き、学び合いが促進されるような手だてを講じること

(学び合いを促進する手だて)

3年次の研究では、昨年度までの「問い」を深化・拡充させる授業を基盤とし、他のもの・人・ことにかかわりながら、「問い」を見いだしたり、解決したりしていく。他者に問う、他者から問われたことに問い返す、問い合うことから新たな「問い」を生み出したり、自分の考えを明らかにしたりする授業づくりを行っていく。

本年度は、子どもの「問い」をさらに引き出しながら連続発展させ、「考えること」を強化した創造的思考力を培っていくために、学び合いによる個と集団とでの、知の関連の在り方も明らかにしていく。他者に問う、他者から問われたことに問い返す、問い合うという視点で、本年度の「知のネットワーク化」が生きてくる。他の学習者とともに、働きかけ合うことを通して、「知を確かなものにすること」や、「知的に他者と関わる能力を育てること」を目的とした授業づくりを構想していく。このことで、子どもの思考は活性化され、これまで思いつかなかったような新たな考えや方法を、子ども自ら見いだしていけるようになる。また、他者の意見を聞いたり、他者に説明したり、他者とともに問題を追究・解決することで、自分の意見と比較したり思考したりする「社会を共に生きる力」が育ち、その結果、豊かな学びを育むことになる。これまでも学び合いの学習は行われてきたが、学び合いがうまくいかず、個と集団の知の関連が、中途半端な状態で終わっていることが多かったと感じる。友達に確かに知を伝えたり、共有したりすることで個人の知も、さらに高まっていくと考える。

▼ 知のネットワーク化を図る具体的方途

学び合いを通して創造される知の方向性として、主に次のような場合が考えられる。

【つけ加えによる知の創造】

- ・ Aの知にBの知をつけ加えることによって、Aの知が高まっていく知の創造

【共通性による知の創造】

- ・ AとBの知を、共通点からまとめることによってCの知へと統合される知の創造

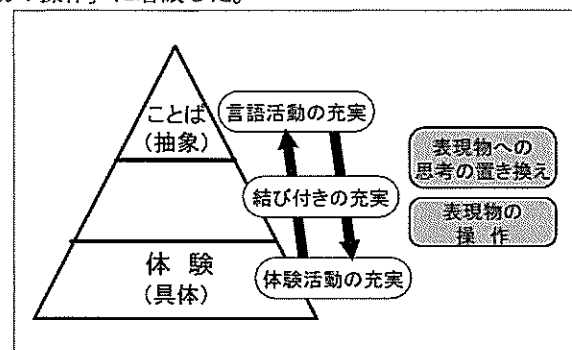
【順序づけによる知の創造】

- ・ AとBの知を観点に沿って順序づける知の創造

【対応づけによる知の創造】

- ・ Aの知に対応するBの知を考え出す知の創造

しかし、どのような場合においても、大切なのは、自分の考えや友達の考えが、まず、ある程度、周りに理解されることである。学び合いによる交流では、考え等の理解・伝達がうまくいってから、やっと次の「考えの比べ合い」の段階に進めることができるからである。そのために、思考したことを表現するもの（表現媒介物）が果たす役割は大きいと考える。知が他者に理解されるように伝わるには、うまく表現をしなければならない。多くの場合、言語だけでは、うまく相手に伝わらないことが多い。そのために、表現の際に手助けとなるのが、表現物である。新学習指導要領では、思考力・判断力の他に表現力の育成も重視されている。そして、言葉と体験の一層の充実も叫ばれている。これまでの学習活動においても、言語化することや、体験を重視してきている。しかし、学び合いの交流活動においては、言語を中心としたやりとりが主になっており、そのために、内容の理解といった面では、うまく伝わりきらずに不十分さが残ったと考える。そこで、学び合いを促進していくためには、言語活動と体験活動とをつなぐ表現媒介物が重要になると考え、「表現物への思考の置き換え」と、その「表現物の操作」に着眼した。



特に小学校期の児童においては、考えを視覚的な表現物に置き換えることで、他者へ伝達される内容の理解が促進される。また、考えを表現し、さらに、その表現物に「まとめる操作」「つなぐ操作」「変える操作」「比べる操作」等の操作を行うことで、考えを他者の考えと関係付けたり、順序付けたりすることが可能になる。

▼ 単元における工夫と交流場面における工夫

子どもたちの言語活動を充実させるためには、理解と伝達方法の工夫が必要である。気付いたことやわかったこと、予想、根拠、解釈、アイデアなどが多様にあっても、それを相手に理解してもらったり、うまく伝達できなければ、交流が促進されず、思考も活性化しない。一人一人の個の考えたことや表現したことのよさが、友達に転移していくためには、単元の学習過程における工夫と、1単位時間の交流場面における工夫の2つの側面からの工夫が必要である。

○ 活用場面が位置付いた活動構成の工夫

音楽科や図画工作科などの授業においては、鑑賞する活動が位置付くことが多い。できあがった作品を交流しても、そこで子どもたちが工夫したことは、作品が完成していれば、どんなによい工夫をしても、友達に取り入れられる場がないことになる。そこで、作品の中間報告会のような方法で交流の場を設定することで、友達のアイデアのよさなどを、次の時間に自分の作品に取り入れていくことが可能になる。これは、作品をつくり上げていく教科だけでなく、どの教科領域等においても考えることができる工夫である。そのためには、全体と部分の関係で成り立つ活動構成や、活動の場が変わりながら繰り返される活動構成にすることが必要である。

○ 1単位時間における交流の場の工夫

一人一人の子どもたちが考えたアイデアなどが友達にうまく伝わるには、言語に加えて思考を置き換えて表現する媒介物が必要である。思考した結果だけでなく、思考の過程をじっくり分析したり理解したりするには、この表現の置き換えが大変重要となってくる。例えば、理科では、思考したことをイメージ図に置き換えたり、実験の結果の分析をグラフなどに置き換えたりすることで、どの部分についての交流なのか、友達が話していることは、どこのことなのかなど、思考の場が焦点化される。また、友達に理解されたりうまく伝えることができたなら、それを、そのままにしておくのではなく、関係づけたり意味づけたりして整理することが必要になる。これは「つなぐ操作」「まとめる操作」にあたる。また、そこで見えてきた内容を一般化していくためには、「変える操作」や「比べる操作」なども必要になってくる。思考したことを表現物に表すことだけに終わらず、それらの内容を整理し関係づけて知を構造化しておくことは、応用性の高い知識として習得されることに有効である。

○ 交流の形態の工夫

交流する際の形態の工夫も、思考を活性化させるのには、大切な手だての一つになる。一人一人が表現する場を確保するには、ペアや小集団での学習形態が有効であり、話し合い方や説明の仕方などの表現力を高める上でも必要となってくる。

5 特別支援教育研究「共生社会を豊かに生きる子どもを育てる学習の創造」

これまで特別支援教育部では、個別的教育支援計画をいかした授業づくりを中心に研究を進めてきた。本年度は、子ども一人一人の将来の自立的な生活を見通し、身の回りのもの、人、こととのかかわりを通して、できることやわかることを増やし、自分から働きかけることができる子どもをめざしている。そこで「選ぶ力、かかわる力、知識・技能」を育むために取り組んできた。そして、一人一人の特性をいかすために、活用できる環境づくりを重視し、次のことを具体的に構想していく。

- ① 個別的教育支援計画から指導内容を明確にし重点化を図る。
- ② 一人一人の特性に応じる学習スタイル(教材開発・学習過程)の具体化
- ③ 障害の特性や個の特性に対応した指導形態、学習形態、学習空間、教材・教具などの支援の工夫
(「活用できる環境」を具体化する授業づくり)

以上の3つのことを大切にしながら、現実社会や生活場面を取り入れた単元や題材の開発、学習過程の工夫、個別的教育支援計画から学習を構想し、支援の在り方を明らかにしている。

6 帰国子女教育研究 「国際社会に生きる基礎を培う帰国子女教育」

学習適応と特性伸長をめざし、国語科、算数科、社会科での知識・技能を整理し、国際交流タイムと関連を図りながら、個に応じた学力を確実に身に付けるとともに、滞在国での体験を生かす方向で教育課程の編成の研究を進めてきた。本年度は、基礎・基本の力を前提に、国際交流タイム等で発揮される個性を重視した活動を仕組む授業づくりと支援の工夫を行った。また、コース別活動においては、一人一人に応じた個別のカリキュラムを作成している。その個別のカリキュラム作成の主な手順については、次の通りである。

- ① 各教科等の指導内容表を作成する。
- ② 指導内容表から、一人一人の未習内容と既習内容を明らかにする。
- ③ その教科等の柱となる領域の内容について系統性して配列する。
- ④ 柱となる領域の他の領域との関連を考慮して、関連付けられる内容について検討する。
- ⑤ 関連付けられる内容については柱の領域の内容と合わせて指導する。
- ⑥ 卒業までの残日数から配当時間を決める。
- ⑦ 学習内容が、通常学級に追いついた場合は、通常学級との交流を図る。

(研究主任 田 中 健 悟)

第1学年の〈ふくおかプラン〉（平成21年度 構想プラン）（習得を重視した単元・題材 ―― ）

時数	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月				
国語	272	えをみて はなそう (8)	おはなし きかせて うたに あわせて あいうえ お (12)	いろいろな くちばしのわ けをみつけよ う (12)	ばめんのよう すをふくらま せてよう おむすびころ りん (11)	みんなに おしえよう (14)	くらべてよも う (15)	げきをしよ う 大きな かぶ (22)	くらべ てみよ う (16)
				せんせい あのね (22)		がっこうでみつけた 知らせよう (16)			
算数	114	なかよしの はなしを つくろう (6)	10 までのか ずをかぞえ よう (9)	わかざりを つくろう (ながさ) (9)	いくつといく つ？びんごでげ っと (6)	たしざん えほんを つくろう (7)	ひきざん えほんを つくろう (10)	20 までのかずを かぞえよう (13)	
音楽	68	うたとともだちに なろう (4)	森のどうぶつ のリズムをつ くろう (4)	わくわくり ずむでたの しくあそぼ う (6)	どれみと ともだちになろう (10)	どんなようすか うかべてえんそう			
図画工作	68	すきな ものがつ まったポ ケット (2)	じげんとなか し (2)	ここは、ぼくの わたしのいきもの ランド (6)	かぜとひかりのお くりもの (5)	ぺたぺたどろどろへ んしんねんど (6)	ペーパーボットで おもちゃづくり (8)		
体育	102	うんどうの ですと (7)	おしだし あそび (6)	うまく よけよう！ ころがし ボールゲーム (6)	ウォーターランドで あそぼう (14)		リズム 変身 あらつ ランド (7)	ジャン グル リレー (6)	
生活	102	おおきくそだてよう！ こころをこめたはなのおくりもの (14)					わくわく おもちゃらんどであ そぼう (11)		
		みんなだいすき ふぞくしょうがっこう (7)	つくろう！ へんしん いきものらんど (12)		にしこうえんのむし とふれあおう (6)				
学級活動	34	○学校のいきかえり (1) ○学校のきまり (1)	◎係を決めよう (1) ○給食のようい (1) ○よいあいさつ (1)	○虫歯きんをやっ つけろ (1) ○雨の日の すごし方 (1) ◎教生先生かんげい 集会 (2)	◎学級の歌をつくろう (2) ○水はこわいぞ (1) ○はじめての夏休み (1)	○きょうから 2 学期 (1) ◎ 2 学期の係をきめ よう (1) ○はじめての運動会 (1)			
道徳の時間	34	・学校ってどんな ところ？ (1) ・時間のきまり (1) ・元気な声で (1) 「おはよう」	・学校ってすてきな ところだね (1) ・ともだちパワーを あつめよう (1) ・さいごまで がんばろう (1)	・わき出る力を 感じよう (1) ・きまりは だれのもの (1)	・危険から 身を守る (2) ・自分の成長を 見つめよう (1)	・わがままを しないで (1) ・黙って いかないで (1) ・やさしい心って あたたかいね (1)			

(活用を重視した単元・題材——) ※探究型は総合的な学習の時間、教科での活用型と本校ではとらえています。

10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
おんどく はっぴょう かい (16) ものをいえの人に (10)	あつめたふ ゆのことば でカルタを つくろう (18)	ふじだなぶんしゅうをつく ろう (10) 本はともだち「ともだちの どうぶつさん」(10)	おみせやさん ごっこを しよう (20)	どうぶつの赤ちゃん のちがいをかんがえ てよう (20)	かみしばいを つくろう (読書活動) (20)
たしざんを しよう (12)	かたちげえむを しよう (10)	ひきざんをしよう (13)	かずづくりゲーム をしよう (11) (100 までのかず)	かずづくりゲームをし う (8) (100 までのたしざん ひきざん)	
おもい しよう (10)	すてきなおとを みつけよう (6)	あそびうたを えらんであそぼう (8)	につぼんのうた みんなのうた ランド (6)	おんがくで おはなししよう (8)	みんなであわ せて (6)
わたしのすてき なとうめいバック (6)	すてきな たいようさん (6)	つづきえ どンドン (8)	すてきな かたちが あつまると (4)	たまごパックが たくさんあつまると (8)	かみのつづが うたっておどつ て (6)
とびっこ ランドであそぼう (7)	てつぼうで あそぼう (9)	マットで つぼうとび ぼこランド であそぼう (8)	うまくあ てようころ ころドッジ ボール (8)	なわとびあそび かけっこあそび (12)	ゲーム大かいを しよう (12) ※けりっこあそびを ふくめて
大すきかぞく (9)	にしこうえんの あきとあそぼう (10)	学校のお正月をつ くろう (11)	花いっぱい そつぎよ うをおいまいしよう (12)	みんな大す きにしこう えん (6)	せいちょうにつ きをしようかいし よう (5)
○みんな友達 (1) ◎教生先生さよな ら集会 (1) ○正しいせい (1) ○きれいな片付け (1)	○本の借り方返し方 (1) ◎好きな本のしょう かいをしよう (2)	◎クリスマス集会を しよう (2) ○冬休みのくらし (1)	◎3 学期の係を決め よう (1) ○ありがとう給食 (1)	○もし火事になった ら (1) ◎ありがとう 6 年生 (2) ○もうすぐ 2 年生 (1)	◎新 1 年生へのプレ ゼントをつくろう (2)
・いつも正直に (1) ・進んで手伝う (1) ・ありがとうの気持 ちを伝えよう (1)	・美しい心を 見つけよう (1) ・ぼくの町って すてきだよ (1) ・命の温かさ (1)	・みんなにもあるね 温かい心 (1) ・自分の成長を 見つめよう (2) ・大切に使う (1)	・何度も ねばり強く (1) ・礼儀正しい生活 (1) ・お世話になって いる人 (1)	・正直で素直な心 (1) ・正しい行い (1) ・きまりを守って 使う (1)	・家族の人の願い (1) ・自分の成長 (2)

第2学年の〈ふくおかプラン〉（平成21年度 構想プラン）（習得を重視した単元・題材 ―― ）

時数	4 月		5 月		6 月		7 月		9 月		
国語	280	よんで楽しもう 「ふきのとう」 (20)		読書をつなごう～たんぽぽのちえを比べて～ (20)		糸で生きるってどう いうこと？～糸で生 きる虫たち～ (12)		仲間とふれあう生き物 のお話を読もう 「スイミー」ほか (選択読書) (20)		はっぴょう名人になろう (21)	
		とっておきニュース (20)									
算数	155	とけいを見ながら生活しよう (7)	たし算をしよう (10)	ひき算をしよう (10)	身体ものさしで見つもら名人になろう (8)	三角形・四角形！ステンドグラスづくり (5)	つかみ取りゲームをしよう (9)		たし算とひき算をしよう (16)		
音楽	70	歌と友だちになろう (8)		わくわくりズムやドレミであそぼう (8)		曲に合わせて、バンブーダンスを踊ろう (4)	夏をかんじて歌おう (6)		音を合わせてえんそうしよう (10)		
図画工作	70	ローラーから生まれたカラフルせかい (8)		ぺったんがったいふしぎなかたち (5)		ぼくのわたしのすてきなぼうし (8)		きらきらシャボンから何が見えた (4)	にじ色のせかいへようこそ (8)		
体育	105	うんどうのテスト (7)	おしあいひきあいあそび (7)	あらつわくわくランドをつくろう (7)		ウォーターランドであそぼう (13)		まねっこパークであそぼう (9)			
生活	105	あらつの町を たんけんしよう (10)				大きくそだて、みんなの夏野さい (継続 12)					
						つくろう！ ようちえんとなかよしフェスタ (12)		はっけん！ すてきなあらつのあきのまち (13)			
学級活動	35	○学級目標を決めよう (1) ◎係を決めよう (1) ○学習中のやくそく (1)		○さそいにのらない (1) ◎学級のシンボルマークをつくろう (2) ◎教生先生のかんげい会 (1)		◎2の○アンビシャス広場に1年生をしょうたいしよう (4)		◎七夕集会をしよう (2) ○もうすぐ夏休み (1)		○2学期のめあてを立てよう (1) ◎楽しい係を決めよう (1) ○運動会に向けて (1)	
道徳の時間	35	・心を結ぶあいさつってどんなもの (1) ・自分できちんと (1) ・自分の成長 (1)		・町のひみつをしょうかいしよう (1) ・やさしい心 (1) ・相手を思いやって (1) ・進んできれいに (1)		・みんなの物を大切にする心を見つけよう (1) ・みんな一生懸命生きてるね (1) ・たった一つの命 (1) ・心強いね (1)		・やりぬく心 (1) ・楽しい家族 (1) ・気持ちのよいあいさつ (1) ・自分の成長 (1)		・小鳥たち元気でね (1) ・動植物にもやさしい心で (1) ・友達への親切 (1)	

(活用を重視した単元・題材——) ※探究型は総合的な学習の時間、教科での活用型と本校ではとらえています。

10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
どのようなかわり合っているのかな?～サンゴの海の生き物たち～ (20)	「がくんとかえるくん」シリーズを読もう(20)	ふじだな文集を書こう (10)	ことばのおもしろさ発表会をしよう (25)	2年生の思い出を書きまとめよう (25)	お話を楽しもう「スーホの白い馬ほか」 (22) (選択読書)
お話大好きはっぴょうかいをひらこう (35)					
かけ算をしよう I (23)	かけ算をしよう II (26)		かけ算九九表のクイズをつくろう (14)	長いものさしを作ってみよう (10)	大きい数をかぞえよう (10) へんしん形づくりゲームをしよう (7)
	すてきな音を見つけよう (6)	きせつをかんじて歌おう (8)	にっぽんの音 みんなの歌ラント (5)	ビンゴにおくるリズムをつくろう! (5)	ようすを思いうかべて歌おう (7) つくろう森の音楽会 (3)
カラフルコチョコチパーティーだ(4)	おしゃれなすてきな紙テープ (8)	ゆめの中のどうぶつランドにあつまれ! (7)	ねん土であそぼう (2)	すてきなペンケース～おりぞめ和紙～ (10)	ありがとうの気持ちをこめて (6)
ジャングルリレーを楽しもう (9)	ころころドッカン! ターゲットゲーム (9)	マット・とびぼランドであそぼう (9)	遊び発見! みんなとチャレンジランド (9)	なわとびあそびかけっこあそび (9)	つくろう! わくどきランド (8) ボールけりゲームを楽しもう (9)
大きくそだて、みんなの秋やさしい (継続 13)			つくろう! ふ小 どくしょまつり (13) ぐんぐんのびる、ぼく・わたし (6)		
つくろう! おもちやランド (10) あらかつフェスタをもちあげよう(5)					
◎教生先生とのお別れ会 (2) ○学習への心がまえ (1) ○目の健康 (1)	○言葉のひみつ (1) ○友達と仲良くしよう (1) ○本のあつかい方 (1) ◎係のがんばりを伝えよう (1)	○友達のよさを見つけよう (2) ○冬休みの過ごし方 (1)	◎3学期の係を決めよう (1) ○楽しくなる食事 (1)	○心の鬼をおいだそう (1) ◎さようなら6年生 (1)	◎学級文集をつくろう (2) ○もうすぐ3年生 (1)
・うそと正直 (1) ・自分の健康を見つめよう (1)	・感謝の気持ち (1) ・助け合う友達 (1) ・勇気をもって (1)	・清らかな心 (1) ・自分の成長 (1) ・学級の仕事 (1)	・上手に使う (1) ・ねばり強くがんばる (1) ・みんなのものを大切に (1)	・生き物の気持ちを考えて (1) ・美しさに感動する心 (1) ・見つめよう自分の生命! (1)	・支えられる生命 (1) ・やさしく親切に (1) ・自分の成長を見つめよう (1)

第3学年の〈ふくおかプラン〉 (平成21年度 構想プラン) (習得を重視した単元・題材 ――)

時数	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月
国語	235	3 学年の読書計画をつくろう (13)	まとまりに気をつけて読もう 道具を使う動物たち 「きつつきの商売」(8)	昔話から読書を広げよう 日本の話・世界の話 (選択読書) (25)	めざせ プレゼンター I (10) どの特長が大事なのかな? (25)
算数	175	全部でいくつ (かけ算九九) (8)	あなあきクイズをつくろう (18)	円と球 (10) ばたばた絵をつくろう (12) ボールをつくろう! 二等辺三角形正三角形 (7)	わり算をかたちで考えよう (10) 生活の時間や時こくを (8)
社会	70	あらつの町たんけん! 附属小のまわりの特色を見つけよう (6)	しょうかいしよう わたしたちのまち福岡 (10)	発見! スーパーマーケットのひみつ (11)	福岡市の仕事をまとめよう (5)
理科	70	植物のそだちをついせきしよう (種から発芽へ) (1)	わくわく昆虫ワールド (8)	磁石のはたらきを調べよう (10)	植物のそだちをついせきしよう (花の咲くころの様子) (2) 植物のそだちをついせきしよう (花の咲くころの様子) (3)
音楽	60	楽き大好き! うたうの大好き! みんなで合唱そう (7)	つくろう! ハーモニーワールド森の24時 (4)	ふしとリズムを楽しもう (8)	場面を音楽で表そう・ふしの流れやリズムにのって歌おう (8)
図画工作	60	くねくね、ぐにょぐにょ絵の具のダンス (4)	発見! まほうのつぼ (4)	つくろう! 教室のなかのふしぎな世界 (8)	水の世界を描こう カップアーティスト (4) とう明カップから生まれたものは (6)
体育	105	スポーツテスト (7)	チャレンジてつぼう (6)	あらつジャンプたんけん (体づくり運動) (5)	あらつすもう (7) めざせ! カップ大賞 (12) 楽しく表現・ダンスをしよう (8)
総合	70	あらつかップ伝説～昔話から探検 あらつの町～ (18)			夏休み自由研究 (7)
英語	35	Let's ask the possession one. (3)		Let's ask a favorite thing. (4)	Let's do the touch game. (3) Let's ask the hour. (3)
学級活動	35	○ぼくは○○です (1) ○学級目標を決めよう (1) ◎係を決めよう (1)	◎教生先生ウェルカム集会をしよう (4)	◎学級の旗をつくろう (2) ○雨の日の過ごし方 (1) ○けじめのある学習 (1)	◎1 学期の係活動を取り返そう (1) ◎1 学期の集会 (1) ○夏休みの生活 (1) ◎2 学期のめあて (1) ◎月見学芸会の計画を立てよう (1) ○運動会に向けて (1) ◎2 学期の係 (1)
道徳の時間	35	・新しい気持ちで (1) ・きまりのある生活 (1) ・真心をこめてあいさつを (1)	・すばらしいお母さん (2) ・正直のよさ (1)	・わたしたちのふるさと (2) ・生き物を大切に (1)	・身の回りをきれいに (1) ・自分の成長を見つめよう (1) ・本当の友達 (1) ・姉に勝って (1) ・お年寄りに感謝 (1) ・生命を大切に (1)

(活用を重視した単元・題材——) ※探究型は総合的な学習の時間、教科での活用型と本校ではとらえています。

10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
「盲導犬の訓練」	あらつフェスタのパンフレットをつくろう(20)	ふじだな文集をつくろう(10) 詩を読もう(10)	「福岡のうまかもん」を説明書に書きまとめよう(20)	想ぞうをふくらませて書こう(20)	自分の力で読もう(選択読書活動)(27)
長いものさし作りしよう(14)	かけ算九九をひろげよう(11)	大きな数を調べよう(11)	表とグラフに表そう3年調査隊(13)	ドールハウスをつくろう(12)	同じ数ずつわけよう(10)
3年キク部会を開いてこれからのキク作りについて考えよう(14)	あらつの今と昔～あらつ昔図かんをつくろう～	考えよう！福岡市紙ごみげんりょう作戦(15)			
あかりのくにへようこそ豆電球とかん電池(11)	昆虫や植物のせい長図かんをつくろう(11)	太陽の動きを調べよう(11)	さぐろう！日光のはたらき(12)	自分たちが育て虫や草花は…(4)	
曲の感じをとらえよう・リコーダーと友だちになろうⅡ(7)	日本と世界のあそび歌集をつくろう(8)	リコーダーと友だちになろうⅢ(6)	ふしや音をえらんで表そう(5)	6年生への思いをこめて歌おう(7)	
光とかげの協奏曲(6)	とびらを開くと見える世界(6)	ダンボールアーティスト(8)	集まれ！すてきなカラフルなかま(8)	にじ色花畑をつくろう※卒業式をかざろう(6)	
つくって楽しもう！たんけんマット(9)	あらつ障害物リレー(8)	チャレンジとび箱(8)	タグフットボールを楽しもう(10)	ちょうせん！なわとび遊びかけっこ遊び(12)	つくろう！わたしの元気もりもりブック(5)
つくろう！ウイングサッカー(8)					
うちの自まん！博多のまんじゅう(15)	あらつフェスタ(10)	つくろう！通学のルール(20) ～ふぞく小マナーアップを目指して～			
Let's shopping！～at vegetable shop and fruit shop～(6)	Let's make a X'mas card(6)	How does the physical condition？(5)	Can this sports？(5)		
○正しい言葉づかい(1) ◎教生先生とのさよならパーティー(2) ○忘れ物をなくそう(1)	○ぼくわたしのいいところ(1) ◎係新聞コンクールをしよう(2)	○男女なかよく(1) ◎2学期の集会(1) ○夏休みの生活(1)	◎3学期の係を決めよう(1) ○給食への感謝(1)	◎係発表会をしよう(2)	○6年生へのプレゼントの内容を決めよう(1) ◎3学期の集会(1) ○4年生に向けて(1)
・みんなの使うもの(1) ・真心の行い(1) ・励まし合う友達(1)	・困っているだれかのために(2) ・みんなが使う場所(1) ・やさしい心(1)	・正しい心、強い心(2) ・自分の成長を見つめよう(1)	・友達によさ(1) ・命を大切に(1) ・不思議なものに感謝する心(1)	・みんなクラスの仲間(3) ・わたしたちのふるさと(1)	・くじけない心(2) ・自分の成長を見つめよう(1)

第4学年のくふくおかプラン（平成21年度 構想プラン）（習得を重視した単元・題材 ―― ）

時数	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月				
国語	235	4 学年の読書計画を立てよう (10)	詩を読もう (10)	どんなお話がはなされたのかな？ ～「夏のおくりもの」の原作と教科書～ 話し合ってみよう！意見にまよってみよう (20)	松井さんの人柄を読み広げよう (25)	読書リレーをしよう (選択読書) (20)	めざせ プレゼンターⅡ (10)		
算数	150	大きな数を表そう (9)	コマをつくろう (14)	収納名人～円の直径と半径をの変わり方を調べて (7)	ビルのオーナーになって家賃を決めよう(面積) (12)	変化をグラフに表そう (7)	整数のわり算をしよう(12)	およその数を表そう (10)	考え方と式に表そう (11)
社会	85	わたしたちの住んでいる福岡県 (3)	オッショイ！博多山笠 ～ 768 年も続く祭りを受け継ぐ人々～ (12)	あらつ防災調査レポート (10)	星野村み力探検隊 (11)				
理科	90	春の生き物を調べよう (6)	空気や水の性質を上手に利用しよう (8)	自然の中の水の行方を探ろう (12)	夏の生き物を調べよう (6)	金属や水のあたたまり方② 熱気球②(15)	夏の星の神秘にふれよう (6)		
音楽	60	みんなのアンサンブルをつくりだそうⅠ ※さくらさくら (4)	白と黒の音楽をつくろう (5)	お祭りの音楽めぐりをしよう (8)	ふしやリズムの流れにのって演奏しよう (6)	みんなのアンサンブルをつくりだそうⅡ (10)			
図画工作	60	形や色から生まれたものは (6)	唐人町ランタンフェスティバル (10)	ストローと針金でおもちやをつくろう (6)	トントンギョギョふぎな生きもの (6)				
体育	105	スポーツテスト (7)	私たちの成長ブックをつくろうⅠ(2) かわそう！ つなごう！オリジナルタグラグビー(7)	つくろう！ 楽しもう！ リズムピクス (5)	あらつ場所 (7)	いろいろな泳ぎに挑戦しよう (12)	リズムダンスレポリューション (8)		
総合		つくろう！我らの附属小ふくこい(19)			夏休み自由研究(7)	アジアの			
英語	35	Let's introduce a favorite thing.(3)		What one is it? (3)	Have a nice trip! (6)	Let's ask the hour. (3)			
学級活動	35	○学級目標を決めよう (1) ◎係を決めよう (1) ○はじめてのクラブ活動 (1)	◎学級のシンボルマークを決めよう(2) ◎飛ばそう！協力のシンボル～連風づくり～(2)	◎飛ばそう！協力のシンボル～連風づくり～(2) ◎教生先生かんげいパーティーⅠ (1)	◎第1学期◎◎集会 (2) ○たばこと健康 (1) ○チャレンジ夏休み (1)	○2学期のめあて① ◎2学期の係を決めよう (1) ○運動会に向けて (1)			
道徳の時間	35	・4年生になって(1) ・生きた礼儀(1) ・目標をもって ・まっすぐな心(1)	・身近な動植物を大切に (1) ・友達のために ・なるのは？(2)	・見つめよう！思いやりの心 (2) ・生きるⅠ (1) ・命を守る仕事 (1)	・ふるさとを思う(1) ・自然や動植物へのやさしさ (1)	・自分のことは自分で(1) ・古いものを大切に ・する心 (1) ・目標に向かって (1)			

(活用を重視した単元・題材——) ※探究型は総合的な学習の時間、教科での活用型と本校ではとらえています。

10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
バリアフリーについて 考えを発表しよう (26)	目的に合わせた伝え 方について読み深め よう (30)	ふじな文庫 (10) 学校づくりに参画しよう 「故の写真から」(10)	発信しよう～すてき な附属福岡小学校～ (23)	言葉遊びを作って遊 ぼう (25)	自分の力で読もう (選択読書) (21)
はしたの数の表し方を 調べよう (10)	三角形のモビール をつくろう (15)	いろんな数で同じずつ分け よう (20)	角度当てクイズ をつくろう (10)	はしたの数の表し方を 調べようⅡ (分数) (8)	生活情報をブックレッ トにしよう (8)
大島不思議隊探検隊 (11)	どうする？これからの八女ち ょうちん (15)	広めよう！ ひきつがれる 博多の行事 (7)	明太子を博多名物 にした川原俊夫 (7)	「福岡県」にピッタリの キャッチフレーズを付け よう！ (9)	
体積変化 のなぞ (6)	秋の生き物を 調べよう (4)	月の不思議を調べよう (6)	冬の生き物を 調べよう (6)	モーターカーパワーアップ作戦 (8)	
	曲の感じをとらえ て歌おう (4)	につぼんの歌 みんなの歌ランド (2)	ジャズの曲にのって 間奏をつくろう (13)	オーケストラの 音楽を楽しもう (4)	6年生への思い をこめて歌おう (5)
ふくらむふくらむ 私のおもい(8)	心の四季を版に込めて(10)	オリジナルタングラムを つくろう (10)	かんしやの気持ちを色と形に込めて (6)		
2 種競技 に挑戦し よう(8)	チャレンジ マット (9)	つくろう！ ハンドジャンプ (8)	セストポ ールを楽 しもう (10)	私たちの成長ブックをつくろうⅡ (2) チャレンジ持久走(7) チャレンジチームジャンプ (6)	スリーゴール サッカー 楽しもう (9)
ひみつを探ろう(19)	あらつフェスタ(10)	附属小樹木調査隊(15)			
Where are you going? (6)	Let's ask a price. (3)	Let's go shopping for Christmas. (3)	Let's play card game. (4)	Let's introduce doing. (5)	
○目を大切に (1) ◎学級文庫をつくら う (2) ◎教生先生さよなら パーティーⅡ (2)	○友達の良いところ(1) ○献立と栄養 (1) ◎係活動発表会を しよう (2)	○男女仲良く (1) ○冬休みの計画 (1)	◎3学期の係を決 めよう (1) ◎ボランティア作戦 をしよう (2)	○食物の秘密 (1) ◎学級文集をつく ろう (1)	○さようなら6年 生 (1) ○もうすぐ高学年 (1)
・日本のすばらしさ (1) ・思いやりの心を もって (1) ・学校のよさ(1) ・家族みんなで (1)	・進んで活動する (1) ・きまりを守る心 (2)	・勇気ある行動 (1) ・目標をもって 生きるⅡ (1)	・何が大切かを 考えて (1) ・みんなのために 働く (2)	・おとしりを大切 にする心 (1) ・みんなのために (1) ・本当の友達 (1)	・真心の美しさ (1) ・自然を大切に (1) ・目標をもって 生きるⅢ (1)

第5学年のくふくおかプラン（平成21年度 構想プラン）（習得を重視した単元・題材 ―― ）

	時数	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月			
国語	180	5 学年の読書計画を立てよう (10)	詩を読み味わおう (13) 筆者の意図を読み取ろう「サクラソウとトラマルハナバチ」 (13)	言葉の研究レポート (15)	千年前の不思議を読み深めよう (16)	めざせ！プレゼンターⅢ (10)			
算数	150	整数と小数の関係を調べよう (14)	四角形を調べよう (20)	しきつめ模様をつくろう (三角形と角) (8)	土地をリフォームして未来の街をつくろう (15)	つくろう！分数カードゲームの攻略法 (14)	小数のかけ算やわり算をしよう (16)		
社会	90	国土に生きる人々Ⅰ・発見！日本の地形 (3)	国土を生きし、食料生産に励む人・どうする？これからの米づくり (7) ・おいしい給食の向こう側 ～ほうれん草、だれがどこからどうやって？～ (10)		われら食料安全調査隊 (8)	国土を生きし工業生産に励む人々・発見！くらしの中の工業製品 (9)			
理科	95	植物の成長の秘密を探ろう 発芽と養分 (8)	植物の成長の秘密を探ろう 肥料と日光 (9)	電気の力でキャッチ～電磁石の性質～ (11)	メダカの成長やひとの誕生 (11)	生命のつながりを探ろう植物 (10)			
音楽	50	豊かな表現をつくり出そうⅠ (5)	歌い継ごう！日本の響き (4)	歌い継ごう！博多の歌・博多の心 (5)		豊かな表現をつくり出そうⅡ (4)			
図画工作	50	ギザギザペクタンから生まれたものは (6)	スチロールのカーニバル (6)	附小のわたしの自慢 (6)		夏の思い出を絵手紙で届けよう (2)			
家庭	60	見つめよう！家庭生活 (7)	野菜サラダをつくろう (9)	オリジナルワッペンをつくろう！ (6)		日本の伝統的な食事わおう！～ご飯をたみよう～ (8)			
体育	90	スポーツテスト (3)	スリーコースリレーを楽しもう (5)	アタックチャンスを実践に～ジャンボブレール～ (10)	あらつ場所 (5)	安全マップをつくろう (2)	あらつ水泳に記録に挑戦 (10)	ダンスを楽しもう (5)	ソフトバレーボールを楽しもう (5)
総合	75	挑戦！わたしたちの米づくり (18)			夏休み研究レポート (7)	米から広がるわたしたちの生活 (11)			
英語	35	Let's guide our school. (5)	Let's expand the circle of friends. (5)	Where would you like to go? (4)		LIFE & TIME (4)			
学級活動	35	○学級目標を決めよう (1) ◎学級の組織を決めよう (1) ◎学級の合い言葉をつくろう (1) ◎つくろう！5の○プロジェクト (1)	◎5の○集会の計画を立てよう (1) ◎学級のシンボルマークをつくろう (1) ◎5の○係の内容を見直そう ◎○○集会の内容を決めよう (1)	◎教生先生の歓迎会をしよう (2) ◎5の○集会をしよう (2)	○アドベンチャースクールに向かって (1) ◎アドベンチャースクールでの遊びを決めよう (1) ○夏休みの計画 (1)	◎2学期の学級組織をつくろう (1) ○運動会に向けて (1) ◎5の○係活動をしよう (1)			
道徳の時間	35	・5年生としての自覚 (2) ・あいさつの大切さ (1) ・ふるさとを大切に (1)	・男女の理解 (1) ・日本人のすばらしさ (1) ・約束や規則の尊重 (1)	・危機的な生命？仕事の責任？ (2) ・生きがいを見つけ (2)	・広場はだれのものを (1) ・自分の成長を見つめるⅠ (1) ・友達のために (1)	・工夫して新しいことを (1) ・困難を乗り越えて (2)			

(活用を重視した単元・題材——) ※探究型は総合的な学習の時間、教科での活用型と本校ではとらえています。

10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
筆者の意図を読み取る ～インスタント食品と私たち～(25)	人とのもののつきあい (23)	人物の生き方を読む う わらぐつの中の 神様(15) 藤棚文集を作ろう (10)	言葉の研究レポート Ⅱ (8)	自分の考えを広げまとめよう「コマーシャルと私たち」 (10) 本の世界を旅しよう (選択読書) (12)	
計算ゲームで小数の かけ算を考えよう (15)	小数の割り算をし よう (15) 割合をグラフで表そう (15)		角度あてクイズをつくろう (12)	樹冠面積エコ調査隊(8) ～円の面積を調べて～ 形をつくって面積取 りをしよう (6)	
国土を生かし工業生産に励む人々 ・徹底追究！わが国の自動車生産 (15)		国土を結ぶ人々 ・発見！情報を活用する私達 (8) ・挑戦！コンビニ一日店長 (12)		つくろう！日本列島 紹介マップ(10)	取り戻せ！青空 (8)
流れる水の はたらき (8)	天気の変化 と自然 災害(6)	てこを使ったリフトゲーム (14)	つくろうミネラル結晶 (14)		ジャガイモを植えよ う (4)
豊かな表現をつくり 出そうⅡ (2) 音楽の形や仕組みを生かそう(7)		心をいやす音楽をつくろ う (6)	ふしとリズムを組み 合わせて (6)	音楽でえがこう(4)	6年生への思いをこ めて歌おう (5)
ダンボールキャンパス (8)	みんなで作ろう！ライトセラピーの 世界 (10)		ペットボトルとスチレンボールから (10)		美しい色、 楽しい形(2)
を味 いて	マイカフェエブロンつをく ろう (8)	地域の野菜を味わおう！ ～博多なすを使った 秋の1品～(10)	スッキリピカピカ大作戦 (10)		できるようになったことを 生かして (2)
ソフトバ レーボールを 楽しもう (3)	ハイジャ ンプのひ みつをさ ぐるう(7)	心の健康 (3) つくろう！ロー プジャンプ (6)	つくろう！ 器械運動 (8)	なわとび・ クロスカントリーに 挑戦しよう (8)	チャンスメイクサッカー (10)
つくろう！みんなにやさしいまちづくり(14) あらかつフェスタ (10)			チャレンジ！ほくらの狐川浄化プロジェクト (15)		
Where do you go out? (6)	Let's make a X'mas card. (4)		Let's go to the restaurant in the world. (4)	How do you say ? (3)	
◎教生先生とのお別 れ会をしようⅡ(2) ◎5の○ボランティ アの計画を立てよ う (1) ○5の○環境会議 (1)	◎省エネプロジェク ト (4)	○これが5の○遠行 会(1) ◎5の○ボランティ アをしよう(1)	◎3学期の学級組織 をつくろう (1) ◎最高学年に向けて (1)	◎縦割り清掃プロジ ェクト (3)	◎縦割り清掃プロジ ェクト (1) ◎5の○プロジェク トを振り返り、お 祝いをしよう(2)
・力強く生き抜く (2) ・健康と安全 (1) ・自分に誠実に(1)	・私の学校じまん (2) ・本当の親切とは？ (1)	・高い目標をもって (1) ・温かい家族 (2) ・自分の成長を見つ めるⅡ (1)	真のリーダーとは？ (2)	・希望をもって(1) ・広い心(1) ・自然を愛する心 (2)	・本当の思いやり (1) ・自分の成長を見つ めるⅢ (1)

第6学年のくふくおかプラン（平成21年度 構想プラン）（習得を重視した単元・題材 ――）

時数	4 月		5 月		6 月		7 月		9 月	
国語	175	6 学年の読書計画を立てよう (5)	短歌と俳句を読み味わおう (8)	筆者の意図を解き明かそう～なぜ、イースター島だったのか～ (12) わたしはこう考える～優先席は必要か？～ (15)		広げよう！読書ネットワーク、本の楽しさお届け隊 (18)		めざせプレゼンターⅣ (10)		
算数	150	整数のなかまづくり (12)		見積もって調べよう (5)	平均データで比べよう (10)	体積から見える世界 (9)	ブロックパズルのピースをつくらう (12)	分数のたし算・ひき算タイズをつくらう (15)		
社会	100	Ⅰ 日本のあゆみ (67) 時代を創った人ⅠⅡⅢⅣⅤⅥⅦ 福岡市博物館 (4) 板付遺跡 (4) 聖武天皇 (4) 藤原道長 (3) 清盛と頼朝 (7) 北条時宗 (4) 日本文化源流をさぐる (8) 天下統一 (4) 徳川家光 (4) 日本文化の源流を探ろうⅡ 町人文化 (5) 伊藤博文 (5)								
理科	95	私たちの周りの環境を見つめよう (4)	養分のつくられ方について考えよう (4)	電気を使ったヨットレース～電気の利用～ (8)		みつめようくらしのなかの火 (14)	生きるために必要な養分のつくられ方について考えよう (6) (動物)	生きるために必要養分のつくられ方について考えよう (10) (植物)		
音楽	50	豊かな表現をつくり出そうⅠ (12)			世界の音楽めぐりをしよう (6)			音楽の発展につくした音楽家たち (6)		
図画工作	50	ぼくの私のすてきフェイス (4)	ベニヤ板のカーニバル (8)		くらしにおしゃれな空間を～創造インテリア～ (8)			形と色のファンタジー (4)		
家庭	55	私にできることを見直そう (2)	さわやかライフをコーディネート (9)			つくろう！伝統の味 ご飯とみそ汁 (11)			我が家のオリジナル	
体育	90	スポーツテスト (4)	あらつ場所 (6)	つくろう！ユニバーサル・ホッケー (10)		あらつ水泳記録に挑戦 (10)		テーマ表現 21 (6)	ハイジャンプの秘密をさぐる (7)	
総合	75	つくろう！ 我らのオリジナルフラ (16) 命の輝きを (14)					夏休み自由研究 (5)			
英語	35	Let's enjoy breakfast! (5)		Let's introduce oneself. (3)		Let's enjoy sweets. (5)		Memories during summer vacation. (3)		
学級活動	35	○最高学年としての役割 (1) ○学級目標を決めよう ○1 学期のテーマを決めよう (1) ○学級組織をつくらう (1)		◎1 年生のお世話をしよう (1) ◎わたしたちの委員会活動をつくらう (1) ◎教生先生の歓迎会 (1) ◎委員会活動活性化プロジェクト (1)		◎委員会活動活性化プロジェクト (4) ○アドベンチャースクールに向けて (1) ○夏休みの計画 (1)		○2 学期のめあてを立てよう (1) ◎2 学期の学級組織 (1) ○最後の運動会・月見学芸会 (1) ◎下級生と交流しよう (1)		
道徳の時間	35	・最上級生としての出発 (1) ・本当の友達 (1) ・役割と責任の重さ (1)		・かがやけ生命 (2) ・何のために生きるⅠ (1)		・最上級生としての責任 (2) ・感謝する心 (1)		・素直な反省 (1) ・男女の友情と協力 (1)		・生きる輝きをもつて (1) ・公德を守る心 (1) ・自分らしさって？ (2)

(活用を重視した単元・題材——) ※探究型は総合的な学習の時間、教科での活用型と本校ではとらえています。

10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
ともに生きる ために筆者の 考えをもとに 伝え合おう(1 5)	ふじだな文集を つくろう (10) 表現を味わおう 「やまなし」 (15)	文化について考え を発信しよう (18)	情報を使って考え よう～人類よ、 宇宙人になれ～ (24)	「ことば」につい て考えよう (10)	卒業する あなたたちに (選択読書活動) 「海の命」、「生きる」 ほか (10)
単位量あたりの大きき さで比べよう (16)	分数のかけ算・わり算の仕方 を調べよう (29)	比を使って 比べよう (10)	比例するものを調 べよう (9)	算数のまとめ (23)	
文化を創った人々Ⅱ 日本文化の 源流を さぐるⅢ文明開 化(5)	時代を創った人々Ⅱ 陸奥宗光 (5)	時代を創った人々Ⅱ 15 年戦争 (5)	Ⅱ 生活と政治(15) ふくふく プラザが できるま で(7)	Ⅲ 世界の中の日本 (18) 世界の国を 訪ねよう (8)	スポーツ交流 会(4) 世界はひとつ 国際連合の働き (6)
生活の中の水溶液を利用し よう～水溶液の性質～ (14)	私たちの体の不思議を 探ろう (13)		土地のつくりと変化 (12)	私たちの周りの環境を 見つめよう (8)	
豊かな表現をつくり出そう Ⅱ (8)	日本の歌 みんなの歌 ランド (4)		室内楽の音楽を楽しも う (4)	音楽でえがこう (5)	6 年間の思いをこめて 歌おう (5)
思い出の一枚をか ざろう (8)	木版画アーティスト (8)		伝えよう！私たちの ポスターメッセージ(6)	お世話になった方に絵手紙をお くろう (4)	
バッグをつくろう (15)	家族も元気！マイオリジナル弁当 をつくろう (9)		家族の一員として の自分 (2)	伝えよう！ありがとうの気持ち (7)	
ソフト ボールを 楽しもう (10)	器械運動 発表会を 開こう (8)	健康な生活をしよう病気の予防 4 リラックス運動をつくろう (5)	縄跳び・持久走に 挑戦しよう (10)	バスケットボールを 楽しもう (10)	
つくろう！あらつ座(17)			あらつコーポレーション(16)		
あらつフェスタ(7)					
Let's enjoy communication! (5)	Let's play foreign music! (5)		What's wrong? (4)	Memories of elementary school. (5)	
○学習環境をつくろう (1) ◎さようなら教生先 生Ⅱ (2) ○読書の幅を広げよ う (1)	◎進めようボランテ ィア活動 (3) ◎第2学期の○○集 会の計画を立てよ う (1)	○心も体もリラック ス (1) ◎第2学期の○○集 会 (1)	◎3 学期の学級組織 をつくろう (1) ◎アルバムクラス用 ページの内容を決 めよう (1)	◎思い出をつくる修 学旅行 (2) ◎後輩へ思いを伝え よう (1)	◎第3 学期の○○集 会 (1) ○中学校へ向けて (1)
・深い思いやり(1) ・世界の中の私 (1) ・すぐれた文化財 (1)	・奉仕する心 (2) ・環境と資源を大切に (2) ・本当の友達 (1)	・生きることの 素晴らしさ (1) ・過ちを許す (1)	・家族の一員として (2) ・何のために 生きるⅡ (2)	・地球を救えるか？ (2) ・人間の力を 超えたもの (1)	・礼儀は心の表れ (1) ・何のために生きる Ⅲ (2)

○ 国語科学習の構想

言語技能を駆使して考えを練り上げる国語科学習

○ はじめに

国語科が究極的にねらっているのは、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てていくことである。言い換えれば、日常の言語生活を豊かに充実させ、それを通して人間を高めていく子どもの育成である。このねらいを達成するには、①言葉に主体的にかかわること、②言語生活を行っていくうえで基礎となる知識・技能を確実に身に付けること、③それらを使いこなしながら課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育てていくことの3つが有機的に作用し合っていくことが不可欠である。これは、新学習指導要領が重視していこうとする方向と重なる。また、この3つは、〈ふくおかプラン〉の土台としての役割・立場を担っている国語科固有の「言語で思考し言語で伝達する」という特性とも重なるのである。これらの「生活に活きる言語」「思考するための言語」「伝達するための言語」を育むという教科の役割をふまえ、言語に関する強い課題意識のもとに、言語で思考しながら言語生活を行っていくうえで基礎となる知識や技能を身に付け、それを駆使しながら言語で考えを明確にしていくことこそ、国語科において豊かな学びを育むことに他ならないのである。

1 主題について

言語技能とは、言葉を通して思いや願いを形成したり伝達し合ったりする際に必要な技術的な能力である。具体的には、言語活動を営むための基礎・基本となる、話す、聞く、書く、読む技能である。言語技能を駆使するとは、言葉を使いこなしていく技術的な能力を確実に身に付けるとともに、それを他の場面でも活かして自分に役立てることである。そのためには、言語を理解したり表現したりする基礎的な技能とともにそれを活用するために必要な思考力・判断力・表現力を伸ばすことが必要となる。言語技能を駆使して考えを練り上げるとは、他者の思いや報せを確かに把握し、自らの既有的な考えと比較して自分にとっての価値を見出し、考えを更新していくことである。言語技能を駆使して考えを練り上げる国語科学習とは、言葉への課題意識を原動力としながら、基礎的な言語技能を身に付けるとともに、それを活かして課題を解決する力、他者とかがわり合って自らの考えを再構成していく力をはくぐむ国語科学習である。そのためには、課題を解決するために必要な言語にかかわる知識・技能を自分で判断しながら選び出していく選択性、一人一人が心の中から言語で思考し考えを導き出す創造性、それらの自己の判断や考えの変容を自分で認知していく自己照射性という3つの条件を満たす国語科学習を創造する。

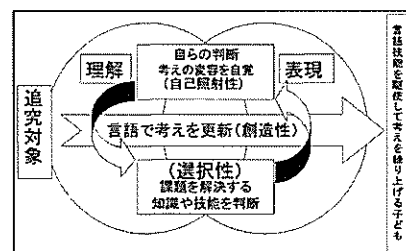


図1 言語技能を駆使して考えを練り上げる子ども

- 解決すべき課題を自らが意識して、自分から進んで、課題解決にあたる子ども (学ぶ意欲)
- これまでに習得した言語に関する知識・技能を駆使しながら、他者の考えや情報の意味を正しく理解し、自分の解釈や評価を加えて自分の考えをつくる子ども (能力)
- つくった自分の考えが他者に認められ、自分に自信をもっている子ども (自信)

～情報を比較・評価する活動を位置付けた授業づくり～

平 川 洋 一

2 副主題について

情報とは、ある発信者の思いと知らせであり、読むことの学習における情報は、①課題に対する学習者の既有的の情報、②文章の中の情報、③同じ課題で学習している友達の情報がある。情報を比較・評価するとは、学習者が課題に対して経験したことや体得した知識で構成した情報と文章の中の情報、友達の情報とを観点を明確にして比べ、自らにとっての価値を明らかにすることである。情報を比較・評価する活動とは、個で吟味した文章の価値を、同じ文章を読んだ友達同士で共通点と相違点を明らかにするなかで、自らの考えを見直していく活動である。情報を比較・評価する活動を位置付けるとは、問題事象に対する自らの考えを明らかにしたいという目的意識のもとに、個で吟味した文章の価値を見出した価値の傾向が同じ小集団で意見を付加・強化したのちに、考えの傾向が異なる大集団へと発信し合う活動を順に位置付けることである。情報を比較・評価する活動を位置付けた授業づくりとは、ある問題事象について、単元の導入、展開、終末の各段階に、主張の異なる発信者の情報と既有的の考えを比べながら、同じ情報を価値付けた友だちとともに（代表者提案）→（質疑－応答）→（付加－挿入）→（意見）の順に交流し合っていくことで、自らの既有的の考えを強化したり多面化したりすることができるように活動を連続して設定することである。

3 具体的構想

● 情報を比較・評価する活動を位置付けた授業づくりの教材選定・課題設定の視点

情報選定の視点

- ア 教材文の筆者の主張と他の教材文の関係性（賛成・反対、補完・包含等）が明確に表れているもの
- イ まとまりと結論がはっきりした論構成の筆者の文章

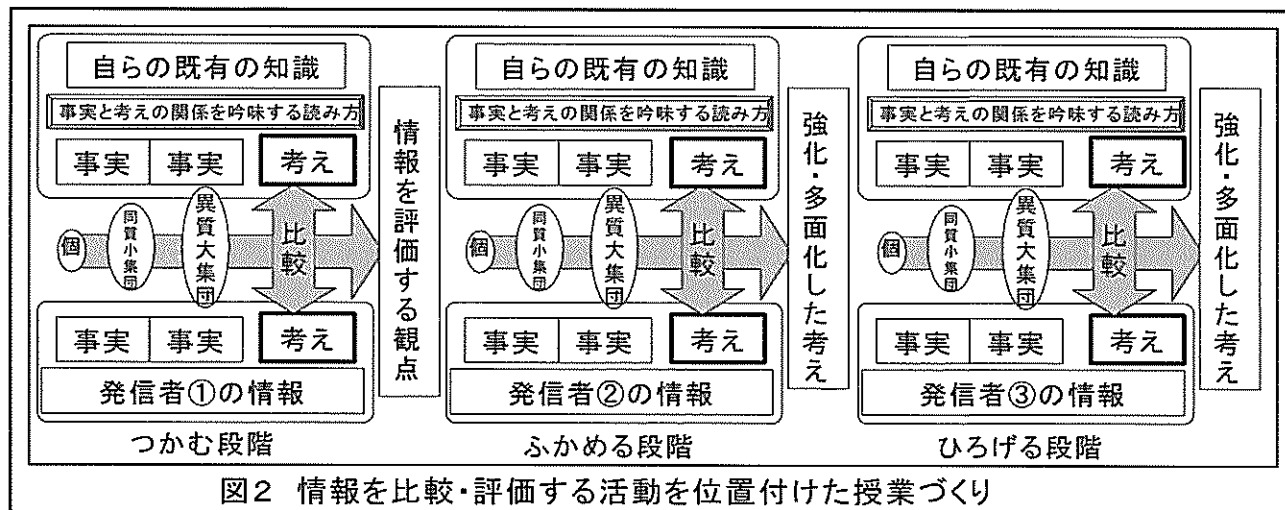
情報の提示順序の視点

- ア 文章の内容・構成が易から難の順に提示する。
- イ 子どもの既有的の見方・考え方が徐々に補完され、完結していくように提示する。

課題設定の視点

- ア 子どもの見方・考え方、これからの生き方に根ざし、追究する価値のあるもの
- イ 筆者と子どもの見方・考え方のズレ、子ども相互の見方・考え方のズレが生じるもの
- ウ 多様な方向に応えを見出す可能性をもつもの

● 情報を比較・評価する活動を位置付けた授業づくりの活動構成



4 指導の実際

第5学年 単元「読み比べて考えよう ～地球のためになすべきこと～」

(1) 目標

- 1 「地球環境と人類とのかかわり」についての自らの考えを明らかにしたいという目的をもって、環境問題についての情報や教材文を観点をもって読み比べ、友達との交流をもとに「地球環境と人類とのかかわり」についての自らの考えを深めたり広げたりしようすることができる。
- 2 教材文の筆者が取り上げる事例と感想、意見などとの関係をおさえる読み方を習得・活用しながら要旨をとらえるとともに、「まとまりの中のつながり」「まとまりとまとまりのつながり」「結論の具体性」という3つの観点で情報を価値付け、「地球環境と人類とのかかわり」についての自らの考えを強化・多面化することができる。

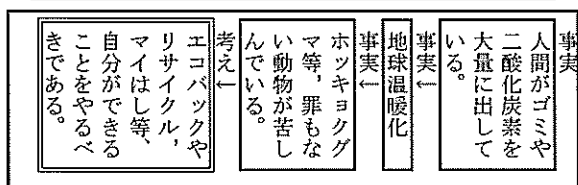
(2) 単元の考え方

- 環境問題に関するＴＶ番組の情報から「地球環境と人類とのかかわり」についての追究課題を生み出し、情報を比較・評価する活動を位置付け、教材文「エネルギー消費社会」、副教材「人類よ、宇宙人になれ」を①事例の中のつながり（整合性）、②事例と事例のつながり（妥当性）、③結論の有効性（具体性）という３観点で評価する。
- それぞれの情報を比較・評価する活動においては、情報に対する考えの傾向が同じ小集団で意見を付加・強化したのちに、考えの傾向が異なる大集団へと発信し合い、考えを再構成する活動を位置付ける。

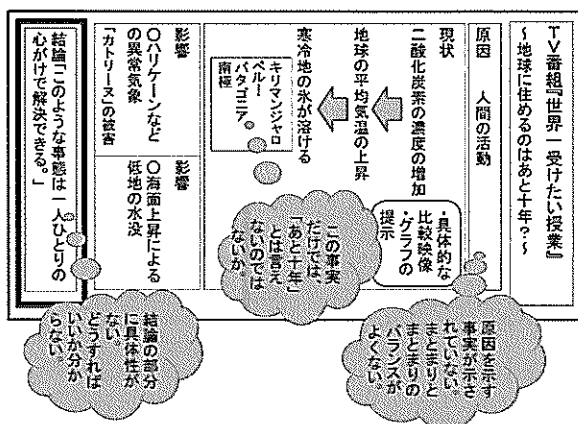
(3) 学習の流れ

つかむ段階： 1～2/10時

環境問題に関する情報を評価する3つの観点
点を明確にもち、読み比べていく課題をもつ。



資料1 M児の環境問題についての考え



資料2 TV番組の情報から評価の観点をもつ

つかむ段階では、環境問題についての自らの考えを明らかにし、TV番組『世界一受けたい授業～地球に住めるのはあと10年?～』でアル・ゴア氏が主張する「一人一人の心がけで地球を救うことができる」という考えと比較することを通して、『地球のために「一人一人が心がけること」とはどういうことなのか、文章を読み比べて考えよう。』という課題をもつことをねらいとしている。

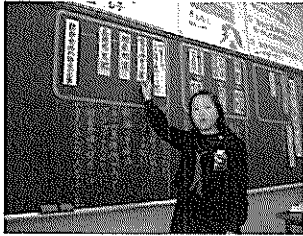
【教師の支援】

- ※ 「自分が知っている環境問題の事実」と「どうするべきか」の2点を明らかにして、個で考えを書きまとめ、全体で交流する活動を設定した。
- ※ TV番組『世界一受けたい授業』を視聴し、「情報を比較・評価する活動」を位置付けた。
- ※ 環境問題について書かれた2つの説明文の題名に出合わせ、内容を予想したり一読後の感想を交流し合ったりする活動を位置付けた。

【子どもの様子及び考察】

- 環境問題についての初めの考えを明らかにさせ（資料①）、ＴＶ番組のアル・ゴア氏の主張との比較交流を位置付けたことで、人類がすべきことは何かを考えていく必要感をもたせることができた。また、説明文を読んでいく際の３つの観点を見出すことができた。

『エネルギー消費社会』を「整合性」「妥当性」「具体性」の3つの観点で価値付ける。



「電気冷蔵庫」の事例
は、「社会全体の努力」に
つながらないと思うです
けど、どう考えればいいの
か、みんなの意見を聞きた
いです。

T: 「電気冷蔵庫」の事例は「地産地消」「長持ち文化」とは違う意味がありそうですね。前の単元で事例と事例の関係を見ると、接続語に気をつけましたね。ここでは、どんな接続語が使われていますか。

C: 「例えば」「しかし」「また」になっています。

T: 「電気冷蔵庫」と「地産地消」「長持ち文化」の事例はどういうつながりかな。

T児: 「電気冷蔵庫」は3つめのまとまりのなかでエネルギーをかしこく使う例になっています。

R児: 「電気冷蔵庫」は「科学の発展の事例で、「地産地消」「長持ち文化」は「社会全体で取り組む事例」になっている。

人間がゴミや二酸化炭素を大量に出している。	事実←	地球温暖化	事実←	消費社会のデメリット、長持ち社会のメリット	考え←	エコバックやリサイクル、マイはし等、自分ができることを社会全体でやるべきである。
-----------------------	-----	-------	-----	-----------------------	-----	--

ひろげる段階：9～10/10時

自分の考えと比べながら、環境問題に関する他の情報に読み広げる。

わたしは初め、「エコバックなど、できることは一人一人がしっかりとやってくる一人一人が大切」という考えでした。

初めのアル・ゴア氏の情報は、温暖化というテーマで共通した事実をいくつも取り上げて説得力を増しているように思いました。そして、「エネルギー消費社会」は、社会全体で取り組むという結論に、体性があつて、みんなで取り組むものというわたしの考えを共通するものがありました。三つめの「人類が宇宙人になれ」は、結論の具現性という点でうまくなかつたけれど、事実はどうかなと思つていて、いざ地球のエネルギーを使い尽くしてしまう前に、人類が宇宙に進化の道をとるという考えに納得しました。

環境問題は、まずは一人一人が自分の行動に責任をもち、できることはやること。そして、社会全体や宇宙にまで視野を広げていくことが大切だと思います。

【全体考察】

◎ 単元の導入に、TV番組に出合わせたことで、文章を価値付ける3つの観点を生み出すとともに、他の文章を読みたいという思いをもたせることができた。また、教材文「エネルギー消費社会」を、3つの観点で価値付け、個から同質小集団、学級全体へと交流を広げていったことで、「電気冷蔵庫」の事例と「社会全体で取り組む」という筆者の主張をつないでとらえ、考えを多面化することができた。同様の観点で、環境問題についての情報に読み広げ、情報を比較・評価する活動を位置付けたことで、さらに考えを多面化することができた。

【教師の支援】

- ※ 筆者の主張を価値付ける3つの観点で、個で評価する活動を位置付けた。
- ※ 個の評価をもとに、同質グループを編成し、(代表者提案)→(質疑一応答)→(付加一挿入)→(意見)という手順で交流し合う場を位置付けた。
- ※ 同質グループからの意見を全体に提案し合い、文章の価値を共通理解する場を位置付けた。

【子どもの様子と考察】

○ 写真1、資料3のように、「電気冷蔵庫を開発することはある一部の人の努力のことなのに、どうして地産地消・長持ち文化のまともに入っているか分からない」というM児の提案をもとに、学級全体で交流することで、社会全体で取り組むという筆者の主張を確かにとらえることができた。

○ 資料4のように、筆者の考えに納得したM児は、「自分ができることをやるべきだ」という学習前の考えを、「自分ができることを社会全体で取り組むべきだ。」と変容させ、考えを多面化することができた。

ひろげる段階では、環境問題に関する教材文「人類よ、宇宙人になれ」に読み広げ、既有的な考えと比べながら初めの考えを見直すことをねらいとしている。

【教師の支援】

※ 『人類よ、宇宙人になれ』という環境問題に関する情報に出合わせ、3つの観点をもとに個で情報を価値付け、同質小集団から学級全体へと広げる「情報を比較・評価する活動」を位置付けた。

※ 学習後の感想として、「地球のために「一人一人が心がけること」とはどういうことなのか」書きまとめる活動を位置付けた。

【子どもの様子と考察】

○ これまで価値付けてきた観点で情報を評価するとともに、環境問題に関する考えの変容を自覚しながら、考えそのものを多面化することができた。

○ 社会科学学習の構想

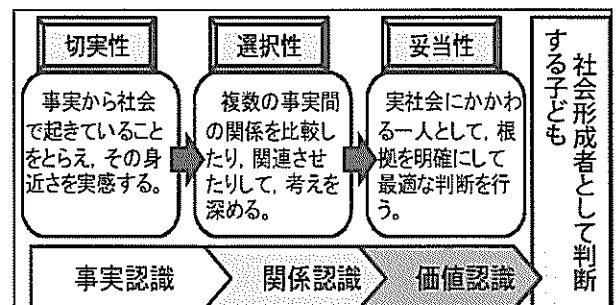
社会形成者として判断する社会科学学習

○ はじめに

社会科が究極的なねらいとしているのは、先人が築いてきた文化としての社会のしくみを受け継ぎ、刻々と変化する社会の中で、他者と共に生きる人間として必要な公民的資質の基礎を身に付けることである。現代社会はグローバル化、規制緩和の進展などで社会経済システムが短期間に激変し、様々な価値観が生まれては消えていく社会である。人々はあふれる情報が生み出す、多種多様な価値観の中から、激変する社会の将来を見通し、自分や集団の行為を選択しなければならない。そのような社会において身に付けるべき公民的資質とは、将来にわたって持続可能な社会をめざし、多様な価値観を理解するための多面的な見方や考え方をもち、他者と協調しながら主体的に判断したりして実社会に参画する資質や能力であると考え。そのためには、現実に行き起こっている社会事象を知ることや、事実間の関係をとらえることによって人々が築いてきた社会のしくみを理解することはもとより、将来の社会を予測し、よりよい判断をしようとする子どもを育てる必要がある。このような、実社会から学習問題を設定し、実社会とのかかわりを深めながら社会のしくみをとらえ、社会向上をめざすことが社会科における豊かな学びであると考え。

1 主題について

社会形成者として判断するとは、社会のしくみを理解し、その維持や向上をめざして、主体的に働きかける考えをもつということである。そのためには、情報から事実を知り、事実と事実の関係をとらえ、社会事象の因果関係を把握するなかで将来を予測し、身に付けた知識を活用して問題解決の方途を探る必要がある。めざす子どもの姿としては問題の解決にあたり、①自分の日常生活や将来の生活にかかわっていることに気づき、その身近さや問題の深刻さから切実感をもち



【図1 社会形成者として判断する子どもの高まり】

って考えようとしている姿、②収集した複数の情報を選択して実社会のしくみや事象の因果関係を推理し自分の考えをつくる姿、③他者と考えを比較して適切な解決策を吟味する姿となる。

社会形成者として判断する社会科学学習とは、切実感のある問いの解決に向かって必要な情報を選択、活用し、考えを深めるなかで社会の一員としての自覚をもち、よりよい社会をめざそうとする態度を培う学びの構想である。そのためには、社会事象に対して積極的にかかわるための場を設定し、その中で必要な情報を収集し、分析する活動を段階的にしくむことで、自他のもつ情報を交換したり、考えを吟味したりする学習を行う必要がある。

- 実社会と自分のかわりに気づき、集団で解決したい問いをつくり出すことができる子ども（学ぶ意欲）
- 多様な情報を集め、比較、関連、統合などの分析を行い、自分の考えを深めることができる子ども（能力）
- 観点を明らかにして他者の考えと比較しながら、自分の判断に自信をもつことができる子ども（自信）

～シミュレーション活動を位置付けた授業づくり～

高 瀬 雄 大

2 副主題について

シミュレーション活動とは、実社会におけるある状況を一定の条件下で変容させた際の結果を吟味することでよりよい考えを生み出す活動のことである。

シミュレーション活動を位置付けるとは、問題を発見する段階、問題から課題に高まる段階、課題を自己解決する段階の各段階ごとにシミュレーションをし、考える立場を変えることで情報を収集・分析を繰り返して問題解決に必要な知識を習得し、社会的思考力や判断力を高めるということである。

シミュレーション活動を位置付けた授業づくりとは、解決の必要を感じる社会事象を取りあげ、自他の意思決定を吟味しながら社会的思考力、判断力を高めることをねらいとする学習構想である。そのためには、シミュレーションを行うための状況を設定したり、その状況を子ども自身がとらえることができる情報収集の場を設定したりして、子どもの思考を深めることができるようにする必要がある。

3 具体的構想

● 情報を収集し、思考のネットワークを図る教材化の条件

実社会とのかかわりを深め、社会形成者としての判断ができるシミュレーション活動を行うためには、考える必然性を生み出し、自分の考えを根拠づける確かな情報をもとにして、より現実に近い状況での判断を行う必要がある。そのために、以下の3点から教材化を行う。

- 【切実性】身の回りや地域で起きている事象、最近変化が激しい事象、深刻な社会問題などを取りあげる。
- 【選択性】直接体験や取材活動などを繰り返し、考えの根拠となる情報を複数集めて選択する。
- 【妥当性】意思決定場面をし、その判断規準を明確にして意見の交流を行う。

● シミュレーション活動の条件について

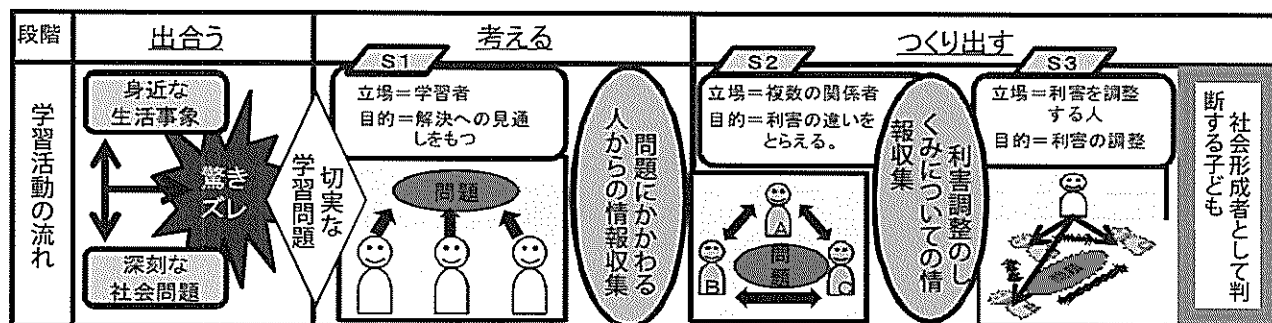
1 現実に起きている出来事を取り上げる。

どこで、いつ、どのような人たちがかかわっているのかを具体的に設定することで、学習することの意味をもたせ、主体的な学びの態度を高めることができる。

2 想定された状況での検討を行う。

自分たちの判断がどのような結果を生み出すのかについて検討を加えることで考えの不十分さが明確になり、判断材料となる情報を収集する必然性を生み出し、追究活動が連続発展する。

【図2 シミュレーション活動を位置付けた単元構成】



第6学年 小单元「きちんととめチャリ ～違法駐輪問題から考える福岡市の政治～」

(1) 目 標

- 1 唐人町地区の違法駐輪問題の解決に向かって、利用モラルの低下が問われている自転車利用者の一人として意欲的に追究し、自分達の生活をよりよくする政治の働きについて考えようとする事ができる。
- 2 商店街内の違法駐輪自転車を解決する方法をさぐるシミュレーション活動を繰り返し行い、自転車利用者、周辺住民、商店主、市役所の立場を通して考え、市民の要望に応える政治のはたらきのよさを判断することができる。

(2) 小单元の考え方

- 本小单元は、福岡市全域で社会問題となっている自転車の違法駐輪を取りあげ、駐輪場の建設について考えるシミュレーションを繰り返し、政治の働きがどのように機能しているのかをとらえさせていく。

(3) 学習の流れ

出合う段階：1～3/11時

唐人町商店街の違法駐輪が深刻な状況に出合い、解決の方法について話し合う。



資料1 駐輪場の整備と違法駐輪の増加を比較



駅に近いところほど、違法駐輪の自転車が多いね。

写真1 唐人町での現状を調査する様子

考える段階：4～8/11時

商店街の違法駐輪にかかわる人の立場で駐輪場の場所を検討するシミュレーションを行う。

出会う段階では、福岡市が駐輪場の整備を進めているにもかかわらず、解決しない違法駐輪の問題を理解し、解決の必要性を感じることをねらいとしている。そのために、5年前に日本一違法駐輪が多い場所だった天神地区が市の政策で減少したことと、唐人町商店街では逆に増えていることを比較させた。

【教師の支援】

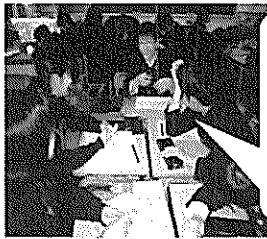
※ 福岡市が違法駐輪の自転車が他地域よりも多いことを総務省の統計からとらえさせた。

※ 唐人町商店街を見学し、違法駐輪が多いことに気付かせ、その理由を話し合う場を設定した。

【子どもの様子及び考察】

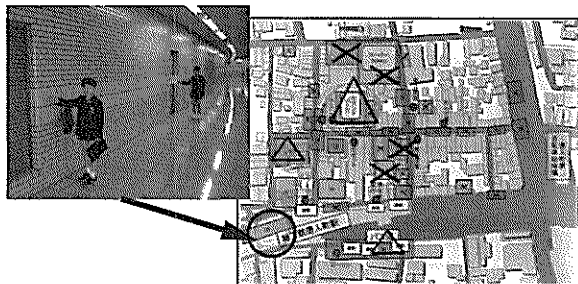
- 写真1のように、駅周辺の整備と撤去の強化が進んだため、商店街内の違法駐輪が増えたことに気付くことができた。
- 歩行の妨げになっていることや、駐輪場に空きが多いことから解決の必要性を感じる事ができた。

考える段階では、商店街の違法駐輪を減らしてほしいという住民の願いをかなえる方法を考えることをねらいとしている。そのために、自転車利用者や歩行者、お店の人の立場で解決策を考えるシミュレーションを行った。



唐人町駅は博多、天神の次に利用者が多いから、駅の地下通路につくることが一番いいと思うよ。

写真2 シミュレーション2の様子



資料2 駐車場の場所について判断したA児の学習ノート(写真はその場所)

つくり出す段階：9～11/11時

福岡市議員の立場で駐輪場建設の是非を問う議会をシミュレーションする。



唐人町駅には、もう一つ駐輪場をつくるべきです。ドームでのイベントが多くあり、住む人にも来る人にも必要です。

写真3 駐輪場建設に賛成するA児

多くの人が唐人町にやってくるのだから駐輪場を整備して歩きやすい街にすることは全体の利益につながると思います。

資料3 学習後のA児の感想

【教師の支援】

- ※ 商店街とその付近で駐輪場に望ましい場所を調査させた。
- ※ 自転車の利用者、歩行者、お店の人の立場で選んだ場所を検討するシミュレーションを行った。

【子どもの様子と考察】

- 商店街で駅に近い場所や空き地の状況を調査したり、歩行者にインタビューをしたりして、地図上で検討した場所のうち、どこが利用率が高くなるかを考えることができた。
- 資料2からは、子どもによって選んだ場所が異なることがわかる。これは、立場によって希望する場所が異なるためであり、実社会において利害が衝突する現実をとらえることができたと考える。

つくり出す段階では、多くの住民の願いをかなえるために総合的に判断している市の働きをとらえることをねらいとしている。そのために、議員の立場で駐輪場建設の是非を問うシミュレーションを行った。

【教師の支援】

- ※ 唐人町商店街付近に税金で駐輪場を建設した場合、市全体の利益になるかをシミュレーションした。

【子どもの様子と考察】

- 各区の要望を実現させる議員の立場で考えさせることで、近隣住民だけに利益があるから反対の意見と、多くの市民が集まる場所なので賛成の意見が対立した。
- 資料3からは、公共性の面で賛成していることがわかる。これはA児が駐輪場が多くの市民の利益になると判断したからである。

【全体考察】

◎ 違法駐輪問題を解決するために、立場が異なる人の願いに寄り添いながら商店街周辺に駐輪場を建設する場所を決めるシミュレーションから市民の願いをかなえる議員の立場で駐輪場建設の是非を検討するシミュレーションを繰り返し行い、周辺住民の立場から建設場所を判断した上で、より広い視野で判断することができた。今後は、グループごとにシミュレーションを行い、その結果をお互いに検討するなど考えをつくり出す場を増やし、学び合いがより活性化する活動のあり方を考えて行きたい。

○ 算数科学習の構想

筋道立てて数理を創造する算数科学習

○ はじめに

現代社会においては、単に知識（情報）を取り入れるだけでなく、多くの知識の中から必要な知識を取捨選択し、組み合わせたり選択したりする思考力・判断力・表現力の育成も求められている。算数科における思考力・判断力・表現力とは、主に、①問題事象を分解して既習と結び付け、その表現・処理の方法を形式的にとらえる力、②多様な解決方法から便利な解決方法を見つけ出したり構造化したりする力の2つが考えられる。算数科においては、既習の知識・技能や数や量についての見方などを用いて新たな問題解決を連続的に行うことが多い。しかし、単純化された数理であるからこそ、単純に適用するだけに終わってしまうことも多い。そこで、「豊かな学びを育む」ために算数科が担う役割は、知識・技能を単純に適用するだけではなく、複雑な問題状況において知識・技能や見方・考え方を組み合わせて応用する論理的な思考力の育成であると考えられる。新学習指導要領においては、算数科では、解決方法が多様に考えられる学習場面には、「説明する活動」が示されている。これは、自分の解決方法を友達に表現する場面を位置付け表現力を高めることもねらいの一つにしていると考えられる。したがって、これからの算数科では、思考・判断したことを表現することを通してさらに新たな数理を創造していくことが求められている。

1 主題について

筋道立てるとは、新たな問題事象に出合ったとき、既習に帰着させて解決方法を見通し、出てきた解決方法や結果を共通性や数理的なよさの観点（簡潔・明瞭・一般）からまとめたり順序付けたりすることである。

筋道立てて数理を創造する算数科学習とは、問題事象の内容や状況が変わっても、既習の数理の内容をもとに解決方法や結果の見通しをもち、進んで問題解決に取り組みながら、複数の数理を組み合わせで演繹的に問題を自力で解決させ、さらにその解決方法を集団解決の中で交流しながら、数理的によりよい処理方法や表現方法へと高めていくことである。

まず、個人での自力解決において、複数の数理を組み合わせで多様な解決方法をつくり出すことができるようになるためには、友達との解決方法の交流によるアイデアの共有が大切になってくる。友達の解決方法を自分の解決方法として使いこなすことができるようになるには、友達に自分の解決方法をわかりやすく表現し伝達し合うことが必要である。そのための条件として、対話の状況が生まれる小集団での交流活動が挙げられる。次に、集団解決の中で、数理的によりよい処理方法や表現方法へと高めていくための条件として、友達に対して自分が「複数の解決方法の中から選び出したよりよい解決方法はこれだ」という理由を説明し合う活動が必要となってくる。

- 問題解決に対する方法や結果の見通しをもち、複数の問題事象を進んで追究する喜びを感じる子ども（学ぶ意欲）
- 複数の知識・技能や見方・考え方を組み合わせ、問題解決の過程を筋道立てて説明できる子ども（能力）
- 複数の解決方法を身に付け、問題事象に対する自分の高まりを実感する子ども（自信）

～解決方法を分類する活動を位置付けた授業づくり～

田 中 健 悟

2 副主題について

解決方法を分類する活動とは、4～5名程度の小集団で行う解決方法の共有と整理を目的とした活動のことである。この活動では、個々の解決方法について、説明し合ったり、聞き合ったりした後、解決方法を小集団の中で仲間分けして整理していく（小集団内での知のネットワーク化）。この活動によって、子どもたちは自分の気付かなかった友達の解決方法に含まれる数理の組み合わせ方に気付きやすくなり、新たな解決方法の創造につながると思う。

解決方法を分類する活動を位置付けた授業づくりとは、個々の子どもたちが考え出した多様な解決方法を小集団で出し合い、それらを仲間分けして分類し、数理的なよさの観点から順序付けする活動を、単元を通して繰り返し取り入れ、自分の数理として使いこなす力を高めていくものである。そして、2単位時間程度の学習過程の中では、小集団でネットワークされた知をさらに学級全体で出し合い、多様な考え方を深めていく。

3 具体的構想

● 友達の知とのネットワークを生み出す教材化の条件について

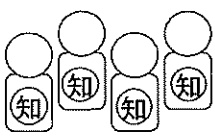
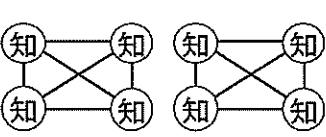
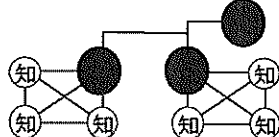
教材化にあたっては、友達に対して表現する喜びや、逆に友達の考えを理解して真似たり付け加えたりして創造する喜びが必要である。そこで、教材化では、次の3つの条件を満たすようにする。

- 【多様性】子ども独自の多様な解決方法が導き出され、交流する楽しさが含まれるもの
- 【表現性】解決方法の筋道がやや複雑で、解決方法の説明が絵図表現と言語表現で理解が可能になるもの
- 【創造性】複数の数理を組み合わせる中でオリジナルの方法を創造できるもの

● 解決方法を分類する活動を位置付けた活動構成について

「小集団での交流活動」を通して、知のネットワーク化が図られるように、次のような3つの活動を設定する。

【表1 小集団での交流活動の過程「説明する活動→分類する活動→選び出す活動」】

	説明する活動	解決方法を分類する活動	解決方法を選び出す活動
活動	① 一人一人が多様につくり出した解決方法を、小集団の中で友達に説明する。	② 小集団の中で説明し出した解決方法を、考え方の共通性をもとに分類し、整理する。	③ 小集団でまとめた解決方法で、数理的なよさの観点からよりよいものを選び出す。
知の状態			

また、単元では、次のような活動構成の中で、小集団から全体交流へという流れを繰り返して位置付ける。

【表2 小集団での交流活動を位置付けた単元の活動構成】

	見いだす段階	試みる段階	広げる段階
学習活動	1 学習対象に出会い、単元の課題を設定するための話し合いを行う。 ○ 課題と見通しの設定	2 各学習対象に対して自力解決活動と交流活動を繰り返しながら、数理を追究する。 ○ 解決方法の習得・適用	3 これまでに創造してきた解決方法を組み合わせ、複雑な問題事象を解決する。 ○ 解決方法の創造
形態	個 → 全体	個 → 小集団 → 全体	個 → 小集団 → 全体

第5学年 単元「土地をリフォームして未来の街をつくろう! (図形の面積+立体)」

(1) 目 標

- 1 土地のリフォームと立体図形の製作による未来の街づくりの活動において、三角形や平行四辺形、ひし形、台形、多角形などの図形の求積及び、それらを底面にもつ立体図形づくりに意欲的に取り組むことができる。
- 2 面積に関しては、様々な図形の面積を求めたり、同じ面積をもつ様々な図形に置き換えたりすることができる。
また、立体に関しては、底面と側面との関係を中心に構成要素の面から考察し、立体図形をつくることことができる。

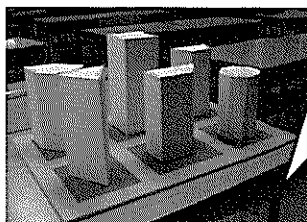
(2) 単元の考え方

- 土地のリフォーム（区画整理）による未来の街づくりを教材化することによって、面積の学習が実生活・実社会の中で使われていることに気付かせるとともに、三角形や平行四辺形やひし形、台形などの図形を求積する場面では、言語活動の充実を図りながら、それらの解決方法を分類し関係付け、使いこなす力を高めていく。

(3) 学習の流れ

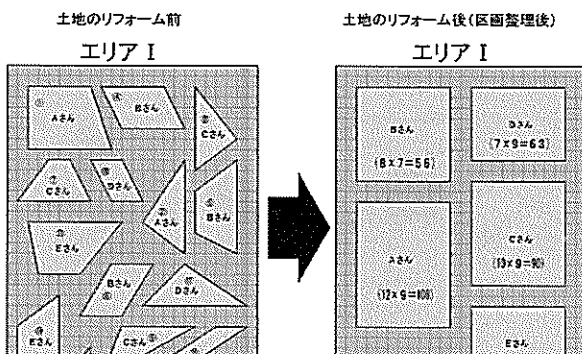
見いだす段階：1～3/15時

未来の街の模型と土地の区画整理の問題に出合い、区画整理の問題について話し合う。



未来の街ってきれいだな。土地はどうやって整備する仕組みなのかな。

写真1 土地を区画整備した未来の街の模型



資料1 土地のリフォームの前後を比較

試みる段階：4～10/15時

土地のリフォームの課題で、三角形や台形や多角形などの図形の求積方法を調べる。

見いだす段階では、土地のリフォームに関する学習課題を設定するとともに、土地のリフォームの問題を解決していくための簡単な見通しをもつことをねらいとしている。そのために、未来の街の模型の観察、区画整理の前後の比較、平行四辺形の土地の区画整理を行った。

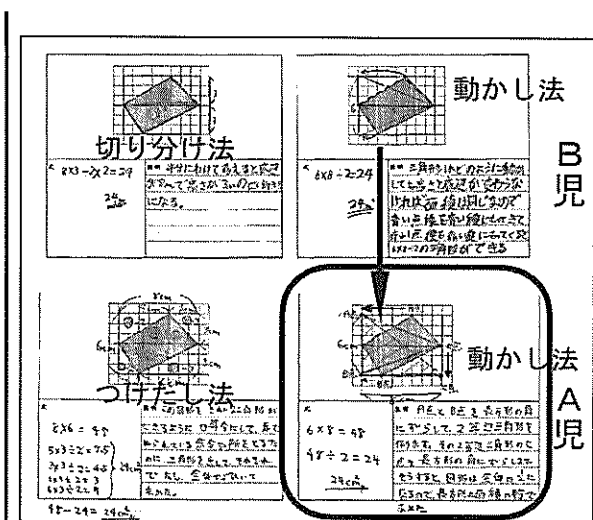
【教師の支援】

- ※ 未来の街の模型に出合わせ、学習のゴール像を見通させる場を設定した。
- ※ 土地のリフォーム前と後の比較から学習課題について話し合う場を設定した。
- ※ 最初に平行四辺形の土地の面積を追及させた。

【子どもの様子及び考察】

- 土地のリフォームや立体図形づくりに必要な学習内容に対する見通しをもつことができた。
- 平行四辺形を変形し、求積方法を創り出すことができた。これは、マス目入りの平行四辺形の図形カードを操作させたことが有効に働いたからだと考える。

試みる段階では、三角形や多角形の求積方法について、図形の変形操作を中心に追及し、求積方法を構造化することをねらいとしている。そのために、図形カードの操作と、多様な解決方法を分類する活動を設定した。



資料2 友達の方法(上)を活用したA児のノート



写真2 小グループでの交流と分類する活動の様子

広げる段階：11～15/15時

エリアⅠとエリアⅡの土地をリフォームし、
立体を作成して未来の街を完成させる。

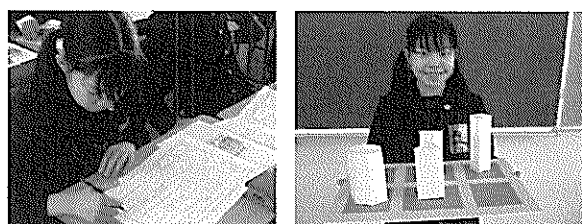


写真3 土地をリフォームし街を完成させたよ

私は、面積を求めるだけで私たちでも土地をリフォームするという大人の方がするようなことができるんだとびっくりしたし、ちょっぴり大人の気分になりました。また、何回も計算して公式を見つけたときは、達成感がありました。

資料3 学習後のA児の感想から

【教師の支援】

※ 三角形→台形→四角形→五角形といったように、
追究対象を変化させながら、小グループで解決方法を分類する活動を繰り返し設定した。

※ 解決方法を分類する活動は以下の条件で行った。

- ① 発表カードを使った考えの理解を図る活動
- ② 解決方法を分類し整理する活動
- ③ 分類した中で、解決方法として簡潔なものを話し合い、選び出す活動

【子どもの様子と考察】

○ 資料2のように、友達の求積方法を活用して新たな求積方法を考えることができた。これは、小グループでの交流で、求積方法を「切り分け法」「つけたし法」「動かし法」といったように、分類し関係付けする活動を位置付けて、変形のアイデアの見通しを常にもたせ続けたことが有効に働いたからだと考える。

広げる段階では、様々な図形の土地をリフォームし、これまでの求積方法を総合的に活用することをねらいとしている。そのために、未来の街づくりの場を設定した。

【教師の支援】

※ 2通りの土地（エリアⅠとエリアⅡ）のリフォーム（面積を求めて足し合わせ、その面積を保ったまま長方形の土地に変形し整備すること）を行う活動を設定した。

※ 建物として立体図形をつくる活動を設定した。

【子どもの様子と考察】

○ エリアⅠとⅡにおける様々な図形の面積を求め、土地の区画整理を行い、未来の街を完成させていった。
資料3からは、実生活・実社会のつながりから見た面積の学習の価値を捉えている。これは、土地のリフォームという課題設定が有効に働いたからだと考える。

【全体考察】

◎ 土地のリフォームという学習課題の中での面積の求積の場面において、子どもたちは、様々な図形に対し多様な求積方法を考え出したり、友達の求積方法に付け加えたりしてオリジナルの求積方法を創造したところに、筋道立てて数理を創造する姿が表れていると考える。これは、解決方法を分類する活動において友達と求積方法のアイデアを交流したり、アイデアを分類したりしたことが様々な図形の面積を求める上で有効に働いたからだと考える。課題としては、60分授業などの時間配分の工夫や小グループでの交流における細かな支援が必要であった。

～図や式で説明する活動を位置付けた授業づくり～

島 川 二 郎

2 副主題について

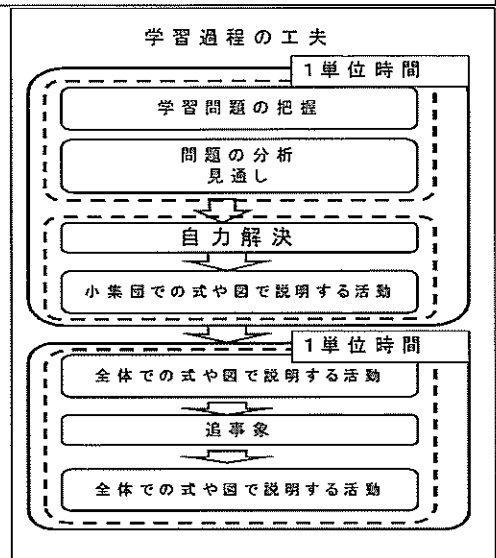
図や式で説明する活動とは、解決方法を表した図のよさを検討したり、式に表わされている解決方法を簡潔・明瞭・一般の観点から検討したりして、自分なりの根拠をもって解決方法の価値を話し合うことである。

図や式を説明する活動を位置付けた授業づくりとは、解決方法と事象、解決方法と図を結びつけ、解決方法の価値を話し合う活動を小集団と全体で行うことである。小集団では図に表した解決方法を解釈し、それぞれの解決方法を比較し、違いを明確にして解決方法の価値を話し合う。ここでは図を中心に話し合うこととする。次に全体では、解決方法を図に表すことではっきりしたことや式の特徴から今までの学習とのつながりをとらえ直すなど、簡潔・明瞭・一般の観点でより価値ある解決方法を話し合う。

3 具体的構想

● 図や式で説明する3つの活動を位置付けた2単位時間セットの学習過程

図や式で説明する活動を位置付ける学習過程を、2単位時間で構成する。はじめの1単位時間では、まず導入段階で、問題を把握、分析し、解決の見通しをもつようにする。次に展開段階では、見通しをもとに自力解決をする。そして終末段階で、式や図で説明する活動を小集団で行う。ここでは、創り出した考えがめあてにあっているものかを検討し、それぞれの解決方法の違いを図を中心に話し合うようにする。次の1単位時間では、導入段階で、全体での式や図で説明する活動を行う。式の説明をした後に図を説明することで、図と式を関係付けて解決方法の価値をとらえることができるようにする。次に展開段階では、とらえた解決方法の価値をもとに追事象に取り組み、考えを創り上げていく。そして終末段階で、全体での式や図で説明する活動を行い、とらえたものを確実なものにする。



【各段階での図と式を説明する活動】

● 小集団と全体での図と式で説明する活動

小集団の構成人数を3から5人にし、まず自分の考えを創り出すときに図をどのように操作したかを、発表者が示す。次にメンバーで図に合う数量や式になっているかを検討していく。最後に、小集団のメンバーがつくった解決方法を比べ、めあてに沿った解決方法になっているかを検討し、

めあてにあったものを選んでいく。次に全体では、代表児の解決方法を発表し、解決方法のよさを検討していく活動を仕組む。式に含まれている関係を比べたり、図の特徴を比べたりしながら、解決方法に含まれる価値を見出していく。そして追事象に取り組むことで、式や図に含まれる価値を全体で共有していく。

小集団	学級全体
① 創り出した解決方法の説明 ② めあてに沿った解決方法であるかの検討 ③ グループのメンバーの解決方法の比較 ④ グループを代表する解決方法の選定	① 代表児の解決方法の説明 ② 式や図に表れている解決方法のよさの検討 ③ 式や図に表れている解決方法の特徴の取りだし ④ 解決方法の価値の検討 ⑤ 追事象に取り組んだ後に解決方法の価値の共有

【小集団と全体での式や図を説明する活動】

4 指導の実際

第4学年 単元「お菓子屋さんになって商品開発しよう（式と計算）」

(1) 目標

- 1 問題事象に対し、思考を働かせ、四則混合の式をつくったり、() 内先行や乗除先行の計算の順序に着目したりしながら、1つの式で表す方法を調べることができる。
- 2 具体的な数量の関係を式の形にまとめて考え、簡潔に表すことのできる式のよさをとらえることができる。

(2) 単元の考え方

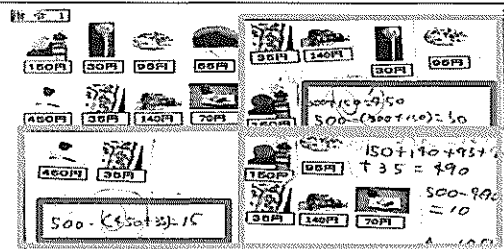
- お菓子の組み合わせの仕方や詰め方を教材化することによって、具体的な事象と数量や式を結びつけ、多様な見方ができるようする。次に数量の関係を式に表すことによって、的確に商品づくりをする方法があることや簡潔にそしていつでもつくることができる方法があることに気付かせ、式に表すことのよさをとらえて解決する方法の価値をとらえられるようにしていく。

(3) 学習の流れ

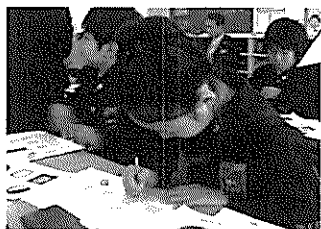
見いだす段階：1～2/7時

お菓子屋さんにある品物を把握し、おつりが少なくすむ品物の開発の仕方を調べる。

ジュース	150円	ケーキ	450円
キャンディー	30円	せんべい	35円
クッキー	95円	チョコレート	140円
まんじゅう	55円	団子	70円



資料1 商品(上)と絵図を使ったK児のノート



団子とせんべいとクッキーとチョコレートとジュースの商品ができるな。

写真1 事象と解決方法を結びつけている様子

試みる段階：3～4/7時

予算1000円で2人に同じものを送ろうとしている人の要求にあう値段の詰め合わせ商品を調べる。

見いだす段階では、商品開発に関する学習課題を設定するとともに、商品開発の見通しをもつことをねらいとしている。そのために、決められた予算、家族の人数構成にあった商品の開発を行った。

【教師の支援】

- ※ お菓子屋さんにある品物と値段の写真と品物表の2つで提示し、商品作りのイメージをもたせた。
- ※ () を使った式と使わない式を提案し、多様につくり出した商品を比較・検討するようにした。

【子どもの様子及び考察】

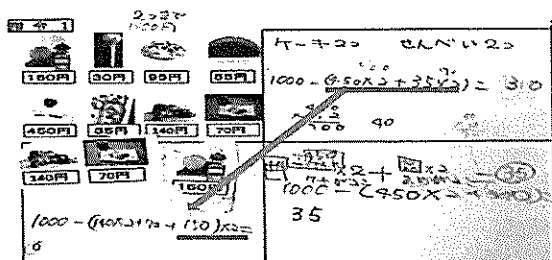
- 図を使って商品を複数つくりだし、おつりに矢印を付けて結びつけ数量や式の意味を説明していた。これは、提案者がつくった解決方法を図と結びつけ、1つの式に表すために() にまとめた方が考えを伝えやすいことに気付いたからだと考える。

試みる段階では、乗法が加法・減法より先行することを理解することをねらいとしている。そのために、予算1000円で2人に同じものを贈ろうとしている人の要求にあう詰め合わせ商品と予算1000円で2人の子どもへ贈る商



一人分が500円になるように組み合わせればできる。

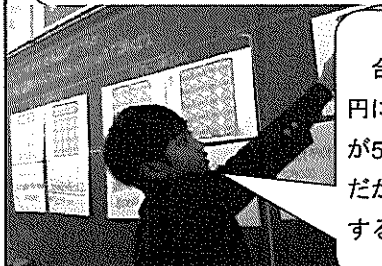
写真2 事象と数量を結びつける様子



資料2 多様な解決方法を出した K 君のノート

広げる段階：5～7/7時

決められた値段の菓子折にどういう組み合わせでいくつ入っているか調べる。



合計数がその1000
円になったら、それ
が5000円ということ
だから横だけで計算
するほうが早い



K君が言ったように、 $5000 \div 5$ をしたら、横一列が1000円だから1000円になる組みあわせをいろいろ考えるだけで、詰め合わせが5すばやくできる。



理由を聞いてそうかなと思った。横の列を考えること（横の列を考えるだけでよい）に納得しました。

写真3 全体で解決方法の価値を説明している様子

【全体考察】

◎ 視覚的にとらえることができる教材にしたことで、式や数を何度も事象や図と見比べながら、解決方法をつくることがわかった。また、図や式で説明する活動を仕組みれば、数量や式の解釈だけでなく、図と結びつけて説明しようとするのがわかった。課題としては、子どもが納得するために必要な条件を明確にする必要がある。

品の開発を行う場の設定を提示した。

【教師の支援】

※ 予算1000円で2人の友人への贈り物と2人の子どもへのお菓子の詰め合わせをつくる場を設定した。

※ 数値を商品と結びつけながら解決方法について話し合い、考えの的確さを説明する活動を仕組んだ。

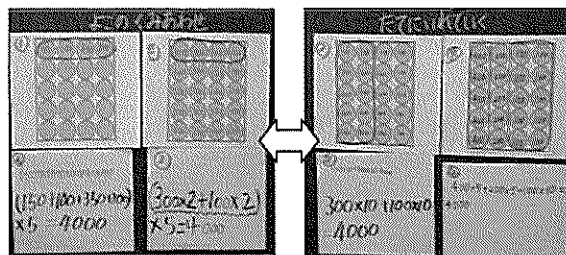
【子どもの様子及び考察】

○ 多様に商品を開発し、解決方法を比較することで、図と結び付け（ ）内先行の考えが乗除先行の考え方よりも優先することを把握することができた。これは数値を精選し、複数の解決方法を比べたからと考える。

広げる段階では、条件に合ったお菓子の詰め合わせ商品
品を、個数、お菓子の種類と配列そしてそれぞれの値段
に気を付けて開発することをねらいとしている。そのた
めに、菓子折の観察、お菓子の配列の確認、菓子折づく
りの場の設定を行った。

【教師の支援】

※ 解決方法にある数量や式を図をもとに説明し、縦向きと横の向きで考える方法を比較・検討した。



【子どもの様子と考察】

○ 式だけでできる商品をすべて作り出すことができた。

これは、資料の「5000円の商品の種類」は、「 $(150 + 150 + 300 + 400) \times 5 = 5000$ 」「 $(100 + 200 + 350 + 350) \times 5 = 5000$ 」の式になる3種類のお菓子からなるものと「 $(100 + 200 + 300 + 400) \times 5 = 5000$ 」となる4種類からなる商品と述べていることから伺える。これは縦つめ法と横つめ方を検討したからだと考える。

○ 理科学習の構想

科学的な思考を活かす理科学習

○ はじめに

理科が究極的なねらいとしているのは、自然の事象と関わる中で、子ども自らが問題を見出し、主体的に観察や実験などを繰り返し行いながら、科学的な見方や考え方を身に付けることである。今の子どもたちは、科学に対する興味・関心は高く、理科についての知識、理解も一定の水準を達成できているものの、理科で学習した内容が生活の中の事象としてあまり感じられていない。これは、理科の学習が一定の知識を覚えるためだけの学習になってしまっているからである。これからの理科学習においては、子どもたちが自然のきまりや規則について追究する中で、その仕組みの素晴らしさや発見する喜びを感じさせ、さらに科学的な見方や考え方を他のものへと広げていったり、身近な生活を見直していったりすることが必要となる。学習する中で自分の考えと他者の考えを共有しながらだれにでも納得してもらえ、考えを学び合いの中からつくり出し、自然のきまりや規則性について追究したことを適用させたり、組み合わせたりする姿が理科における豊かな学びを育む姿といえる。

1 主題について

科学的な思考とは、子どもたちが自然の事象と出合ったときに、納得できるような条件との関係付けをするために、1つの見方や考え方だけでなく、条件や対象を変えながら自然のきまりや規則性を見出すことである。科学的な思考を活かすとは、自分自身にも自信があり、友達にも納得してもらえようになった考えをもとにして、自然のきまりや規則性を使って新たな問題を解決することである。そのような考えをもつためには、1つの事象を引き起こすと考えられる条件が1つしか見つからないままでは十分とはいえない。条件を多様に考え出すことは、1つの事象に対して多面的な視点から見ることになり、また、考え出した条件の一つ一つを検証し、互いに関係付ける中でさまざまな方法を用いることになり、思考がより科学的な見方や考え方へと変わることになる。

科学的な思考を活かす理科学習とは、自然の事象と出会い、主体的に問題解決を行う過程の中で、生活の中に今まで学んだことがどのように利用されているのか、あるいは自分で身近なものをつくりかえることができるかについて調べていこうとすることである。このことによって、子どもたちはさまざまな視点から条件を考えながら問題解決を進んで行いようになり、友達と考えを出し合うことでさらに問題を見付けて観察・実験を繰り返すことで、学んだことを活かすことができる自分に対して自信をもつことができると考えた。そのためには、子どもたち自身が根拠のある仮説をもとに検証していくような自然事象の教材化や、自分と他者の見方や考え方との相違点を意識しながら多様な実験方法を考えることができるような交流活動の工夫が必要となってくる。

- | | |
|--|--------|
| ○ 自然の事象と出会い、多様な条件を考えながら問題解決しようとする子ども | (学ぶ意欲) |
| ○ 客観的な事実を得るために、友達と考えを出し合い多様な条件で実験を繰り返す子ども | (能力) |
| ○ 自分の学びを生活の中にあてはめてみたり、活かしたりすることができる自分に気付く子ども | (自信) |

～個の知見が段階的に表出する授業づくり～

今 泉 伸 一 郎

2 副主題について

個の知見とは、観察・実験等で見出した結果の考察のことである。個の知見が得られるためには、子どもが結果と方法の見通しを立てて調べる必要がある。まず、問題解決の手順をふみながら教師が必要に応じて実験方法を紹介したり、発問によって観察の視点を絞り込んだりする。そして、働きかける対象の質や量、位置関係や要因を変えて問題を解決していくように活動構成を工夫し、習得した科学的な見方考え方を活用していくようにする。個の知見が段階的に表出するとは、共通課題を子ども一人一人が探究し、①観察・実験の結果をもとに考察したことを同質グループ内で確証を得る話し合いを行い、②多様化した各グループの考察を全体交流し、自然のきまりへと一般化していくように話し合うことである。次に、同質グループ内で個の知見を相互に外化して確証を得るために考察を図で表す交流ボードを活用する。個の知見が段階的に表出する授業づくりとは、共通の課題を子ども一人一人が探究し、それらを相互に交流することで自然のきまりへと収束していく構想である。

3 具体的構想

● 教材化の工夫

○ 課題性の観点

- ・ 対象の量、形、類、位置関係等を変えたり、はたらきかける要因や条件を変えたりして自然のきまりや規則と科学的な方法を活用して解決できる課題
- ・ 科学的な見方考え方や知の統合で解決するものづくり

○ 予想や仮説・方法の多様性の観点

- ・ 生活経験の差から多様な考えの表出が期待でき、認識のズレや考えの対立が生じる対象
- ・ 定性的な解決方法や定量的な解決方法があり、子どもにとって実証可能な対象

● 活動構成の工夫と1単位時間の支援

- 多様な因子を捨象し視点を明確にする図や模型と物質の構造やエネルギーを粒子に例えて表出した図を活用する。
- 「であう段階」では、子どもが問題意識をもち、解決の手順を踏みながら自然のきまりや規則性と学び方を習得できるように事象の提示、実験方法の紹介、発問による観察の視点の絞り込みなどの支援を行う。「活用する段階」では、「であう段階」で調べた対象の量、形、質、位置関係、はたらきかける要因や条件を変えて適用して解決できる課題の設定を行う。「広げる段階」でこれまでの学びで習得した方法を活用して達成できる課題を設定する。
- 個の知見が確証を得、さらに一般化を図る全体交流へと向かう1単位時間の支援

	導 入	展 開	終 末
活 動	1 問題となる事象と要因との関係について話し合う。	2 観察・実験によって調べ、結果を処理し考察する。→同質グループでの話し合い	3 グループ考察を交流ボードを用いて全体考察を行う。
支 援	※ 自然事象とその要因についてズレや対立が予想される提示と発問 ※ 描画法による個の考えの表出 ※ 対立する考えと補完する考えを取り上げ、マトリックスで整理	※ 事象の変化に伴う要因を視覚化したり、数量化したりする工夫 ※ 予想や仮説のモデルと結果とを比較し、モデルのかき換えを行う活動の保障 ※ 個が考察する場面における助言	※ グループごとに交流ボードで考察を出し合う活動の設定 ※ 交流ボードを使って各探究グループの考察を全体交流する場の設定

第4学年 単元「進め!ホバークラフト ～電気のはたらき～」

(1) 目標

- 1 光電池に当てる光の強さなどを変えたり、乾電池の大きさや個数とつなぎ方などを変えたりして、モーターの回転数の変化と回路を流れる電流の量の違いを興味・関心をもって探究できる。
- 2 光の強さと光電池の電流の強さを関係付けてとらえるとともに乾電池のつなぎ方による回路を流れる電流の大きさとモーターの回り方を関係付けてとらえることができる。

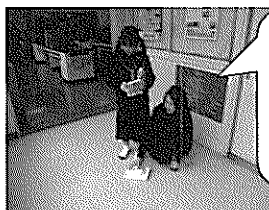
(2) 単元の考え方

- 光電池や乾電池で動くホバークラフトを教材化し、乾電池や光電池にモーターをつないで動かしてみる活動を通して、光電池に当たる光の強さや広さ、乾電池のつなぎ方などによる回路を流れる電流の大きさや向きとモーターの回り方と電流の強さとを関係付けてとらえ、電気エネルギーの見方や考え方について知的好奇心を高めて追究する態度を育てる。

(3) 学習の流れ

つかむ段階：1～4/10時

ホバークラフトを光電池につないで動かし、動き方の違いとその要因との関係を調べる。

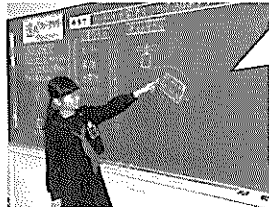


他の人と同じように作ったのに、どうして私のホバークラフトはスムーズに動かないの？

写真1 問いをもつA児

私のホバークラフトは、他の人と同じ条件でやっているはずなのに動きがよくありませんでした。比べてみるとプロペラの回る向きが反対になっていました。(中略)光電池の+極-極を逆につないでいたから電流が逆に動いたからです。

資料1 A児のノートから



ホバークラフトをパワーアップするには、光電池に当てる光の強さを強くすればいいのでは？

写真2 問いをもつA児



光電池の面積を大きくしたときの電流の大きさを簡易検流計で調べて確かめてみよう。

写真3 方法を述べるB児

つかむ段階では、モーターの回り方と光電池に当たる光の強さ、電流の大きさを関係付けることをねらう。そのためにソーラーホバークラフトづくりを位置付ける。

【教師の支援】

- ※ ホバークラフトが動かないことから、プロペラの回る向き、光電池の+極-極に着目させる。
- ※ 電流には向きがあることを伝え、そのことは簡易検流計で確かめられることを教える。

【子どもの様子及び考察】

- 資料1から、A児がモーターに光電池の+極-極を逆につなぐとプロペラが逆に回る事実認識とそれが電流の向きが原因であるという関係認識へと高まったことが分かる。これは、電流の向きを観点に話し合い簡易検流計で確かめたことが有効に働いたからである。

【教師の支援】

- ※ ホバークラフトがスムーズに動くように光電池に当てる光の強さや面積に着目させる。
- ※ 光電池の+極と-極を変えると、モーターの動きと回路の電流がどう変わるかを簡易検流計で調べる。
- ※ 仮説や考察を図を用いて表現させ、交流においてお互いの考えを共有しやすくする。

【子どもの様子及び考察】

- 資料2から光の強さとモーターの回り方を関係付けてい

光の強さを変えるために光源と光電池の長さを変えて調べました。光源から近いとモーターは速く回ったので光の強さは関係あります。次は電流の大きさを検流計を使って比べてみたいです。

資料2 A児のノートから

活用する段階：5～8/10時

乾電池を使ったホバークラフトの動きをパワーアップする問いを探究する。



写真4 乾電池の大きさやつなぎ方を変えて探究

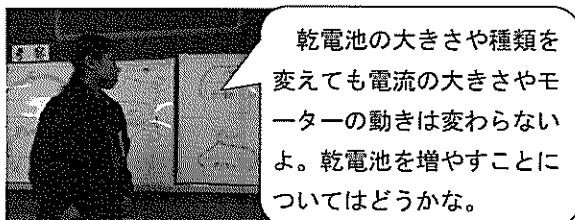


写真5 探究結果を各グループで図を用いて交流

乾電池を2個つなぐとパワーアップするかを調べました。光電池の時みたいに検流計を使うと1個よりも電流が大きくなりました。他の班での実際に動きを比べる実験で2個のほうがスムーズに動いたことから私の考えは確かめられました。

資料3 A児のノートから

ひろげる段階：9～10/10時

光電池や乾電池の使われ方と用途との関係を実生活の様々な電化製品を観察して調べる。

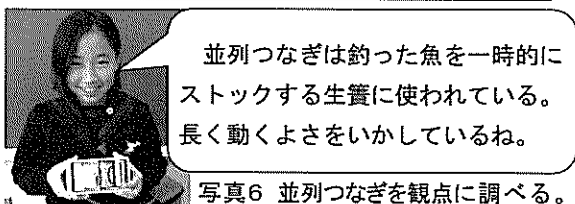


写真6 並列つなぎを観点に調べる。

わたしは、並列つなぎは長持ちすると思いました。つり用のけいたいの生簀に使われていることがわかり、考えを確かめることができました。

資料3 A児のノートから

【全体考察】

- ◎ ホバークラフト作りを単元の中心に位置づけ、スムーズに動かしたいという求めが何をどのようにという問いへと変えていくことが学びの主体性を高めた。光電池で習得した見方や考え方を乾電池へ活用できるよう単元構成を工夫したことで対象と方法を見通し、複線型の科学的な探究ができるようになった。さらに目的が同じであることが他の探究の結果を共有することになり学びを強めることができた。観察実験から得られた知見を相互に説明し合う理科の言語活動について図や言葉だけでなく、素材や実験器具を使っていくことなどの工夫が必要であろう。

ることがわかる。また、検流計で定量的に調べようとしている姿もうかがえる。これは、モーターの稼動と電流の大きさとの関係から、調べる方法を習得している姿である。

活用する段階では、モーターの回り方と乾電池の大きさ、種類、つなぎ方と電流の大きさを関係付けることをねらう。そのために乾電池を使ったホバークラフトづくりを位置付ける。

【教師の支援】

- ※ 単3乾電池1個ではホバークラフトの動きがスムーズではないことを解決する発問を行う。
- ※ 流れ図で学びをふり返ることができる環境を整備する。
- ※ 調べる対象や方法の違いによって探究する班を設け、定性的・定量的に調べた結果を交流する。
- ※ 各探究グループごとにホワイトボードで考察を図で表し相互に説明する活動を設定する。

【子どもの様子と考察】

- 資料3からホバークラフトをパワーアップする問いの解決に向け、であう段階での学びを活用し、乾電池を2個つないだときの電流の大きさを関係付けていることが分かる。また、他の探究グループの考察を補完して説明していることが分かる。これは各探究班が考察を図を表し、相互に説明する活動が有効に働いたからである。

ひろげる段階では、電池のはたらきの見方を広げることがをねらう。そこで、電池の使われ方を実生活のなかで見出していく活動を設定する。

【教師の支援】

- ※ 並列つなぎのよさを交流し観察の視点を明らかにする。
- ※ 光電池の規模や使われ方、乾電池のつなぎ方と用途の関係を視点に電化製品を観察させるようにする。

【子どもの様子と考察】

- 資料3から、並列つなぎのよさが実生活の電化製品に活かされていることを実感していることが分かる。これは、視点を決める話合いが有効に働いたからである。

～条件を組み合わせるゲーム活動を位置付けた授業づくり～

福 原 伸 治

2 副主題について

条件を組み合わせるとは、子どもたちがもった問題を解決するために、必要だと考えた条件を考えつく限り出し合い、それらを一つ一つ実証するために用いるものを考えたり、新たな課題を解決するために条件がもつ特徴を組み合わせてみることである。ここでいう組み合わせるとは、条件が問題に関係していることをより明らかにするために、用いるものを1種類ではなく複数の種類で考え出すことを示す。また、学習して得られた内容を活かしながら、新たな課題を解決するための方法を見付け出そうとすることも組み合わせるととらえる。条件を組み合わせるゲームとは、単元を通して子どもたちが解決したいと考えるような課題をもたせ、その解決方法を自分の考えや既習内容を使いながら、いろいろな観点から実証しようとするルールをもった活動のことである。明らかにしようとするための観点が多ければ多いほど、科学的な方法であると考えられ、自然のきまりや規則性を追究している姿だととらえられる。

条件を組み合わせるゲーム活動を位置付けるとは、子どもたちが判断した解決のための方法が、より多面的な視点からとらえられるように、「つかむ」段階で問いの創出をし、「さぐる」段階で習得すべき内容を追究するようなゲーム活動1を行い、「ひろげる」の段階で習得した条件を活かすことができるようなゲーム活動2を位置付けて追究した内容を具体的にゲームの中で活用していくことができるようにすることである。

3 具体的構想

● 条件の組み合わせにつながる教材選択の条件と活動の内容について

多様な実験方法を子どもたちが考え出すための具体的な条件は以下の2点である。

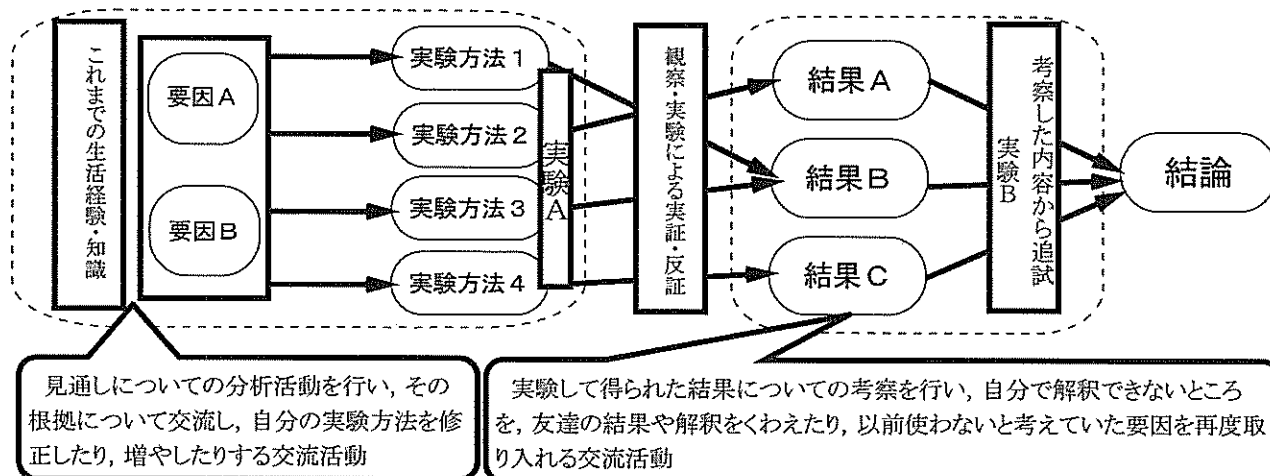
- ・ 追究する過程で、実験方法が多様に考え出しやすいもの
- ・ 比較する条件から、さらに他の関連した条件が出しやすいもの

この条件をもとにした教材化をして次のようなゲーム活動になるようにした。

＜ゲーム活動1＞：問いを創出するとともに、習得する内容を追究していくことができる活動

＜ゲーム活動2＞：ゲーム活動1で習得したきまりや規則性を新たな問題解決のために組み合わせしていく活動

● 1時間の学習過程における活動構成について



第5学年 単元「電気の力でキャッチ～電磁石の性質～」

(1) 目 標

- 1 自分が考えた実験方法を使いながら、電磁石の磁力を強くするための方法について調べようという課題意識を持ち、電磁石に流れる電流の大きさやコイルの巻き数などに着目しながら電磁石の性質を調べることができる。
- 2 電磁石の磁力を変化させる方法について実験を行い、電流の大きさやコイルの巻き数、コイルの巻き方などについて条件を制御しながら検証することで、電磁石の性質について見方や考え方をもちることができる。

(2) 単元の考え方

- 本単元では、ゲーム活動1においては磁力をより強くするという目的をもたせ、ゲーム活動2では条件を組み合わせる目的にあった状況をつくりだせるようにする。そのために、ゲーム活動1で重さの違うブロックを電磁石でつり上げるクレーンゲームを提示し、ゲーム活動2では、指定された釘の数だけ取れるようにするねらってキャッチゲームを提示する。クレーンゲームでは、子どもたちは磁力を強くする方法を追究し、ねらってキャッチゲームでは、条件を組み合わせるような姿が見られる。このように、互いの条件の組み合わせの違いやよさから、科学的に思考する力が発揮され、より深く電磁石の性質について理解させることができる価値ある教材である。

(3) 学習の流れ

つかむ段階：1～2 / 12時

電磁石のアームを使ったクレーンゲームを行い、作りかえたいところについて話し合う。

棒の先に電磁石をつけ、単3型の電池をつないだもの

色分けされた大きさの異なる木のブロックに釘を打ち付けた物をつり上げる

5点しかとれないんじゃないよ。電池を増やしたらどうか？

巻いているコイルがもっと多くなれば磁石の力も強くなるんじゃないの？

写真1 磁力を変化させる条件を見出す子ども

つかむ段階では、電磁石の仕組みをとらえるとともに、磁力を変化させる条件を考えさせることをねらいとしている。そのために、乾電1個に100回巻きの電磁石が付いた棒を提示し、ブロックをつり上げるゲームを行った。

【教師の支援】

- ※ 電磁石を使ったクレーンゲームを提示して、さらに、材料を与えて同じものを作る活動を設定した。
- ※ 軽くて点数が低いブロックは取れるが、高得点のブロックは重くて取れないものを提示した。
- ※ 電磁石の材料や仕組みなどから、磁力を変える要因になりそうなものを班で書かせ交流させた。

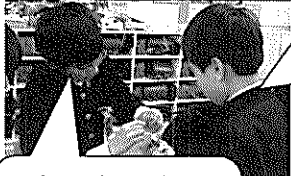
【子どもの様子及び考察】

- 電気が流れることで、磁力が発生することから流れる電流の大きさと磁力との関係についてはどの子どもも予想することができていたが、そこから派生する内容については個人差があった。
- 電磁石に関わる要因を自分たちで考え出すことができた。これは、磁力を強くしたいと思わせるゲームの提示が有効に働いたからであると考えられる。

さぐる段階：3～8/12時

多様に考え出した要因を実験によって、一つ一つ調べることで、電磁石の磁力を変化させる方法を見つける。

電池の数を変えたときの確かめ方について交流



ブロックで確かめるのもゲームに使えるかどうか分かるからいいと思うよ。検流計でも実験してみれば電池が違っていても電流の大きさが確かめられるね。

ぼくの確かめ方は、電池が1個のときと2個の時の区別があまり出てこない。Bくんがやっていた釘の方法でやるとよさそうだ。

・A児の変容
ブロックだけを使って磁力を確かめる

釘や鉄粉を使ってより細かい磁力の変化をとらえる

① コイルと電池と電流計を用いる。
② 全部つなげる。
③ 電池を多くして電流計で計る。
④ はたか電流と、よく37°の角を
Xもする! ときもする。
↓
一番いい方法をとる。

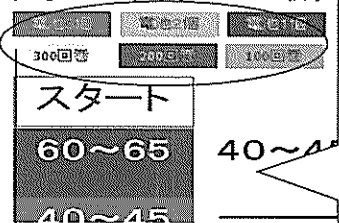
ブロックだけを使って実験していたA児が、釘や電流計を用いたことを記入している。

資料2 友達との交流の中で変容した実験方法

ひろげる段階：9～12/12時

ねらってキャッチゲームを行い、電磁石の磁力を調節して得点できる方法を見つける。

ねらってキャッチ2～取れ



サイコロカードで出た目の分進み、そこに指定された条件を使って磁力を調節した電磁石で釘を取る。指定された範囲内の数で取れたら点数となる。

乾電池を3個にすると200回巻きじゃ強くて取れすぎてしまう。乾電池は2個ぐらいにして、コイルの巻き数を100回巻きにすれば、上手く釘の数を調整できるぞ。



写真2 要因を組み合わせることで磁力を調節

さぐる段階では、電磁石の磁力を強くするための方法について自分たちで見通しをもって実験方法を選択し、実験して得られた結果をもとに電磁石の性質についてのきまりや規則性を見出すことをねらいとしている。そのために、変化する磁力を確かめるための方法について話し合うことで、それぞれの考えの違いを交流した。

【教師の支援】

※ 電流の大きさと磁力との関係を考えることができるような学習プリントを提示する。

※ 確かめる方法を交流させ、用いた理由について交流できる場を設定する。

【子どもの様子と考察】

○ 子どもたちは、確かめる方法について交流し、はじめはブロックを使っていた子どもも、くぎの方が細かい違いが分かることや電流の大きさを直接確かめられることからお互いの方法を用いるようになった。これは多様な実験方法のよさを交流させたことが有効であったからである。

ひろげる段階では、さぐる段階で学習した電磁石の磁力を変化させる要因を組み合わせることをねらいとした。そのために、ねらってキャッチゲームを提示し、子どもたちが条件の特徴を活かして磁力を調節するようにした。

【教師の支援】

※ 電磁石の力を強くしないととれないが、電池の数を増やすだけでは上手く得点できないというねらってキャッチゲームを提示する。

【子どもの様子と考察】

○ 電池の数を変化させるだけでなく、コイルの巻き数などを変化させることで、上手く得点できるように調節していた。これは、変化させる要因の特徴を活用できるような場の設定が有効であったからである。

【全体考察】

◎ ゲーム活動1で電磁石の働きについて習得させ、ゲーム活動2で磁力を変化させる条件を組み合わせるような活動を仕組み、表現物を操作しながら交流させたことは、要因がもつ特徴についての見方や考え方を高め、組み合わせで利用できるような姿が見られたことから有効であったと考えられる。また、実験方法を選択した根拠を交流し合うことは、自分の考えに不足している点について気付くことができたことから有効であったと考えられる。

○ 音楽科学習の構想

価値ある音楽表現をつくり出す音楽科学習

○ はじめに

音楽科において豊かな学びとは、音楽的感性を豊かにし、音楽と生活とのかかわりに関心をもって生涯にわたり、音楽文化に親しむ態度をはぐくむことである。具体的には、①直接的音楽体験を通して音楽のよさを感じ取り、思いや意図をもって表現したり音楽全体を味わって鑑賞したりすること、②1つの音楽を友達とつくっていく体験を通して、協同する喜びを感じることである。ここに、子どもにとっての音楽を学ぶ意義があり、情意面と能力面とを同時に育てていく役割を担っている。現代社会において、いろいろなジャンルの音楽に耳を傾けて聴くという状況が十分に行われていないため、それぞれの音楽がもつ美しさを感じ取ったり、自分にとっての音楽のよさを実感したりすることができていない。そのために、音楽科では、音楽に対する感じ取る力、聴き取る力を重点的に身に付けさせていくことで、音楽のよさや美しさを追究していこうとする態度を養っていく必要がある。

1 主題について

価値ある音楽表現とは、音楽そのものの美しさにあこがれ、主体的に働きかけながら「こんな音楽をつくりたい。」という思いをもち、音楽の要素や仕組みの働きに着目し、自分の表したい音楽を求めていくことである。音楽においては、精神的活動に満足を与える場合と課題を達成する場合とがある。前者の場合は、音楽そのものの美しさを感じ取り、音楽に対して主体的に働きかけ、心を潤すことである。そのためには、音楽を特徴付ける要素や音楽の仕組みの働きから、自分の音楽に対する嗜好性を理解することが役に立つ。後者の場合は、演奏や音楽づくりなどの課題をもつ場合とあこがれをもちながらよりよい音楽にするために、自分に課題をもたせる場合とがある。

価値ある音楽表現をつくり出すとは、表現意欲をもち、表現方法を追究し、自分の求める音楽へ練り上げることであり、自分にとって役に立ったと実感することである。そのためには、音楽へのあこがれから表現意欲をもち、思いや意図をもつことが必要である。そして、音楽の要素や仕組みの働きを聴き取り、感じ取ったことを自分のつくった音楽に繰り返し試しながら、表現に必要な音楽の要素や仕組みを選択できるようにする。さらに、選択した要素や仕組みを組み合わせたりつくりかえたりすることを試しながら、つくってみた音楽と自分が求める音楽を重ね合わせていくことである。価値ある音楽表現をつくり出す音楽科学習とは、自分の表したい音楽をもち、つくっていきたいという思いや見通しをもつこと（目的性）、自分の表したい音楽にするために、音楽の要素や仕組みの働きを明らかにし、選択すること（選択性）、自分の表したい音楽に近づけるための、選択した音楽の要素や仕組みを組み合わせたりつくりかえたりすること（創造性）、ができる学習のことである。そのためには、試行錯誤しながら友達の考えと自分の考えを比べ、新たに自分の表したい音楽をつくっていく学習のことである。

- | | |
|--|--------|
| ○ 音楽の美しさを感じ取り、音楽体験を通して自分の役割や音楽の有用性を実感している子ども | (学ぶ意欲) |
| ○ 自分の求める表現にするために、繰り返し音楽的要素や仕組みに働きかけ活かしている子ども | (能力) |
| ○ 自分の音楽表現に満足し、新たな音楽とのかかわりを求める子ども | (自信) |

～音楽的モデル比較活動を位置付けた授業づくり～

有 川 陽 子

2 副主題について

音楽的モデルとは、気付かせたい音楽の要素や仕組みだけを変えて条件を整備して、際立たせた対照的な2つ以上の音楽である。音楽的モデル比較活動とは、モデルの比較鑑賞と試しの演奏を組み合わせた活動である。そして、ねらいによって、その種類は次の3つがある。1つ目は、音楽的モデルを通して、音楽の要素や仕組みによる表現の多様性に気付かせる＜モデル比較活動①＞、2つ目は、音楽の要素や仕組みの働きから感じ取ったことを根拠に、選択する＜モデル比較活動②＞、3つ目は、自分の求める音楽にするために、音楽の要素や仕組みの働きを根拠に、組み合わせる＜モデル比較活動③＞である。音楽的モデル比較活動を位置付けた授業づくりとは、音楽的モデルの比較鑑賞を通して聴き取った、音楽の要素や仕組みの働きから感じ取ったことや働きの違いを根拠にして、試しては聴き比べ、聴き比べては試しながら、自分の求める音楽を追究していく活動のことである。

3 具体的構想

● 音楽的モデル比較活動を位置付けた教材化について

○ 比較するモデルの条件は、低・中・高学年の学習内容に伴う音楽を特徴付けている要素の働きを変えた複数の音楽のことであったり、音楽の仕組みの働きを変えたり、有無があったりする複数の音楽のことである。

	音楽を特徴付ける要素	音楽の仕組み	音楽の実態から見た楽曲選定
低	音色・リズム・速度・旋律・強弱	反復・問いと答え	身体反応によるリズムを中心とした楽しさを感じ取れる音楽
中	⑩に加えて音の重なり、音階や調	⑩に加えて、変化	楽器や曲想の違いから旋律の面白さを感じ取れる音楽
高	⑩に加えて、和声の響き	⑩に加えて、音楽の縦と横の関係	ハーモニーなどによる旋律の美しさを感じ取れる音楽

● 音楽的モデル比較活動を位置付けた授業づくりにおける活動構成

階	出合う段階	つくる段階	広げる段階
活動	1 音楽的モデルを比較鑑賞し、感じたことを出会う。	2 音楽を特徴付ける要素や仕組みを聴き取り、それらを活かして求める音楽表現をつくる。	3 つくった音楽を発表する。
活動構成	＜音楽的モデル比較活動①＞	＜音楽的モデル比較活動②＞ ＜音楽的モデル比較活動③＞	

第5学年 題材「物語を音楽で演出しよう!～「はらぺこあおむし」～」

(1) 目 標

- 1 音楽を特徴付けている要素や仕組みを生かして、自分たちでつくった音楽を楽譜に表したり場面の感じが出るように工夫した点に気を付けて演奏したりすることができる。
- 2 場面に合う音楽を友だちとともにつくり上げたりよさを認められたりすることで、満足感を味わったり自分達でつくり上げた音楽を演奏する楽しさや、音楽で気持ちを伝えるよさを実感したりすることができる。

(2) 題材の考え方

- 物語をもとにした音楽づくりを仕組むことで、ストーリーからあおむしの気持ちを手掛かりに、根拠をもって音楽の要素や仕組みを生かしていくことができる。また、そこにモデルを提示していくことで、見通しをもたせたり新たな発想を生み出させたりしていくことができる。そこで、「もっと場面にあった音楽にしたい。」と表現の高まりを求める問いが深化していく。

(3) 学習の流れ

出合う段階：1～2/8時

3パターンの音楽を比較鑑賞（見る、聴く）したり、モデル演奏の効果を音楽的要素や仕組みを根拠に発表したりする。



資料1 夜の場面のモデル（教師作成）

A 児 夜の場面は、お月様が優しく森の動物たちを見守っていて、穏やかな感じなのでもっとゆっくり演奏した方がいいと思いました。

B 児 私もゆっくりの方がいいと思います。あと、音の高さを高くしたら夜の静かな感じが出ると思います。

資料2 モデル音楽から感じたこと

つくる段階：3～7/8時

モデルを参考に、よさやアドバイスを出し合って、場面に合った音楽をつくる。

出合う段階では、物語における音楽の効果を実感し、物語にあった音楽をつくっていきたいという思いや見通しをもたせることをねらいとしている。そのために、音楽なし、穏やかな楽曲、寂しい楽曲の3パターンで、同じ場面の映像やモデルを比較鑑賞したりする。

【教師の支援】

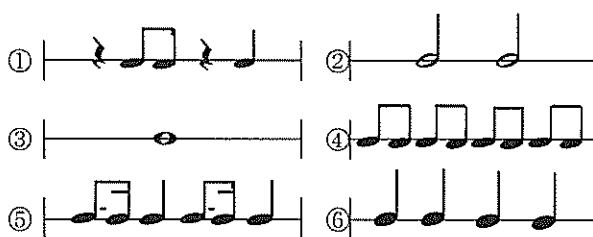
※ 「はらぺこあおむし」のDVDの導入の場面（夜の場面）に、音楽なし、穏やかな音楽（「月の光」：ドビュッシー）、暗い音楽（「アダージョ」：アルビノーニ）を比較鑑賞させる。

※ 夜の場面のモデル（教師作成）を提示し、音高、速度を変えて比較鑑賞させる。

【子どもの様子と考察】

- 資料1のモデルを要素（速度、音高）を変えて比較鑑賞することで、資料2のように、場面と要素をつないで発言をすることができた。これは、3パターンの音楽から違いをとらえさせ、モデルから要素の働きに着目させたことが有効に働いたからだと考える。

つくる段階では、グループ毎に、場面に合った音楽をつくることをねらいとしている。そのために、モデルを参考に、根拠をもって演奏を試しながら交流を行った。



資料3 和音伴奏のモデルのリズム



写真1 ②と④を比べて演奏してみよう。

広げる段階：8/8時

5年2組読みかせ発表会～音楽物語『はらぺこあおむし』を全校に発表する。



写真2 音楽で元気な感じを伝えたいな。

最初は出来るかなと心配だったけど、友達と協力してアドバイスをもらって場面の感じが出るような演奏ができて良かったです。他の絵本でもまたしたいと思いました。もっとたくさんの人に聴いてほしいなと思いました。

資料4 発表会後の感想

【教師の支援】

※ 音楽づくりの手順として、リズム、旋律、和音伴奏、楽器の決定と段階を踏んで進めた。

※ 和音伴奏の段階では、リズムパターンを変えてモデル演奏を鑑賞させ、働きの違いをとらえさせた。

※ モデル演奏のリズムを記譜したカードをグループ毎に配付した。

※ 和音伴奏の段階までは、鍵盤ハーモニカで統一し、それぞれの要素の働きに着目させた。

【子どもの様子と考察】

- 資料3のモデル演奏を鑑賞させることで、リズムによる感じ方の違いをとらえ、写真1のように、自分の担当する場面に合うリズムを演奏を通して決定することができた。これは、鑑賞したことをカードで振り返ることが有効に働いたと考える。

広げる段階では、グループでつくった場面に合う音楽を、『はらぺこあおむし』の物語にのせて演奏することをねらいとしている。そのために、読みかせ発表会の開催を全校にお知らせし、参加を呼びかけた。当日は、たくさんのお客さんが来てくれて、子どもたちは話に合わせながら演奏し、満足いく発表ができた。

【教師の支援】

※ 発表会では、DVDとともに、読み聞かせ役を決めて、それぞれのグループがつくった音楽にのせて話が進められるようにした。

【子どもの様子と考察】

- 資料4の下線部から、友達と演奏を通して、交流しながらつくりあげる楽しさを感じたり、もっとたくさんの人と音楽を通して交流を図りたいという自信をもつことができたことがわかる。

【全体考察】

- ◎ 各段階において、モデルを提示し、全体で感じたことを出し合う場を設定したことで、1人ひとりが自分の考えを確かにもって、よさやアドバイスを出し合うことができたと考える。そして、各要素の働きの違いをとらえ自分たちの演奏に取り入れていくことができ、それぞれのグループが場面に合う音楽をつくりあげていくことができた。このように、感受したことをもとに、根拠をもって交流していくことで、より場面に合う音楽につくりあげていくことができたことで、音楽科における知のネットワークが有効に図られたと考える。

○ 図画工作科学習の構想

豊かな発想とともに表現を創り出す図画工作科学習

○ はじめに

図画工作科が究極的なねらいとしているのは、豊かな情操を養うことである。人は美しいもの、心地よいものを創り出していきたいという根源的な表現の欲求をもっている。「生きる力」の育成の中でも図画工作科は「創造性のある人間の育成」を重要な課題としてあげられるだろう。図画工作科は、材料や造形対象と深くかかわり、造形的な自分の求めをもとに、新たな美を創り出していくクリエイティブな学習である。よって、美の文化の継承や創造を通して、創造的な思考力や創造的な技能といった創造性を育成し、さらに新たな文化創造への感性を高めていく役割を担っているのである。

しかし、表現方法や表現内容だけの伝授により、それだけを知識として身に付けたとしても、子どもたちの「生きる力」にはなり得ない。また、新たな発想や表現は対話から生まれるといわれる。つまり、他と積極的に対話することによって新たな表現を創り出し、その結果、個人の創造性を高めていくことになるのである。

そこで、これからの図画工作科では、他と積極的にかかわりながら創り出していくことを通して、自分の表現に価値付けをし、造形的に自分の求めを実現させていくことで、造形的な感性を育てていくことができると考える。

1 主題について

豊かな発想とは、表現意図や表現主題に合わせて、材料や用具を用いて表現を試す中で表現内容や表現方法が量的にふくらみ、その中からこだわって選択していくことによって質的にもふくらんでいくことである。表現内容は、表したいものを出合った色や形、材質を活かすことで、表現したいものが新たに加わったり、詳しくなったりしていく。これを具現化するために、表現内容に近づけるような方法を選んでいくことが表現方法である。

ともに表現を創り出すとは、回りにいる様々な人や材料、造形対象と対話しながら、新たな表現方法や内容を見出し、自らの表現を練り上げていくことである。

豊かな発想とともに表現を創り出す図画工作科学習とは、感じたことや想像したことなどを出合った形や色、材料などの特徴を活かすことで、連続した内的な活動が深化し、さらに自分自身や他（もの・こと・人）と対話することで、表現がさらに練り上げられていく学習のことである。そのような表現のプロセスにおいて、自分の思いを納得するまで造形活動することによって創造性を高めていくことができるのである。

- 材料や造形対象、また他とかかわり合うことを通して、自ら面白いもの、美しいものを意欲的に創り出していこうとしている子ども（学ぶ意欲）
- 材料と造形対象に対して多面的に特徴をつかみ、その特徴を活かした活動を通して、形や色をとらえたり用具や手を働かせて用いながら表現する子ども（能力）
- 自他の表現過程や表現物をふり返り、自他の表現のよさや面白さを見出し、これからの自分の造形的な表現に活かしていこうとする意欲や求めをもっている子ども（自信）

～自他の鑑賞活動を位置付けた活動構成の工夫～

安 藤 順 子

2 副主題について

自他の鑑賞活動とは、造形活動において、自分や身の回りにいる人、材料や造形対象と双方向に対話していくことである。自分の表現対象の形や色からイメージしたものから、次にどのような表現追究をしていきたいのか、自分の目標をもち、表現活動していくことで、達成できたこと、さらに追究していきたいことが生まれてくる。そこで、友達や先人など他の人に伝えたり他の人の考えや方法を聞いたりしていくことで、また、新たな表現を生み出していくことができる。そうすることによって、自分の表現のよさや可能性に気づき、これまでとは違った表現を練り上げていくことができるのである。材料や造形対象とかかわり合うことで、視覚的に形や色の変化から自分に働きかけ、自分にとって面白いもの、よいものを創り出していく造形表現活動のことである。

自他の鑑賞活動を位置付けた活動構成の工夫とは、造形表現活動において、個人の知を身近な人たちと共有化させながら、自分や他の人、材料、造形対象と双方向に働き合い、そこでつかんだ知をさらに個人の表現に活用していく学びを展開していくことが必要である。その造形活動において、形や色、材料などに自ら働きかけ、表したいことを見出し、それを表す方法を考えた上で、一人一人の造形活動に活かされてくる。このような活動を連続的に位置付けることで、新たな自分の表現をつくりだしていくと考える。

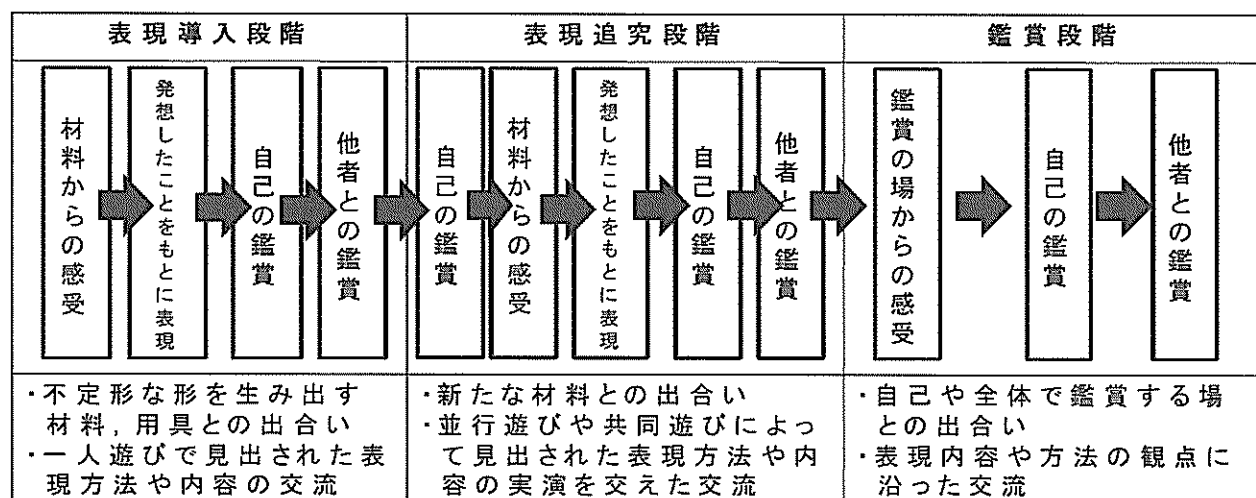
3 具体的構想

● 自他の鑑賞活動を位置付ける題材条件

- 【必要感】学習者全体に共通の目的や共通の対象物があり、創造的な思考力や技能が高まる材料を用いた題材
- 【期待感】学ぶ見通しや手順が明確になり、「こうやってみたい」など子ども自らの学びと意欲を生み出す題材
- 【受容感】お互いの表現について積極的な情報交流が期待でき、他者との学び合いの活動を重視して学べる題材
- 【満足感】創り出す表現や作品のよさや面白さが造形的な感性を高めていくような題材

● 自他の鑑賞活動を位置付けた活動構成

見出された表現方法について、実際に演じたりしながら友人と交流していくことで、新たな表現方法を見出したり、そこからさらに詳しく表していきたい内容を発想していくことができると考える。



○ 家庭科学習の構想

家庭生活とのかかわりを深めながら生活をつくりだす家庭科学習

○ はじめに

家庭科が究極的なねらいとしているのは、家庭生活に必要な知識・技能を身に付け、家族の一員として家庭生活を向上していこうとする実践的な態度を養うことである。しかし、学校で習得した基礎的・基本的な知識・技能が、子どもたちの家庭生活の中で、家庭生活を向上させていくためにいかされているとは言い難い。さらに、子どもたちが家庭生活を見つめ、課題を見出し、解決していく過程で自分の学びのよさを十分に味わうことができていないのが現状である。それは、学校での学びが、教室の中のこととして完結してしまい、習得した基礎的・基本的な知識・技能が、家庭生活の様々な場面に合わせて創意工夫していく体験に結びついていないからである。そこで、家庭科では家庭生活で行われている事象へと目を向けさせ、習得した家庭科の基礎的・基本的な知識・技能が、自分の家庭生活においてどのように役立てることができるのか、どんな工夫をすればいいのかを思考・判断することを通して、家庭生活の課題を解決したり、家庭での実践を無理なく行ったりすることができるような能力を育みたい。子どもたちが、家庭生活の様々な場面に応じて、身に付けた知識・技能を使いこなすことの、意味やおもしろさに気付いたり、自分にもできたという自信をもったりすることが、家庭科における豊かな学びを育むことである。

1 家庭生活とのかかわりを深めながら生活をつくりだす家庭科学習

家庭生活とのかかわりとは、家庭生活の中で行われている生活事象に出合い、課題を見い出したり、追究したいという意欲をもったりして、試行錯誤しながら解決の方法や、追究の方法を見出すことである。

家庭生活とのかかわりを深めるとは、自分の習得した知識・技能をもとに、自分の家庭生活に合った方法や、家族のニーズに応えることができるように、思考・判断できるようになることである。

家庭とのかかわりを深めながら生活をつくりだす家庭科学習とは、①家庭生活の中で行われている生活事象に対して、興味・関心をもつこと②家庭生活上の課題を見出し、解決するために調べたり、実習したりすること③自分たちの学びを家庭生活に合わせて工夫すること④工夫したことをもとに家庭生活中で実践し、自信を高めたり有用感を味わったりすることである。そのために授業では、習得したことをもとに、自分の考えを働かせながら工夫し、実践する経験を繰り返す必要がある。つまり、家庭実践に向けて、自分の考えの妥当性を検討し、よりよく思考・判断できるようになるために、繰り返し調べたり実習したりする活動を行う必要がある。

- 家庭生活の事象に出合い、家庭生活を見つめ直すことで、課題を見出したり、追究したいという意欲をもったりして、自ら進んで課題解決にあたる子ども (学ぶ意欲)
- 衣食住に関わる実習・観察・実験を通して課題解決に必要な基礎的・基本的な知識・技能を習得し、家庭生活に合わせて、活用していくことができる子ども (能力)
- 自分が習得した知識や技能を家庭生活に合わせて、活用して実践することで、自分自身の生活向上のよさや、家庭生活の大切さを実感し、有用感や満足感をもつ子ども (自信)

～3つの実習を位置付けた授業づくりの工夫～

緒 方 敦 子

2 副主題について

実習とは、家庭生活に関する習得した知識を、自分の家庭生活に合わせて、工夫したり、変更したりしながら実際に適用する取り組みであると共に、家庭生活に必要な基礎的・基本的な技能を高める場である。

3つの実習とは、最終的には、子どもたちが、学校で学んだことをもとにして、家庭実践を行い家庭生活への理解を深めたり、有用感や達成感を味わうことを目的としている次の3つのことである。①題材を通して習得する基礎的・基本的な知識・技能獲得のための実習。②知識や技能をもとに、実習で取り扱う対象を変えてできるかどうか、一般化を検討したり、試行錯誤したりすることで、家庭生活への理解を深めたり、技能を高めたりする実習。③2つの実習で習得したことをもとに、家庭実践の計画を立て、それが実行可能かどうかや、家庭実践の計画が妥当かどうかを検討するための実習。

3つの実習を位置付けた授業づくりとは、題材につかむ、つくる、いかすの3つの段階を設定し、つくる段階の実習で、一般化を図り、いかす段階の実習で家庭実践に向かわせる実習を展開していることである。

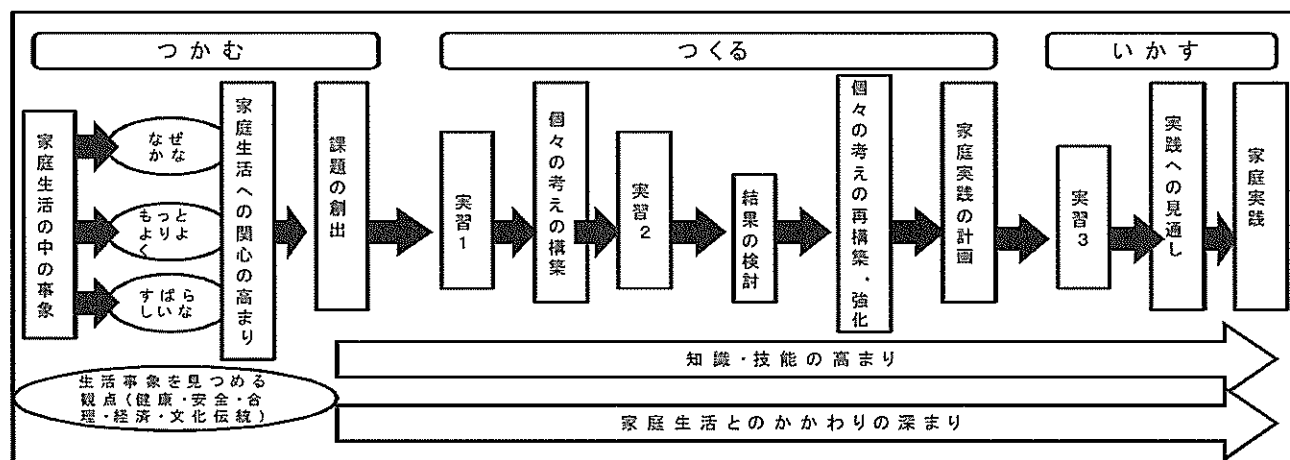
3 具体的構想

● 家庭生活とのかかわりを深めながら生活をつくりだすための教材化の工夫

教材化にあたっては、子どもたちの学びが、家庭生活にいかされ、子ども自らがよりよい家庭生活を築いていくことができるようにすることに重点を置く。そこで、教材化では、次の条件を満たすようにする。①子どもの家庭生活に身近な生活事象であること②子どもが見通しをもって実習に臨むことができ、かつ実現可能な内容であること③一回の実習や家庭実践にとどまらず、新たな課題へとつながる発展性があり、2年間の学習の中で、繰り返し取り組むことができるものである。

● 3つの実習を位置付けた活動構成

家庭生活を営んでいく上で必要になってくる知識や技能は、繰り返し取り組むことで子どもたちに習得され、思考力・判断力も高まっていく。



【図1 3つの実習を位置付けた授業づくりを行うための活動構成】

○ 体育科学習の構想

価値ある動きを創る体育科学習

○ はじめに

体育科が究極的なねらいとしているのは、生涯にわたって運動やスポーツを豊かに実践するための運動実践力とたくましい心身を育てることによって、現在及び将来とも楽しく明るい生活を営むための基礎づくりをすることである。現代社会においては、体力の低下傾向、運動をする子としない子の二極化などの問題がある。これらの大きな要因の一つとして、技能の向上のみを重視した学習や活動欲求を満たすだけの楽しさのみを重視した学習など、運動に親しむ資質・能力の不十分な育成がある。そのため子どもたちには、多様で豊かな運動体験や確かな身体能力を身に付けさせることが求められている。そこで体育科が担う役割としては、具体的な運動を通して、運動する意欲や身体能力とともに、社会性、論理的思考力、判断力などを身に付けさせることが重要であると考え。そのために①運動の心地よさを実感できる②技能の伸びがわかる③仲間とのかかわりのよさを味わえる④知的探求心を満足させることができるといった多様な運動の体験ができる豊かな学びを繰り返すことが重要である。そこで体育科の指導の立場としては、子どもに身に付けさせたい内容を「動き方を状況に合わせて戦術として使っていくための思考力や判断力」と「個人技能、身体の動かし方などの情報」が一体化したものととらえ、他者との交流、既習の動きとの交流、情報との交流を通して、運動を楽しむ実行力のある知として身に付くようにする。

1 主題について

価値ある動きを創るとは、「自己－他者－もの」とのかかわり合いを通す中で、機械的に身体やものを操作するだけでなく、刻々と変化する運動場面の状況に応じて、それまでに身に付けてきた動きの知識をもとに、創造的に思考、判断し、その場にあった最善な身体の動かし方を選び実際に動いたり、ものを操作したりすることができるようになることである。

価値ある動きを創る体育科学習とは、単なる低次の活動欲求を満たすだけでなく、目的達成のためにより合理的に思考、判断されたものの操作や身体を身に付け、活用していく学習のことである。そのためには、身に付けた動きが、運動のもつ機能的特性を十分に味わい満足することのできる目的に合ったものであること（合目的性）、高まった動きを身に付けていく過程において他者やものとの多様なかかわりがあること（関係性）、さらにそのようなかかわりのある学習の中で、一人一人のもっている知識や動きを交流し、試行錯誤しながら創造的に動きを繰り返すこと（創造性）が必要である。このような姿を発揮させるには、多様な動きが生み出されるように教材化した運動において、状況に合った動き方をその場で思考し試す活動を繰り返すことが必要となってくる。

- 運動への強い願いをもち、その実現のために、他者やものとかかわり、身体を動かすことを楽しみながら、見通しをもって運動の楽しさを実感する動きの習得、修正を繰り返す子ども（学ぶ意欲）
- 状況に応じた課題解決のための多様な動きやそれを獲得する知識を身に付けた子ども（能力）
- 精一杯の力を発揮して体を動かす心地よさや運動を創るよさを味わう子ども（自信）

～ゲームの中にフィードバック活動を段階的に位置付けた授業づくり～

渡 邊 正 則

2 副主題について

フィードバック活動とは、それぞれの運動の状況に応じて的確な思考・判断と一体化した動きを発揮させるために動きの分析→修正→練習(評価)を繰り返し行い、できるだけよい動き方を見付け出すことである。その際、事前にその運動の基礎となる動きを体験したり、モデルとなる動きの知識を身に付けたりして、フィードバックが有効に働き、その運動の特性にあった合理的な動きが身に付くようにしたものである。

ゲームの中にフィードバック活動を段階的に位置付けた授業とは、技能習得を目的としたフィードバック活動Ⅰ→攻撃局面を中心としたフィードバック活動Ⅱ→局面をひろげたフィードバック活動Ⅲというように、子どもの技能や攻撃への意識の高まりに応じて活動の内容を高めていく授業のことである。それはまた、単なる課題の確認・修正だけの活動から、課題とは位置や方向などが変化した場面においても最適な動きを瞬時に判断して試すことができるように、技能とともに思考力・判断力に発展性・応用性のある動きに高まっていく授業のことである。それには、動きや言語による3つの交流を位置付ける。3つの交流とは、事前に自分たちの考えた戦術的な動きをもとに課題を確認する交流(交流①)、2つのゲームを通して動きを高める段階で状況に応じた合理的な動きを思考・判断する交流(交流②)、高まった動きの情報をもとに動きのよさを相互評価し合う交流(交流③)のことである。

3 具体的構想

● フィードバック活動を段階的に位置付ける授業の教材化について

教材化にあたっては、①身に付けさせたい動きが頻繁に現れ、効果的に動きの体験ができるようにルールを緩和する。②本来行われているゲームでは、ハーフタイムでしか中断のない運動のゲームに作戦タイム(動きがストップする)を設け、戦術の確認、試行ができるようにする。

● ゲームの中にフィードバック活動を段階的に位置付けた活動構成について

フィードバック活動での交流を主体的に、効果のあるものにするためにフィードバック活動Ⅰ(技能習得)→Ⅱ(A局面の集団技能)→Ⅲ(B局面の集団技能)という活動(確実に動きを習得させるため2時間1単位とする)を構成する。そこでフィードバックの情報となる多様な動きを身に付けさせたり、情報として集めたりできるようにする。

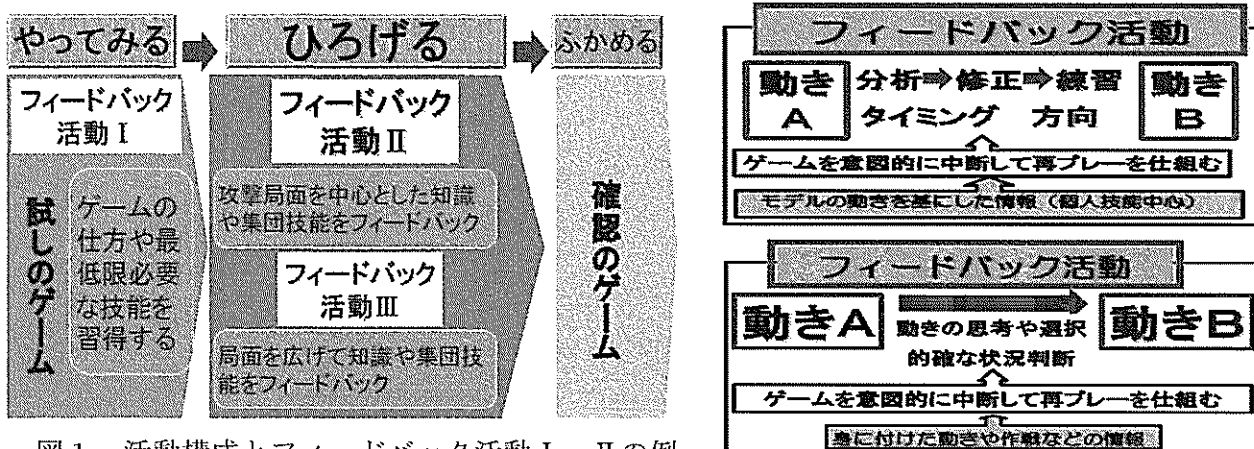


図1 活動構成とフィードバック活動Ⅰ、Ⅱの例

第5学年 単元「チャンスメイクサッカー」

(1) 目 標

- 1 チャンスメイクサッカーの動き方や勝敗に興味をもち、できる動きで精一杯活動したり、友達と動きや楽しみ方に関してもっている知識を交流して高めたりして楽しく活動することができる。
- 2 これまで身に付けたゴール型ゲームの攻撃パターンを生かして攻撃したり、状況に応じて 手や足によるより有効な動きを判断して攻防を楽しむことができる。

(2) 単元の考え方

- 本単元では、ネットワークを図る知を、「文化としての運動のもつ特性に応じた目的に合った動き方と楽しみ方」と「それらの動き方を状況に応じて選択して活用する判断力」とした。それらの知を個人差のある技能をもった友達が同チームでプレーする中で、模倣したり、モデルの動きをもとに試行を繰り返すことで自分なりの動きを創り出したり、言葉やイメージ図をもとに知識として理解したりしながら動きが高まるような交流活動を位置付ける。

(3) 学習の流れ

やってみる段階：1～2 / 10時

チャンスメイクサッカーを試し、ゴール像を設定するとともに、はじめの問いをつくる。

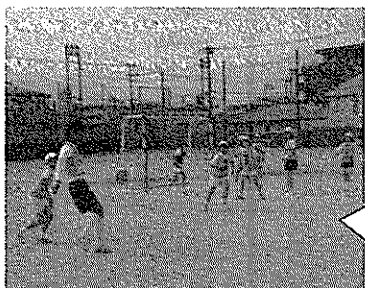


写真1 GTとのゲーム

アビスパの先生が、たくさんシュートを打たせてくれて楽しかったよ。

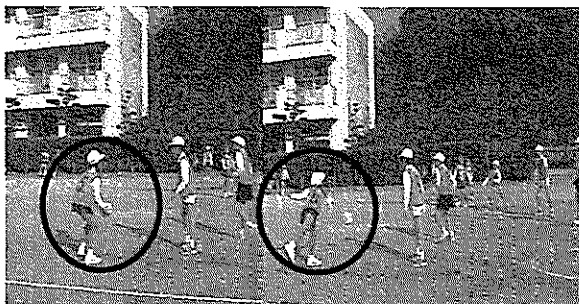


写真2 手でボールを操作して試す活動の様子

チームで協力してゴールを入れることや作戦を立ててみんなで実行することをがんばりたい。また積極的に動きシュートを決めて勝てるようにしたい。

資料1 A児の設定したゴール像

やってみる段階では、チャンスメイクサッカーやGTとのサッカーに出合い、本単元のゴール像を設定したり、その達成のための課題を見出したりすることをねらいとしている。そのために、GTとのゲーム、簡易化したルールでのゲーム、攻撃・ゲームメイク・守備に分かれたポジション別のゲームとそれに基づく動きの分析を位置付けた。

【教師の支援】

- ※ GTとのゲームを体験させ、サッカーの楽しさや楽しみ方に気付くようにした。
- ※ 簡易化したルールのゲームを行い、課題が焦点化できるようにした。
- ※ ポジション別の動きの分析を行い、動き方を体験させた。

【子どもの様子及び考察】

- ゲームの楽しみ方を感じ、ボールの蹴り方などでないゴール前での戦術的な課題を設定することができた。
- それは、GTとのゲームを楽しんだことで、サッカーの楽しみ方が理解できたためであり、ルールの簡易化により戦術面の課題に目を付けさせることができたためであると考え。

ひろげる段階：3～8／10時

めざすゴール像に向かってフィードバックゲームを中心とした活動を繰り返す。



みんなで考えた作戦を確認するよ。今日はこの動きをできるようにするよ。

写真3 フィードバック情報としての戦術の確認の様子



写真4 フィードバックゲームの様子

パスをなるべくゴール前で受けるとシュートができるけど、私たちはシュートが続かない。シュートを続けられるためには、声をかけ合うことやみんなの動きがたりていない。GTからはたくさん走ってマークを外すことを学んだよ。

資料2 交流での話し合うやGTからのアドバイス

ふかめる段階：9～10／10時

これまで高めてきた動きを発揮してチャンスメイクサッカー大会を楽しむ。

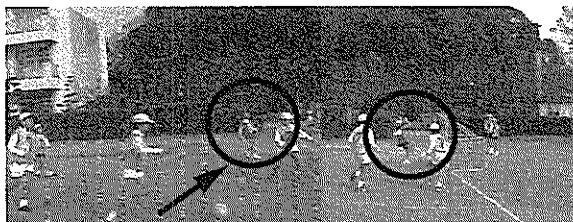


写真5 サッカー大会での高まった動きの様子

これまで作戦タイムやサクセスボードで何時間も考えてきたことを生かしてとても嬉しかった。

資料3 ゲーム大会終了後のA児の感想

【全体考察】

◎ フィードバックゲームや交流を位置付けたことは、子どもの動きやチームとしての戦術的な動きを高めることに有効であったと考える。それはゲームの様子の中に状況に応じた的確な判断が多様に現れたことから言える。また教材化をしたことで個人技能に時間をとられるのではなく戦術的な動きに焦点化して高めることができ有効であった。

ひろげる段階では、めざすゴール像に向かって問いを深化させ、フィードバックゲームで動きや戦術を交流し、成功感を味わえる動きに高めることをねらいとしている。そのために、課題にあったタスクゲームを選択して練習したり、身に付けた情報をもとにフィードバックゲームを繰り返させたりした。

【教師の支援】

- ※ 動きの課題にあったタスクゲームを開発した。
- ※ 作戦や課題を明確にし、フィードバックが必然的に起こるようにした。
- ※ 交流ボードを活用し創り出した動きを視覚的にとらえられるようにした。

【子どもの様子と考察】

○ 写真3のように自分たちの作戦を確認し、それをもとにしたフィードバックゲームで、写真4のように自分たちに必要な動きを交流し修正することができた。そのことにより確認のゲームでは、ゴール前での瞬時の判断による効果的な動きが増えた。

それは動きをフィードバックするために情報となる作戦を明確に確認させたことやフィードバックゲームでの交流にGTや教師からのアドバイスの支援をしたことが有効に働いたためと考える。

ふかめる段階では、ゲーム大会を行い、学習への満足感を味わえるようにした。そのために動きを比べさせたり相互評価したりできるようにした。

【教師の支援】

- ※ 初めの動きと比べさせて変化を実感させたり、相互評価を充実させたりできるノートの工夫をする。

【子どもの様子と考察】

○ チャンスメイクサッカーの特性を楽しむことができる効果的なプレーがたくさん現れた。資料3にあるように、フィードバックゲームを中心とした学習の積み上げが有効に働いたものとする。

○ 生活科学習の構想

かかわりのよさに気付く生活科学習

○ はじめに

生活科において豊かな学びとは、自らの思いや願いの実現や必要感を強く感じて、解決に向けた見通しをもとに身近な人や社会、自然との出会いを通して、自分とのかかわりで対象とのかかわりやよさに気付く、新たに働きかけていく力を身に付けることである。しかし、現代社会においては、子どもが生活する環境は、多様に変化しており、自ら対象に働きかけて得た気づきをもとに考えたり身の回りの人と協力し合って課題を解決したりしていく体験が希薄化している状況である。そのため、子どもが自分の生活や環境を見つめ直し、よりよい生活や環境を求めて主体的に働きかけたり自分のよさに気付いて生活したりすることが十分にできていない状況である。そこで生活科における豊かな学びを育むことにより、子ども自身の切実な思いや願いから見通しをもとに情緒的な働きかけを進め、対象や自分への気づきを実感的なものにしたり、思いや願いの実現から自分への自信や展望をもったりする子どもを育てることができると考える。そして、身近な人や社会及び自然を対象として繰り返しかわる活動や体験をする中で、よき生活者となることをめざすことができると考える。

1 主題について

かかわりのよさに気付くとは、自分を取り巻く人や社会、自然に対する不思議さや面白さ等の知的好奇心をもって繰り返し働きかけながら、対象の反応から働きかける楽しさや働きかけた意味に気付いたり、次に働きかける見通しを見い出すことである。そして、対象を比べる視点や関連づける視点をもとに、対象との関係や対象のもつ価値を実感的に見い出し表したものである。

かかわりのよさに気付く生活科学習とは、自分の思いや願いを実現しようと切実感や必要感、こだわりをもって、対象に繰り返し働きかけながら、対象を友達と比べたり対象の変容や反応からつなげて考えたり、対象のもつ共通の要因や差異の要因を見出して働きかける新たな見通しをもつことである。そして、働きかけの意味や楽しさを実感することで、自分ができたことや自分のよさに自信をもって、これからの自分の生活に役立てたり活用したりしていく学習のことである。このような学習において、低学年の発達特質から、対象の全体や部分を比べて共通点や違いを見つけ出したり、働きかけたことで変容した対象の様子やよさを言い表したりしながら、成就感や達成感を味わうとともに、次への新たな気づきをもって、生活をつくりかえていくことができると考える。

- 身近な対象に対する思いや願いをもとに切実感や必要感をもって、意欲的にかかわっていくよさや自分の高まりを実感している子ども (学ぶ意欲)
- 自分とのかかわりで対象との関係や価値に気づき、主体的な働きかけを繰り返しながら、自分の生活に役立てたり、活用したりする子ども (能力)
- 対象とかわる楽しさをもとに、自分の働きかけに自信をもち、自分の成長を実感する子ども (自信)

～比較交流活動を位置づけた授業づくり～

塚 本 正 典

2 副主題について

比較交流活動とは、切実な問題意識をもって働きかけた体験をもとに、対象の全体の様子や部分を比べたり、関係づけたりする話し合いを通して、対象の共通点や違いから対象と対象の関係や自分と対象との関係を見出したり、繰り返しかかわることで、対象のよさや自分の成長を気付いたりすることである。

比較交流活動を位置づけた授業づくりとは、子どもの「なぜかな」「やってみたい」という思いや願い、問題意識から、対象を比べたり関連付けたりする活動を通して、試行的、意図的体験から得た気づきを根拠にして対象の共通点や違い、問題意識や活動の方向性を見だし、次の活動への見通しをもつ活動構成を工夫する学習のことである。

3 具体的構想

● 教材化の工夫

- 切実な思いや願いをもって、実際の生活場面における目的意識、相手意識をもとに問題解決を行う体験ができること
- 繰り返し働きかけることで、働きかけた意味に気付いたり、次の活動への見通しにつながる、新たな気づきが生まれたりすること
- 対象にかかわる思いや願い、切実な問題意識をもとに、友達と協力的に問題解決を図ることができること

● 比較交流活動を位置付けた活動構成の工夫

活動構成を「であう」「ふかめる」「いかす」の3段階で構成し、それぞれの段階に以下の3つの比較交流活動①、②、③を位置付ける。そして、比較交流活動によって、生まれた気づきが次の活動につながるように、比べる視点をもとに個から全体、グループから全体への交流の活動を繰り返し位置付ける。

「表1 比較交流活動の内容」

	対 象	形 態	活動のねらい	活動の内容
比較交流活動①	出合った対象の全体を比べる	個→全体へ ※ 同じ働きかけをした友達で	「比較交流活動①」 友達どうして対象の違いをさぐり、自分の思いや願いから、対象に新たな働きかける（情報収集、作りかえる等）課題や見通しをもつ。	・ 対象に働きかけたり、つくりだしたりする、出会いの体験 ↓ ・ これまでの生活や学習の体験との、差異点を見出す交流 ↓ ・ 新たな働きかけのための課題と見通し
比較交流活動②	対象の部分と部分を比べる	グループ→全体へ ※ 違う働きかけをした友達	「比較交流活動②」 異質のグループで比べたり関連づけたりして、対象の共通点をもとに、対象の関係に気づき、新たな課題や見通しをもつ。	・ 同質のグループで、試行的な体験 ↓ ・ 比較の視点をもって、複数の実演をもとに、交流 ・ 対象の共通点から、関係を見出す交流
比較交流活動③	対象のもつよさを比べる	個→全体へ ※ 自分や友達の評価で	「比較交流活動③」 自分の働きかけを振り返り、対象の価値や変容、自分が成長したことや自信につながったことを振り返る。	・ 対象に働きかけたり、つくりだしたことを、振り返る活動 ↓ ・ 対象の差異点から対象のよさや自分の変容を見出す交流（友達、自分の評価）

○ 特別活動の構想

集団とのかかわりを深めながら生活づくりに参画する学級活動

○ はじめに

特別活動において豊かな学びとは、集団活動を進めるために必要な基礎的な事項や技能、態度などを実生活や実社会の各場面に即して、自主的、実践的に発揮できる力として体得し、活用していくことである。特別活動の中心となる学級活動において、新学習指導要領においては、よりよい人間関係を築き、楽しい生活をつくるなど、自分たちの学級や学校の生活の充実と向上のために主体的に参画し、進んで話し合い、協力して実現しようとする自主的、実践的な態度の育成が重視されている。

そこで、特別活動でも、自分の考えを他者に説明する、相手の意見を傾聴する、相互の意見を比較するなど、話し合いを積み重ねながらよりよいものへ集団決定する。この過程を通して、考えを共有し、協働するという力を育む役割を担っている。これは、子どもたち自身が学校や家庭や地域社会のなかで学んだ知識を、他者との多様な関係のなかから、躍動的で創造的な授業を創造し、ともに問題解決していく力を育成していくこととも合致する。

1 主題について

集団とのかかわりを深めながらとは、学級や学校の集団の一員として自分が大切な存在であることを認識し、所属感や役割意識をもつことである。生活とは、学級や学校で過ごすなかでの要素全般の総称である。生活をつくり出すためには、生活全般の要素のなかから特に、次の三つの要素が重要になる。①学級や学校の今の状況を「感受」すること、②今の状況から理想の学級や学校を「思考」し、「創造」していくこと、③学級や学校の集団の一員である「意義」を実感していくことである。生活づくりに参画するとは、学級や学校の現状を感受し、計画立案段階から主体的に意思決定に加わり、理想を思考しながら新たな考えを創造し、理想に近付いていくことの意義を感じていくことである。このことは、将来の民主的な市民社会の形成者として社会参画する態度の素地を養うことにつながる。

集団とのかかわりを深めながら生活づくりに参画する学級活動とは、「感受」「創造」「意義」の三要素を大切にしながら自分も他者もよいと思える応えをめざして個々の役割を明確にし、協力して学級や学校における生活上の諸問題を解決していく学級活動のことである。ここでいう生活上の諸問題とは、学級の共同生活をマンネリ化させたり、人間関係を崩したりするような行動に関する問題、より楽しく豊かな学級をつくらうとする目標を実現していくために積極的にみんなで取り組む活動計画及び実施の問題が考えられる。これは、三要素から生まれる集団意識にかかわる問題であり、直接体験活動を通して高めることができる。この直接体験活動から得た知識を根拠に話し合い活動で新たな考えが生まれる。つまり、今の集団の状況を感受し、理想を求めて思考し、創造していくことで、さらに集団の一員である意義を感じていく学びのことである。

- | | |
|---|--------|
| ○ 今の集団の状況を感受し、解決に向かって自ら活動しつづける子ども | (学ぶ意欲) |
| ○ お互いのよさを認め合い、理想を求めて思考し、納得のいく応えを創造する子ども | (能力) |
| ○ 自己の役割を果たし、今まで以上に集団の一員としての意義を感じる子ども | (自信) |

～ワークショップ型の話合い活動を位置付けた授業づくり～

黒 澤 真 二

2 副主題について

ワークショップとは、人々が共同作業を進め、お互いに理解しながら総合的に創造していく参加体験型のグループ学習のことである。ワークショップ型の話合い活動を位置付けた授業づくりとは、「感受」、「創造」、「意義」を生み出すために、参加体験を通した少人数討議を行うことで、判断の根拠となる意味ある情報を収集・選択していかねばならない「状況」と「環境」をつくり出すことができるようにすることである。このときの活動過程を「問題点の共有化」、「解決案の明確化」、「実践化」の三段階とし、授業づくりを展開していく。具体的には、「問題点の共有化」の段階では、今までの経験に基づく自分の情報から学級の実態を感受し、早急に解決しなければならない共同の問題を発見する。次に、「解決案の明確化」の段階では、ワークショップ型の話合い活動①として、既知の情報から話合いの観点を比較し原案を創造するとともに、話合い活動②として、直接体験を通して未知の情報から既知の情報へ活用し、新たな考えを創造していく。最後に、「実践化」の段階では、今までの話合い活動のなかに一人一人の考えが反映され、さらに実践活動を通して、集団の一員としての意義を感じることができるようにする。

3 具体的構想

● ワークショップ型の話合い活動を位置付けた授業づくりの教材化と活動構成について

学級目標具現化に向かって、重点題材を題材のねらいや学年の発達段階に応じて意図的・計画的に設定する。このときの「感受」「創造」「意義」を引き出すための条件を下の三つで考える。また、「解決案の明確化」の段階におけるワークショップ型の話合い活動①や話合い活動②の活動構成を次のように考える。

【表1 ワークショップ型の話合い活動①②を位置付けた教材化の条件と一単位時間の活動構成】

○ 直接体験活動ができ、一人一人の思いをもたせることができるもの (体験)			
○ 解決案が豊富に考えられ、学級の総意によって新たな高まりが期待できるもの (討議)			
○ 一人一人に役割分担ができ、みんなが協力することで成功できるもの (作業)			
段階	問題点の共有	解決案の明確化	実践化
状況	何とか解決したいと思える状況	話し合わなければならない状況	実践を成功させたいと思える状況
環境	他教科等による学びの体験の統合	観点での比較や直接体験ができる場	協働できる場
活動	分析活動	比較活動	評価活動

◎子どもの実態に基づく必然性のある状況

◎必然性のある状況に基づく納得できる応えを求められる場の設定

段階	出し合う	比べる	まとめる
活動構成	話合い① ・ブレインストーミングでの全体討議 ・話合いの観点にそった仲間分け	・マトリックスを活用した操作活動 ・2つの観点に基づく少人数討議	・児童への意図的指名 ・G.Tからの情報 ・学級の実態の想起 ・2つのめあての観点にそった集団決定
	話合い② ・試しの直接体験活動後のプレイ ・ンストーミングによる情報収集	・体験による新たな情報の整理 ・マトリックスを活用した少人数討議	

第3学年 題材「ネイチャー集会でチャレンジ!」

(1) 目 標

- 1 西公園で行うネイチャー集会上に1年生を招待して楽しませるという目的意識の下、1年生の立場で考えた話合い活動を行い、協力して実践活動を行うことで、学級目標に近付くという意識を高めることができる。
- 2 1年生にとっておきの遊びを教えるために、安全で楽しい遊び場になるかを創造する過程で、全体やグループで話合い活動の進め方がわかり、決まったことをもとに一人一人が役割を分担して活動することができる。

(2) 題材の考え方

- 本題材の価値は、1年生を西公園に招待する集会活動の計画や運営、準備などを行うことで、学級での役割を分担し、協力し合って集会活動を実践することである。具体的には、①学級の「もっと協力していきたい。」という現状を把握し、ネイチャー集会の必要性を感受すること、②ネイチャー集会でどのような遊び場をつくるか友達と意見を比べ、1年生が安全で楽しめる集会の内容を創造すること③ネイチャー集会を通して、学級の友達とかかわりながら集会を成功させることで、学級の一員としての意義をさらに深めることである。

(3) 学習の流れ

つくる段階：1～2／5時（問題点の共有）

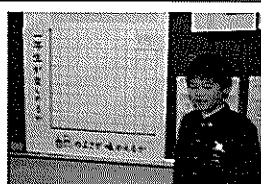
1年生との交流会から、「とっておきの遊びを教えてください。」という1年生の要望に応えるネイチャー集会を開くことを話し合う。

この集会は、1年生をよろこばせるのももちろんですが、3年1組の学級目標を達成するためでもあります。（中略）3年1組の1つの思いは1年生につたわるのかとても楽しみです。これからもっと楽しめるように一人一人の役目をはたして、最高の遊び場をつくりたいと思います。3年1組のチームワークを発揮するときです。

資料1 N児の学習後の感想

決める段階：3～4／5時（解決案の明確化）

話合い活動①②を通して、ネイチャー集会の5つの遊び場を決めたり、1年生がより楽しく安全に遊べるような遊び場を創造したりしていく。



以前体験したターザンロープが楽しかったです。

写真1 今までの経験した遊びをもとに考えよう

つくる段階では、ネイチャー集会を開くことが学級目標の具現化につながるということを感じることがねらいである。そのために、GTの先生と西公園で自然の素材を生かした工作をしたり、もので遊んだりする場や1年生と交流を続けたりする環境を設定した。

【教師の支援】

- ※ 図画工作科との学びの体験の統合により、西公園での体験活動に興味・関心をもたせた。
- ※ 1年生と交流を続け、1年生の「とっておきの遊びを教えてください。」という内容の手紙を提示した。

【子どもの様子及び考察】

- 子どもたちは、ネイチャー集会の必要性を感受することができた。これは、学級アンケートから自分たちの協力することが必要であるという現状を把握させる状況と1年生の手紙を基に、図画工作科と学級活動の学びの体験を統合する環境を設定したからである。

決める段階では、ワークショップ型の話合い活動①②を通して、既知の体験や知識を基に、友達の考えと自分の考えを比較し、ネイチャー集会の遊び場を創り上げることをねらいとしている。そのために、マトリックスボ

F児：「ターザンロープ」⇔「ロープウェー」

自分たちが以前体験したときには、どちらも楽しかった。だから、1年生も「もっと楽しめる」と思う。⇒ 楽しかった遊びを組み合わせた「ジャングルタワー」に決定。

資料2 ワークショップ型の話合い活動①



写真2 遊び場での体験活動や少人数討議の様子

「ジャングルタワー」をやって、わたしも最初落ちそうになって、1年生だったら落ちたとき、もっと痛いから安全性に気を付けてマットなどを用意する必要があると思う。(全体討議で採用)

「落ち葉拾いで宝さがし」のゲームを待つ時間を短くするために、受付をつかって、そこでルールを説明し、宝を入れるカプセルを返して中身だけもらえるようにする。

資料3 ワークショップ型の話合い活動②のN児の考え

行う段階：5／5時（実践化）

ネイチャー集会を実践し、感想を交流する。

実際、集会を行って、1年生もたくさん遊んでくれて、すごい笑顔も見られてみんなから楽しかったと言われ、うれしかったです。3年生の学級目標に向かう気持ちが表れたと思います。1年生の笑顔を見るためチームワークを高めました。

資料4 ネイチャー集会後のN児の感想

【全体考察】

- ◎ ネイチャー集会を成功させることで、学級としての協力することを高めていくことができた。これは、今の学級の実態を感受し、ネイチャー集会の遊び場を決めなければいけないという状況と情報収集するための環境を設定することで、少人数や学級全体での情報活用を促し、5つの遊び場を創造することにつながった。そして、協力して実践していくことで、集団の一員としての意義を感じることができた。課題としては、全体交流の時間の確保であった。

ードを使い、話合いの観点にそって友達の前案と比較したり、決まった遊び場を実際に西公園につくり、直接体験する場を用意したりしながら少人数グループや学級全体で意見交流を行い、最適案を決めていった。

【教師の支援】

- ※ マトリックスボードに自分の考えを置き換え、操作することで友達の考えと比較し、原案を整理した。
- ※ 決まった遊び場を実際に西公園につくり、体験することで、情報活用できるようにした。
- ※ 1年生の保護者をGTとして招聘した。

【子どもの様子と考察】

- ネイチャー集会を成功させるためには、どんな遊び場にするのかを話し合わなければいけない状況を設定し、マトリックスボードで友達と意見交流できる環境を用意したことで、友達と自分の考えを話合いの観点で比べ、5つの遊び場を集団決定することができた。
- 子どもたちからは、「実際に体験していないので本当に1年生にとっておきの遊び場になっているか試したい。」という状況が生まれた。そこで、試しに体験する環境を設定したことで、体験を基にした情報から5つの遊び場の最適案を決めることができた。

行う段階では、役割分担しながらネイチャー集会を実践し、達成感や有用感を味わい、集団の一員としての意義をさらに深めることをねらいとしている。そこで、集会後に感想を交流する場を用意した。

【教師の支援】

- ※ 1年生からお礼の手紙をもらう場を用意した。
- ※ 実践後に自己評価・相互評価していった。

【子どもの様子と考察】

- 1年生が楽しめるようにペアの1年生の面倒を見ながら集会を運営することができた。資料4からも学級目標に近付いた意義を感じていることがわかる。

○ 道徳学習の構想

道徳的価値の大切さを実感する道徳学習

○ はじめに

道徳教育が究極的なねらいとしているのは、人間が本来もっている願いやよりよい生き方を求め、実践する人間の育成を目指し、その基盤となる道徳性を養うことである。道徳教育は、人格の形成の基本にかかわるものである。道徳学習は、道徳的価値の大切さや重要性を自覚し、自己の生き方を主体的に考え、求めていこうと意欲付けしていく時間である。そのためには、切実性や問題性があり、心に響き感性に訴えることのできる道徳学習を展開し、各教育活動において行われる道徳教育を調和的に補充、深化、統合し、道徳的実践力を高めていくことができるようにすることが重要になる。道徳学習における「豊かな学びを育む」とは、子どもが自分の生き方に対しての問いを追究し、最終的に「このような生き方をしたい」という明確な自己像を描いていくことができる学びを展開することである。

現代社会においては、変化が著しい生活の中で、子どもたちの経験や生活の幅が狭くなり、人と人とのかかわりが希薄になるとともに、子どもたちの心の荒廃も顕著になってきている。そのような状況の中で、子どもたちが自分自身の道徳的課題に立ち止まり、自分自身の生き方に対する問いをもち、その問いに対する応えの追究を行っていくことで、自分の生き方への考えを深めることができるような道徳教育の充実に取り組むことが求められている。

1 主題について

道徳的価値とは、子どもたちが将来出合う様々な状況において、自らの力で最も適切な行為を導き出すための基準のはたらきをするもののことである。子どもたちが将来出合う様々な場面においては、いろいろな行為の可能性がある。いくつかある可能性の中で、はじめて人は価値を実現するための最も適切な行為の選択をする。選択するにあたっては、自ら「本当によいことだ」と思う基準に従う。その基準のはたらきをするのが、道徳的価値である。

道徳的価値の大切さを実感するとは、その基準や原理のはたらきを自分とのかかわりの中でとらえることを通して、他人に強制されてではなく、自ら「本当によいことだ」と気づき、把握した価値を自分のこれからの生活へと取り入れていこうとする姿のことである。

道徳的価値の大切さを実感する道徳学習とは、道徳的価値を対象として意識し、自分にかかわりのあることとして把握した価値を自分へと取り入れていく学習のことである。その姿として、次の3つの姿でとらえられる。①多面性、関係性といった道徳的価値の本質について理解すること、②資料中の主人公の姿を通して、自分の中にある道徳的価値に気付くこと、③上の①と②をもとに高まった価値から、「こんな自分になりたい」という具体的な姿を描き、価値を自分の中へ取り入れることである。そうすることで、常に道徳的価値を自分とのかかわりで考える学習を展開することができ、このことで自分のよさに気づき、自分への自信をもつことにもつながると考えられる。

- | | |
|---|--------|
| ○ 自分の生き方を求め、資料や他者と主体的にかかわり、道徳的価値を追求する子ども | (学ぶ意欲) |
| ○ 資料や他者とのかかわりの中から、道徳的価値の大切さを理解することができる子ども | (能力) |
| ○ 道徳的価値のよさを実感し、積極的に自分の中に取り入れ、生活にいかしていこうとする子ども | (自信) |

～二つの資料を比較する活動を取り入れた授業づくり～

三 浦 研 一

2 副主題について

二つの資料を比較するとは、自分たちの日常に近い主人公を描いた資料（資料A）の道徳的場面と価値高い主人公を描いた資料（資料B）の道徳的場面とを比べたり、推し量ったりすることである。

二つの資料を比較する活動とは、①資料Aとこれまでの自分自身を比較し、子ども一人一人が道徳的課題を把握するための比較活動、②資料Aと資料Bの道徳的場面を比べたり、推し量ったりしながら、道徳的課題を追求するための比較活動、③2つの資料を比較することで見出した道徳的価値をもとにこれまでの自分自身を振り返り、道徳的課題の解決を行い、実生活に向けての見通しをもつための比較活動の3つである。

二つの資料を比較する活動を取り入れた授業づくりとは、以上のような比較活動を、①→②→③という順序で道徳学習に位置付けることである。それは、子どもたちが主体的に道徳的課題を解決し、道徳的価値の自覚を深めていくためには、そのような展開が欠かせないからである。資料との出会いから生じた道徳的課題から、資料や資料中の主人公の生き方を自分の既有的価値観に振り返りながら比較活動を行い、具体的な生き方を創り出していく。

3 具体的構想

● 二つの資料を比較する活動を取り入れた授業づくりにおける資料選定の在り方

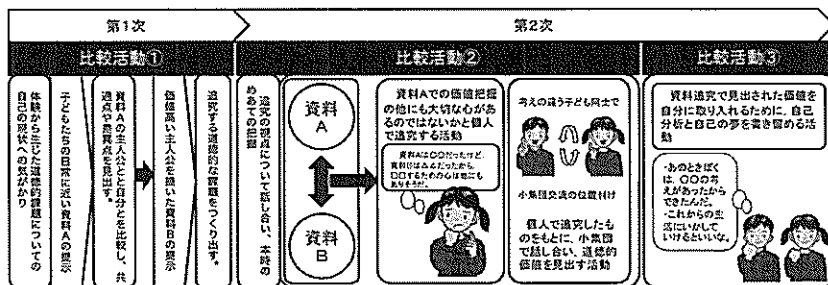
比較活動では、右のような視点で2つの資料を活用していく。資料A Bとも同じ価値項目の資料であるが、主人公の道徳的行為を支える側面に違いがあるものを選定し、資料を比較しながら道徳的価値を追究せざるをえない状況をつくり出していくことで、主体的に道徳的価値を見出し、道徳的課題の解決に向かうことができると考える。

資料A	資料B
子どもの見方考え方に近く、どの子ども共感できる主人公が描かれているもの 道徳的行為を支える側面が一面性に描かれているもの	子どもたちが資料Aをもとに、あるべき姿について追求していくことができるもの 道徳的行為を支える側面が多面的に描かれているもの

【図1 二つの資料の選定条件】

● 二つの資料を比較する活動を取り入れた活動構成の工夫

子どもたちが道徳的価値の自覚を深めるためには、道徳的課題を主体的に解決していくことが大切であり、その過程の中で、子どもたちは自分の生き方について考えを深めていくことができる。そこで、図2のような活動構成の工夫を行う。まず、比較活動①では、これまでの経験をもとにしながら、子どもの生活実態に近い資料Aを提示することで、道徳的価値の一面性をとらえさせる。そして、資料Bを提示し、ねらいとする道徳的価値には、他にも大切な心があるのではないかという課題をもつことができるようにする。次に比較活動②では、資料Aと資料Bを比べ、それぞれの主人公の違いを比較することで、資料Aでは見出すことができなかった側面を資料Bの中から明らかにし、道徳的価値を多面的にとらえ、課題追究を行うことができるようにする。さらに、比較活動③では、自己分析と自分の夢を書き留める活動の位置付け、把握した価値を自分に取り入れることで、課題解決を行うことができるようにする。



【図2 二つの資料を比較する活動を取り入れた活動構成の工夫】

第4学年 主題「がんばる自分はかがやいている」

(1) 目 標

- 1 自分でやろうと決めたことを最後まで粘り強くやり遂げることのよさや大切さについての考えをもとにして、自分の生活を見つめ、自分のこれからの生き方について考え、実践に向けての意欲を高めることができる。
- 2 自分の心の中には、やめてしまいたい気持ちとがんばってやり遂げたいという気持ちがあることに気づき、自分の成長のためには、あきらめずにがんばることが大切であるととらえることができる。

(2) 主題の考え方

- 本主題「がんばる自分はかがやいている」において、資料A『がんばった足かけうしろ回り』と資料B『台風の島に生きた人』を提示することによって、その2つの資料を比べることでやり遂げるための大切な心を見出し、把握した価値を自分に取り入れ、実生活へ向けて実践意欲を高めていく。

(3) 学習の流れ

見つめる段階：1/2時

これまでの経験から、資料をもとにやり遂げるための大切な心について話し合う。



写真1 自分の経験を振り返るK児

がんばろうと思うけど、途中で投げ出してしまったことも。どんな心があれば、やり遂げることができるのかな。

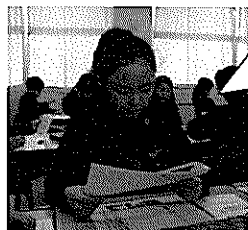


写真2 資料Bを読むK児

資料Aの主人公は、友達の支えや自分のがんばりでやり遂げることができたけど、資料Bの主人公は違うような気がするな。

資料Aのたかふみ君は自分のためにがんばっているけれど、資料Bの卓爾さんは島に住んでいるみんなのためにがんばっているところが違う。

資料1 資料Bを読んだ後のK児の感想

深める段階：2/2時

資料Bをもとに、やり遂げるための大切な心は他にもあるのか話し合う。

見つめる段階では、これまでの経験の想起から、資料A『がんばった足かけうしろ回り』をもとに、自分の道徳的課題を把握することをねらいとしている。そのために、これまでのやり遂げることができた経験やできなかった経験の想起、資料からやり遂げるために大切な心の追求、資料B『台風の島に生きた人』の提示を行った。

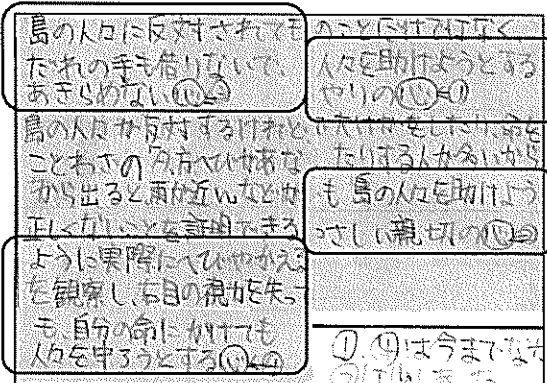
【教師の支援】

- ※ 価値にかかわった自分の経験を想起させた。
- ※ 子どもたちの生活実態に近い資料Aを提示した。
- ※ 資料Bを提示し、資料Aとの違いから道徳的価値を追究するための課題をつかませた。

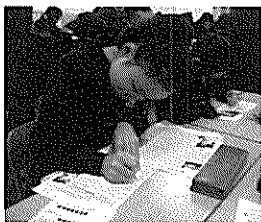
【子どもの様子及び考察】

- 目標をもって取り組んだ経験を振り返ることで、やり遂げることができた自分や、できなかった自分に気付くことができた。
- 資料1のように、それぞれの主人公がやり遂げることができた理由には違いがあることに気付くことができた。これは資料Bを提示し、資料Aとの比較を行ったことが有効であったからだと考える。

深める段階では、2つの資料を比較しながら、やり遂げるための大切な心を多面的にとらえることをねらいと



資料2 比較し違いをまとめたK児のノート



それぞれの主人公が
やり遂げるために大切
にしている心には違い
があるみたい。

写真3 大切にしたい心を追うK児

資料Aでは、自分で決めたことを最後まであきらめない心が大切だと思っていたけれど、資料Bで考えてみると、人のためにがんばるという心もやり遂げる心を支える大切な心なんだということがわかってきました。

資料3 追求後のK児のノートの記述



資料Aの主人公に似て
いる自分に気付いたけ
ど、これからは、強い思
いをもってやり遂げるよ
うにしたいです。

写真4 これらの自分について発言するK児

これからの生活にも、目標を立ててがんばらなくてはならないことがたくさんあると思います。
自分を信じて最後まで希望を捨てないでいようとする心をもった自分を大切にしたいと思います。

資料4 学習後のK児の感想から

している。そのために、資料Aと資料Bのやり遂げることができた理由の比較と、やり遂げるための大切な心について追究するために小集団での交流活動を設定した。

【教師の支援】

※ 2つの資料を比較しながら、それぞれの主人公のやり遂げることができた理由を見出すことができるノートの提示を行った。

※ 資料を比較して明らかになった主人公のやり遂げる心の違いをもとにして、それぞれの主人公がやり遂げるために大切にしたい心について色の違う付箋紙に書く活動を位置付けた。

【子どもの様子と考察】

- 資料2のように資料を比較することで、主人公のやり遂げることができた理由の違いを多面的にとらえることができた。
- 資料3のように、主人公のやり遂げることができた理由について自分の考えを書く活動を通して、資料Aでは明らかにすることができなかったやり遂げるための大切な心について、資料Bをもとにしながら新たな価値に気付くことができた。

【教師の支援】

※ やり遂げるために大切な心をもとに、自分自身を見つめ、価値を自分の中に取り入れるための自己分析と自分の夢を書き留める活動を設定した。

※ 実践への意欲を高めることができるようにするための教師の説話をを行った。

【子どもの様子と考察】

- 資料4のように、把握した価値をもとに自分自身を見つめこれからの自分について書き留める活動を位置付けたことで、これからの自分の生き方についての見通しをもつことができた。

【全体考察】

- ◎ 主人公の道徳的行為を支える側面の違う2つの資料を比較しながらねらいとする道徳的価値を追求していく場面において、主人公がやり遂げることができた理由について多面的にとらえ、それらをもとに自分自身を見つめ、これからの生き方を見出しているところに、自分の生き方を創り出す姿が表れていると考える。これは、2つの資料を比較することで、ねらいとする価値を支える側面について多面的にとらえさせることが有効であったからだと考える。課題としては、比較活動での効果的な話し合いの工夫（小集団交流活動）の在り方について考える必要があった。

○ 総合的な学習の時間の構想

実社会・実生活と主体的にかかわる総合的な学習

○ はじめに

総合的な学習の時間が究極的なねらいとしているのは、横断的・総合的な学習や探究的な学習を経験しながら、自己の生き方をつくることである。PISA 型の学力育成が求められている昨今、総合的な学習が、各教科の中だけでは実現できない部分を担う役割はより大きくなってきていると考える。そこで、これからの総合的な学習では、学ぶべき内容と付けたい力を明確にし、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学びを展開するという特長を最大限に生かしながら、そこへ向かう方法をはっきりとさせる必要が出てきているといえる。つまり、子どもたち一人一人がつくった課題を、実社会と自分自身との関係を意識しながらこれまでに身に付けた知を使う経験を積み重ねて検討したり実践したりすることで、解決を図っていくプロセスを明らかにしていく必要があるのである。また、このような学びを展開することで、これまでに身に付けてきた知が教室内だけでなく実社会でも有効に活用できたことを実感でき、総合的な学習そのものがより探究的になるだけでなく、学ぶ意欲の向上にもつながると考える。

1 主題について

実社会・実生活と主体的にかかわるとは、学習対象が存在する社会や自然や生活の場面において、これまで身に付けてきた知識や技能が存分に発揮され、その際に遭遇する様々な「壁」を乗り越える経験を重ねることで、学びの成就感や自分の可能性に気付いていくことである。具体的には、①自ら設定した課題を解決するために、既知の技能などの方法知や、知識や見方考え方を活用している②目的をもって他者や学習対象とコミュニケーションを図り、情報を収集、分析したり創り出した考えを発信したりしている③自己実現を通して、学習に取り組む意義を感じ、自己肯定感を高めている姿である。

実社会・実生活と主体的にかかわる総合的な学習とは、実社会や実生活から見出した課題を、教室だけでなく実社会を舞台に、各教科等で身に付けた知を使いながら追究し、他者や実社会との相互作用により、有用感や達成感を味わう学習である。具体的には、学習対象が所属する実社会を対象に活動を行ったり、そこで見出した自分なりの考えを友だちと検討し合ったり、実社会に自分達がつくり出したものを発信したりすることで、これまでの学びが生活や実社会に「役に立つ」ことを実感することができる学習である。そのためには、価値ある文化や人々の営みに出会い、それらが存在する実社会を学びのステージとして追究活動が展開され、課題を達成するためには実社会と積極的にかわりながら学校で学んだ知を活用していく必然性に迫られるような学習展開を構想することが必要となる。

- 自分の課題をつくり、目的的に実社会とかかわりながら解決へのプロセスを経験することで、学びの意義
(学ぶ意欲)
を実感している子ども
- 自ら各教科等で習得した知を活用する必然性に気づき、探究的に追究していくことで、自分の応えを見出
(能力)
し表現している子ども
- 実社会で自分の知を総合化することで課題解決を実現することで、学びの意義を実感し、実社会にいき
(自信)
る一員としての生き方を考える子ども

2 総合的なカリキュラムの考え方

● 実社会・実生活と主体的にかかわる教材化の条件

(1) 学習対象

学習対象は、子どもたちにとって価値高いものでなければならない。「子どもたちにとって価値高い」とは、対象を追究していくことで、自己の生き方の参考になったり、生活現実にかかわる事象に対しての認識が深まったりすることである。具体的には、①地域の文化や生活を創っている象徴的なものやこと（行事、学問、建築、芸術、スポーツ、自然環境、社会の仕組みなど）②自分の生き方を創っていく際にモデルとなったり参考となったりする人間やその生き方などである。

(2) 学習対象選定の条件

これからの総合的な学習では、学習対象そのものの追究だけではなく、それらの対象が存在する実社会のようすをとらえたり、その実社会で実際に自分たちもその立場になったり活動したりする経験が必要である。そこで、学習対象選定の際には、価値ある対象であることはもちろん、実社会で子どもがこれまでにとらえたことを活用できるような新たな課題を含んでおり、価値ある経験ができるようなステージが設定できることが必要となる。ここでいう価値ある経験とは、試してみたり、交渉したり、働きかけてみたりするなど子どもたちが実社会と本物のかかわりをもつことである。また、カリキュラム構想については、第3学年においては、「総合的な学習入門期」として位置付け、活動を十分に味わわせながら、基本的な学び方を獲得することに重点をおく。そのため、子どもにとって身近な生活場面型やゴール像がイメージしやすいイベント開催型の単元を位置付ける。そして、学年が進むにつれて、徐々に視点を学級や学校の外に広げ、向社会型の単元に挑戦したり、プロジェクトを子どもたちが立ち上げ、実現に向けて取り組んでいくようなプロジェクト型の単元を位置付けていく。また、高学年においては、自分自身の生き方や考え方をつくっていくことを主眼においたヒューマンプロデュース型の単元も位置付けていく。



図1 4年間を見通した総合的な学習のカリキュラムの考え方

(3) 学習対象が備えるべき

	内 容	中 学 年	高 学 年
郷土文化	○ 日本の伝統文化に対する理解と愛情を育て、文化を受け継ぎ守っていく態度を育てる。	地域の文化に積極的に親しみ、地域やその文化への愛着をもつこと。 地域や文化を支える人の工夫や努力を理解すること。 地域の一員であることに気づき、郷土の文化を守るための考えをもつこと。	日本の文化や伝統の特徴に気づき、郷土や文化への愛着を深めること。 進んで文化行事や活動に参加し文化を支える人の工夫や問題点を理解すること。 文化を調べたり、つくったりして自分たちの文化として実践すること。
環境	○ 身近な自然や環境と積極的にかかわり、生活と環境の関係について理解し、よりよい環境をつくる。	身近な自然と自分の生活の関わりに気づき、愛着をもって接すること。 環境問題を解決するための機関について知り、自然を守る人々の工夫や努力について理解し、自分にもできる方法を考えて試してみる。	地域の自然や環境の美しさ、大切さに気づき環境との共存について考えること。 環境問題の現状について、科学的な方法を用いて調べるとともに自分の生活との関係を理解し、環境創造をめざし日常生活に実践すること。
食育	○ 「食」に関する知識を身に付け、健康的な生活を実現できる食生活を実践できる態度を育てる。	食文化について調べることで、食についての正しい知識を身に付けること。 自分自身の食生活を振り返り、食生活と健康とのかかわりについて調べ、これからの食生活の在り方について考えること。	「食」の安全性などの知識を身に付け、選択する力を獲得すること。 「食」とそれを支える「農業」の関係を、体験を通して調べ、環境とのかかわりを合わせて考えることで、その重要性について

			考えること。
福祉	○ 自分を含め高齢者や障害者、年少者の存在のことを理解し、皆が幸せに暮らせる社会をつくらうとする。	身近な高齢者、年少者、障害者について理解を深め、身近なところの配慮や工夫に気付くこと。 身近な福祉問題解決のために、自分たちにできる方法を考えて実践すること。	毎日の生活が人々の支えや助け合いで成り立っていることに気付き、他者を思いやり大切にすること。 人々が幸せに暮らせる社会をつくるには、どうすればいいか解決策を考え実践すること。
生命健康	○ 生きることのすばらしさや生命の尊さに気付き、自他の生命を大切に、心身ともに健康に生きる。	動植物の生態や生育環境に関心をもち、生命の神秘さや大切さを感じる。 健康で安全な生活を送るために、必要なことに気付き、よりよい生活習慣や態度を身に付けること。	生命の誕生について理解し自分の命と周りの人や環境との関係を理解すること。 生命や健康を維持するために、自分の生活を見直し、よりよい生活環境や生き方をつくること。
勤労・進路	○ これまでの自分やこれからの自分の将来の夢を考え、自分の個性を生かしていく。	家庭や学校、地域での身近な人々の働く姿や仕事に出会い、その営みが自分たちの生活を支えていることに気付き、職業に関心をもつこと。 身近な人々の職業や生き方に関心をもつとともに自分自信の姿を見つめること。	職業調べや職場体験を通してそれぞれの職業や働く人の生き方を理解し、働く意義を考えること。 自分の個性や将来の夢について考え、なりたい自分に向かって、自分の理想像をもった生き方考えること。
経済金融	○ 健全な金銭感覚を養いものやお金を大切に、資源を有効に活用する。	お金の役割を理解し、様々な目的や使い方や貯め方があり、お金や資源の大切さを感じる。 少額のお金を使って金融に関する意志決定を学び、お小遣いや慈善への寄付を含む使い方を考えること。	将来のニーズは貯蓄によって実現されることを学び、お金や資源を取り扱う権利と責任をもつこと。 消費者の選択が他の人々の経済や環境に与える影響を含めお金の使い方についての社会観をもつこと。
法	○ 法への関心を高め、その役割や必要性を理解し法に基づいた社会参加意識を高めていく。	学校や地域のルールや法と自分たちの生活とのかかわりに気付き、そのよさを感じる。 よりよい学校生活や地域社会での生活を送るためにどのようなルールがあればいいか考えること。	社会生活を維持するための法がどのような目的でどのようにつくられているのか理解すること。 法がよりよく活用された社会の在り方について考えること。
国際理解	○ 日本や世界の国々に関心をもち、文化や生活習慣を理解し、他の国々の人々とともに生きていこうとする。	様々な国の人々と交流して文化を知り、互いのよさや違いに気付き、認め合うこと。 外国語に関心をもち、様々な場面での歌や言葉に慣れ親しむこと。	様々な国の文化や歴史、生活習慣を理解するとともに互いの違いを認め尊重しようとする。 広い視野で世界の中の日本人としての意識を高め、積極的に関わっていこうとすること。 →言語活動については、外国語活動へ

(4) 身に付けさせたい力

総合的な学習でこそ身に付けさせたい学力がある。各教科の枠にとらわれない学習であるからこそ、各教科で身に付けている知を組み合わせながら、必然的に発揮できるように、各学年や単元で身に付けさせたい力の重点化を図り、単元を構想していく必要がある。特に、中学年では、総合的な学習の時間入門期ということで、情報活用力や実践力など活動そのものを重視していく。また、高学年では、中学年で経験を生かして、課題設定力や多面的な見方・考え方、自己評価力などを育て、一人一人が、より主体的に目的をもって学習を進めていくことができるようにしたい。

観 点	中 学 年	高 学 年
知識理解力	郷土文化、環境、福祉、生命健康、勤労・進路、国際理解を追究するなかで、見出すことができる具体的な知識を身に付ける。	郷土文化、環境、福祉、生命健康、勤労・進路、国際理解の知識を身に付け、もの・人・ことから生じる願いや取り組み、自分の具体的な行動の仕方などを知る。
課題設定力	気がかりや疑問から追究可能な課題を設定することができる。	追究の価値を考え、追究可能な課題を設定することができる。
情報活用力	課題解決のために、取材や体験から情報を収集し、必要な情報が取捨選択することができる。	施設や情報機器を有効に活用しながら、収集した情報を検索、選択、再構成することができる。
総合表現力	伝えたいことを順序や内容がわかるように工夫して、目的に応じた表現媒体を選択し表現することができる。	目的意識や相手意識、状況意識をもち表現方法を駆使して意図に応じた効果的な表現をすることができる。
多面的な見方・考え方	自分の経験や、各教科等で獲得した知識や技能をもとに、情報を比べながら、自分の考えを広げることができる。	各教科等で獲得した知識や技能を生かし、得られた事実を分析、関係づけして構造化し、自分の見方を高めることができる。
実 践 力	自分の目的に応じて、周りの状況や、条件を意	自他の目的に応じて、周りに対する影響を考え

	識して活動内容を決定し、自分や相手の立場を考え、他者と協力しながら活動することができる。	ながら活動内容を決定し、自分や相手の立場を明確にし、自分の活動を客観的な視点でとらえ活動することができる。
自己評価力	自分の追究を、他者から助言を受けながら客観的に見つめたり、自他のよさを捉えたりすることができる。	自分の追究を他者と比較しながら、客観的、分析的に見つめ追究の応えを肯定的にとらえることができる。

● 子どもの「問い」を深化・拡充させる活動構成

総合的な学習は、子どもたちにとっての学ぶ意義や目的意識を明確にするため、日常生活における課題を発見し解決しようとするなど、実社会とのかかわりを重視している。そのため、学習を展開していく中で、意図的・計画的に子どもたちが実社会とのかかわりながら探究活動が進められるようにしなければならない。

(1) 単元導入時の意図的な実社会とのかかわり

総合的な学習は、比較的長い期間で展開される学習である。これは、子どもたち一人一人の課題解決を探究的にじっくりと行っていくことを保障しているからであり、それだからこそ、教材との出会いは重要である。つまり、教師が設定した実社会にあるテーマに子どもたちをいざない、知的好奇心をかき立てられ「もっと追究してみたい」という意欲を高める必要がある。そのためにも、教師は、実社会のテーマと意図的に子どもたちを出合わせる場を設定していく。

(2) 課題設定から解決への道筋をさぐっていくプロセスと実社会とのかかわり

テーマとの出会いから生み出された気付きをもとに、自分の課題を設定し、課題解決に向けた見通しをつくったり、これまでに身に付けてきた様々な知識や技能を駆使しながら解決へ向かって追究していったりするために、繰り返し実社会とのかかわる必要が出てくる。ここでは、教師の意図的な実社会との出会わせの他に、子どもの求めに応じてかかわりを認めていくことも多くなっていく。また、子どもたちは、課題解決を実社会を通して模索している段階であるため、試行錯誤と学び直しが許される学習環境を保障しなければならない。

(3) 協同的に思考・表現していくプロセスと実社会とのかかわり

子どもたち一人一人の課題に沿って追究される総合的な学習では、子どもたちの実社会とのかかわり方にも共通するところや異なるところがあるはずである。また、個の課題に沿って追究していく場合、まだ学びは閉鎖的で、独りよがりなところも見受けられる。そこで、他者のもっている情報や考え方を取り入れ、より多面的な思考にしていくために、協同的に思考・表現していく場を設定していくことが必要となる。ここでいう協同的とは、①同じ課題や異なる課題で追究している他者の考えと自分自身との考えを比較する活動②実社会のひと・もの・ことと主体的・往復的にかかわりながら課題解決を図っていくことの2つがある。そして自分なりにつくった文化や生き方を実社会に発信し、それに対しての実社会からの反応（成果や評価）を得られる場面や機会を位置付けることで、更に広い実社会への関心を高め、参画していこうとする態度を育てていく必要がある。

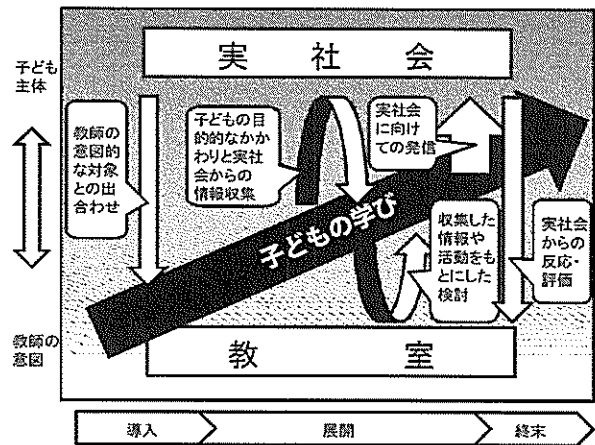


図2 子どもの内面の学びのベクトル

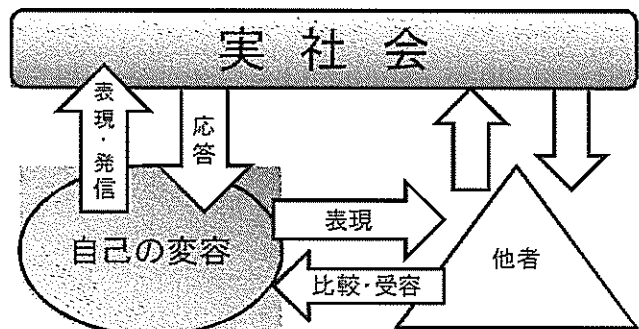


図3 協同的な思考・表現

総合的な学習の時間の実践

第4学年 単元「つくろう!我らの附属小ふくこい」

総合部 高良祐治

(1) 目 標

- 1 福岡に根付き始めた「ふくこい」の起こりや意味やふくこいをつくるために必要な郷土文化を調べたり、自分たちのふくこいをつくったりすることを通して、郷土への愛着を深めることができる。
- 2 ふくこいの専門家など、実社会の人々とかかわりながら、郷土の文化や自分たちらしさを取り入れたオリジナルふくこいを衣装、曲、演舞の観点から構想し、自分たちだけのふくこいをつくることことができる。

(2) 単元の考え方

- 郷土や学校文化をベースにして、自分たちの発想を取り入れた「ふくこい」をつくることを主なねらいとしながら、各教科等で身に付けた知を活用したり、オリジナルふくこいづくりのために必要な情報を収集、協力を仰ぐために、実社会の人々とかかわっていったりする活動を子どもの実態に合わせて取り入れていく。そして、できあがったふくこいを地域に発信していくことで、達成感を味わわせるとともに、郷土への愛着を深めさせたい。

(3) 学習の流れ

第1次：1～3/19時

「ふくこい」と出会い、どのようなふくこいをつくるか計画を立てる。



これが本物の「ふくこい」か。ずいぶん激しい踊りだな。でもとても楽しそうだな。私も踊ってみたいくなってきたぞ。

踊ってみると、とても楽しい！ふくこいは、自分たちでつくって踊るんだ。ぼくたちもふくこいをつくって踊ってみたいな。

写真1 ふくこいとの出会い踊ってみる

第2次：4～17/19時

郷土の文化と学校の文化を取り入れたオリジナルふくこいをつくる。

第1次では、「ふくこい」とはどのようなものなのか知り、その魅力に触れることで、「わたしたちも自分たちの『ふくこい』をつくりたい」という思いを強くもち、ふくこいづくりの見通しをもたせることをねらいとしている。そのために、本物の「ふくこい」を踊る体験を行った。

【教師の支援】

- ※ 「ふくこいアジア祭り組織委員会」の協力を仰ぎ、子どもたちに演舞を披露していただく場や実際に演舞に参加できる場を設定した。
- ※ 代表の石川さんから「ふくこい」は自分たちでつくることができる踊りであることを伝えていただいた。

【子どもの様子と考察】

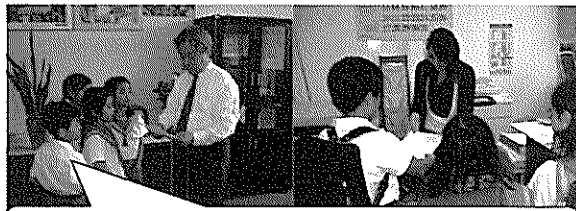
- ふくこいを「自分たちもつくってみたい。」という思いをもたせることができた。これは、見るだけでなく、体験できる場を設定したことが有効に働いたからだと考える。

第2次では、ふくこいの歴史や込められた思いをとらえた上で、オリジナルのふくこいをつくることをねらっている。そのために、専門学校や商店街などとかかわりながらつくっていく活動を設定した。



専門学校の方や踊りの先生に協力してもらってだんだんわたしたちのふくこいができあがってきたぞ。

写真2 3つのチームに分かれてふくこいをつくる



ぼくたちのふくこいできました。一生けん命踊るので、踊る許可をしてください。

写真3 商店街での演舞許可を申請する

第3次：18～19/19時

できあがったオリジナルのふくこいを地域に向けて発信する。



ついに本番だ！福岡や学校の文化を取り入れたぼくたちの思いが、見る人に伝わっているかな。



本物のふくこい祭りで踊れるなんて！こんなにたくさんのお客さんの前でわたしたちのふくこいを踊ることができるなんてうれしいな。

写真4 完成したオリジナル附属小ふくこい

【教師の支援】

- ※ よさこい文化について、インターネットの活用や組織委員会へのインタビューを利用して調べさせた。
- ※ 商店街会長から夏祭りを盛り上げてほしいという依頼が来ていることを伝え、ゴール像を明確にした。
- ※ 「衣装」「音楽」「振り付け」の3チームに分かれて、それぞれ専門学校や組織委員会の方の協力を得ながらつくっていけるようにした。
- ※ 商店街での演舞許可申請も子どもたちに行わせた。

【子どもの様子と考察】

- 博多の文化と学校の文化を取り入れたオリジナルのふくこいをつくることができた。これは、ふくこいをつくる際に自分たちにできるところとできないところをはっきりさせ、専門学校などの協力を得させることで、実現できそうだという思いをもたせ続けたことが有効に働いたからだと考える。

第3次では、自分たちでふくこいをつくることができたことへの成就感を味わわせることをねらいとしている。そのために、地域に向けて演舞を発表する場を設定した。

【教師の支援】

- ※ 地域の商店街の夏祭りや「ふくこいアジア祭り」で演舞する場を設定した。
- ※ これまでにお世話になった専門学校の方や副濃いアジア祭り組織委員会の方を招待し、子どもたちの演舞を評価していただいた。

【子どもの様子と考察】

- 自分たちがつくった衣装、音楽、振り付けで、自信をもってオリジナル附属小ふくこいを踊ることができた。これは、これまでの取り組みの成果を発表できる場を設定したことが有効であったからだと考える。

【全体考察】

- ◎ 「自分たちだけのオリジナル附属小ふくこいをつくる」という課題を達成していく過程を通して、地域の文化や学校の文化を大切にしながら、実社会へ自分たちがつくったふくこい文化を発信する経験をさせることができた。これは、本物のふくこいに出合わせ、祭りでの発表という明確なゴール像を設定した上で、「衣装」「音楽」「振り付け」の各チームが専門学校や組織委員会の方とコラボレーションしながら制作に取り組んだり、チーム相互の合意形成を図る場を設定したりしたことが有効に働いたからだと考える。

第3学年 単元「つくろう!通学のルール ～附属小マナーアップを目指して～」

(1) 目標

- 1 通学の時のきまりやルールに関心を持ち、意欲的に実地調査や地域の方へのインタビューを進め、自分たちが決めたルールを守って登下校することができる。
- 2 実際に自分たちがきめたルールをもとに登下校を実践したり、マナーを守る大切さを広げる報告会を開いたりする活動を通して、法的視点や科学的視点、公共の視点から自分の登下校のルールの意味を考えることができる。

(2) 単元の考え方

- 自分の通学の様子を見直し、納得のいくルールづくりを通して、自分の通学の仕方を変えていくことができるようにする。そのために、附属小の通学に対する考えを地域の方にインタビューし、通学の課題をもたせる。そして、ルールの大切さについて、実地調査や弁護士にインタビューを進め、法的、科学的な視点から考えさせる。

(3) 学習の流れ

対象にであう段階：1～5/20時

通学の実態に対する気付きから、通学の見直しを図る課題について話し合う。



自分の通学の様子を見つめることができるよう、他の小学校の通学の様子と比較からよさや問題点を話し合わせる。

資料1 他校の通学の様子をビデオで視聴



附属小学校の通学の様子をどのように見ているのか、通学の様子の良い点や問題を明らかにしよう。

資料2 通学の実態をつかむインタビュー

対象を追究する段階：6～15/20時

実地調査を進め、根拠をもとにしながら通学のルールをつくる。

対象と出会う段階では、自分たちの通学の様子に対する気付きをもとに、自分の課題をつかむことをねらいとしている。そのために、他校の通学の様子からゴール像を設定し、自分たちの通学を見直すために、地域の方にインタビューする活動を進めた。

【教師の支援】

- ※ 自分たちの通学の様子を見直し、ゴール像を具体的に設定することができるよう、きまりを守って通学する様子をビデオで視聴する場を設定した。
- ※ 通学のよさや問題点について明らかにするため、地域の方にインタビューする場を設定した。

【子どもの様子及び考察】

- 資料2のように、地域の方に生の声をインタビューすることで、具体的に個の課題を明らかにすることができた。これは、自分たちの通学の様子に対する気付きから具体的に調べて、ルールの大切さを明らかにする活動が有効に働いたからだと考え。

対象を追究する段階では、自分のルールをつくることをねらいとしている。そのために、ルールの大切さを納得する資料をもとに意味づけていく、具体的な調査活動やインタビューを進めた。



ルールの大切さについて、だれが聞いても分かりやすく説明ができるように、調査を進めたよ。



バスの運転手さんは、乗る人がどんなことを考えてくれるといいなと思っているのか聞いたよ。

写真3 バスの運転手さんの気持ちは？

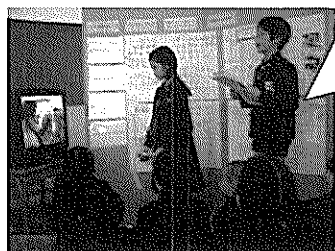


席を譲るルールをもとに、実際どれくらい大変なのか、お年寄りの体験をして調べたよ。

資料4 お年寄りの体験をして、調べたよ。

対象を生かす段階：16～20/20時

ルールをもとに、マナーを守って通学を実践し、報告会を開く。



実際に席をゆずったことや、お年寄りの方の大変さを実感した体験をもとに、ルールの大切さや意味を説明したよ。

自分でお年よりの体けんをして、立っていることがとても大変なことや席をゆずっていく大切さをつくづく感じました。そして下校の時に、お年よりの人がバスに乗ってきたので、少しドキドキしたけど、席をゆずることができました。みんなにこのルールの大切さを伝えて、これから、もっともっと続けたいと思いました。

資料5 通学のルールの報告会を開いたよ。

【教師の支援】

※ 個の課題を明らかにするために、課題ごとのグループで編成し、具体的に調査する場を設定した。

※ 通学のルールの大切さについて、様々な視点から気付くことができるよう、視点が違う小グループでの交流を位置付けた。

※ 通学のルールの大切さについて、聞く人が納得するように、より客観的、実証的に再調査する場を設定した。

【子どもの様子と考察】

- 自分のルールを更に客観的に実証的に明らかにするために、通学の問題について具体的に地域の方にアンケートをとったり、実際にバスでお年寄りの立場になって試行的に実験を行ったりすることができた。これは、自分の課題を解決していく中で、聞く相手が納得のいく資料になるように再調査活動を繰り返し進めたことが有効に働いたと考える。

対象を生かす段階では、自分たちの通学のルールをつくって実践した報告会を開く活動を通して、自分の生活を変えることができることをねらいとしている。そのために、校内や地域で報告会を開く活動を進めた。

【教師の支援】

※ 自分が再調査したことをビデオで紹介したり、ルールをもとに通学で実践したことを発表したりしながら、ルールの大切さを報告する場を設定した。

【子どもの様子と考察】

- 自分が調査したことや実践したことをもとに、自信をもって報告することができた。これは、客観的な根拠をもとに実践をしながらルールの意味を明らかにした報告会を位置付けたことが有効であったと考える。

【全体考察】

- ◎ 通学の様子を法的な視点から教材化を図ったことは、これまでの通学の仕方を振り返るとともに、これからの自分や自分の生活を変えることにつながったと考える。また、情報を整理する活動を繰り返し位置付けた活動構成の工夫により、ルールの意味づけを法的な視点や科学的な視点から、より客観的なデータからルールの意味づけを図り、自分の生活につなげることができた。しかし、自分の生活実践から他に広げ、働きかけていく活動の仕組みが今後の課題といえる。

○ 外国語活動の構想

進んで自分の意思を伝え合う英語活動

○ はじめに

英語活動が究極的なねらいとしているのは、英語活動を通して、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することである。昨今の子どもたちを取りまく状況は、社会や経済のグローバル化が急速に発展し、外国や世界を身近に感じるようになってきている。そのような中で臆することなくコミュニケーションを図ることができる日本人を育成することは、これからの重要課題の一つである。なぜなら、日本人はこれまで中学校から6～10年程度の英語教育を受けてきたにもかかわらず、そのほとんどが、会話することに自信がなく、「英語は話せない」と自覚しているからである。このような事態になっているのは、中学校からいきなり4技能を一度に取り扱ってきた指導の在り方に無理があったことは否めない。そこで、これからの英語活動では、意思伝達を図るために、小学生なりに無理のない英語を用いたコミュニケーションに取り組み、「通じた」「できた」喜びを経験していくことが大切だと考える。従って、カリキュラムに関しても、進んでコミュニケーションを図ることに主眼を置き、英語を使った体験的な活動を中心にカリキュラムを作成することが求められる。

1 主題について

進んで自分の意思を伝え合うとは、同じ目的をもつ他者と、小学生に無理なく使える英語表現を駆使して、互いの気持ちや思いや考えを表現し合うことである。そのためには、①会話内容に最低限必要な語彙と表現を習得する力②会話の文脈を判断して、状況に応じて適切な表現を運用する力③コミュニケーションが成り立たない危機に直面したときに、他の表現で試してみたりジェスチャーなどで補いながら何とか意思疎通を図ろうとする力などが必要である。そして、このような力を英語活動の中での体験として積み重ねることで、「私も英語を使って相手に自分のことを伝えることができた」「相手のいっていることがわかった」といった自信をもつことができるし、どんな場面でも簡単にあきらめずに、積極的なコミュニケーションを図る行動力につながると考える。

進んで自分の意思を伝え合う英語活動とは、英語でコミュニケーションをしてみたいと子どもが思える場面を課題として設定し、そのために英語に関する簡単な語彙と基本的な表現（判断・希望・要求など）を身に付け、それらを用いて、状況を判断しながらコミュニケーションを図り、課題達成を通して英語表現に慣れ親しむ活動である。これまでの英語活動では、語彙習得、パターン・プラクティスやダイアログの暗唱など、子どもの目的意識とは関係のないところで学習が展開されていたところがある。しかし、子どもたちが英語を使ってコミュニケーションを行うことに主体的になるためには、「この英語表現を使えるようになれば、こんなことができる」というゴール像が明確になっていることが大切である。そのためには、状況判断と意思疎通が必要となる場の設定が必要となる。

- | | |
|--|--------|
| ○ 目的をもって、英語でコミュニケーションを図ろうと取り組んでいる子ども | (学ぶ意欲) |
| ○ 基本的な語彙と表現で、状況に応じたコミュニケーションを図ることができる子ども | (能力) |
| ○ 英語で、自分の意思を伝えたり相手のことが理解できた喜びを実感している子ども | (自信) |

～タスク的な活動を位置付けた授業づくり～

高 良 祐 治

2 副主題について

タスク的な活動とは、生活のある特定の場面や話題を切り取って、その活動を英語を用いて行う課題を、これまでに学習した語彙や表現から選択したり組み合わせたりしながら、コミュニケーションを実現していく活動である。

タスク的な活動を位置付けた授業づくりとは、学習の導入段階で、英語でコミュニケーションをしてみたいと子どもたちが思える課題を設定し、その実現に向けて語彙や表現の習得に目的をもって取り組み、その成果を実践することで、達成感を味わえるように構成したプロジェクト型の学習の構想である。

3 具体的構想

● プロジェクト型の題材構成について

これまでの「プログラム型」のカリキュラムでなく、子どもが課題解決のために必要感をもって語彙や表現を習得し、それらを活用して課題を達成する「プロジェクト型」の題材に構成するために、以下の条件を考える。

- 場面シラバスや話題シラバスをタスク的な活動で行い「できそう」「やってみたい」と思えること（課題性）
- 一人一人が簡単な単語や表現を聞いたり話したりする場面が多くあること（連続性）
- 基本表現の中に、状況判断によって変更したり選択したりできる要素があること（選択制）

更に、このようなプロジェクト型の題材構成に、「(3) 言語と文化に関する事項」の内容も積極的に取り入れる。

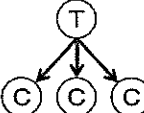
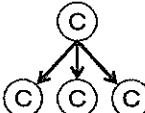
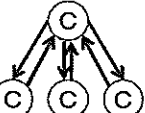
● タスク的な活動を促すための支援

① ゲームを取り入れた活動の設定

課題に関する語彙・表現を使うゲームを取り入れ、楽しみながら自然に語彙や表現を習得できるようにする。

② 集団によるコミュニケーション活動の設定

英語に抵抗感をなくすため、「聞き取る」「伝える」「わかり合う」という段階を意識したグループ活動を設定する。

「言っていることがわかった!」を重視	「自分の考えを言ってみた!」を重視	「相手とわかり合えた!」を重視
Tを中心として、Tの話 す内容を聞き取ること を目的とした活動 	発話をするを中心 として、色々な友だち に働きかける活動 	自分の意思を伝 え、相手の意思 を理解する活動 

③ 自分の意思で選択できる活動の場の設定

子どもがゴール像としてめざしているコミュニケーション場面では、自分の好みや考え方を相手に伝えるために、基本的な表現に選択する部分を取り入れた英語表現になるように配慮する。

● タスク的な活動を取り入れた1時間の学習過程

楽しみながら、目的をもってコミュニケーションができるように3つのモジュールで1時間の活動を構成する。

表1 3つのモジュールからなる1時間の活動構成

段階	Warming up	Having fun	Winding up
学 習 活 動	1 英語での表現への意欲付け ○ 活動に関連した歌やチャンツ ○ 課題達成に必要な語彙や表現の確認	2 課題達成のためのコミュニケーション ○ 課題場면을英語で表現するコミュニケーション ○ 役割を交代しながら繰り返しの活動	3 活動の振り返り ○ 活動の感想を話し合い、課題が達成できたかの確認 ○ 活動に関連した歌やチャンツ

第5学年 題材「イギリスのティー・タイムを楽しもう!」

(1) 目 標

- 1 イギリスの伝統的な生活習慣である「ティー・タイム」を英語を使ってやってみるために、友だちと積極的にコミュニケーションを図ることができる。
- 2 「ティー・タイム」を英語を使って行う体験活動を通して、イギリスの人々の紅茶文化の考え方についてとらえることができる。

(2) 題材の考え方

- ALT の出身国であるイギリスのティー・タイムの風習の紹介を受けて、「自分たちもティー・タイムをやりたい。」というあこがれをもち、そのために必要な語彙や英語表現を調べたり、会話練習に取り組んだりする活動を目的に行い、自分の嗜好にあった紅茶やお菓子を手に入れ、ティー・タイムを実現していく。

(3) 学習の流れ

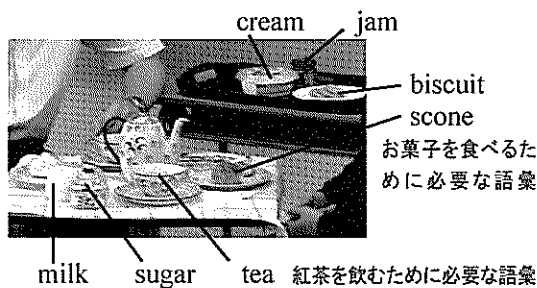
つかむ段階：1/3時

イギリスのティー・タイムに関心をもち、楽しむために必要な語彙や表現に触れる。



イギリスでは、たくさん紅茶を飲むんだな。わたしたちもイギリスのティー・タイムをやってみないな。

写真1 ALTによるティー・タイムの実演



資料1 ティー・タイムに必要な語彙

ためす段階：2/3時

ティー・タイムを楽しむために必要な英語表現を調べ、会話ゲームを通して英語表現に慣れ親しむ。

つかむ段階では、イギリスの紅茶をたくさん飲む紅茶文化について知り、関心を高めることで、「自分たちもティー・タイムをやりたい。」という思いをもたせることをねらいとしている。そのために、イギリス人の ALT によるティー・タイムの実演やイギリスの紅茶文化についての聞き取りを行った。

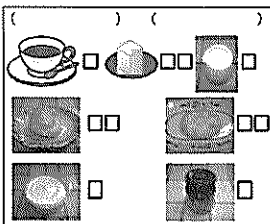
【教師の支援】

- ※ 本物の紅茶やスコーンなどを用意し、ALT に実際に英語でティー・タイムを実演してもらった。
- ※ ティー・タイムに登場する道具や食べ物についてクイズ形式で答えさせていくことで、必要な語彙をとらえさせた。

【子どもの様子と考察】

- ティー・タイムを「わたしたちもやってみよう」という思いと、実現するために必要な英語表現を調べる必要感をもたせることができた。これは、実際に本物のティー・タイムを楽しんでいる ALT の様子を間近で見たことが有効に働いたからだと考える。

ためす段階では、お客を招く側と招待される側のそれぞれの立場に必要な英語表現をとらえることをねらいとしている。そのために、両者の立場を経験できるティー・タイムの会話ゲームを設定した。



資料2 様々なパターンの「お好みカード」と「チェックシート」

【ティー・タイムに誘い、紅茶の好みを聞く】

家人: Would you like some tea?

お客: Yes, please.

家人: Would you like milk and sugar?

お客: Milk and one sugar, please.

【お菓子は何かがいいか相手の好みを聞く】

家人: Would you like scones or biscuits?

お客: Scones, please. (Biscuits, please.)

家人: How many biscuits(scone)?

お客: Two, please. (Just one, please.)

家人: Would you like jam or cream?

お客: Jam please. (Cream please.)

家人: Here you are. Enjoy your tea.

お客: Thank you.

資料3 ティー・タイムに必要な英語表現

いかす段階: 3/3時

好みを伝えたり、相手の好みを聞き取ったりして、ティー・タイムを実現する。



写真2 ティータイムを楽しんでいる様子

英語で話しかけて、相手から返事が返ってきたときに「できた」という感じがしました。会話がうまくできて、紅茶が飲めたりスコーンが食べられたりできたのがうれしかったです。ティー・タイムのというのは素敵な習慣だなと思いました。

資料4 授業後のA児の感想

【教師の支援】

※ ALT によるティー・タイムの役割演技を一つの会話や動作ごとに止めて、どのような内容の会話をしているのか想像させ、その内容と実際の英語による会話を結び付けて考えさせた。

※ 砂糖、ミルク、スコーン、ビスケット、ジャム、クリームをランダムにのせた「お好みカード」の内容を相手に伝えたり聞き取ったりするゲームを設定した。

※ 聞き取ったことを確認できる「チェックシート」を使い、相手の好みを確認できるようにした。

【子どもの様子と考察】

- ティー・タイムに必要な英語表現を習得することができた。これは、ALT による役割演技と併せて英語表現を調べさせたことで、場面に合わせた会話のイメージができたことや、会話ゲームを通して、様々な好みによる表現の選択が有効に働いたからだと考える。

いかす段階では、これまでに習得してきた英語表現を状況に応じて活用し、ティー・タイムを実現することをねらいとしている。そのために、実物を用意して、実際にティー・タイムを行う場を設定した。

【教師の支援】

※ 紅茶、砂糖、ミルク、スコーン、ビスケット、ジャム、クリームなどのティータイムを楽しめる材料や道具を全員分用意し、2人組で家人と客の役割を交代しながら、ティー・タイムを行わせた。

【子どもの様子と考察】

- 互いの好みを伝え合いながら、ティータイムを実現することができた。これは、実際にティー・タイムを行える場を用意し、互いの意思に合わせた表現を選択し、伝え合わないでティー・タイムを実現できない状況を生み出したことが有効に働いたからだと考える。

【全体考察】

- ◎ ティー・タイムを通して、状況に応じた英語表現を使って、積極的にコミュニケーションを図ろうとすることができた。また、イギリスの紅茶文化に親しむことができた。これは、ALT による実演を取り入れることで、英語表現を使う目的をもたせたことと、イギリスのティー・タイムという場面に絞って、役割を交代しながら実現をめざすタスク的な活動を取り入れたプロジェクト型の単元構成が有効であったからだと考える。課題としては、ティー・タイムを行っている間の会話も、これまでにやってきた英語活動をいかした会話を行わせるなどの工夫が必要であった。

○ 特別支援教育部の全体構想

共生社会を豊かに生きる子どもを育てる学習の創造

○ はじめに

ノーマライゼーションの理念の波及と具体化の中で、障害のある方々も、必要な支援を受けながらも、可能な限り自分自身で選んだり決めたりしながら生活していくこと、また、回りの人々に積極的に働きかけたり、働きかけに応じたりして生活していくことなどが望まれている。さらに、新学習指導要領において自立活動の領域に新しく「人間関係の形成」が設けられた。このことから、子どもたちが健常者とともに生きる社会の中で積極的にかかわることができることが必要とされていることが伺える。つまり、様々な場面で人・もの・ことと、よりよくかかわることができるような力を積み上げていくことが大切であると考えられる。かかわりに答えるだけでなく、自分からかかわっていく力を付けるためには、子どもたちが主体的に活動できるように自己選択、自己決定の場面を設定したり、見通しをもち主体的に活動できるような単元・題材づくり、環境の設定などに配慮したりした授業づくりが必要である。

1 主題について

共生社会を豊かに生きる子どもとは、身の回りの人・もの・ことにかかわることで、できることやわかることを増やしていき、それらを生活の中でいかし、主体的に活動したり回りに働きかけたりする子どもである。このような子どもを育てるためには、次のような資質、能力を育てていくことが必要となる。まず、わからないことがわかるようになった、できなかったことができるようになった、がんばったから目標が達成できたなどの楽しさを感じる「学ぶ実感」、次に、身の回りの人・もの・ことに自分から働きかけたり回りからの働きかけに応じたりする「かかわる力」、さらには、できることわかることが増えることで自分に自信をもつとともに、できたことやわかったこと、身に付けた知識・技能を生活の中で積極的に活用したいと感じる「やる気・自信」である。この3つの力（要素）を考えに入れて、子どもの実態や将来像からねらいを設定していく必要がある。

共生社会を豊かに生きる子どもを育てる学習の創造とは、子どもたちが生活の目的を達成するために身近な人・もの・ことに積極的に働きかけたり回りからの働きかけに応じたりすること、わかるようになったこと、できるようになったことを生活の中でいかすことができるように、教育活動の種類や配列、環境などを工夫することで、子どもが主体的に活動できるようにしていくことである。

- 学びを通して、わかるようになったこと(知識)やできるようになったこと(技能)が増える楽しさを感じている子ども
(学ぶ実感)
- 身の回りの事象とのかかわりを通して、生活にいきる知識、技能を自分で考えたり、判断したりして用いることができる子ども
(かかわる力)
- できるようになった、わかることが増えたという経験の積み重ねから、新たな事象に対してかかわっていく意欲や見通しをもつことができる子ども
(やる気・自信)

～「活用できる環境」を具体化する授業づくり～

2 副主題について

環境とは、①スケジュールなどを時間を追って提示したり活動のはじめとおわりを明確にして活動に取り組ませたりする「時間的環境」、②活動の内容や活動の流れに応じて場所などを区切ることや活動に必要な物などの配置を考えた「物的環境」、③人に働きかけたりかかわったりすることで課題を解決させるための「人的環境」が考えられる。さらに、時間的環境、物的環境、人的環境だけでなく、活動の構成そのものや単元・題材を貫く場面設定、子どもの興味関心を引き出すための目的の設定などもこれに入る。

活用できる環境とは、子どもたちが人・もの・ことにかかわる場面において、生活に必要な知識・技能を身に付けたり、身に付けた知識・技能をいかしたりしながら、活動に見通しをもって主体的にかかわることができるような状況のことである。

「活用できる環境」を具体化する授業づくりとは、個別の教育支援計画から子どもの将来像を明らかにし、それにつながる力を付けるためには、各教科・領域・合わせた指導の中で、子どもたちが主体的に活動できるように「時間的環境」「物的環境」「人的環境」などを個の実態に応じて整えていくことである。さらに、上記の環境を整えていくだけでなく、単元を貫く場面設定や、友達とかかわり合いながら学習を進めていく場面の設定なども考えていくことも必要である。

3 具体的構想

● 具体化していくための視点

「活用できる環境」を以下のように具体化していく。

環境設定	具 体 化 の 視 点
・単元を貫く場面設定	・共有できる目的意識と明確なゴール像の設定 (「やってみたい。」という活動意欲)
・時間的環境	・活動のスケジュール化と視覚的な支援 (「つぎは〇〇をすればいいんだな。」という見通しをもてるもの)
・物的環境	・学習の見通しや子どもが自ら学習に取り組むための活動の場の設定 (学習を行う上での必要な道具、物、構造化された活動場所)
・人的環境	・友達や教師、GTなどを中心とするかかわりの対象の広がりやかかわり方の深まり (お互いの学び合いの場面と人から学び取る場面の設定)
・協働活動の設定	・個の知識・技能を発揮しながら他者を意識したり他者の考えを取り入れたりすることができる活動 (他者とともに「できた」「やりとげた」達成感をもつことができるもの)
・かかわり合いの場面	・チームやグループ、ペアなどの集団での目的の共有とやりとりする場面の設定 (一緒につくる、一緒に考える、友達のまねをする、等)

○ 特別支援教育国語科学習の構想

ことばを通してかかわりを広げる国語科学習

○ はじめに

共に生きていくためには、回りの人・もの・ことと一方的ではなく、双方向的にかかわっていく必要がある。双方向的にかかわるためには、①人・もの・ことからの情報を受け取ること、②情報を理解すること、③情報に応じた行動をすることが必要である。その中でも、人とかかわる中では、自分の感情を理解し適切に表現すること、相手の感情を理解し適切に行動できることが重要である。そうすることで、自分も回りの人も、安定した気持ちで暮らすことができると思う。

新学習指導要領において国語科の目標に「伝え合う」という言葉が加えられた。国語科が究極的なねらいとしているのは、言葉を使って双方向的にかかわることである。特に、自閉症の子どもたちは、言葉は知っているのに場に応じて使えない、感情をうまく表現したり、理解したりすることが難しいので人とかかわりがうまくいかないということも多い。かかわりをもつための知識・技能を身に付け、人に伝わる喜び、気持ちを共有する喜びを知りかかわることができるようになることが「共生社会を豊かに生きる」ということにつながる。

1 主題について

かかわりとは、目的や、場面、相手を意識してそれらに合うように、相手が分かるように話したり、目的や場面を考えて、言い方を変えたり、相手からの話を受け入れて、それによって行動を決めたりすることである。そのためには、情報の共有や経験の共有、気持ちの共有が行われる必要がある。ことばを通してかかわりを広げるとは、①自分の気持ちに気付き、表情やことばなどで相手に伝えること、②表情やことば、状況を手がかりにして相手の気持ちをとらえること、③相手の気持ちをとらえた上で自分がどのように行動すればいいかをとらえること、というように自分中心の一方的なものから相手のことも考える双方向的なものになっていくということである。そのためには、状況に合うことばがわかる理解力、相手に伝わるような言い方ができる表現力、複数の情報の中で自分の気持ちや相手の気持ちに気付くためにはどの情報が必要なのかをとらえる把握力が必要になる。

ことばを通してかかわりを広げる国語科学習とは、①自分だけではなく、誰かとかわらなければならない状況を設定すること、②誰がどうしたなどの状況を共有できるようにすること、③子どもたちが自分で決めたり選択したりできる場面を設定すること、④実際にやりとりをする場面を設定すること、によって誰が何をしているのかという状況を把握したり、自分の気持ちを相手がわかるように表したり、相手の気持ちを理解しそれに対して自分がどのように発言したり行動したりすればいいかがとらえられるようにする学習のことである。

- ことばを使うことで自分の要求が満たされたり、目的が達成されたりすることがわかり、ことばを使って表現するよさを実感している子ども (学ぶ実感)
- 楽しくやりとりがしたいと思ってかかわろうとする子ども (かかわる力)
- 自分や相手の気持ちがわかると楽しくかかわりあえることに気付き、進んで表現しようとする子ども (やる気・自信)

～自閉症児に対する劇づくりを位置付けた授業づくり～

諏訪 原 佳 子

2 副主題について

自閉症児に対する劇づくりとは、状況や気持ちをとらえることが苦手な子どもたちに対して、劇の台本を作る活動を通して状況や気持ちをとらえ、場に応じた表現や動きを劇の中で行うものである。台本を作ることで、状況や気持ちをとらえるための手がかりとなる情報を整理することができる。さらに、劇をすることで生活に近い場でどのように表現し、行動すればいいかを体験することができる。

自閉症児に対する劇づくりを位置付けたとは、「みとおす段階」では、話の内容をとらえること、「つかむ段階」では劇の場面ごとに状況に合うセリフや行動を考え台本をつくること、「ひろげる段階」では全場面の劇を通して行い、劇を完成させていくことというように劇づくりを位置付け、状況や気持ちをとらえられるようにしていくものである。

自閉症児に対する劇づくりを位置付けた授業づくりとは、セリフや動きを考えるとときに複数の情報の中から何に着目すればいいかとらえ気持ちを表現したり相手の気持ちをとらえたりすることができるようにしていく授業である。

3 具体的構想

● 教材化の工夫

以下の視点から劇や劇の中で取り上げることばの選定を行う。

- 子どもの願いや目標から考える。 ○ やりとりをすることで劇が進んでいくもの
- 役割がはっきりしているもの（～する、されるという関係など）
- 子どもたちが身近な題材であったり、よく知った話だったりするもの

障害特性や個の発達段階から以下の点に配慮して支援を行っていく。

- 見通しをもたせる。→活動の予定、取るべき行動などを視覚化する。
- 感情とそのときの状況の例などを示したものの提示や吹き出しなどを使って状況から気持ちを考えさせたり、状況を流れにそって説明したりするなど、理解しやすい方法に応じた支援を行う。
- パターン化→パターン化して繰り返し取り組むことで定着を図る。
- パターン化崩し→知的に高い子どもに対しては、パターンを崩さなければならない状況も経験させる。

● 自閉症児に対する劇づくりを位置付けた授業づくりにおける1時間の学習過程

【表1 自閉症児に対する劇作りを位置付けた授業作りの学習過程】

段階	みとおす段階	つかむ段階	ひろげる段階
活動	1 基になるお話の読み聞かせを聞き、内容について話し合う。	2 場面にあったセリフや動きを考え、台本にまとめる。	3 劇の場面に合う適切な表現について話し合う。
ねらい	○ 活動に見通しをもち、意欲的に取り組もうとすること	○ 自分や相手の気持ちをとらえ合う表現をとらえること	○ さまざまな表現をとらえたり表現を見直したりすること
個に応じた支援	※ 挿絵のみの拡大絵本の提示 ※ お面や背景など劇遊びの道具の提示	※ 情報を整理→劇→気持ち、と結び付ける活動 ※ 表情カードの提示	※ 状況を整理する声かけ ※ セリフや表現の仕方などモデルとなる表現の取り出し

4 指導の実際

第3・4・5・6学年 「だい本をつくってげきをしよう!〜きりかぶ〜」

(1) 目 標

- 1 劇遊びをするために台本をつくるという見通しをもち、意欲的に状況や自分、相手の気持ちをとらえ、表現しようとするができる。
- 2 (AG) 自分の気持ち、(BG) 相手の気持ちをとらえ、合うセリフを言うことができる。

(2) 単元の考え方

- 自分や相手の気持ちをとらえ、適切に表現できるようにするために、生活の場面に近いものを取り上げ、劇を行う。さらに、「つかむ段階」では気持ちをとらえるには、「誰が何をした。そして、どうなった。」という状況や相手の表情、態度などに注目すればいいことに気付くため、プリントを提示し、その後、セリフや動きを考える。何に着目すればいいか理解し適切な表現を身に付けることは、日常生活の中で役立つと考える。

(3) 学習の流れ

Aグループ a児(3年男子)

- 日常生活において、簡単な指示を理解し行動できる。遊びの場面で一緒に遊びたいのにうまく言えずに、いらだってしまったたり、自分の思うようにできないと相手に対して怒ってしまったたりすることがある。質問されると決まったパターンやオウム返しで答えることが多い。

〈特性に応じた場作りと支援〉

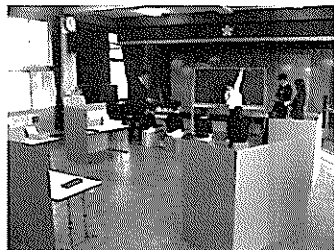


写真1 学習の場 全体像

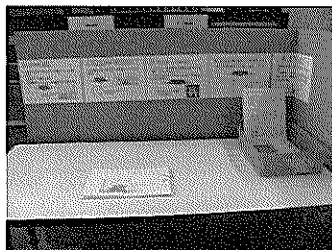


写真2 学習の場 個人の机



写真3 学習の場 劇の場

※ 個人で学習する場、全体で学習する場をわけた。

※ 集中できるように机に仕切りを設け個に応じた手順表を掲示した。

※ 劇の場は一段高くなった場所に設置。前に複数のお面を用意した。

みとおす段階: 1/9時

絵本を読み、試しの劇を行う。その後、劇を行うためには何が必要か、話し合う。



セリフや様子を表す文が必要なことに気付かせるようにした絵本。

みとおす段階では、活動の見通しをもち、台本を作って劇をしたいという意欲をもたせることをねらいとしている。そのために拡大絵本を提示したり試しの劇を行ったりした。

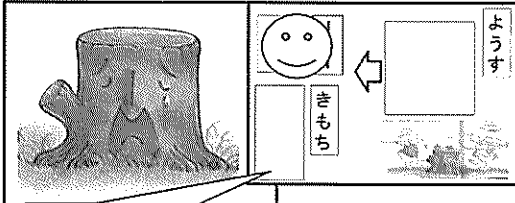
【教師の支援】

※ 絵本の読み聞かせをし、劇をするためには何が必要か、学芸会の経験などを振り返り、話し合わせた。



.....
なんて言えいいの
か、わからないよ。

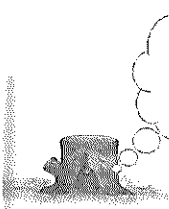
つかむ段階：2～8/9時 教師と実際の場面
を再現し、セリフや動きを台本に記していく。



表情に着目できる挿絵を提示し、プリントに
様子を書き、それから気持ちを考えた。



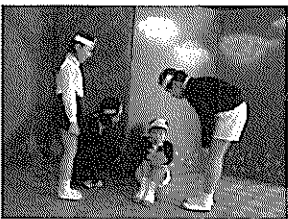
ぼくはここだよ。
ぼくといっしょに
あそぼうよ。



状況をまとめた
ときにはセリフを書け
なかった。劇の後は
セリフを書けた。

ひろげる段階：9/9時

全場面を通して劇をする。



もっといっしょにあ
そびたいよ。
いかないで。

【子どもの様子と考察】

○ a児は困ったような表情を見せるだけだった。そこ
で、学芸会のことを振り返り何が必要か聞くと、「台本」
と答えた。これは、実際に劇をしてみたことが有効に
働いたと考える。

つかむ段階では、状況を整理し、それに応じたセリフ
や行動をとらえることをねらいとした。そのために、手
がかりとなる情報をプリントで取り出した後に劇を行い、
セリフや行動を考えた。

【教師の支援】

- ※ 表情に注目できるような挿絵を提示した。
- ※ プリント→劇→プリントの流れを設定した。

【子どもの様子と考察】

○ 最初は挿絵の中の草などに気をとられていたが、表
情カードを提示すると表情に注目し「ないている」と
書いた。劇で一緒に遊んでいたのに、遊んでくれなくな
った場面では、笑顔だったのがとまどったような表
情になった。その後、「一緒に遊ぼう。」と言いプリン
トにまとめることができた。これは表情を手がかりに
気持ちをとらえる、劇で状況と気持ちを体験する、状
況と気持ちをプリントにまとめるという流れが有効に
働いたのだと考える。

ひろげる段階では、劇を通し、様々な状況とそれに合
う行動がわかることをねらいとしている。

【教師の支援】

- ※ 子どもの課題に応じて、役を設定した。

【子どもの様子と考察】

○ セリフを場に応じた言い方で言うことができた。こ
のことは、状況と気持ちを結び付けてプリントにまと
めた上で劇をしたことが有効に働いたと考える。

【全体考察】

◎ 進んで活動に取り組んでいる様子、気持ちに合うことばを言っている様子がわかる。これは、劇を取り入れたこと、
さらに劇をすることで、その状況に近い場面の中でやりとりをすることになり、子どもたちの感情を引き出し易かつ
たのだと考える。また、劇をする前に、状況を整理したことで、より、劇の中で気持ちをとらえ易かったと考える。
今後の課題としては、自閉症の子どもたちが状況の変化をとらえるためには、どのような状況整理の仕方をしたらいい
のかということと、相手の気持ちをとらえるために必要な条件を明らかにしていくことである。

○ 特別支援教育算数科学習の構想

数量や図形に豊かにかかわる算数科学習

○ はじめに

子どもが「共生社会を豊かに生きる」ために算数科が担う役割は、他者と共有する情報として数量や図形を適切に処理する知識・技能や、他者とともに自分の経験を活かし、生活における諸問題の解決を行うための資質や能力などを身に付けさせることである。子どもたちにとって大切なことは、自分の力を自分の得意な方法で発揮し、自信をもって生活していくことである。数や量などが他者との共通の情報になったときに、社会の中で他者とよりよくやりとりができるようになる。よって、これからは共通の目的をもった子ども同士が数理を高め合ったり、しっかり身に付くように教え合ったりする学習が求められると考える。そのためには、学校での学習によって獲得した知識・技能が、日常生活での諸問題においても、自分だけでなく他者との関係においても主体的に解決していく基盤になって活かされることが重要になる。学習したことを活かしてできたという達成感や有用感をもたせることで、その能力が般化され、算数の力を発揮することへの自信を高めることができ、豊かに生きることにつながると言える。

1 主題について

数量や図形にかかわるとは、子どもが身近なものやことから数量や図形の要素を見出し、その対象を具体的な行為を通して操作し、働きかけていることである。子どもは、数量や図形についての知識を具体的な手続きとして身に付ける。その時に、例えば身近なものを手で触れて動かしたり、声に出して数えたりすることは、思考しながら知識や技能を獲得している姿と言える。数量や図形に豊かにかかわるとは、数量や図形の対象に対して、その目的や条件に合うように、自分の身に付けた操作に新しいアイデアを付加したり、試行錯誤しながらも強化したりしていくことである。例えば、長さの直接比較の操作を身に付けた子どもが、比べたいものが離れていて直接比べられないとき、何とか比べようと媒介物を用いるなどの工夫をしていく姿のことである。このことは、身に付けた数量や図形についての知識や技能を、発展的・応用的な場面でも自分から発揮していく態度を育てるという点で意義がある。

数量や図形に豊かにかかわる算数科学習とは、題材を通した目的を達成するために、解決を図る中で、他者とともに、数量や図形へのかかわり方を工夫したり、修正したりして、その有用感や達成感を実感する学習のことである。そのための条件は、①目的を共通認識し、数量の操作を共通理解する共通性、②目的を達成しながら、他者とともによさを味わっていく協働性、③操作を付加、強化しながら高めていく操作性が必要である。算数で身に付けた力を他者とやりとりしながら発揮していくことは、共生社会の中で、他者とともに自分の経験を活かし、生活における諸問題の解決をしていく資質・能力の育成につながると考える。

- 数量や図形に対して、できなかった操作や考え方ができるようになったことを自覚する子ども (学ぶ実感)
- 対象の量や条件が変わっても、自分の操作に付加したり、強化したりして実行する子ども (かかわる力)
- 目的の達成を通して、数量や図形を操作する方法や結果に有用感や達成感を味わう子ども (やる気・自信)

～置き換え活動を段階的に位置付けた授業づくり～

弘 松 英 樹

2 副主題について

置き換え活動とは、身近な事象から数量や図形を見出し、問題の解決方法を考えやすくするために、別の数量や図形に表現の仕方を換えることである。置き換えることの役割は、数字をドットなどに置き換える具体化や、逆に連続的な長さを数値に置き換える抽象化、多くの数をまとまりに置き換えて考える構造化などである。置き換え活動を段階的に位置付けたとは、数理内容の高まりに応じ、次のような段階を設定した授業のことである。①置き換えの操作の仕方を知る「つくる」段階、②置き換えの操作を繰り返し行う「みにつける」段階、③身に付けた置き換えの操作を発揮し、新しいアイデアを付加したり、強化したりする「たかめる」段階である。置き換え活動を段階的に位置付けた授業づくりとは、友達と共通の目的意識をもって、自分の操作の仕方を発揮しながらも、友達とやりとりすることで、自分の方法を見直したり、自信をもったりする経験を積み重ねる授業のことである。ここで、友達とやりとりをする理由は、自分の身に付けた置き換えの操作を発揮していくために、目的意識を共有している友達とアイデアを出し合ったり、一緒に確かめたりすることができるからである。特別支援教育算数科での他者との交流は、ノートに書いたものなどでの表現より、むしろ、ものを介した操作による交流が主になる。このことは、算数の知識・技能の定着のみならず、人と一緒に学び合うという学び方を身に付けていく上でも価値がある。

3 具体的構想

● 教材化の条件について

- ① 数量や図形を、目的をもった活動を通して部分から全体へと統合させる行為が連続的に設定できるもの
- ② 友達と一緒に自分が身に付けた操作を発揮できる場面があり、それを確かめる評価機能が設定できるもの

● 置き換え活動を段階的に位置付けた活動構成について

題材を通した問題解決過程において、活動構成を下のように設定する。(下線部は、置き換え活動の手だて)

	つくる段階	みにつける段階	たかめる段階
活動	1 目的意識をもち、解決の見通しを話し合い、試しの活動をする。	2 目的や条件に合わせて、自分の操作方法を変えながら、徐々に友達と数量や図形を共有して活動する。	3 これまでの操作方法を活かして、目的達成のために友達とやりとりをしながら活動する。
内容	○ 対象にかかわる必要性に気付き、そのための操作の仕方がわかること	○ 対象が増えたり、変わったりした状況でも、自分の操作方法を工夫したり、修正したりして解決を図ること	○ これまでの対象へのかかわり方を活かして解決し、有用感や達成感を感じる
支援	※ 試しの活動の場や教具 ・ <u>数を具体物や単位ごとに置き換える教具</u> (様々な数の数え箱など) ・ <u>量を媒介物に置き換える教具</u> (測り棒、手作り物差しなど)	※ 共有するための段階的な対象の設定 ・ 数や量の範囲の拡大 ・ <u>繰り上がりなど操作の仕方の変化</u> ※ 算数の実態が違う子どもでのグルーピング ※ 実態に応じた活動手順の提示	※ 活用の操作のための場や教具 ・ <u>数や量を組み合わせる教具</u> ・ 統合して全体が完成する場 ※ 実際的な生活場面の活動設定 ・ 行事や遊び、係活動などの生活場面での活用

第3・4学年 題材「ながさをくらべて さくらんぼちゃんの あそびばを つくろう」

(1) 目 標

- 1 ウサギの遊び場を作りたいという目的意識をもち、その囲いを作るために、長さを比べたり、同じ長さを見付けたりする活動を意欲的に行うことができる。
- 2 長さを比べたり、同じ長さを見つけたりする活動を通して、(AG) 長さを見積もり、間接比較での長さの測定の仕方をとらえること (BG) 任意単位のいくつ分で長さを測定する仕方をとらえることができる。

(2) 題材の考え方

- 本題材は、ウサギの遊び場の囲いを作る目的をもち、長さを目測で見積もったり、間接比較で長さを比べたり、任意単位のいくつ分で長さを測ったりする活動を行う。そのことを通して、量感覚を養い、長さの比較、測定の操作技能を身に付けていく。この題材は、子どもの生活に即した学習対象を設定したことで、子どもが友達と解決の目的を共有しやすく、さらに量を多様な長さで設定することができるので、置き換え活動を変化させながら繰り返し設定できるという点で価値がある。

(3) 学習の流れ

Aグループ a児（3年男子）	Bグループ b児（3年男子）
○ 並べたり重ねたりして、長さを比べようとすることはできるが、「長い」「短い」「同じ」の判断をすることは難しい。	○ 「長い」ものの判断はできるが、「短い」「同じ」の判断は難しい。また、媒介物や単位を用いて長さを調べることは経験していない。

つくる段階: 1/6時

ウサギの遊び場の囲いを作るために、材料の棒の長さを比べる試しの活動をする。

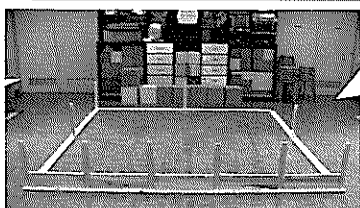


写真1 作る前の遊び場の全体の様子

さくらんぼちゃんの遊び場を作ってあげたいな。

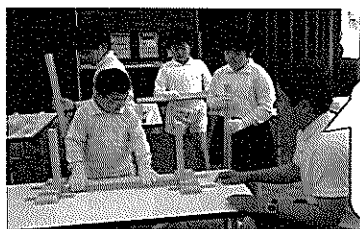


写真2 長さを確かめているb児の様子

長さがぴったりあったよ。

つくる段階では、さくらんぼちゃんの遊び場を作ってあげたいという単位を通しての目的意識をもたせ、基本的な操作の手順を理解させることをねらいとしている。そのために、棒の長さを目測で見積もったり、囲いの柱の間隔と棒が同じ長さか置き換えて調べる活動を行った。

【教師の支援】

※ 囲いの全体像をイメージさせ、期待感を高める場の提示をした。また、見積もった長さが合っているか確かめるコーナーを作り、評価機能をもたせた。

【子どもの様子と考察】

- 写真2のようにb児は、目測で見積もった長さを、直接比較で調べる操作の仕方を知ることができた。比較する長さの準備と、長さを置き換える確かめコーナーの設定が有効に働いたからであると考え。

みにつける段階: 2~4/6時

囲いを作る棒の長さを比べて同じ長さを見つけたら、長さを合わせたりする活動を行う。

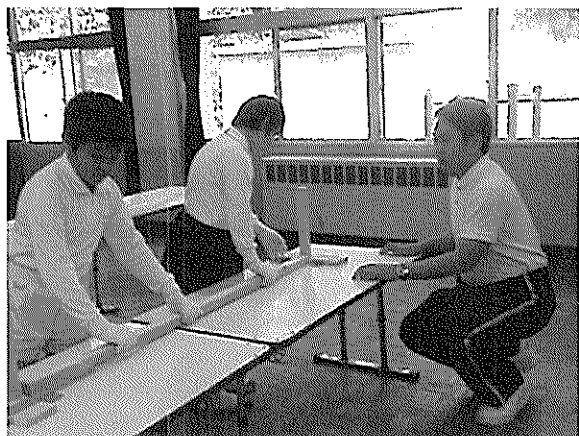


写真3 長さを確かめているb児とd児の様子

ひろげる段階では、囲いの柱の間隔を長くして、目測では難しい長さを測ることをねらいとしている。そのために、友達とペアで同じ長さを見付ける活動を行った。

【教師の支援】

※ 長さの差が小さい棒を複数準備し、確かめコーナーで棒の端が合っているかを正確に確かめないと、長さが合わない設定を行った。

【子どもの様子と考察】

○ 写真3に見られるように、a児とd児は、長い対象でも選んだ棒の長さが合っているかを、長さの端に着目して確かめることができた。これは、共同で置き換えの操作を、繰り返し行わせたことが有効であったからである。

たかめる段階: 5~6/6時

長さを合わせて囲いを作るために、棒の長さを間接比較や任意単位の測定で比べたりする活動を行う。

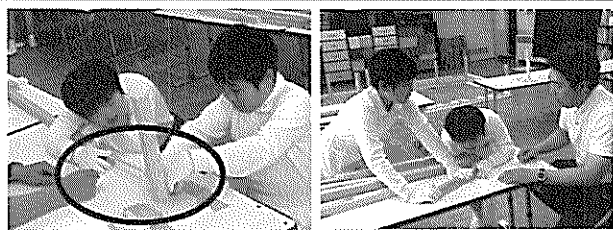


写真4 a児とd児の様子



写真5 b児とc児の様子

※ 柱の間の長さを紙テープで測り取って、間接比較で正確に長さを調べられるようにした。

※ 長さが同じの判断が難しいa児と、同じ長さを「ぴったり」と判断できるd児をペアで編制する。

※ 任意単位となるウサギカードのいくつ分で間の長さを測り、カードで長さを調べられるようにした。

※ 単位のいくつ分が理解できたe児と、いくつ分を正確に測定するのが苦手のb児をペアで編制する。

○ a児は、写真4にあるように、d児の持ってきた棒と柱の間隔を紙テープで測りとり、長さを置き換えて調べることができた。合わないときには、d児がそのことを知らせて修正することができた。これは、正確に測るために置き換える道具を用意して友達と測定する活動を位置付けたからである。

○ b児は、写真5にあるように、e児の持ってきた棒の残りをウサギカードのいくつ分に置き換えて調べ、長さを見付けることができた。また、友達が調べているときも、一緒に確かめることができた。これは、単位に置き換える教具を準備し、友達と確かめる活動を位置付けたからであると考えられる。

【全体考察】

◎ 子どもが目的とする長さを、確かめコーナーの長さで置き換えたり、長さに繰り返しかわり身に付けた操作を、媒介物を用いた間接的なテープや、単位となるカードに置き換える操作に高めるよう活動を段階的に仕組んだことは、量感を活かしながら長さの測定技能を高めることに有効であった。また、個別の測定から友達との測定へと活動を設定したことは、子どもが自分の操作の仕方を主体的に発揮し、生活に活かせる実感をもたせる上で有効であった。

○ 帰国子女教育部の構想

国際社会に生きる基礎を培う帰国子女教育

○ はじめに

帰国子女教育において豊かな学びを育むとは、日常生活の様々な課題を、特性を生かしながらコミュニケーションを図り、課題の解決を図ることができることである。つまり、これまでに身に付けてきた特性である滞在国の伝統・文化や経験を生かして、さらに生活の場を広げ、自ら主体的に日本社会に参加していくことである。しかし、帰国子女の子どもたちをみると、滞在国での学習の状況が以前に比べ、インターネットの普及や補習校の整備等で教育的な環境も整ってきてはいるものの、学習した内容を適用するまでには至っていない現状がある。さらに、滞在国で培ったコミュニケーション力や他者とのかかわりのよさなどを、日本での学習に生かし切っていない状況にある。これは、知識・理解の獲得だけでなく、状況を判断する力、違いを見つける力、関連づけて考える力などの「学ぶ力」の育成が大きな課題になってきていると考える。このような状況を考えたときに、子どもたち一人ひとりに、今後、世界中の一員として生活していくための力として、課題解決力や特性を活かしたコミュニケーション力、さらには、事象と学習環境を関連付けたり、事象と事象そのものを関連付けながら海外での貴重な経験を生かしていこうとする活用力を身に付けさせることが必要になってくる。帰国子女教育では、滞在国における文化経験や習慣など多面的な見方・考え方を自らが身に付けてきた知識や技能をさらに生かしながら日本社会に適応していく力を育み、今後の国際社会を生きていく豊かな学びを育んでいくことができるような人間を育成していくことであると考えます。

1 主題について

国際社会とは、共通の伝統・文化や生活習慣や異なった伝統・文化や生活習慣などが混在し、自国の伝統・文化のよさを再認識するとともに、他国の伝統・文化においては、自国のこれまでの概念とのギャップを含んだ場となり、新たな見方・考え方が生まれる場のことである。国際社会に生きるとは異文化経験をもつ子どもたちが、海外で生活したり学習したりする中で身に付けてきた見方・考え方を、日本の文化の中に積極的に適用していくための知識や技能を活用しながら生活をしていくことである。また、日本の文化と滞在国の文化とのズレや意識の違いを他者とのコミュニケーションを図りながら、関連させて新たな見方・考え方を構築していくことである。国際社会に生きる基礎を培うとは、滞在国で身に付けてきた特性としてのコミュニケーション力や判断力、表現力などの基礎的、基本的な知識や技能を使って日本の生活に適応していこうと、自らが主体的に他者とのかかわりをもって課題解決を図り、国際社会の一員として意欲的に課題に関わっていくための新たな見方・考え方ができるようになることである。

- 自分の課題をとらえ、日本でもよりよい生活を送るためには、生活や学習に対する課題を克服していく必要があることに気づき、意欲的に学習に取り組む子ども (学ぶ意欲)
- 未習の内容や習熟が不十分な内容を補完し、海外生活で身に付けた経験を積極的にいかすことができる子ども (能力)
- 自分の課題を克服したり、その過程で海外での経験をいかしたりすることを繰り返していくことで、主体的に生きていこうとする子ども (自信)

～滞在国の体験を生かした授業づくり～

永 尾 健

2 副主題について

滞在国の体験を生かしたとは、日本とは異なった滞在国の経験や習慣や文化、言語環境の違いを状況に応じて日本と滞在国の両方の見方・考え方を活用することである。つまり、滞在国で培った特性でもあるコミュニケーション能力や表現力を発揮しながら滞在国で学んだ文化、習慣などの知識や技能を生かして学習課題へ様々なアプローチを試みて、新たな知識や技能の獲得をねらうのである。このように、滞在国の立場で日本の在り方を客観的にみて、滞在国のよさや日本のよさの統合化を図りながら、よりよい国際社会を築いていこうとする国際協調の立場に立った見方・考え方をすることができるのである。滞在国の生活経験を生かした授業づくりとは、滞在国で学習してきた知識や技能、そして、コミュニケーションを主体にした学び方をカリキュラムの中に位置付けながら、学習面、生活面の両面から個の実態に応じた目標や方法を設定し、新たな知識・技能の獲得と自己の海外体験を社会的感受性と共感性から高め、価値付けていくことを図る学習過程のことである。

3 具体的構想

● 各教科等における特性伸長指導と適応指導、個性重視の指導の在り方について

主体的に日本の教育に適応できる教科指導の在り方を明らかにしていく。そのために、特性伸長指導の在り方と特性伸長指導を生かしていくための適応指導と個性重視の指導の在り方を考えていく必要がある。

特性伸長指導…具体的な海外の生活体験した内容（言語、文化、伝統、習慣等の理解）、学習体験の内容を生かした学習方法（フィールドワーク、レポート学習、インタビュー活動などの学習経験）、海外の学校で身に付けてきた表現力（ディベート、プレゼンテーションなど）

適応指導…言葉や生活習慣に慣れ、人間関係の構築を図り、学校生活の基盤をつくる生活適応の指導、学習場面・生活場面における日本語の理解状況に応じた学習適応の指導、滞在国での就学状況や生活状況での学習実態を把握し、未学習部分の補充を行う指導

個性重視の指導…学習方法の傾向性や既学習などの実態に応じた指導

● 教材化、活動構成、学習形態の工夫

教材化の工夫…子どもの実態の多様化に伴い、未学習部分に対応する系統性や、滞在国での学習、生活経験や滞在国に関連した事象をもとにした、子どもの興味・関心を考慮した教材化と単元構成が必要である。

活動構成の工夫…学習に必要な日本語や基礎的・基本的な学習の知識の補充を行い、子どもの特性伸長を図ることができるような表現活の場や体験活動の場の設定をおこなった活動構成の工夫が必要である。

学習形態の工夫…集団参加への力や他者との関わる力（コミュニケーション力）の達成度を考慮したグループ編成や活動項目を設定するなどの学習形態を考慮する。

各教科においては、ディスカッションや説明する活動を取り入れながら学習を進め、思考力、表現力、判断力を高める学習を展開する。また、国際交流タイムの中では、日本で学ぶ環境教育を滞在国で学んだ環境教育との違いに視点を置いて日本と滞在国のそれぞれのよさを取り入れ、体験的な学習を行う学習を展開する。

○ 国際交流タイム学習の構想

滞在国の生活経験の価値をとらえる国際交流タイム

○ はじめに

帰国子女国際交流タイムにおいて国際社会に生きる基礎を培うとは

帰国子女国際交流タイムにおいて国際社会に生きる基礎を培うとは、立場の違う他者との交流活動を行いながら自分の現状を把握し、他者との関係性をとらえ共感的な理解を図り、国際協調と人間尊重の精神を養うことである。つまり、日本という国、滞在国という国について、多面的な理解を図り、他者の考えに共感したり、人間関係を拡張したりしていくことである。しかし、子どもたちは、その特性を生かすどころか「帰国隠し」をすることによって目立つことを避け、日本の文化にとけ込むことだけを考えるような状況にある。そこで、国際交流タイムにおいて、これまでに滞在国で身に付けてきた知識・技能と日本に帰国してきて身に付けた知識・技能を生かしながら、他者の考え方の違いや共通性から解釈を広げ、広い見地に立った見方・考え方を創り出していく。また、他者の考えとの交流によって、滞在国の特性を再認識することになる。帰国子女教育・国際交流タイムでは、他者の考えから自分の現状をとらえ、新たな考えを生み出すための交流活動を通して基礎的・基本的な知識を確実に身に付けていく。そのために、子どもたちの滞在時の状況を踏まえて、細かなグループの編成や学習環境による支援を行う必要がある。

1 主題について

滞在国の生活経験とは、滞在国で直接体験してきた「もの・こと」、培った見方・考え方をもとに文化・伝統を支える「ひと」とのコミュニケーションを図りながら、情報の収集をしたり、自己の考えを表現したりして課題の解決を図るといった特性である。滞在国の生活経験の価値とは、日本と滞在国の両方の立場に立った考えを明らかにし、文化や習慣、学習の共通点や差異点を協調の観点で日本の生活を更新していこうとする見方、考え方である。また、生活状況や学習状況の違う対象と考え方を出し合う中で、他者の考えとの相違点や共通点から自分の考えを拡張したり、統合したりして新たな見方・考え方ができるようになることである。その際、自分の獲得している知識や技能、事実を認識し、他者の考えの共通点や差異点から関係性を見つめ、新たな見方・考え方を再構成していくような段階を経ていくことが大切になる。滞在国の生活経験の価値をとらえる国際交流タイムとは、滞在国で身に付けてきた特性を生かして課題解決を図り、滞在国や日本の実態を調査する活動を行ったり、表現活動を行ったりして滞在国で経験した自分と他者との見方、考え方を統合し、国際社会に対応できる実践力、判断力を身に付けていく学習である。これは、最近の子どもたちの傾向から、他者との関係性が希薄になりつつある中で生活を送ることによって、固定した価値基準を自分の中に有しているため、他者の考えを取り入れる場を設ける必要があるのである。

- 実生活場面に主体的に参加するために海外での生活・学習経験を生かそうとする子ども (学ぶ意欲)
- 自分がこれまでに身に付けた特性を生かして他者と意見交換を積極的に行い課題追究をする子ども (能力)
- 海外での学習経験を生かすことのできる自分に気づき帰国子女としての誇りを持つ子ども (自信)

～体験的活動を取り入れた授業づくり～

永 尾 健

2 副主題について

体験とは、子どもたちが滞在国で身に付けた特性（伝統・文化、など）を生かして、主体的に表現したり、行動に移したりすることである。また、滞在国での生活経験を通して獲得してきた伝統・文化における知識のよさを、日本の生活場面でも生かすことを目的として、実践していくことである。体験的活動とは、滞在国の生活経験から身に付けたよさを、日本の生活場面で実践していく過程において、個の特性（表現形態、言語環境、生活経験など）を生かしながら表現したり、具体的な目的的活動を実践したりすることである。体験的活動を取り入れたとは、目的達成のための主活動を実践していく過程で、個の特性（表現形態、言語環境、生活経験など）を生かす場を設定し、一人一人の表現力を高めていく。さらには、これまでにしかかわった人や物、ことから学んだよさ（伝統・文化における知識）を調査し、より実践的な主活動の実現に向けて生かしていくことである。

3 具体的構想

● 体験的活動を取り入れた教材化の工夫

体験的な活動を取り入れた教材として、滞在国で身に付けた特性を生かすために3つの条件が必要となる。

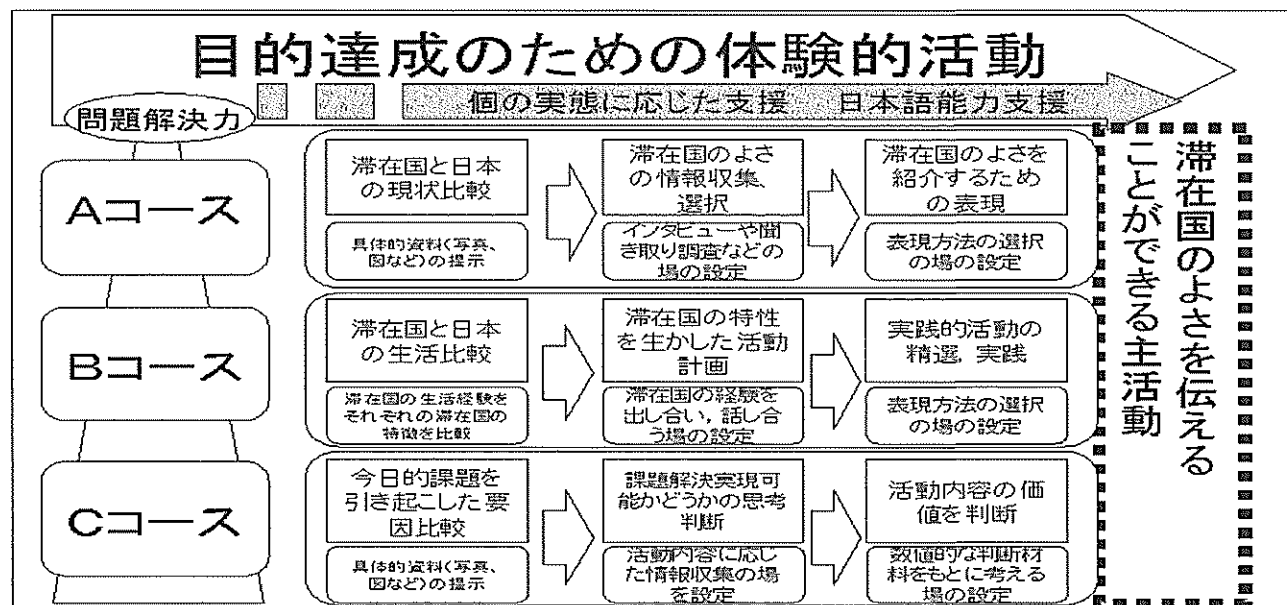
1つ目は、目的性である。今日的な課題の解決という目的のもと、社会的に価値ある活動を行うにあたって、滞在国での生活経験が生かされ、なおかつ実践可能であることを主体的な調べ、表現し、実践していくことである。

2つ目は、活動性である。目的達成をする過程において、個の表現特性が生かされ、活動項目も個の言語状況に応じた選択肢が多様にある活動で構成されたイベント的な活動を主に取り上げていく必要がある。

3つ目に、関係性である。滞在国と日本との生活や文化・伝統などを比較し、共通点や相違点を見いだす中で、相互の経験のよさを統合的にとらえ、それを生かす活動の場を設定することである。

● 個の実態に応じた活動構成の工夫

子どもたちの滞在国での滞在期間や就学状況などに応じて、学習内容の整理を行い、活動内容を検討する。



3組合同 題材「温暖化防止大作戦～滞在国のエコ生活を生かして～」

(1) 目 標

- 1 温暖化の現状を調べ、滞在国と日本の温暖化への課題から国際社会の一員として滞在国での環境に優しい活動を日本の生活の中でも意欲的に実践することができる。
- 2 温暖化の事実を把握し、人間活動（人間の消費活動）と温暖化との関係性や、滞在国での行いが環境に優しい活動であったよさを再認識し、滞在国での経験を実践するよさをとらえることができる。

(2) 題材の考え方

- 本題材の指導にあたっては、滞在国の生活の中で学んだ環境を守るための経験を生かして、環境に優しい生活を送る中で、滞在国の経験のよさを実感し、そのよさを日本の生活の中でも実践していこうとすることをねらいとしている。そこで、滞在国の経験を生かしたガレージセールを行い収益金を募金する活動を行えば、世界の植樹に直接かかわることができるとともに滞在国の経験の価値を再認識し、滞在国のよさを実感できる教材であると考え。

(3) 学習の流れ

Aグループ a児（4年女子）	Bグループ b児（5年女子）	Cグループ c児（6年女子）
○ 滞在国の特性を簡単な言語や図による表記ができる。	○ 滞在国の特徴などマニュアルにしたがって、話すことができる。	○ 場の状況に応じて、これまでに身に付けた言語を選択しながらたくさんの人に対応できる。
※ 絵や図を中心に簡単な表記をもとにした表現活動を行う。	※ マニュアルにしたがった表現活動を行う。	※ 状況に応じた表現活動を行う。

つかむ段階：1～6/25時

環境委員会が「環境ランキング」を行う理由やどうして今行うのかといった課題をもち、滞在国や日本での環境に関する意識を調べる。



写真1 滞在国と日本のお店の様子を比較するCG児

日本のスーパーなどに比べて、ビニル袋に入られていないし、お客さんもバックをもっていたから、フランスやドイツには何気ないエコな生活がたくさんあるんだな。



写真2 お父さんに滞在国のことをインタビューをするBG児

お父さん、アメリカではどんなエコ生活があったかな？知っていることを教えて！

つかむ段階では、地球温暖化の問題が、日本だけの問題に関わらず世界中の最重要課題であることをとらえる。そのために、滞在国と日本の生活の比較を行った。

【教師の支援】

- ※ 参観の際に、自分の滞在国での生活経験と親の生活経験を交流し、滞在国についてのよさを再認識する場の設定を行う。
- ※ それぞれの滞在国の環境に優しい活動（エコ活動）に見られる共通性を見いだすための交流活動の場

【子どもの様子と考察】

- 身近に行われていた環境に優しい活動が、世界規模で懸念されている温暖化問題と結び付けて考えたり、滞在国と日本の温暖化による被害の現状調べたりしながら、自分たちも何か行動を起こす必要感をもつことができた。これは、世界の抱えた問題を日本と滞在国という2面でもとらえ、比較をすることによってできたのだと考える。

つくる段階：7～18/25時

滞在国と日本の環境に優しい活動を調べ、滞在国の生活経験のよさを出し合い、自分たちにもできるエコ活動・ガレージセールの計画について話し合う。

つくる段階では、ガレージセールを計画し、自分に応じた表現方法を使って広報活動を行い、滞在国のよさを生かしたガレージセールを主体的に実践することをねらいとしている。そのためにガレージセールを開催する。



リードコピーに日本とは違う、滞在国のことをかいて驚いてもらおう。

写真3 ポスターづくりをするAG児



3組でガレージセールを開催します。アメリカやヨーロッパではほかにも...

写真4 ガレージセールの広報をするBG児



ドイツでは、エコバック使用率100パーセントです。質問はありませんか。

写真5 報告会で説明するCG児

※ 滞在国の生活のよさを生かしたポスターづくりをする。

- 滞在国と日本との生活の違いを表現して、ポスターを作った。

※ 各クラスにガレージセールの呼びかけをする場の設定をする。

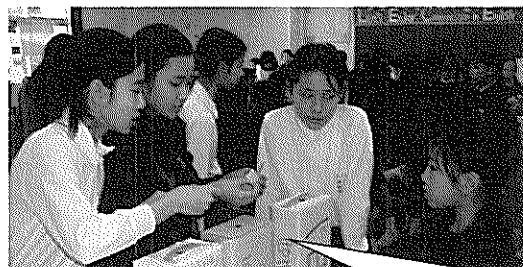
- たくさんの人の前で、ガレージセール開催に向けての案内を行った。

※ 滞在国の環境にやさしい生活を報告する報告会を開催する。

- 報告会を開き、滞在国についての質問に答えることができた。

深める段階：19～25/25時

自分の表現のよさを生かして「3組！ガレージセール」の開催に向けた準備と本番の活動を行う。



ガレージセールで得たお金は、募金として世界の植樹のために利用してもらおうと考えています。だから、商品は、みなさんの気持ちを、1コインで表してください。

写真6 ガレージセールの趣旨を説明する子どもたち

深める段階では、温暖化防止活動を主体的に実践できることをねらいとしている。そのためにガレージセールを開催する。

【教師の支援】

- ※ ガレージセールに向け、役割分担に応じてお客さんの対応場所を変えたり、表現物（ポスターなど）まとめたりして表現の活用場の設定をする。
- ※ ガレージセールによる収益金の募金をする団体の選択基準を、滞在国や世界の植樹に生かされることとするための話し合う場を設定する。

【子どもの様子と考察】

- ガレージセールでは、自分の表現力に応じた表現方法でガレージセールの広報活動、購買活動、営業活動を行うことができ、それぞれの担当場所で、自信をもって、お客さんに対応できた。

【全体考察】

- ◎ これまで滞在国と日本の生活経験の違いをよさとして受け入れることなく、日本の生活に適應することだけを心掛けていたが、滞在国の生活のよさを再認識することで表現意欲や問題解決的な学習を主体的に進めることができた。これは、滞在国には、たくさんの環境に優しい活動「温暖化を防止する活動＝日常の便利な生活を回避する＝ゴミ発生回避」といったことを目的とした活動がたくさんあったことを再認識し、ガレージセール開催という新たな課題をもって取り組むことができたからである。そして、自分の表現力に応じた表現活動を行いながら「ガレージセール開催」へと主体的に関わることができたと考える。これは、ガレージセールという体験的な活動を取り入れ、活動を進める過程において表現活動を行う場ができたからだと考える。そして「3組！ガレージセール」では、滞在国の生活のよさを日本の生活場面に生かしていこうとする実践力へと広がっていったと考える。

新学習指導要領を具体化する授業づくり!

～言葉と体験を重視した授業を展開します～

平成21年度

福岡教育大学附属福岡小学校

教育実践研究会

平成22年 2月5日(金)



- PISA型学力をつける指導
- 今求められる読解力
- 子どもを引きつける発問
- 子どもの思考を促す板書
- 交流活動を活かす学習
など

現代の教育課題に対応した
実践の提案!

◎ 内容(予定)

- ・ 教科等の公開授業と協議会

お わ り に

副校長 佐々木 壮一郎

平成21年度は、新学習指導要領の移行期間になり、「確かな学力」の形成を目指し、習得、活用、探究の活動を展開していくことが求められています。

このような中、各学校では新教育課程のねらいや内容がどのようなものなのか、また、これまでの教育とどう違うのか、学校はどのような教育を進めようとしているのかなどについて、保護者や地域の人々に対する説明が必要になってきているのではないのでしょうか。すなわち、これからは移行期間から全面実施にいたるまで、新教育課程の内容を繰り返し説明し、理解と協力を求めていく場が多くなるということです。

さて、これまで3年間、本校では「豊かな学びを育む学習の創造」を研究主題に研究を進めてまいりました。1年次は、「学びの体験を活かす3つの統合」を方途に、体験を意図的・計画的に統合した授業づくりを目指しました。2年次は、子どもが自ら問いを創り出し深めたり、広げたりしていく授業づくりを目指しました。そして3年次の本年度は、新学習指導要領の内容を基盤に、子どもがもの・人・ことにかかわりながら、子ども自らが新たな問いを生み出したり、自らの考えを明らかにしたりし、知識の構造化を図り、学び合いを促進する知のネットワーク化を図る授業づくりを目指し、実践してまいりました。

その際、次の3点により学び合いの具現化を図ってきました。

- ① 学び合いを促進する中で、「同じような考えはないか」、「考えをどのような言葉で表現したらよいか」というように、共通性や類似性に着目させる。
- ② 学び合いを促進する中で、「この立場の人たちは、どんな考えをもっているのか」というように、考え方の意味や理由を問い、因果関係を明らかにする。
- ③ 学び合いを促進する中で、「友だちの考えを聞いて、新たに考えたことはないか」、「自分の考えが活かされている」というように、自分の考えと他の考えを比較しながら、考えの関連性や有用性に着目させ、概念化を促す。

このような学び合いでは、子ども自らが、習得した知識を概念化、抽象化できる総合的な力を身に付けていくプロセスが大切であり、この学び合いを具現化した姿こそが、本校が目指す知のネットワーク化であります。

以上、述べてきましたことの一端を本研究会で発表しました。本校研究の成果を、皆様方の教育活動にお役に立ていただければ幸いです。

最後になりましたが、本校研究の深化・充実のために、御指導を賜りました上智大学総合人間科学部教育学科教授の奈須正裕先生、福岡教育大学の先生方及び本校先輩をはじめ関係の先生方に深く感謝申し上げます。今後も、私たちの研究に厳しい御指導・御助言を賜りますようお願い申し上げます。

福岡教育大学附属福岡小学校・福岡教育大学研究同人(平成21年度)

◎ 学 長 大後 忠志					
◎ 大 学					
(国 語 科)	河野 智文	(生 活 科)	津川 裕	(道 徳)	堺 正之
(社 会 科)	小田 泰司		寺岡 聖豪		小林万里子
				(特別活動)	高田 清
(算 数 科)	飯田 慎司	(音 楽 科)	平井 建二		木内 隆生
	清水 紀宏		原田 大志	(帰国子女教育)	小林万里子
	今井 一仁	(家 庭 科)	貴志 倫子	(特別支援教育)	納富 恵子
					猪狩恵美子
(理 科)	森藤 義孝	(図画工作科)	阿部 守		藤金 倫徳
	安藤 秀俊				中山 健
	坂本 憲明	(体 育 科)	相部 保美	(養 護)	照屋 博行
					宮田 正和

◎ 附 属 小	(職名)	(担任)	(専 攻)	(氏 名)	(出身地区)
校 長			理 科	鈴木 清一	大 学
副 校 長			体 育	佐々木 壮一朗	糟 屋
教 頭			国 語	光延 正次郎	糟 屋
研究主任			算 数	田中 健悟○	糸 島
教務主任			生 活	塚本 正典	三 瀬・大川
教 諭	1 の 1		特 別 活 動	黒澤 真二○	筑 紫
教 諭	1 の 2		国 語	藤田 進	筑 紫
教 諭	2 の 1		国 語	平川 洋一○	福 岡 市
教 諭	2 の 2		図 画 工 作	安藤 順子	福 岡 市
教 諭	3 の 1		音 楽	古井 由希子	福 岡 市
教 諭	3 の 2		体 育	毛利 拓也	福 岡 市
教 諭	4 の 1		音 楽	高武 龍彦	糟 屋
教 諭	4 の 2		理 科	今村 光宏	福 岡 市
教 諭	3・4 の 3		家 庭 科	緒方 敦子	福 岡 市
教 諭	5 の 1		算 数	福原 伸治	筑 紫
教 諭	5 の 2		社 会	永尾 健○	三 瀬・大川
教 諭	5 の 3		体 育	永江 英俊	糟 屋
教 諭	6 の 1		道 徳	渡邊 正則	三 井・小郡
教 諭	6 の 2		社 会	三浦 研一	福 岡 市
教 諭	6 の 3		算 数	高瀬 雄大	糸 島
教 諭	専 科		特別支援教育国語	島川 二郎	筑 紫
教 諭	ふ じ		特別支援教育生算	諏訪原 佳子○	福 岡 市
教 諭	さ く		特別支援教育算数	倉富 護	久 留 米
教 諭	梅		特別支援教育体育	弘松 英樹	糸 島
教 諭				堀 亮輔	遠 賀
養護教諭	専 科		体 育	松尾 七七子	福 岡 市
研 修 師	専 科		社 算	緒方 勝彦	糟 屋
研 修 師	専 科		国 語	藤 周作	筑 紫
研 修 師	専 科			立川 嘉彦	田 川
講 師	専 養			中山 博紀	福 岡 市
				檉村 文美	福 岡 市

※ ○印は平成21年度研究部員

平成20年度 附属福岡小学校転出教員

三原 英喜(福岡市)	北田 尚雄(福岡市)	平島 健二(筑 紫)
下川 勝彦(糟 屋)	今泉 伸一郎(福岡市)	高良 祐治(糟 屋)
有川 陽子(筑 紫)	西村 眞輝(糟 屋)	田代 直美(宗 像)

平成21年6月 印刷・発行
福岡教育大学附属福岡小学校
研究紀要 No.40

発行者 福岡教育大学附属福岡小学校
〒810-0061 福岡市中央区西公園12番1号
TEL 092(741)4731(代)

印刷所 (株)ネオプリンティング
TEL 092(511)8941(代)

Fuzoku
Fukoka